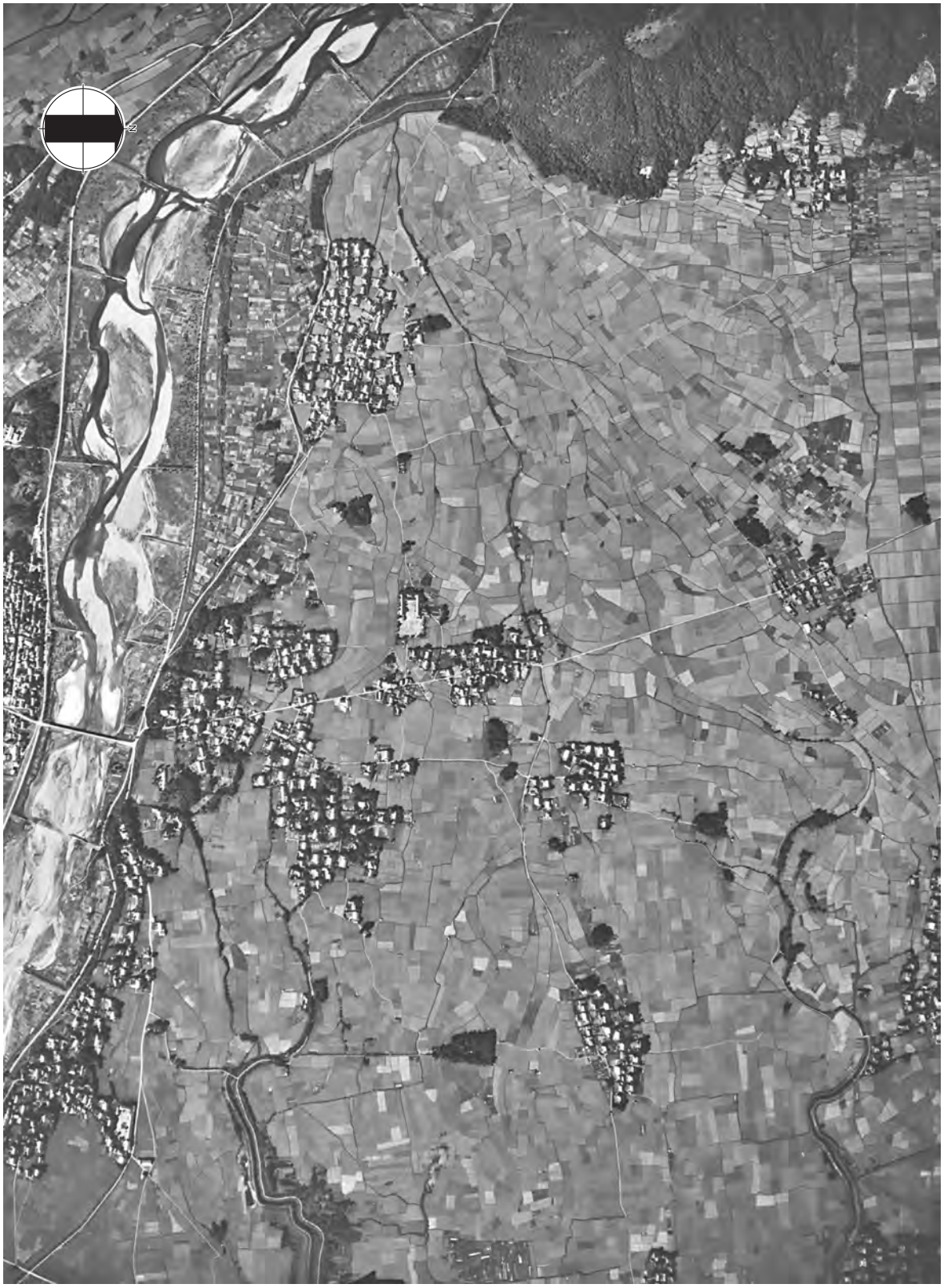
養老町埋蔵文化財調査報告書第７集

日吉遺跡発掘調査報告書

－第１～３次発掘調査の成果－

養老町教育委員会
２０１４年３月



米軍が撮影した象鼻山及び日吉遺跡周辺の空中写真

1区2期河道1及び土器集中部1検出状況（北東から）

3区6期完掘風景（南東から）

序

養老町は岐阜県の南西部に位置し、養老山脈に沿って南北に 12km、東は揖斐川に至るまで東西 10km の比較的平坦部の多い地域であり、豊かな自然と多くの文化遺産が残る美しい町です。

特に、平成 22 年度まで発掘調査を実施した象鼻山古墳群は、墳墓のほとんどを西暦 2 世紀中頃から後半に大規模に造成して、一斉に計画的な造墓を進めた稀有な遺跡であることが明らかになっており、東海地方の古墳の出現や広く古墳時代の始まりを考えるための重要な情報を提供しています。

そして、平成 19 ～ 20 年度には、日吉遺跡の発掘調査を実施し、この遺跡が象鼻山古墳群の築造に深く関わった集落跡であることも明らかにしました。その成果は、象鼻山古墳群出現の社会背景を解き明かす重要な手掛かりになるものであり、得られた情報を整理し、東海地方の歴史を考えるための新たな情報を発信することが養老町に求められた課題の一つとなっています。

文化遺産の保護を通して先人の文化を理解・伝承することは、真の地域社会の発展につながるものであり、また文化財の調査を通して得られる情報は様々に活用できる可能性をもつものであります。

本書は平成 19 年度から平成 20 年度まで継続して実施した、町道拡幅工事に伴う日吉遺跡発掘調査の報告書です。この報告書がより多くの方々に利用され、文化財保護の一助となることを願っております。

終わりに、調査の実施及び報告書の作成にあたり、ご協力いただきました方々、またご指導いただきました関係諸機関の方々に厚くお礼申し上げます。

平成 26 年 3 月

養老町教育委員会

教育長　**並河　清次**

例　　言

1　本書は、養老町教育委員会が、町道拡幅工事の事前調査として実施した日吉遺跡発掘調査の報告書である。

2　調査にあたっては、養老町教育委員会が後記の調査団を編成してこれを実施した。

3　本書の執筆は中島和哉（養老町教育委員会生涯学習課）が行った。

4　遺物整理及び遺物写真撮影はナカシャクリエイテブ株式会社に委託した。

5　本書の作成にあたっては、以下の方々のご協力・ご指導を得た。

赤塚次郎・宇野隆夫・鬼頭 剛・近藤景子・笹栗 拓・志知識子・竹谷充生・中谷正和・中野秀昭（五十音順、敬省略）

6　調査記録・出土遺物は養老町教育委員会にて保管している。

7　編集は中島和哉が担当した。

凡　　例

1　本書に用いた高度値は海抜高（TP）である。

2　本書掲載の遺物実測図の縮尺は4分の1を基本とし、必要に応じて8分の1や16分の1に縮小した。

3　本書では遺跡・遺物の時代区分に、後期旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世を用いている。なお、弥生・古墳時代の時代区分については、廻間Ⅱ式の成立前後を指標とした。

4　本書の土器の分類と年代観について、特に断りのない限り、赤塚次郎2002「濃尾平野における弥生時代後期の土器編年」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第92集　八王子遺跡　考察編』（財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター）に従っている。

目　　次

第1章　調査の概要 …… 1
1　調査の目的と調査に至る経緯 …… 1
2　調査組織と調査の経過 …… 3

第2章　日吉遺跡の立地と歴史的環境 …… 7
1　日吉遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 7
2　日吉遺跡の立地 …… 9

第3章　発掘調査の成果 …… 11
1　調査前の知見 …… 11
2　調査の方法 …… 11
3　基本層序 …… 13
4　1区の調査 …… 14
（1）　層位と時期区分 …… 14
（2）　1期の遺構・遺物 …… 14
（3）　1期の年代 …… 17
（4）　2期の遺構・遺物 …… 18
（5）　2期の年代 …… 27
（6）　3期の遺構・遺物 …… 28
（7）　3期の年代 …… 34

（8） 小結 …… 34
5 2区の調査 …… 36
（1） 層位と時期区分 …… 36
（2） 1期の遺構・遺物 …… 36
（3） 1期の年代 …… 47
（4） 2期の遺構・遺物 …… 47
（5） 2期の年代 …… 51
（6） 3期の遺構・遺物 …… 54
（7） 3期の年代 …… 71
（8） 小結 …… 71
6 3区の調査 …… 74
（1） 層位と時期区分 …… 74
（2） 1期の遺構・遺物 …… 74
（3） 1期の年代 …… 85
（4） 2期の遺構・遺物 …… 87
（5） 2期の年代 …… 93
（6） 3期の遺構・遺物 …… 94
（7） 3期の年代 …… 99
（8） 4期の遺構・遺物 …… 102
（9） 4期の年代 …… 107
（10） 5期の遺構・遺物 …… 108
（11） 5期の年代 …… 114
（12） 6期の遺構・遺物 …… 115
（13） 6期の年代 …… 125
（14） 小結 …… 126
7 結語 …… 129

第4章 考 察 …… 131
1 日吉遺跡にみる養老町域の土器様相と
その画期 …… 131

第5章 総 括 …… 151

巻頭図版

米軍が撮影した象鼻山及び日吉遺跡周辺の空中写真 …… 巻頭図版1
1区2期河道1及び土器集中部1検出状況（北東から） …… 巻頭図版2
3区6期完掘風景（南東から） …… 巻頭図版3

挿図目次

第1図 養老町の位置 …… 1
第2図 日吉遺跡鳥瞰図 …… 1
第3図 事業計画地と遺跡の範囲 …… 2
第4図 日吉遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 8
第5図 日吉遺跡発掘調査の調査区と基準観測点
…… 12
第6図 層序分類模式図 …… 13
第7図 1区南壁断面図 …… 15
第8図 1区1期遺物包含層出土土器実測図 16
第9図 1区1期遺物包含層出土土製品・石器実測図
…… 17
第10図 1区2期平面図 …… 19
第11図 河道1・2断面図 …… 20
第12図 1区2期河道1出土土器実測図 …… 21
第13図 1区2期土器集中部1出土土器実測図1 22
第14図 1区2期土器集中部1出土土器実測図2 24
第15図 1区2期土器集中部2出土土器実測図 26
第16図 1区2期遺構面及び遺物包含層出土土器
実測図 …… 26
第17図 1区3期平面図 …… 29
第18図 1区3期河道2出土土器実測図1 … 31
第19図 1区3期河道2出土土器実測図2 … 33
第20図 1区3期土器集中部3出土土器実測図 33
第21図 1区3期遺物包含層出土土器実測図 34
第22図 1区の主な遺構の編年的位置 …… 35
第23図 2区北壁断面図 …… 37
第24図 2区1期平面図 …… 39
第25図 2区1期河道1出土土器実測図1 … 40
第26図 2区1期河道1出土土器実測図2 … 41
第27図 2区1期河道1出土土器実測図3 … 43
第28図 2区1期河道1出土土器実測図4 … 45
第29図 2区1期河道1出土木製品・木器実測図 46
第30図 2区2期平面図 …… 49
第31図 2区河道2・3断面図 …… 50
第32図 2区2期河道2出土土器実測図1 … 52
第33図 2区2期河道2出土土器実測図2 … 53
第34図 2区2期河道2出土木器実測図 …… 53
第35図 2区3期平面図 …… 55

第36図　2区3期河道3出土土器実測図1　… 57
第37図　2区3期河道3出土土器実測図2　… 59
第38図　2区3期河道3出土土器実測図3　… 60
第39図　2区3期河道3出土土器実測図4　… 62
第40図　2区3期河道3出土土器実測図5　… 64
第41図　2区3期河道3出土土器実測図6　… 66
第42図　2区3期河道3出土木製品・木器実測図　67
第43図　2区3期竪穴建物1出土土器実測図　68
第44図　2区3期遺構面及び遺物包含層出土土器・土製品実測図　…… 70
第45図　2区の主な遺構の編年的位置　…… 73
第46図　3区北壁断面図1　…… 75
第47図　3区北壁断面図2　…… 77
第48図　3区1期平面図　…… 79
第49図　3区1期河道1出土土器実測図1　… 80
第50図　3区1期河道1出土土器実測図2　… 81
第51図　3区1期河道2出土土器実測図　…… 83
第52図　3区1期土器集中部1出土土器実測図　84
第53図　59・66層出土土器実測図　…… 84
第54図　51・52層出土土器実測図　…… 85
第55図　3区2期平面図　…… 87
第56図　3区2期河道3出土土器実測図　…… 88
第57図　3区2期河道3出土木器実測図　…… 88
第58図　環濠推定図　…… 89
第59図　3区2期環濠出土土器実測図1　…… 91
第60図　3区2期環濠出土土器実測図2　…… 93
第61図　3区2期環濠出土木器実測図　…… 93
第62図　3区2期竪穴建物2・5・6出土遺物実測図　…… 94
第63図　3区3期平面図　…… 95
第64図　3区3期竪穴建物8～11・土坑1出土土器実測図　…… 97
第65図　3区3期土坑2・3出土土器実測図　… 98
第66図　3区3期遺構面・遺物包含層出土土器実測図1　…… 100
第67図　3区3期遺構面・遺物包含層出土土器実測図2　…… 101
第68図　3区4期平面図　…… 103
第69図　3区4期河道4出土土器実測図　…… 105
第70図　3区4期河道4南岸遺構面出土土器実測図　…… 106
第71図　3区4期竪穴建物12・13、土坑5・6出土遺物実測図　…… 108
第72図　3区5期平面図　…… 109
第73図　3区5期河道5出土土器実測図　…… 111
第74図　3区5期遺構面・遺物包含層出土土器実測図1　…… 113
第75図　3区5期遺構面・遺物包含層出土土器実測図2　…… 115
第76図　3区6期平面図　…… 117
第77図　3区6期河道6出土土器実測図　…… 118
第78図　3区6期河道7出土遺物実測図　…… 120
第79図　3区6期溝2出土木器実測図　…… 120
第80図　3区6期遺構面・遺物包含層出土土器実測図1　…… 122
第81図　3区6期遺構面・遺物包含層出土土器実測図2　…… 124
第82図　3区の主な遺構の編年的位置　…… 128
第83図　日吉遺跡出土土器の形態と分類1　… 132
第84図　日吉遺跡出土土器の形態と分類2　… 133
第85図　日吉遺跡から出土した主な外来系土器　134
第86図　壺A・B・Cの変遷　…… 142
第87図　壺D・E・Fの変遷　…… 143
第88図　高杯A・Bの変遷　…… 144
第89図　高杯C・D・Eの変遷　…… 145
第90図　器台A・Bの変遷　…… 146
第91図　甕A・B・Cの変遷　…… 147
第92図　鉢A・Bの変遷　…… 148

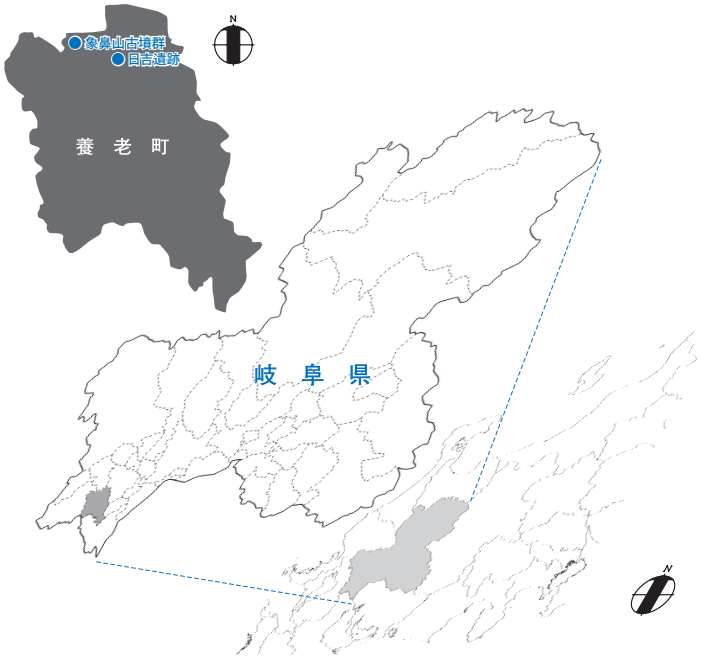
表目次

第1表　2区北壁断面土層一覧　…… 38
第2表　3区北壁断面土層一覧　…… 78

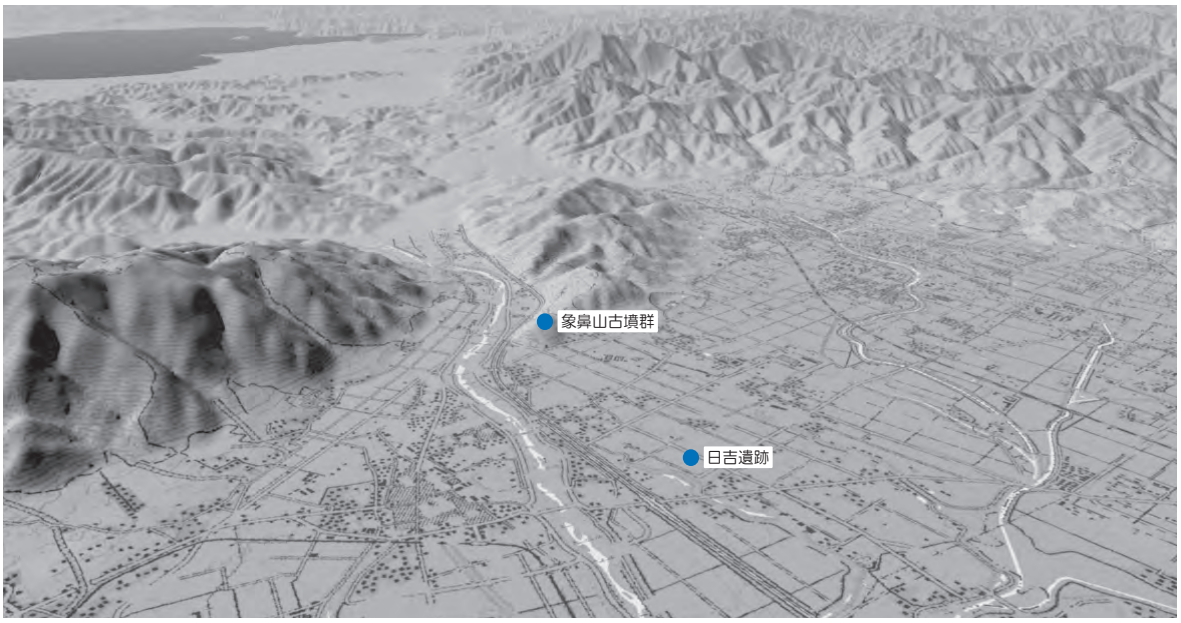
第 1 章　調査の概要

1　調査の目的と調査に至る経緯

岐阜県養老郡養老町宇田、豊、中、飯田に所在する日吉遺跡は、養老山地と南宮山の谷口より流れでる牧田川とその支流によって形成された標高 7 ～ 11 mの扇状地に立地している。東西に 1.2km、南北に 1.3km の規模をもち、平成 14 ～ 18 年度にかけて実施した遺跡詳細分布調査では、弥生時代後期から中近世に属する遺物が採集された。中でも、遺跡の東南部を中心として、弥生時代後期から古墳時代前期に属する遺物が多く採集されており、同時期に、一斉に計画的な造墓を進めた象鼻山古墳群と密接な関係をもつ遺跡である可能性が予想できた。



第 1 図　養老町の位置



第 2 図　日吉遺跡鳥瞰図（東から）

そうした中、平成 19 ～ 20 年度の２カ年にわたって、養老町役場建設課が、日吉遺跡の範囲内において、町道拡幅工事を計画した（第３図）。そのため、養老町教育委員会では、事前にそれぞれの事業対象地において遺跡の有無及び範囲の確認を目的として、試掘確認調査を実施した。

その結果、平成 19 年度においては事業対象地の一部、平成 20 年度においては事業対象地全域において、弥生時代後期から古墳時代前期の遺構・遺物が良好に遺存していることが確認でき、町道拡幅工事による遺跡への影響が避けられないと判断できたため、記録保存のための本発掘調査を２カ年３次にわたり実施するに至った。

第３図　事業計画地と遺跡の範囲（S ＝ 1/5,000）

試掘確認調査風景

試掘確認調査風景

2　調査組織と調査の経過

日吉遺跡の第１～３次発掘調査にあたっては、養老町教育委員会を中心として、下記の調査団を編成して実施した。また、調査成果を評価するため、象鼻山古墳群調査整備委員会委員長である宇野隆夫国際日本文化研究センター教授と、象鼻山古墳群調査整備委員会委員である赤塚次郎愛知県埋蔵文化財センター統括専門員より、現地にて指導助言を頂いた。

その調査経過は、以下のとおりである。

【平成 19 年度　第１次発掘調査】

12 月 10 日より発掘調査を開始。試掘確認調査において、遺構・遺物が集中して確認できた地点を中心に、調査区の設定を行った。調査区南壁の観察により、２面の遺構面と、さらにその下層に遺物包含層が存在することを明らかにできた。そのため、当調査区を１～３期に区分した。12 月 15 日までに、１期の遺物包含層と２～３期の遺構面の精査を行い、調査区を南北に河道が走っており、この河道が比較的短い期間に埋没したことと、河道のそばで祭祀行為が行われていたことを確認した。12 月 16 日までに、それぞれの写真撮影、平面図作成、調査区南壁の断面図作成を終了した。12 月 17 日に、調査区の埋め戻しを行い、全ての作業を終了した。

【平成 20 年度　第２次発掘調査】

８月 21 日より発掘調査を開始。事業対象地を２区に分け、その東側を中心に、調査区の設定を行った。事前の試掘確認調査の成果により、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて３面の遺構面があることを確認できていたため、８月 23 日までに、１～３面の遺構面の精査をそれぞれ行い、調査区を東西に河道が走っており、この河道が第１次発掘調査で確認した河道と一連のものである可能性が高いことを確認した。８月 25 日までに、それぞれの写真撮影、平面図作成、調査区北壁の断面図作成を行い、全ての作業を終了した。

調査風景（第１次）

調査風景（第１次）

調査風景（第２次）

調査風景（第２次）

【平成 20 年度　第３次発掘調査】

10 月 31 日より発掘調査を開始。事業対象地を２区に分けたうち、西側を中心に、調査区の設定を行った。事前の試掘確認調査や、第１・２次発掘調査の成果により、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて３面以上の遺構面があることを確認できていた。11 月６日までに、第１面（６期）までの掘り下げを行った。翌 11 月７日の第１面（６期）の精査において、河道や柱穴、土坑などを検出し、これらの掘り下げを行った。11 月 11 日までに写真撮影、平面図作成を終了し、第２面（５期）の検出を開始した。11 月 13 日までの第２面（５期）の精査において、調査区東側を東西に走る幅５ｍの河道を検出し、その遺構埋土の観察などから、これが第２次発掘調査において確認できたごく短期間に埋没した河道と一連のものであると判断した。11 月 17 日には、第２面（５期）の遺構の掘り下げを終了し、写真撮影、平面図作成を行った。翌 11 月 18 日には、第３面（４期）の検出を行い、河道の他に、河道北岸の微高地において、複数の竪穴建物と土坑を確認した。また、調査区南壁の観察から、さらに下層に２面の遺構面があることも確認した。11 月 25 日までに、第３面（４期）の遺構の掘り下げ、写真撮影、平面図作成を終了し、11 月 26 日より、第４面（３期）の検出を開始した。11 月 28 日までの遺構面の精査で、河道と微高地の境に、微高地より一段低い平坦面を確認するとともに、微高地と平坦面の境において、さらに下層に遺構が存在することを確認した。12 月２日には第４面（３期）の遺構検出後の写真撮影を行い、平面図の作成を開始、12 月４日までに平面図作成を終了した。12 月８日より、微高地と平坦面の境において確認した下層遺構の検出、掘り下げを行い、12 月 12 日までの精査で、この遺構が濠状を呈し、東西に流れる河道に対し、南北方向に直角に接続していることを明らかにした。そのため、これを人為的な掘削によるものと判断し、環濠である可能性が高いと考えた。12 月 16 日までに環濠を検出した第５面（２期）の写真撮影、平面図作成を終了し、12 月 17 日より、第６面（１期）の検出を開始した。12 月 19 日までの遺構面の精査で、環濠と河道が接続していた地点において河道が分流していることを確認した。精査を十分に行えなかったが、12 月 22 日までに、第６面（１期）の写真撮影と平面図作成を終了し、12 月 24 日より調査区北壁の断面図作成を開始した。12 月 26 日に、調査区北壁断面図の作成を終え、全ての作業を終了した。

調査風景（第 3 次）

集合写真（第 3 次）

日吉遺跡発掘調査団

（平成 19 年度　第 1 次発掘調査）

団　　長：野村浩太郎（養老町教育委員会教育長）
調　査　員：中島　和哉（養老町教育委員会生涯学習課学芸員）
調査参加者：近藤　景子・志知　識子・高木　吉一・富永　茂樹・中野　秀昭・長沢博千代・安福　隆司
事　務　局：安藤　淳一（養老町教育委員会生涯学習課課長）
　　倉本　雅志（養老町教育委員会生涯学習課課長補佐）
調査協力者：竹谷　充生

（平成 20 年度　第 2 次発掘調査）

団　　長：野村浩太郎（養老町教育委員会教育長）
調　査　員：中島　和哉（養老町教育委員会生涯学習課学芸員）
調査参加者：近藤　景子・笹栗　　拓・志知　識子・高木　吉一・中野　秀昭・長沢博千代・安福　隆司
事　務　局：安藤　淳一（養老町教育委員会生涯学習課課長）
　　河村　佳隆（養老町教育委員会生涯学習課課長補佐）
調査協力者：赤塚　次郎・宇野　隆夫・鬼頭　　剛・竹谷　充生

（平成 20 年度　第 3 次発掘調査）

団　　長：野村浩太郎（養老町教育委員会教育長）
調　査　員：中島　和哉（養老町教育委員会生涯学習課学芸員）
調査参加者：近藤　景子・志知　識子・高木　吉一・中野　秀昭・安福　隆司
事　務　局：安藤　淳一（養老町教育委員会生涯学習課課長）
　　河村　佳隆（養老町教育委員会生涯学習課課長補佐）
調査協力者：赤塚　次郎・竹谷　充生

第 2 章　日吉遺跡の立地と歴史的環境

1　日吉遺跡の位置と周辺の遺跡

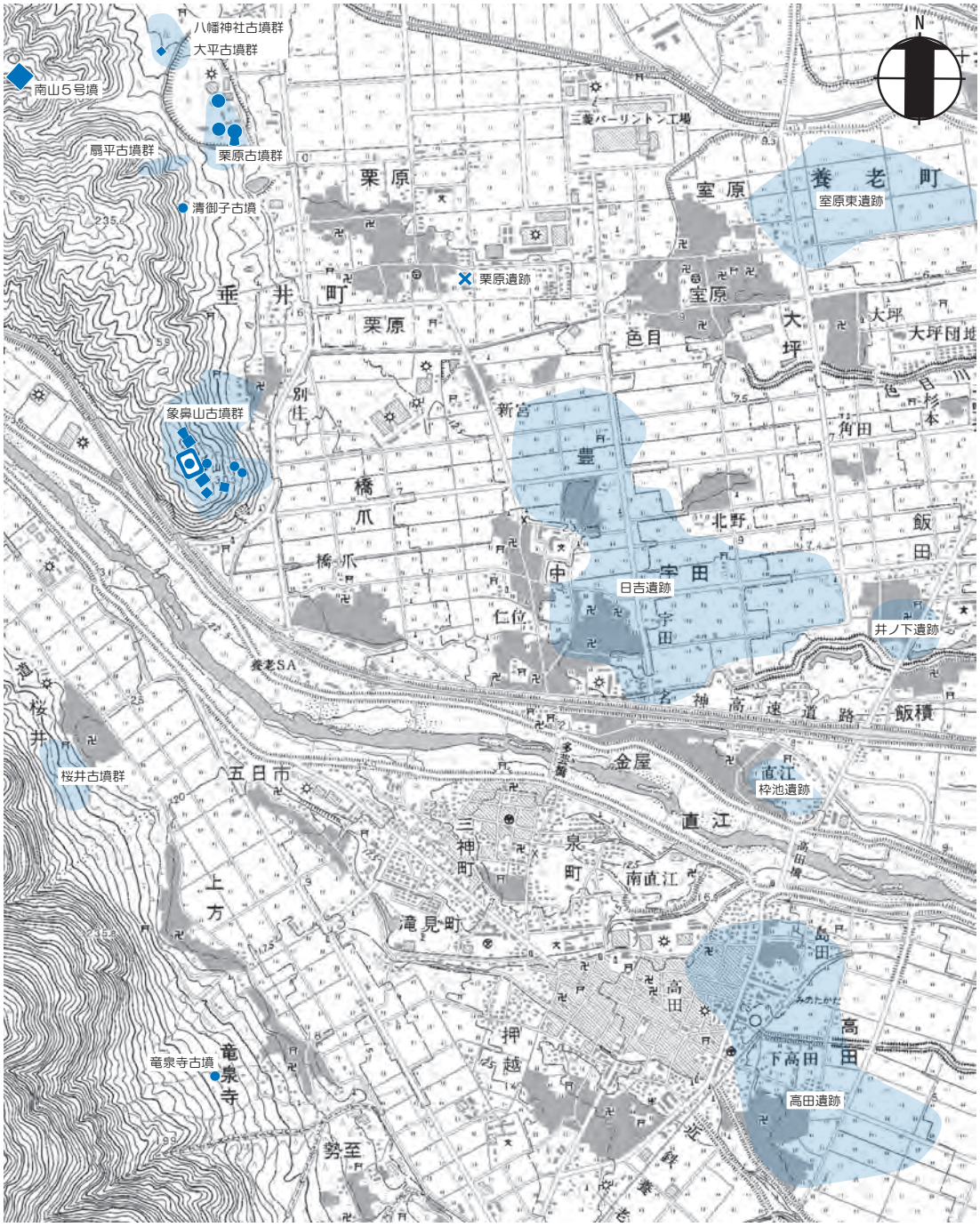
日吉遺跡全景

日吉遺跡は岐阜県養老郡養老町宇田・豊・中・飯田に所在する。本地域は岐阜県の南西部に位置し、滋賀県や三重県とも境を接している。日吉遺跡の西方は、伊吹山地と鈴鹿山地及び養老山地が南北に隣接して狭い地峡帯を形成しており、ここに位置する関ヶ原は、古くより東西交通及び軍事の要衝であった。この地峡帯を東に抜けて濃尾平野に至るには、南宮山の北から不破郡垂井町に向かうルートか、南宮山の南から大垣市上石津町を通過し、養老郡養老町へ向かうルートを通過する必要がある。この二つのルートには、現在でもＪＲ東海道線や新幹線、名神高速道路、国道 21 号線といった主要交通施設が集中している。

また、日吉遺跡において、人が生活をはじめた、弥生時代後期には、現在の地形環境とは異なり、養老町付近まで旧伊勢湾が入りこんでいたと推定されている*。さらに、濃尾平野の東高西低の地盤運動から、揖斐川をはじめとする様々な河川も西へ流れ込んでいただろう。そのため、弥生時代や古墳時代における本地域は、陸路だけでなく、海運や河川交通においても重要な拠点となっていた。

この日吉遺跡とその周囲一帯には、古墳時代への移行期に築造された数多くの墳墓と、その築造を支えた勢力が本貫とした遺跡が良好に遺存している。山間部では、象鼻山古墳群をはじめ、栗原３号墳や南山５号墳、円満寺山古墳、行基寺古墳、東天神 18 号墳（狐山古墳）が所在しており、中でも、象鼻山古墳群は、弥生時代後期から古墳時代前期に山中を大規模に造成し、一斉に計画的な造墓を進めた稀有な遺跡であることが明らかになっている**。一方、平野部においても、日吉遺跡をはじめ、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての散布地が複数確認できており、象鼻山古墳群を形成した勢力の基盤が、その眼下に存在したことが明らかになりつつある***。

＊　赤塚次郎 1994「３・４世紀の東海地域」『東日本の古墳の出現』
＊＊　中島和哉編 2010『象鼻山古墳群発掘調査報告書 - 第１～４次発掘調査の成果 -』養老町教育委員会
＊＊＊　中島和哉 2007「分布調査の成果」『養老町遺跡詳細分布調査報告書』



【散布地等】

日吉遺跡　（山中様式期から廻間様式期の集落・祭祀跡、山中様式期から中世の散布地）
枠池遺跡　（山中様式期から廻間様式期の散布地）
井ノ下遺跡（廻間様式期から中世の散布地）
室原東遺跡（松河戸様式期から中世の散布地）
高田遺跡　（松河戸様式期から中世の散布地）
栗原遺跡　（山中様式土器出土地点）

【墳墓】

象鼻山古墳群　（前方後方墳、上円下方壇他 68 基の墳墓群）
栗原古墳群　（前方後円墳他２基の墳墓群、うち３号墳は消滅）
八幡神社古墳群（方墳他６基の墳墓群）
大平古墳群　（横穴式石室をもつ群集墳、消滅）
扇平古墳群　（円墳３基の墳墓群）
南山５号墳　（方墳）
清御子古墳　（円墳）
桜井古墳群　（横穴式石室をもつ群集墳、消滅）
竜泉寺古墳　（詳細不明）

第４図　日吉遺跡の位置と周辺の遺跡（国土地理院 1/25000 大垣・養老から）

2　日吉遺跡の立地

日吉遺跡は、象鼻山の東側、主に牧田川によって形成された標高７～11 mの扇状地に立地する弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。ただ、当地域の平野部は、比較的短期間のうちに、三角州帯から沖積低地、扇状地へと地形を変化させたため、時代毎に立地を検証していく必要がある。

そして、急速にその範囲を拡大させていく当地の平野部は広大である一方、しばしば起こる牧田川などの氾濫によって不安定であり、そうした地形の開発には相応の技術や相当な労働力の投下が必要であった。しかし、こうした地形の開発に成功したならば、その後には大きな生産力をもつ耕地が得られただろう。

日吉遺跡で採集できている弥生時代の資料は、牧田川が中心となって形成した平野部では現段階において最も古いものである。そのため、当平野部の本格的な開発が始まった時期を示している可能性がある。そして、西は関ヶ原、東には濃尾平野、南には伊勢湾という特殊な位置のもと、そうした開発を可能にした勢力が、象鼻山古墳群の築造に深く関わったと推察している。

第 3 章　発掘調査の成果

1　調査前の知見

これまでに実施された遺跡詳細分布調査によって、日吉遺跡の範囲内で採集できた遺物は、弥生時代後期から古墳時代前期の土器が 657 片、古墳時代の須恵器が 4 片、古代の土器が 15 片、古代の須恵器 1,453 片、灰釉陶器 161 片、中世の土器 62 片、山茶碗 434 片、古瀬戸 26 片、瓷器系陶器 24 片、中国製陶磁器 2 片、瀬戸美濃 1 片に上る*。

中でも、今回発掘調査の対象となった事業地では、弥生時代後期から古墳時代前期の土器が多く採集できており、その一方で、他の時期の資料は、ほとんど採集できていない。また、採集できた土器の多くが、山中様式から廻間様式に属するものであった。

そのため、当調査地点において、象鼻山古墳群に深い関わりをもつ遺跡の情報が得られることを事前に予測できた。また、分布調査による採集遺物数が多く、さらに、事業対象地の現状が、周囲に比べて相対的に土地が低く、湿地化しており、営まれている水田においては排水に暗渠を必要としていることから、遺物包含層や遺構面までの深度が浅いことも予測できた。

こうした調査前の知見に基づき、平成 19 年度から平成 20 年度にかけて、日吉遺跡の発掘調査を実施した。その結果、当調査地点には、象鼻山古墳群の築造と時期を同じくする山中様式期から廻間様式期までの集落があり、その集落には山中様式期を中心に環濠を備えた時期があり、さらに、廻間Ⅰ式期において、大きな水害を受けた可能性が高いことを明らかにできた。これらの成果は以下に示すとおりである。

2　調査の方法

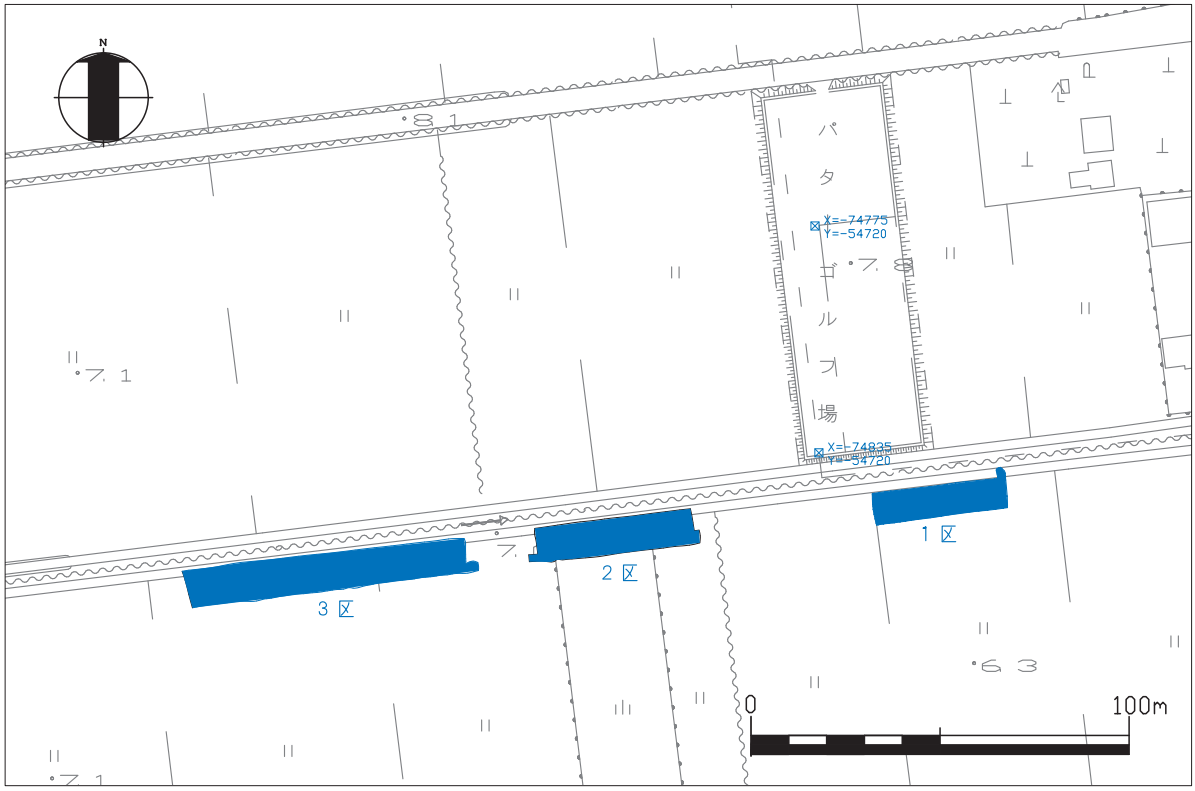
日吉遺跡は、弥生時代から古墳時代への移行期に数多くの墳墓の築造を支えた勢力が本貫とした遺跡である可能性が高い。そのため、日吉遺跡の動態を明らかにし、象鼻山での一連の造墓活動との関係を明らかにできたならば、当地域において古墳が出現するプロセスのみならず、当時期の社会変革をも明らかにしうる可能性を秘めている。また、初期前方後方墳の分布は東海地方だけでなく、北陸や関東地方などにも及んでおり、当地域の動態を総合的に調査することは、より広域の社会動態の把握にも有効であろう**。

平成 19 年度及び平成 20 年度の日吉遺跡発掘調査の目的は、開発により失われる日吉遺跡を記録保存し、その内容を後世に伝えるものであり、かなり限られた条件下での調査ではあったが、今

＊　中島和哉 2007「分布調査の成果」『養老町遺跡詳細分布調査報告書』
＊＊　赤塚次郎 1997「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 73 集

後、象鼻山古墳群の調査・研究・活用を進めるためには、当地域において土器編年の基準資料を得ることが必要と考えた。そのため、調査では遺跡の形成過程の復元を重視し、出土した遺物は、その変遷に沿って、地点を記録し採集した。

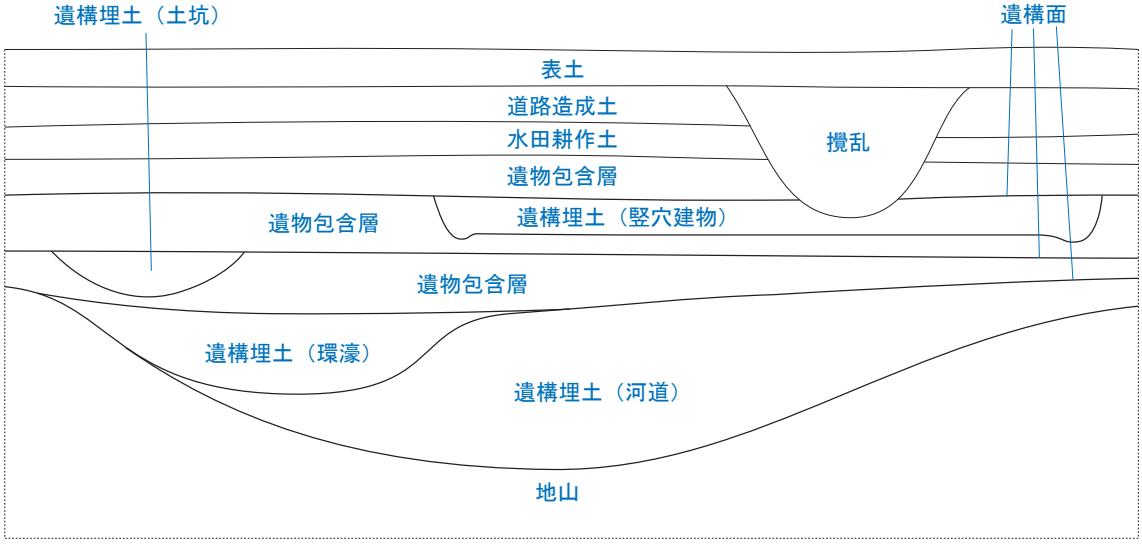
調査区は、平成 19 年度の事業対象地に対して 1 区、平成 20 年度の事業対象地に対しては発掘調査を 2 次に分け、2 区と 3 区を設定した。調査成果の実測には、世界測地系を用いた。基準観測点は、養老町スマイル町民パターゴルフ場に設置した国土座標 X=-74835,Y=-54720, 標高 7.540 と国土座標 X=-74775,Y=-54720, 標高 7.590 の 3 級基準点である（第 5 図）。



第 5 図　日吉遺跡発掘調査の調査区と基準観測点（S ＝ 1/2,000）

3　基本層序

基本層序は、腐植土である表土層、町道新設時に盛土した道路造成土層、町道新設時に埋没した水田耕作土層、遺構を確認できる土層の上面である遺構面と、それを被覆する遺物包含層、人的活動以前の堆積土である地山層であり、これに、後世に人為的な活動や植物の生痕によって形成された攪乱層と、遺構中に堆積した埋土層を加えた（第６図）。



第６図　層序分類模式図

4　1区の調査

（1）層位と時期区分

調査区南壁の観察により、1区の層位を20層に分層することができた。そのうち、20～30cmの土器片を含む現代の表土層と水田耕作土層を除去した標高約6.0m以下で、2面の遺構面と、さらにその下層において遺物包含層を確認した（第7図）。

そのため、当調査区を1～3期の3時期に区分した。

（2）1期の遺構・遺物

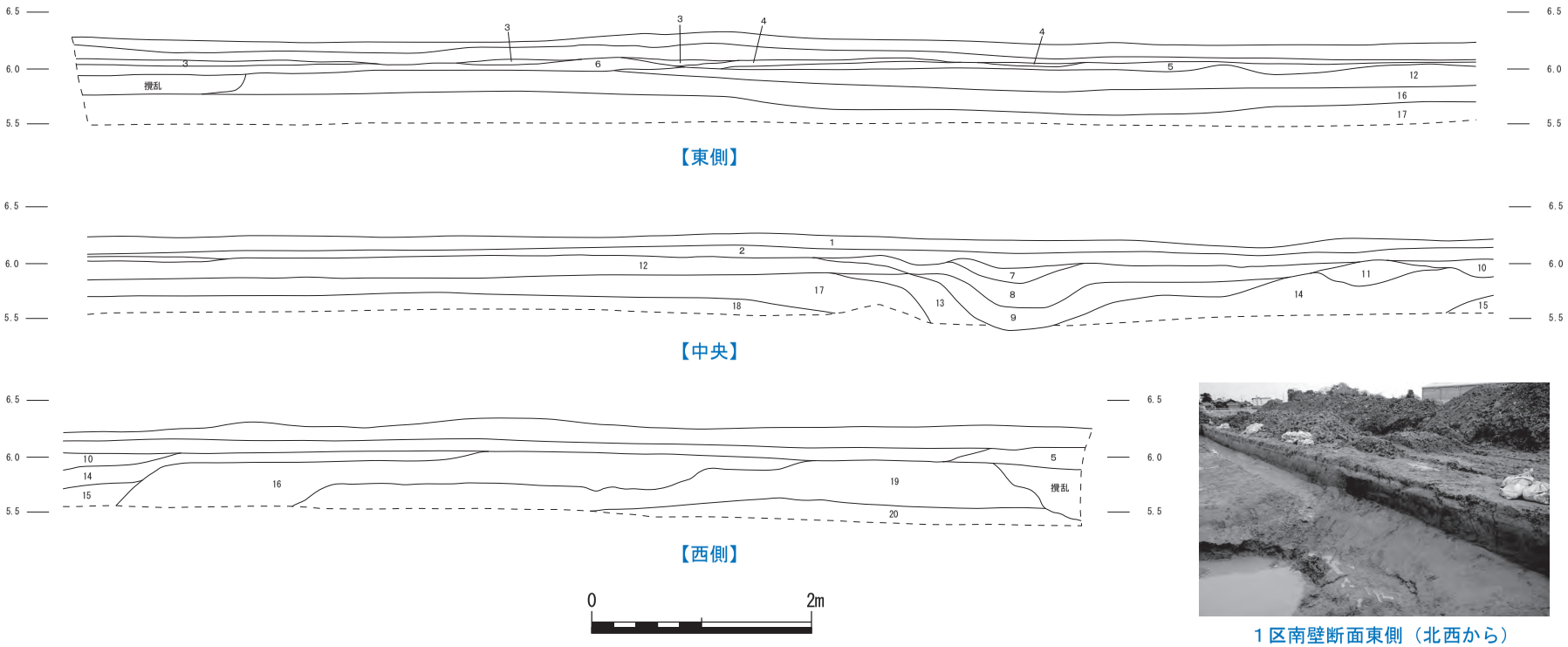
1期では、遺構を確認できず、遺物包含層（16・17層）のみ確認した。ただ、これらの遺物包含層は、2期で確認した河道1に向かって、緩やかに傾斜しており、河道の埋土である可能性がある。

16・17層より出土した遺物のうち、接合等によって形態を復元できた39点の土器と1点の土製品、1点の石器を図示した（第8図の1～39、第9図の40・41）。

1～10は壺である。1は外反する口縁部をもち、その端部は面をなす。口縁端部内面に列点状の刺突文を施すが、有段状の文様帯は形成していない。肩部外面に直線文を施している。2は外反する口縁部をもち、口縁端部は面をなしている。3は拡張した口縁端部外面に擬凹線文と赤彩を施している。口縁端部内面には、羽状に並ぶ3列の刺突文を施すが、有段状の文様帯を形成していない。また、この刺突文を描く文様帯上には赤彩を施していない。頸部と体部の外面境には2条の突帯を貼り付け、さらにその間には竹管文を施している。肩部外面に直線文と刺突文を施している。4は外傾する口縁端部外面に擬凹線文を施している。口縁端部内面にはやや内彎する文様帯をもち、羽状に並ぶ3列の刺突文を施すが、赤彩は確認できない。5は外反する口縁部をもち、その端部は面をなす。口縁部外面を赤彩している。6は体部外面に直線文と波状文を施し、赤彩している。7と8は底部である。共に、内面にらせん状のハケを施すが、7は平底で外面に縦方向のミガキを施し、8は突出底で外面に横方向と斜め方向のミガキを施している。9と10は小型壺である。9は受口状の口縁部をもち、頸部に1条の沈線と刺突文を施している。10は緩やかに内彎する口縁部をもち、外面にはススが付着している。

11～17は甕である。11と12は受口状の口縁部をもつ。ともに口縁屈曲部外面に刺突文、肩部外面に直線文を施す。13～15はく字状の口縁部をもつ。13は口縁端部に刺突文、14は肩部外面に直線文と刺突文を施している。16と17は台付甕の脚部である。ともに台部から体部までを先に製作し、その後に底部を充填している。

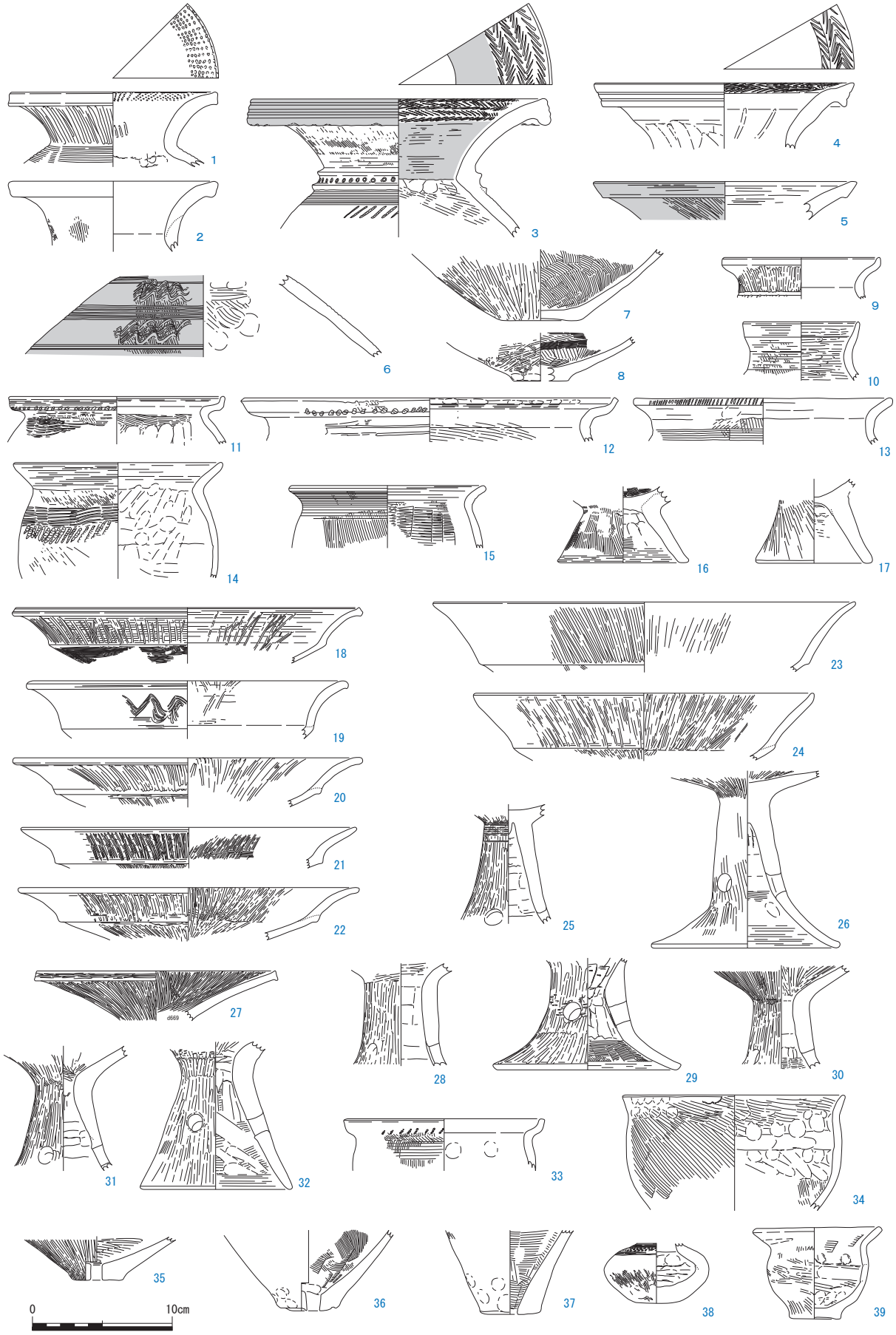
18～26は高杯である。18～22は杯部が浅く、外反する口縁部をもつ。18は口縁端部を面取りしているが、19～22は丸くおさめている。19は口縁部外面に波状文を施している。いずれも、口縁部と杯底部の内面境があまり明瞭でない。23と24は杯部がやや深い。23の口縁部は外反しているが、24の口縁部はわずかに内彎している。25と26は脚部である。25は円錐状を呈しており、



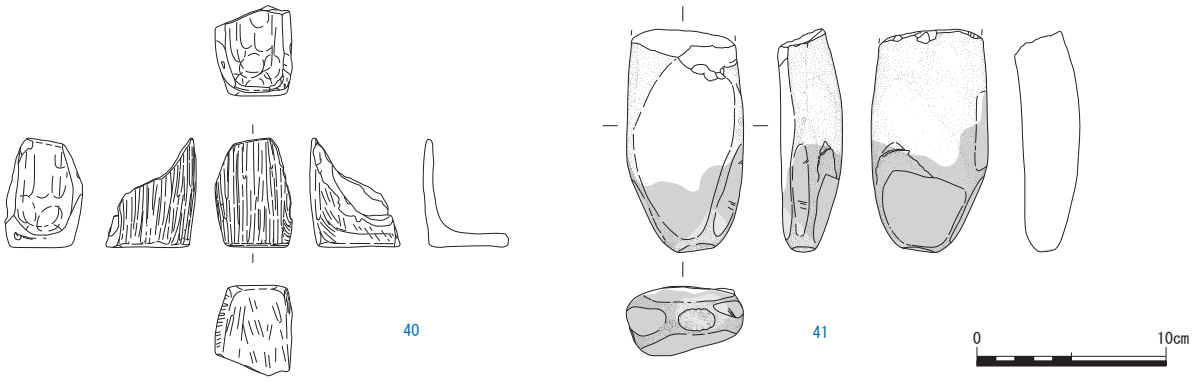
1区南壁断面東側（北西から）

第7図　1区南壁断面図（S＝1/60）

〔表土〕	1	Hue10YR5/3	にぶい黄褐色粘質土	
〔水田耕作土〕	2	Hue2.5Y5/2	暗灰黄色弱粘質土	
	3	Hue10YR6/1	褐灰色粘質土	
	4	Hue10YR5/2	灰黄褐色粘質土	
	5	Hue10YR5/3	にぶい黄褐色粘質土	
〔３期遺構面覆土〕	6	Hue10YR4/1	褐灰色粘質土	
〔河道２埋土〕	7	Hue2.5Y2/1	黒色粘質土	３期
	8	Hue2.5Y3/1	黒褐色粘質土	３期
	9	Hue2.5Y4/1	黄灰色粘質土	３期
〔窪地埋土〕	10	Hue5Y3/1	オリーブ黒色砂質土	
	11	Hue5Y4/1	灰色砂質土	
〔遺物包含層〕	12	Hue2.5Y4/1	黄灰色弱粘質土	２期
〔河道１埋土〕	13	Hue10YR5/8	黄褐色粘質土	２期
	14	Hue7.5Y4/1	灰色砂質土	２期
	15	Hue7.5Y4/1	灰色砂質土	２期
〔遺物包含層〕	16	Hue10YR4/1	灰色弱粘質土	１期　※河道埋土の可能性あり
	17	Hue5Y4/1	灰色弱粘質土	１期　※河道埋土の可能性あり
〔地山〕	18	Hue7.5Y4/1	灰色砂質土	
	19	Hue7.5Y4/1	灰色粘質土	
	20	Hue2.5Y5/2	暗灰黄色粘質土	



第８図　１区１期遺物包含層出土土器実測図（S＝1/4）



第９図　１区１期遺物包含層出土土製品・石器実測図（S＝1/4）

脚部の上端外面に直線文を施している。26 は柱状を呈している。いずれも３方向に透孔をもつが、25 は裾部と柱状部の境、26 は脚部中位よりやや低い位置に施している。

27 ～ 32 は器台である。27 はわずかに外反する口縁部をもち、口縁端部は面をなす。28 と 29 は柱状の中空脚をもち、３方向の透孔を脚部中位よりやや低い位置に施している。30 ～ 32 は円錐状の中空脚をもち、それぞれの中空部分の径は 1.6cm、1.5cm、2.4cm を測る。３方向に透孔を施しており、その位置は 30 と 31 が脚部中位よりやや低く、32 はほぼ脚部中位である。

33 ～ 37 は鉢である。33 は受口状の口縁部をもち、口縁端部を面取りしている。口縁屈曲部外面に刺突文、肩部外面に直線文を施している。口径が体部径をわずかに上回っている。34 はく字状の口縁部をもち、口縁端部を丸くおさめている。頸部の屈曲は緩やかで、口径が体部径をわずかに上回っている。35 ～ 37 は有孔の底部である。35 は内外面ともにミガキを施している。36 と 37 はともに体部が直線的に立ち上がり、体部内面にハケを施している。

38 と 39 はミニチュア土器である。38 は壺形で肩部外面に直線文と刺突文を施しており、39 は甕形を呈している。40 は箱形の土製品である。詳細は不明である。

41 は石器で敲石である。円礫を用いて製作しており、先端部に敲打痕が残る。煤が付着している。

（３）１期の年代

図示した 39 点の土器は、河道埋土の可能性が指摘できる遺物包含層から出土しており、やや時期差をもつと考えている。

まず、壺であるが、口縁端部内面に、羽状に並ぶ３列の刺突文を施すが、粘土を付加した文様帯などを形成していないパレス壺（３）や、外傾する口縁端部外面をもち、口縁端部内面にやや内彎する文様帯を形成するもの（４）を確認できている。甕では、受口状の口縁部をもつものと、く字状の口縁部をもつものが主体であり、S 字状の口縁部をもつものは確認できていない。また、器壁の薄いものも確認できていない。高杯は、杯部が浅いものが中心であり、口縁端部を面取りするもの（18）や、口縁部外面に波状文を施すもの（19）も確認できている。一方、やや深い杯部をもつもの（23・24）も確認できており、24 の口縁部はわずかながら内彎している。脚部の透孔は、全て３方向に穿孔されており、その位置は脚部中位より下である。器台は、全て中空器台であり、

柱状の中空脚をもつものと、円錐状の中空脚をもつものが混じる。円錐状中空脚の中空部分の径はあまり小さくなく、３方向の透孔を脚部中位より高い位置に施したものもない。また、底径が口径を凌駕するものや、内彎を志向したものもない。鉢は、口径と体部の最大径がほぼ同じである。

以上の特徴から、１期の出土土器の編年的位置を、山中Ⅱ式２段階～廻間Ⅰ式０段階の範疇で捉えられると考える。

（４）２期の遺構・遺物

２期では、１本の河道（河道１）と２カ所の土器集中部（土器集中部１、土器集中部２）、１本の柱穴（柱穴１）を確認した（第 10 図）。

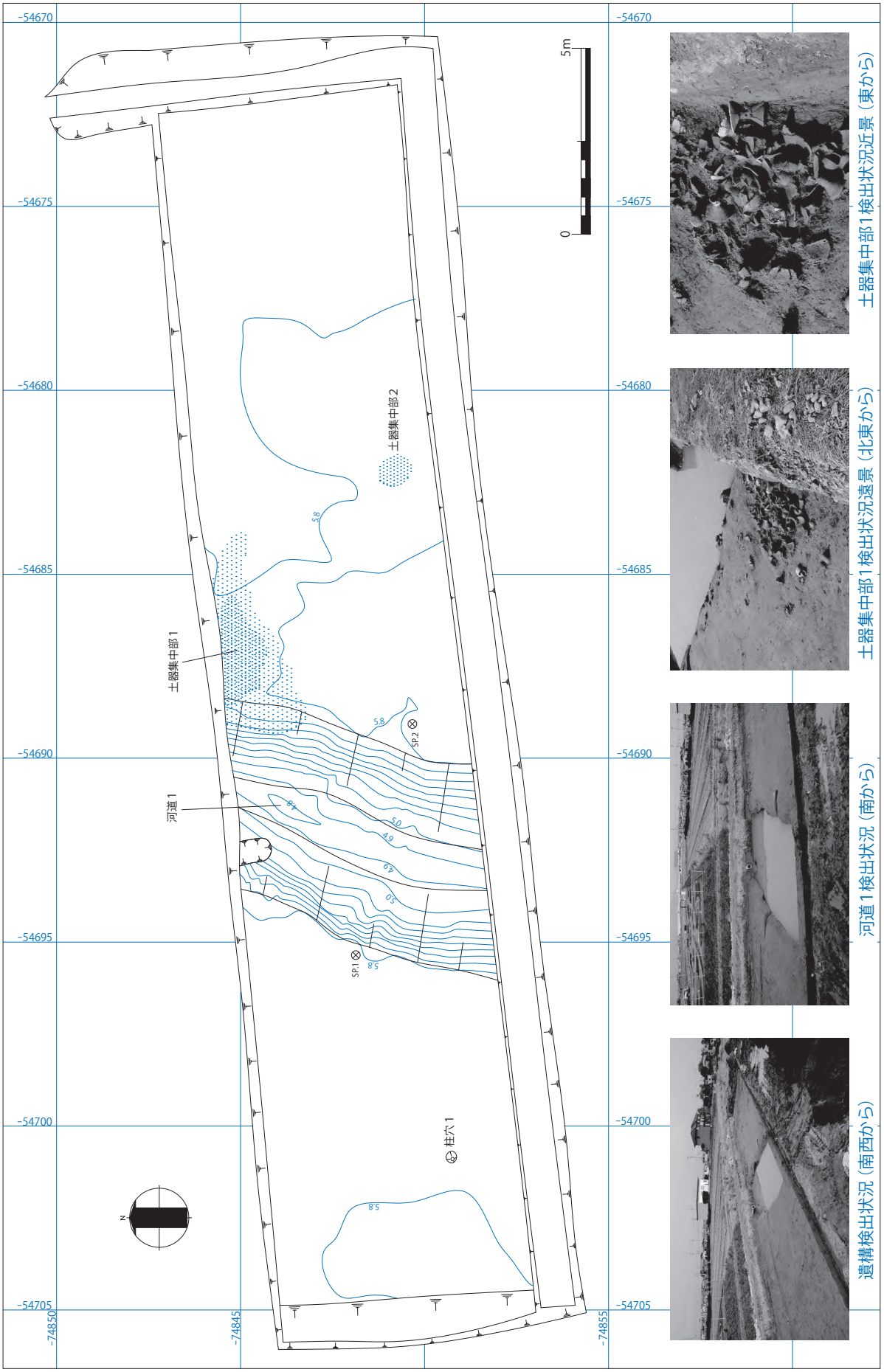
【河道１】

河道１は幅約 5.7 m、深さ約 1.3 mの規模をもつ。河道底部の標高から、調査区を南から北に流れていた可能性が高いと判断した。埋土は、上から灰色を呈する砂質土層（第 11 図５・６層）、灰色を呈する砂層（第 11 図７～ 10 層）、底に溜まった暗灰色砂礫層（第 11 図 11 層）の３つに区分できる。このうち、埋土の大半を占める灰色を呈する砂層（第 11 図７～ 10 層）は、よく似た特徴をもつ粗砂層と細砂層で構成されるが、後述する同時期の河道（２区河道２、３区河道５）の埋土に確認できたような明確な一括体積の特徴は看取できなかった。

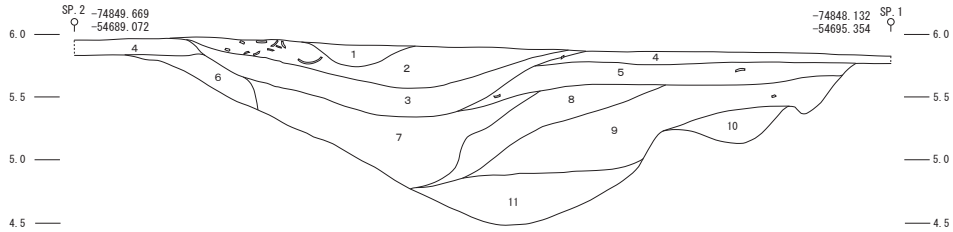
この河道１から出土した土器のうち、出土層位を判定できなかった 13 点の土器のほか、底に溜まった暗灰色砂礫層から出土した１点の土器と、埋土の大半を占める灰色を呈する砂層から出土した９点の土器を図示した（第 12 図の 42 ～ 64）。

42 ～ 44 は壺である。42 は直線的に立ち上がる口縁部をもち、口縁端部を面取りしている。43 はわずかに内彎する短い口縁部をもつ。44 は外反する短い口縁部をもつ。頸部の締まりが緩やかで、口径と頸径にあまり差がない。45 ～ 52 は甕である。45 は受口状の口縁部をもつ。口縁端部外面に刺突文を施し、頸部外面には強いヨコナデ状の直線文を施している。46 ～ 49 はく字状の口縁部をもつ。46 と 47 は外反する短い口縁部をもち、口縁端部を面取りしている。48 はわずかに内彎する口縁部をもち、口縁端部を丸くおさめている。49 は外側にほぼ直線的にのびる口縁部をもち、丸くおさめた口縁端部に刺突文を施している。頸部の屈曲が緩やかである。50 と 51 はＳ字状の口縁部をもつ。どちらも口縁部２段目外面に押引状の刺突文を施し、頸部内面にハケを施す。ただ、体部外面のヨコハケを、50 は頸部に接して施すのに対し、51 は頸部よりやや下がった位置に施している。52 は受口状の口縁部をもつ。口縁端部を外側に明瞭につまみ出しており、Ｓ字状の口縁部によく似ている。口縁屈曲部外面に刺突文を施し、体部上半外面には２条の沈線を施す。体部内面にはナデを施すが、器壁は薄くない。胎土はにぶい黄橙色を呈している。53 と 54 は高杯である。53 は杯部が浅く、外反する口縁部をもつ。口縁部と杯底部の内面境があまり明瞭ではない。54 は脚部である。円錐状を呈し、脚部中位よりわずかに低い位置に、３方向の透孔を施している。

55 は器台である。わずかに外反する口縁部をもつ。口縁端部はやや拡張され、面をなしている。



第10図　1区2期平面図（S＝1/150）



〔河道２埋土〕	1	Hue5Y2/1	黒色粘質土	３期
	2	Hue5Y3/1	オリーブ黒色粘質土	３期
	3	Hue7.5YR4/1	褐灰色粘質土	３期
〔遺物包含層〕	4	Hue5Y4/1	灰色砂質土	２期
〔河道１埋土〕	5	Hue7.5Y5/1	灰色砂質土	２期
	6	Hue2.5Y5/1	黄灰色砂質土	２期
	7	Hue7.5Y4/1	灰色粗砂	２期
	8	Hue10Y4/1	灰色細砂	２期
	9	Hue10Y4/1	灰色細砂	２期
	10	Hue7.5Y4/1	灰色粗砂	２期
	11	ValueN31	暗灰色砂礫	２期

0　2m

河道１・２断面（北から）

第 11 図　河道１・２断面図（S＝1/60）

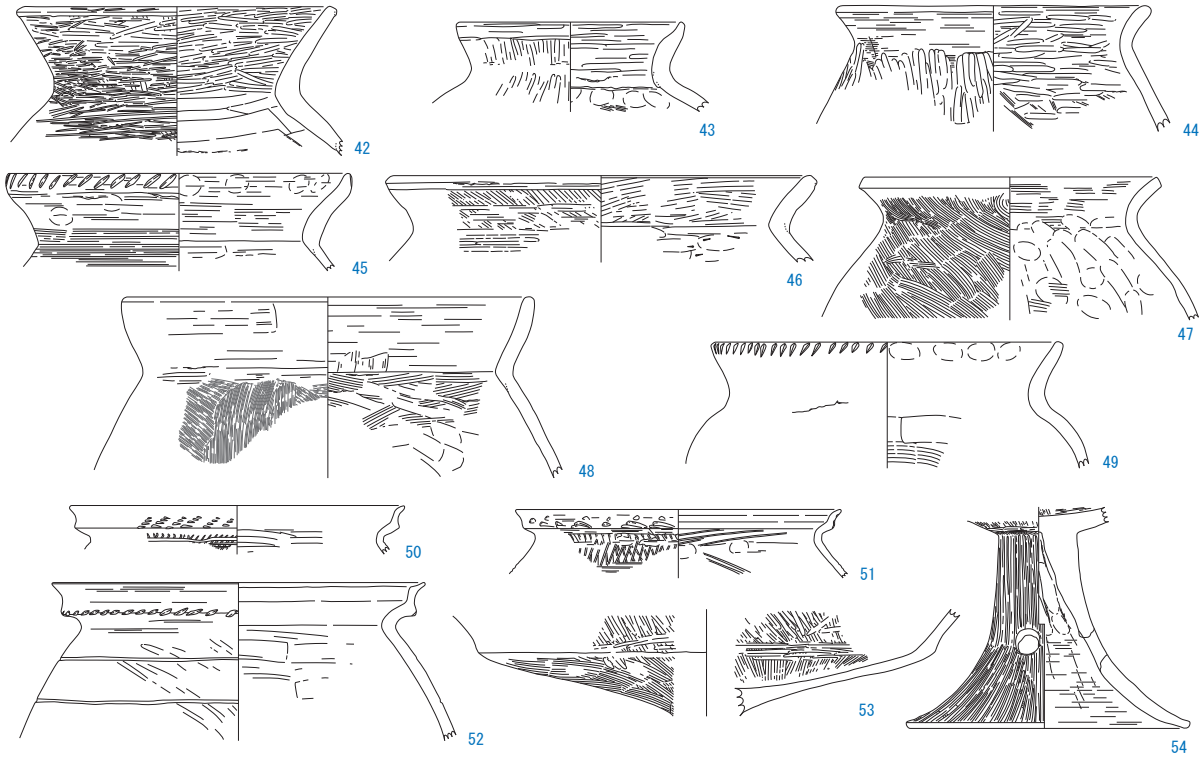
56 は壺である。垂下して拡張させた口縁端部外面に擬凹線文を施している。口縁端部の内面には、羽状に並ぶ３列の刺突文を施す。この刺突文を描いた文様帯上には赤彩していない。57 ～ 59 は甕である。57 と 58 は受口状の口縁部をもち、口縁端部を面取りしている。57 は口縁端部外面に刺突文を施し、頸部外面には 1 条の沈線を施している。59 は外側にほぼ直線的に開く、く字状の口縁部をもち、口縁端部を面取りしている。体部の最大径を中位にもつ。60 は高杯である。円錐状を呈する脚部をもち、裾部と柱状部の境に透孔を施している。61 は器台である。ほぼ直線的に開く口縁部をもち、口縁端部外面は拡張され、面をなしている。62 ～ 64 は鉢である。いずれも受口状の口縁部をもつ。62 は口縁端部外面に波状文、頸部外面に直線文と連弧文を施している。63 と 64 は無文で、頸部の屈曲は緩やかである。いずれも体部径が口径をわずかに上回っている。

【土器集中部１】

土器集中部 1 は河道 1 の東岸、X=-74844.9,Y=-54687.2, 標高 5.8 mの地点を中心に、東西 2.7 mの規模をもつ。北側が調査区北壁に接するため、南北の規模は明らかにできなかった。なお、やや密度は薄くなるものの東西 5.3 mの範囲にわたっても土器は散布しており、これらについても、当遺構の範囲に含まれると判断した。遺存状態が良好であり、接合によって全体の形態を復元できる土器が多い。

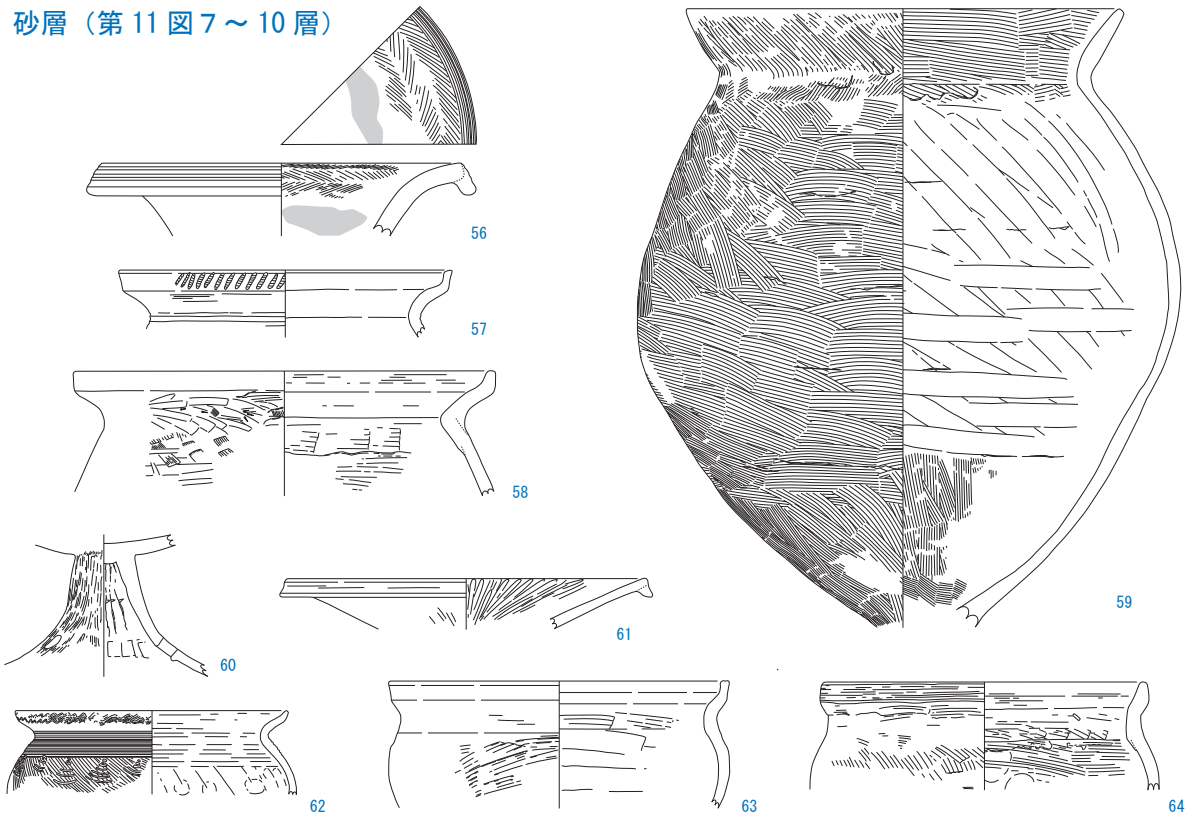
出土した土器のうち、密度の濃い範囲から出土した 28 点、密度のやや薄い範囲から出土した 5 点を図示した。（第 13・14 図の 65 ～ 97）。

65 ～ 70 は壺である。65 はやや外反する口縁部をもち、口縁端部を丸くおさめている。66 は体部外面に 2 帯の直線文と刺突文を施している。刺突文には線形を呈するものと円形を呈するものがある。67 ～ 70 は小型壺である。67 はやや内彎気味に立ち上がる長い口縁部をもち、口縁端部

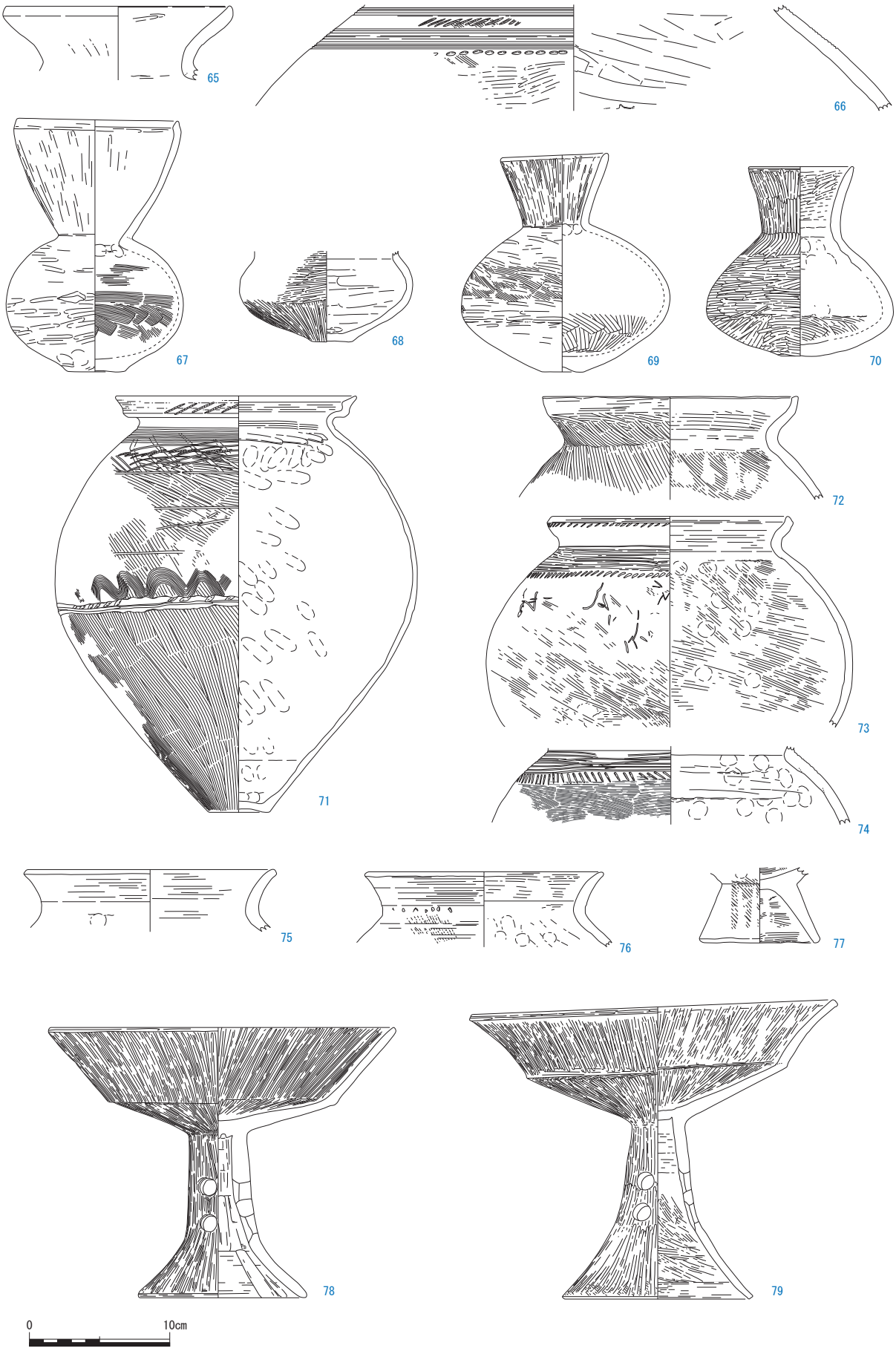


底（第 11 図 11 層）

砂層（第 11 図 7 ～ 10 層）



第 12 図　1 区 2 期河道 1 出土土器実測図（S ＝ 1/4）



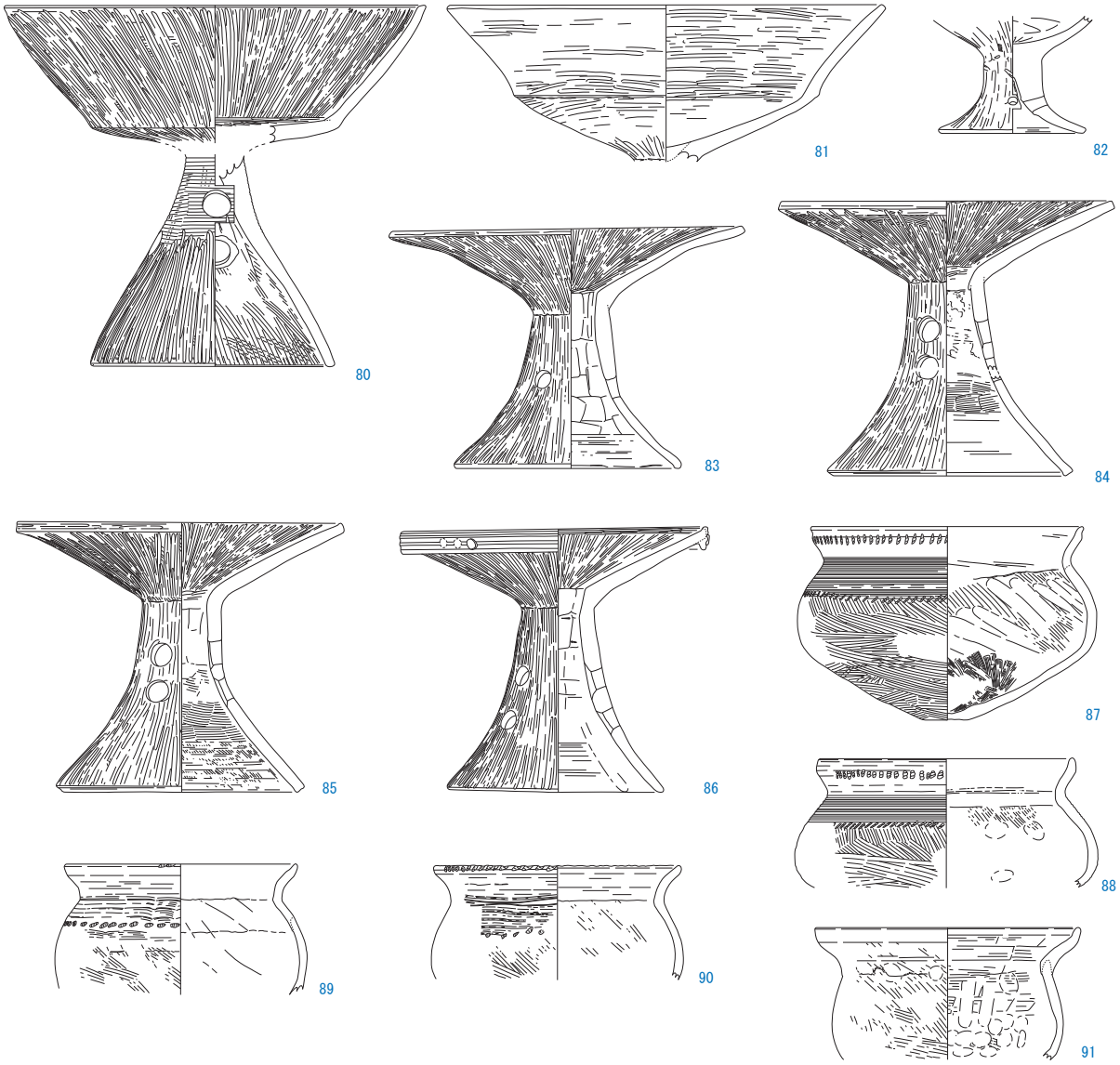
第 13 図　1 区 2 期土器集中部 1 出土土器実測図 1（S ＝ 1/4）

は内側に面をなす。球形の体部をもち、体部外面に横方向のミガキを施す。底部は平底で、わずかに突出している。体部の一部を焼成後に打ち欠いている。68 は球形の体部をもち、体部外面に横方向のミガキを施す。底部は平底で、わずかに突出している。69 はほぼ直線的に開く短い口縁部をもち、口縁端部を丸くおさめている。球形の体部をもち、体部外面に横方向のミガキを施す。底部は平底で上げ底している。70 はわずかに外反する短い口縁部をもち、口縁端部を丸くおさめている。体部は最大径が中位よりやや下に位置しており、しもぶくれ状を呈する。体部外面に横方向のミガキを施している。底部は平底である。

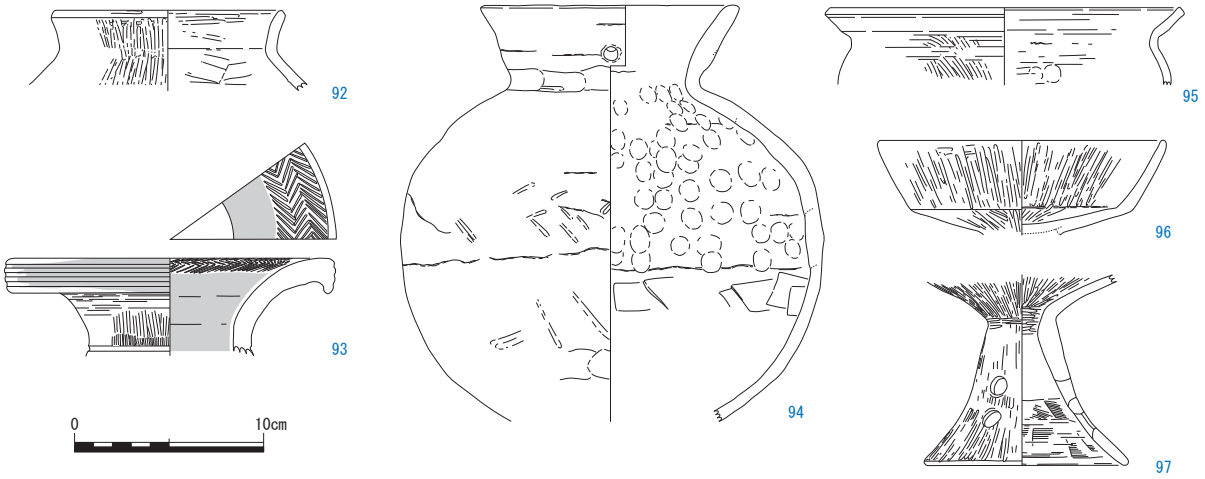
71 ～ 77 は甕である。71 は受口状の口縁部をもつ。口縁端部を外側につまみ出しており、端部内側に明瞭な面をもつ。口縁端部外面に刺突文、肩部に直線文と刺突文、体部上半に断続する 4 条の沈線、体部の中位には波状文と、 1 条の沈線と刺突文を施した 1 帯の貼付突帯を付加している。頸部内面は横方向のハケを施し、体部内面はナデで仕上げている。底部はやや上げ底状の平底をもち、体部の器壁は非常に薄い。72 と 73 は受口状の口縁部をもつ。72 は口縁端部を面取りしている。73 は口縁端部をやや内側につまみ上げており、口縁屈曲部外面に刺突文、肩部外面に直線文と刺突文を施している。また、体部上半外面にヘラ描きのような沈線を確認できるが、絵画を意図したものであるかは判断できなかった。74 は肩部外面に直線文と刺突文を施している。75 と 76 はく字状の口縁部をもつ。75 は口縁端部を面取りしているが、76 は丸くおさめている。76 は頸部外面の一部に工具痕が残っている。77 は台付甕の脚部である。

78 ～ 82 は高杯である。78 は杯部が深い。杯底部から稜部までの長さが口縁部の長さとほぼ同じで、柱状の脚部をもち、その中位に 2 段 3 方向の透孔を施している。79 はやや深い杯部をもつ。杯底部から稜部までの長さが口縁部の長さをやや上回っており、口縁部と杯底部の内面境には、横方向のミガキを施し、稜を明瞭にしている。円錐状の脚部をもち、そのほぼ中位に 2 段 3 方向の透孔を施す。80 は杯部が深く、ほぼ水平に開く杯底部とわずかに内彎する口縁部をもつ。口縁部の長さが杯底部から稜部までの長さをやや上回っており、口縁部と杯底部の内面境の稜は明瞭である。円錐状に内彎する脚部上部の外面には直線文が施され、脚部中位よりやや高い位置に間隔が均等ではない 3 方向の透孔と、さらにその上段に 1 方向の透孔を施している。81 は杯部が深く、杯底部から稜部までの長さが口縁部の長さとほぼ同じである。口縁部内外面ともに横方向のミガキを施している。82 は杯部が椀形を呈している。柱状の脚部をもち、柱状部と裾部の境に 4 方向の透孔を施している。

83 ～ 86 は器台である。83 は緩やかに外反する口縁部と、円錐状の脚部をもつ。口縁端部を面取りし、裾端部を丸くおさめている。中空部分の径は 2.7cm を測る。脚部内面は、ナデを施すことによって、前段階までの痕跡のほとんどを消している。脚部のほぼ中位に 3 方向の透孔をもつ。84 は外側にほぼ直線的に開く口縁部と円錐状の脚部をもつ。口縁端部と裾端部をともに面取りしている。中空部分の径は 2.4cm を測る。裾端部の内面には横方向のナデを施し、前段階のハケの痕跡を消しているが、脚部中位の内面にはハケの痕跡が残っている。脚部の中位とその上段に、 2 段 3 方向の透孔を施している。85 は外側にほぼ直線的に開く口縁部と円錐状の脚部をもつ。口縁端部と裾端部をともに面取りしている。中空部分の径は 2.8cm を測る。裾端部の内面には横方向



密度の薄い範囲から出土した土器



第 14 図　1 区 2 期土器集中部 1 出土土器実測図 2（S＝1/4）

のナデを施すが前段階のハケの痕跡が残っている。また、脚部中位の内面にもハケの痕跡が残っている。脚部の中位とその上段に、２段３方向の透孔を施している。86 は直線的に開く口縁部と円錐状の脚部をもつ。口縁端部外面は拡張されて面をなし、３方向にそれぞれ３つの円形浮文を貼り付けている。裾端部は丸くおさめている。中空部分の径は 2.4cm を測る。83 と同様に脚部内面の前段階の痕跡をほとんど消している。脚部の中位に２段３方向の透孔を施している。

87 ～ 91 は鉢である。87 と 88 は受口状の口縁部をもち、口縁端部を丸くおさめている。口縁屈曲部外面に刺突文、肩部外面に直線文と刺突文を施している。どちらも体部径が口径を上回っており、体部外面中位に横方向のハケを施している。89 と 90 はく字状の口縁部をもつ。89 は口縁端部をわずかにつまみ上げている。どちらも口縁端部に刺突文、肩部外面に直線文と刺突文を施しており、体部径が口径をわずかに上回っている。91 は受口状の口縁部をもち、口縁端部を丸くおさめている。文様は施しておらず、口径が体部径を上回っている。

92 は土器集中部１の東端、密度が薄い範囲から出土した。壺で、わずかに内彎する短い口縁部をもつ。93 ～ 97 は土器集中部の西端、土器の密度が薄い範囲から出土した。93・94 は壺である。93 は拡張した口縁端部外面に擬凹線文を施し、赤彩する。口縁端部の内面には、羽状に並ぶ３列の刺突文を施すが、粘土を付加した文様帯は形成していない。また、この刺突文を描く文様帯上は赤彩していない。頸部と体部の外面境に１条の沈線を施している。94 は直線的に立ち上がる口縁部をもち、口縁端部を丸くおさめている。口縁部の中位に１カ所の透孔をもち、体部は球形を呈している。95 は甕である。く字状の口縁部をもち、口縁端部を面取りしている。文様は施されていない。96 は高杯である。やや深い杯部をもち、杯底部から稜部までの長さが口縁部の長さをわずかに上回る。口縁部と杯底部の内面境はわずかに凹んでおり、稜が明瞭になっている。97 は器台である。円錐状の脚部をもち、中空部分の径は 1.6cm を測る。口縁部と脚部の内外面の境には横方向のミガキを施している。裾端部の内面には横方向のナデを施しているがハケの痕跡が残る。脚部の中位とその下段に、２段３方向の透孔を施している。

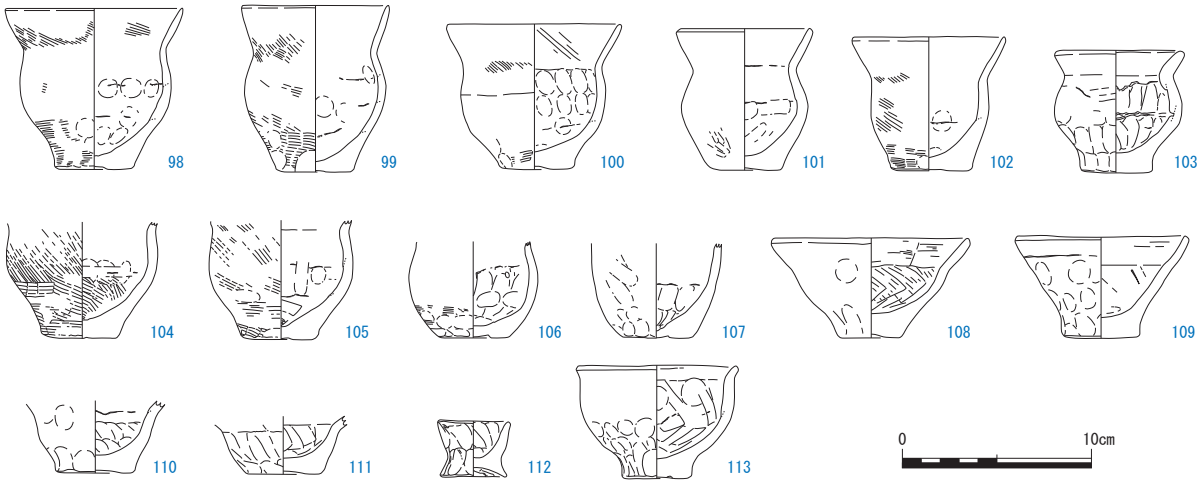
【土器集中部２】

土器集中部２は河道１の東岸から東に約８ｍ、X=-74849.2,Y=-54682.1, 標高 5.8 ｍの地点を中心に、東西 1.0 ｍ、南北 0.7 ｍの規模をもつ。遺存状態は良好であり、出土した遺物は全てミニチュア土器であった。出土した土器のうち、16 点を図示した（図 15 図の 98 ～ 113）。

98 ～ 113 はミニチュア土器である。98 ～ 107 は甕形、108 ～ 112 は体部が直線的に立ち上がる鉢形、113 はく字状の口縁部をもつ鉢形を呈す。底部には、平底のものと上げ底状のものがある。

【柱穴１】

柱穴１は調査区西端から東に約 1.8 ｍの地点、16 層上面において検出した。直径 0.3 ｍを測る。埋土に遺物を確認できなかった。

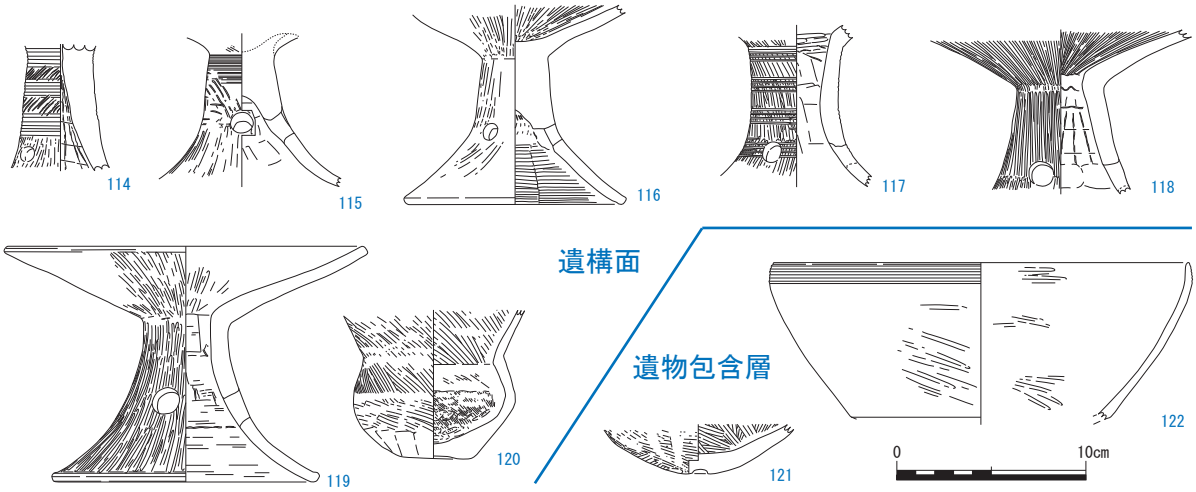


第 15 図　1 区 2 期土器集中部 2 出土土器実測図（S＝1/4）

【遺構面・遺物包含層】

2 期では、16 層上面及び 17・19 層上面が遺構面であり、12 層が遺物包含層である。ただし、調査区西側から東に約 2 mの範囲については、1 期と 2 期の遺構検出面は等しい。この遺構面直上から出土した遺物から 7 点、遺物包含層から出土した遺物から 2 点の土器を図示した（第 16 図の 114 ～ 120、121 ～ 122）。

114 ～ 116 は高杯である。いずれも柱状の脚部をもち、114 は脚部上部外面に直線文と刺突文、115 は脚部上端外面に直線文を施している。脚部の透孔の位置は、114 が方向は不明で中位よりもやや下、115 が 4 方向でほぼ中位、116 が 3 方向でほぼ中位である。115 と 116 は脚部の中実部分がやや長い。117 ～ 119 は器台である。117 は柱状の中空脚をもち、脚部外面に 4 帯の直線文を施している。中空部分の径は 2.9cm を測り、3 方向の透孔は裾部と柱状部の屈曲部に施されている。118 は外側にほぼ直線的に開く口縁部と円錐状の脚部をもつ。中空部分の径は 2.2cm を測り、3 方向に透孔をもつ。119 は直線的に開く口縁部と、円錐状の脚部をもつ。口縁端部と裾端部を面取りしている。中空部分の径は 2.6cm を測る。脚部内面は、ナデを施すことによって、



第 16 図　1 区 2 期遺構面及び遺物包含層出土土器実測図（S＝1/4）

前段階の痕跡のほとんどを消している。脚部のほぼ中位に３方向の透孔を施している。120 はミニチュア土器である。甕形を呈し、わずかに上げ底した平底をもつ。

121 は小型壺の底部である。丸底であり、底部外面が小さく凹んでいる。122 は高杯である。杯部は深く、内彎して立ち上がる口縁部をもつ。口縁部の長さが杯底部から稜部までの長さを上回っており、口縁端部外面には７条で１帯となる直線文を施している。

（５）２期の年代

図示した 81 点の土器は、河道１、土器集中部１、土器集中部２、遺構面・遺物包含層から出土している。

まず、河道１であるが、全体としては、杯部の浅い高杯（53）や口縁端部内面に有段状の文様帯を形成していないパレス壺（56）、A 類の特徴を備えた S 字甕（50・51）、裾部と柱状部の境に透孔を施す高杯脚部（60）を確認できるが、53 は口縁部と杯底部の内面の境があまり明瞭でなく、56 は口縁部内面の赤彩が部分的であり、60 は透孔の間隔が一定ではない。また、内彎を志向する高杯や器台、小型の高杯、底径が口径を上回る器台、S 字甕 B 類を確認できない*。

底から出土した 55 の器台は、脚部を欠損しているものの、口径は 17.0cm を測り、底径が口径を凌駕する可能性は低い。また、口縁部はわずかに外反しており、内彎を志向していない。

埋土の大半を占める砂層から出土した土器では、61 の器台が脚部を欠損するものの、口径は 19.0cm を測り、底径が口径を凌駕する可能性は低い。口縁部もほぼ直線的に開いており、内彎を志向していない。62 ～ 64 の鉢は、いずれも受口状の口縁部をもつが、その形状は痕跡的である。62 は文様をもち体部径が口径をわずかに上回っている。63 と 64 は無文であるが、体部径は口径をわずかに上回っている。

以上の特徴から、河道１の出土土器の編年的位置を、廻間Ⅰ式０段階～廻間Ⅰ式３段階の範疇で捉えられると考える。

次に、土器集中部１である。図示した 33 点の土器のうち、密度の薄い範囲から出土した６点の土器を除けば、土器の遺存状態が良好であることや、その出土状況から、一括性の高い資料であると判断した。

まず、小型壺であるが、球形の体部をもち、最大径の位置を中位にもつもの（67 ～ 69）と、体部最大径の位置が中位よりやや下に位置し、しもぶくれ状を呈するもの（70）があり、いずれも体部外面の調整に横方向のミガキを確認できる。底部は、わずかに突出した平底のもの（67、68）と、ほとんど突出していない平底のもの（70）のほかに、上げ底したもの（69）がある。甕では S 字甕を確認できていないが、体部の器壁が２～３mm と非常に薄いもの（71）がある。高杯では、口縁部の長さが杯底部から稜部までの長さを上回るものは 80 だけであるが、全体的に杯部は深くなってきている。脚部の透孔は、２段３方向に穿孔され、その位置は脚部中位にくるものが多い。脚部が内彎するもの（80）も含まれる。器台は、全て円錐状の脚部をもつ中空器台であり、底径

＊　赤塚次郎 1990「廻間式土器」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 10 集

が口径を凌駕するものはない。口縁部が明確に内彎するものもなく、中空部分の径は 2.2 ～ 2.9cm と大きいものが中心である。鉢は、体部径が口径を上回り、口縁端部や肩部外面に文様を施すものが多いが、口径が体部径を上回り、文様を施さないもの（91）もある。

以上の特徴から、土器集中部１の出土土器の編年的位置を、廻間Ⅰ式１段階を中心とした範疇で捉えられると考える。

土器集中部２については、出土土器の諸特徴から、その編年的位置を検討することは困難であった。

次に遺構面･遺物包含層であるが、遺構面から出土した高杯や器台の脚部の透孔は、脚部中位か、それよりもやや下にくるものが多い。また、明確に内彎するものはない。一方、遺物包含層から出土した高杯（122）の口縁部は内彎して立ち上がっており、小型壺（121）の底部は丸底状を呈している。

以上の特徴から、遺構面の出土土器の編年的位置を、山中Ⅱ式２段階～廻間Ⅰ式０段階の範疇、遺物包含層の出土土器の編年的位置を、廻間Ⅰ式２段階～廻間Ⅰ式４段階古の範疇で捉えられると考える。

（６）３期の遺構・遺物

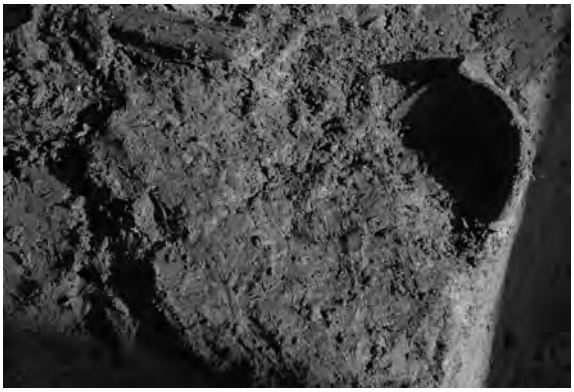
３期では、１本の河道（河道２）と１カ所の土器集中部（土器集中部３）を確認した（第 17 図）。

【河道２】

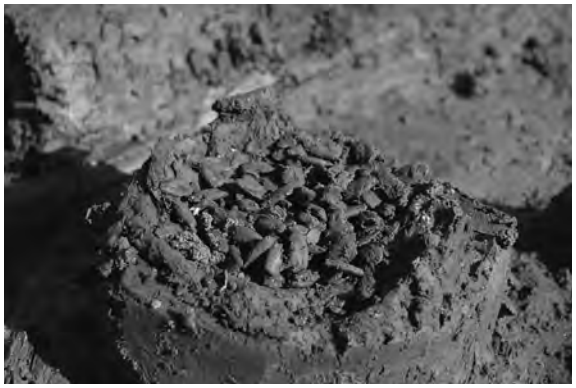
河道２は幅約3.2ｍ、深さ約0.6ｍの規模をもつ。河道１の埋没によって生まれた河道であるため、河道１と同様、調査区を南から北に流れていたと考えた。埋土は、黒色を呈する粘質土層（第11図１・２層）と底に溜まった褐灰色を呈する粘質土層（第 11 図３層）の大きく２つに区分することができる。多量の土器の他に、種子やシジミ、樹皮製の編みカゴなどが出土した。

この河道２から出土した土器のうち、下層から出土した 10 点の土器と、上層から出土した 27 点の土器、出土層位を判定できなかった 14 点の土器を図示した（第 18・19 図の 123 ～ 173）。

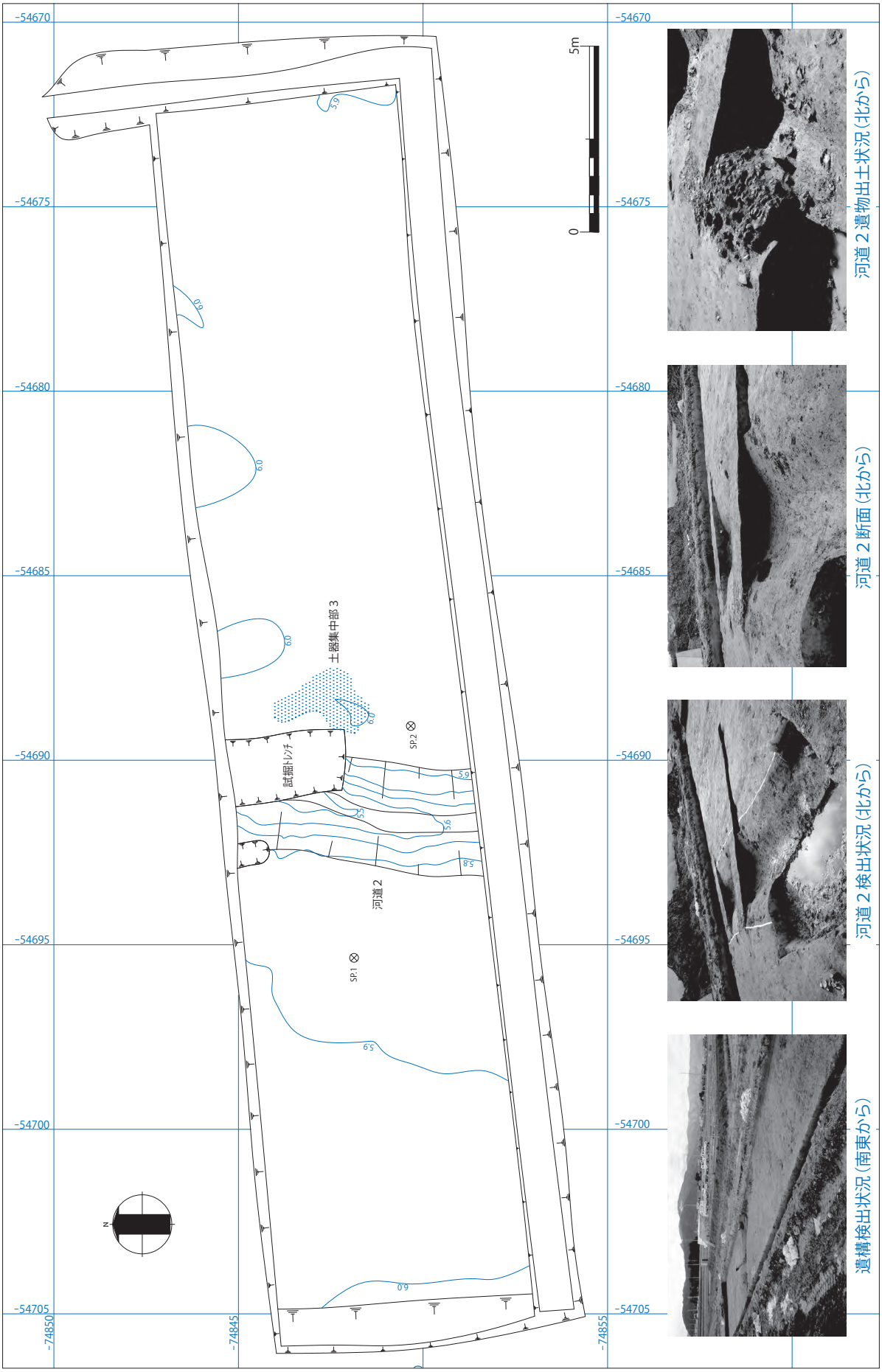
123 ～ 125 は壺である。123 は拡張した口縁端部外面に擬凹線文を施した後、４本の棒状浮文



編みカゴ出土状況（西から）



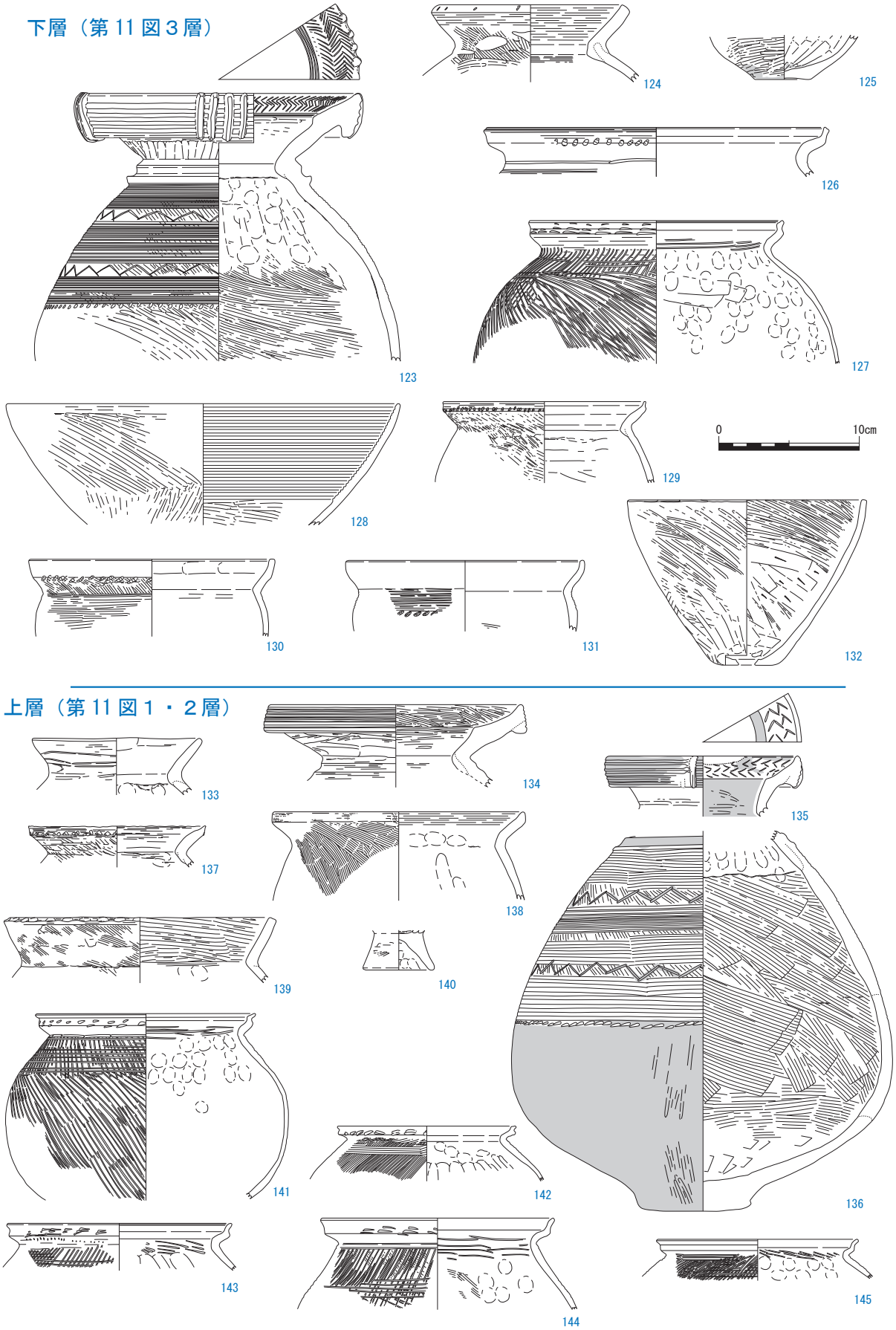
有機物出土状況（西から）



第 17 図　1 区 3 期平面図（S＝1/150）

を４方向に施している。また、口縁端部の内面には、粘土を付加した有段の文様帯を形成し、羽状に並ぶ３列の刺突文と４条の直線文を施している。頸部と体部の外面境には２条の突帯を貼り付け、しもぶくれ状を呈する体部の外面には、３帯の直線文と、その間に鋸歯状に刺突文を施し、さらにその下部に刺突文を施している。赤彩は確認できない。124 はわずかに内彎する口縁部をもち、面をなした口縁端部には、刺突文を確認できる。125 は小型壺の底部である。平底であり、内外面の一部に赤彩を確認できる。126・127 は甕である。126 は受口状の口縁部をもち、口縁屈曲部外面に刺突文、頸部外面に１条の沈線、肩部外面に直線文を施している。127 はＳ字状の口縁部をもつ。口縁部２段目外面に押引状の刺突文を施し、頸部内面にハケを施す。体部外面には羽状のハケの他、頸部からわずかに下がった位置にヨコハケが施されている。128 は高杯である。杯部が深く、内彎して立ち上がる口縁部の内面には、有段で幅の広い文様帯を形成し、多条沈線文を施している。口縁部の外面には、羽状に並ぶ２段の斜め方向のミガキを施している。129 ～ 132 は鉢である。129 ～ 131 は受口状の口縁部をもつ。129 は口縁端部をつまみ上げており、口縁屈曲部外面に刺突文を施している。体部径が口径をわずかに上回っている。130 は口縁屈曲部外面に刺突文、肩部外面に横方向のハケを施している。口径が体部径を上回っている。131 は肩部外面に直線文と刺突文を施しており、口径が体部径を上回っている。132 はほぼ直線的に立ち上がる体部をもち、底部には穿孔がある。口縁端部にミガキを確認できる。

133 ～ 136 は壺である。133 は、わずかに内彎する短い口縁部をもち、口縁部外面に沈線を確認できている。134 は拡張した口縁端部外面に擬凹線文を施している。口縁端部の内面には、内彎する文様帯を形成しているが施文はない。頸部と体部の外面境に、ナデにより２条の突帯を表現している。赤彩は確認できない。135 は拡張した口縁端部外面に擬凹線文を施した後、棒状浮文を貼り付けている。口縁端部内面には、内彎する文様帯を形成し、羽状に並ぶ４列の刺突文を施している。口縁端部外面と口縁端部内面の一部、口縁部内面に赤彩を施している。136 は頸部と体部の外面境にナデによって２条の突帯を表現しており、しもぶくれ状を呈する体部の外面には、３帯の直線文と、その間に鋸歯状に刺突文を施し、さらにその下部に刺突文を施している。突出した平底の底部をもち、頸部と体部の外面境と、鋸歯状に配置された刺突文、体部外面の刺突文以下に赤彩を施している。137 ～ 150 は甕である。137・138 は受口状の口縁部をもつが、いずれも痕跡的である。137 は口縁屈曲部外面に刺突文を施しているが、138 は無文である。139 はく字状の口縁部をもつ。面をなした口縁端部に押圧痕が残る。140 は台付甕の脚部である。高さが低く、ほぼ直線的に開いている。141 ～ 150 はＳ字状の口縁部をもつ。141 ～ 144 は口縁部２段目外面に押引状の刺突文を施しているが、このうち 142 のみ頸部内面にハケを施していない。141 は体部外面に単斜方向のハケをもつ。また、頸部に接してヨコハケを施している他、頸部外面に１条の沈線も施している。一方、142 ～ 144 は体部外面に羽状のハケを施しており、ヨコハケは頸部から下がった位置に施されている。さらに、144 は頸部に２条の沈線も施している。145 ～ 150 は口縁部に施文していない。149 のみ体部外面のハケが単斜方向に施されている。150 は頸部内面にハケが施されず、頸部外面に１条の沈線が施されている。151 ～ 154 は高杯である。151 はやや内彎して立ち上がる口縁部の内面に無段の狭い文様帯を形成し、多条沈線文を施している。152 は杯底部から稜部までの長さが短く、大きく開いた口縁部をもつ。口縁部の内面に無段の広い文様



第 18 図　１区３期河道２出土土器実測図１（S＝1/4）

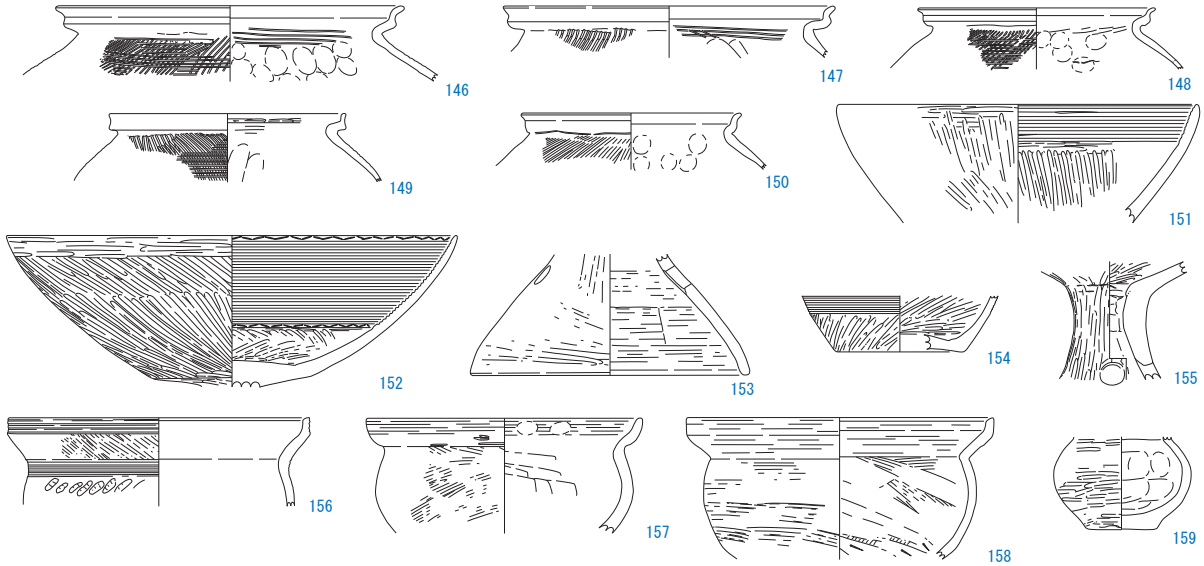
帯を形成し、多条沈線文と２帯の羽状の刺突文を施している。口縁部と杯底部の内面境の稜は明瞭である。153 は内彎して開く脚部をもつ。脚部のほぼ中位に透孔を施すが、間隔は一定ではない。脚部内面は、全体に丁寧な横方向のナデを施すことによって、成形や調整の痕跡を消し去っている。154 は小型の高杯である。口縁部外面に多条沈線文を施しており、口縁部と杯底部の内面境に明瞭な段をもつ。155 は器台である。円錐状の中空脚をもち、中空部分の径は 1.4cm を測る。４方向の透孔を脚部の中位よりやや低い位置に施している。156 ～ 158 は鉢である。いずれも受口状の口縁部をもち､口径が体部径を上回っている。156 は口縁部外面と頸部外面に直線文を施し、肩部外面には刺突文を施しているが、157・158 は無文である。159 はミニチュア土器である。壺形を呈し、平底の底部をもつ。

160・161 は壺である。160 は、わずかに内彎する短い口縁部をもち、口縁端部は面をなす。161 は肩部外面に直線文とやや直線的な波状文を施している。162 ～ 164 は甕である。162 はく字状の口縁部をもつ。口縁端部に押圧痕が残る。163 は台付甕の脚部で、やや内彎しているが小型化はしていない。164 はＳ字状の口縁部をもつ。口縁部２段目外面に押引状の刺突文、頸部内面にハケを施している。体部外面には羽状のハケを施しており、ヨコハケは頸部に接している。165 ～ 168 は高杯である。165 はほぼ水平に開く短い杯底部をもつ。円錐状を呈する脚部は、中位で屈曲している。脚部中位よりわずかに高い位置に３方向の透孔を施している。166 は内彎して開く脚部をもつ。脚部のほぼ中位に透孔を施す。脚部内面にはハケを施しており、ナデによって痕跡を消し去っていない。167 は杯底部の中心からやや外れた位置に直径約７mm の穿孔を施している。168 は小型の高杯である。無文であり、口縁部と杯底部の内面境に明瞭な段をもつ。３方向に透孔を施している。169・170 は器台である。169 はほぼ直線的に開く口縁部と、円錐状の脚部をもつ。口縁端部を面取りしている。中空部分の径は 2.0cm を測る。脚部に３方向の透孔をもつ。170 は円錐状の脚部をもち、中空部分の径は 0.9cm を測る。脚部に透孔をもつ。171・172 は鉢である。171 は頸部から肩部外面にかけて横方向の強いナデを施し、その下部に刺突文を施している。この体部上位に施した横方向の強いナデは、調整としてではなく、直線文として施された可能性が高い。172 は内彎して立ち上がる体部をもち、口縁端部は面をなす。底部を穿孔している。173 はミニチュア土器である。甕形を呈し、やや丸みを帯びた底部をもつ。

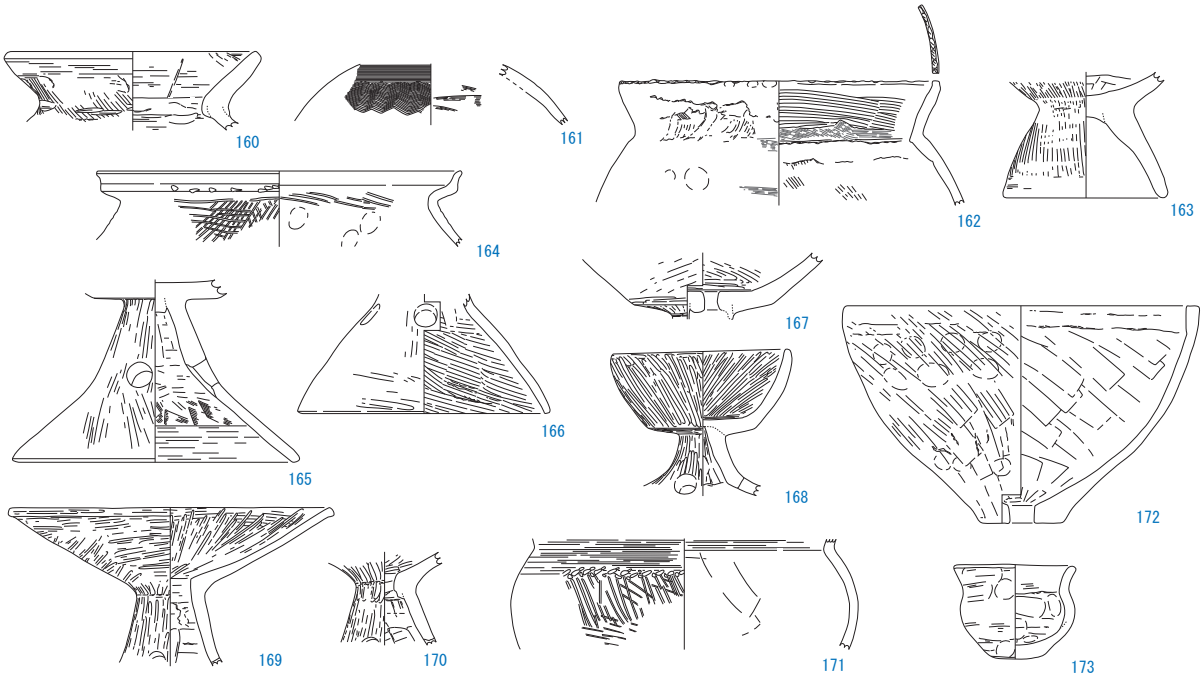
【土器集中部３】

土器集中部３は河道２の東岸から東に約 1.5 m、X=-74847.4,Y=-54688.2, 標高 6.0 mの地点を中心に、東西 1.9 m、南北 2.6 mの規模をもつ。遺存状態はあまり良くない。出土した土器のうち、４点を図示した（図 20 図の 174 ～ 177）。

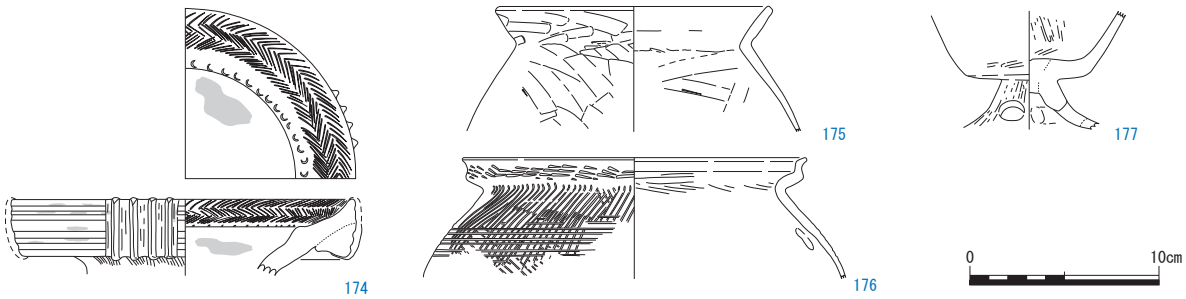
174 は壺である。拡張した口縁端部外面に擬凹線文を施した後、４本の棒状浮文を４方向に貼り付けている。また、口縁端部内面には、内彎する文様帯を形成しており、羽状に並ぶ３列の刺突文と竹管文を施している。口縁端部外面や口縁部内面に赤彩を確認できるが、摩耗が著しく詳細は不明である。175･176 は甕である。175 はく字状の短い口縁部をもち､口縁端部を面取りしている。176 はＳ字状の口縁部をもつ。口縁部２段目外面に押引状の刺突文､頸部内面にハケを施している。体部外面のハケは羽状を呈し、ヨコハケは羽状のハケの境に施されている。177 は小型の高杯で



上層（第 11 図 1 ・ 2 層）



第 19 図　1 区 3 期河道 2 出土土器実測図 2（S ＝ 1/4）



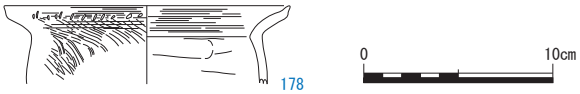
第 20 図　1 区 3 期土器集中部 3 出土土器実測図（S ＝ 1/4）

ある。脚裾部は残存していないが、無文であり、口縁部と杯底部の内面境に明瞭な段をもたない。脚部に３方向の透孔をもつ。

【遺構面・遺物包含層】

３期では、10 ～ 14 層上面及び 16 層上面が遺構面であり、６層が遺物包含層である。ただし、調査区東側から西に約５m、調査区西側から東に約 5.4 mの範囲については、２期と３期の遺構検出面が等しい。このうち、６層から出土した遺物から１点の土器を図示した（第 21 図の 178）。

178 は鉢である。受口状の口縁部をもつが痕跡的である。口縁屈曲部外面に刺突文を施しており、口径が体部径を上回っている。



第 21 図　１区３期遺物包含層出土土器実測図（S ＝ 1/4）

（７）３期の年代

図示した 56 点の土器は、河道２・土器集中部３・遺物包含層から出土している。

まず、河道２であるが、底に溜まった褐灰色粘質土層から、粘土を付加した有段の文様帯を形成し、しもぶくれ状を呈する体部をもつ壺（123）や、口縁部内面に有段の広い文様帯を形成し、多条沈線文を施す高杯（128）、口径と体部径がわずかに前後する鉢（129 ～ 131）、底部に穿孔がある直口鉢（132）などを確認できている。一方、上層の黒色粘質土層からは、内彎する文様帯を形成しているが施文はないパレススタイル壺（134）や、口縁部に施文がなく、頸部には１条の沈線を施しているＳ字甕（150）、杯底部から稜部までの長さが短く、口縁部内面に無段の広い文様帯を形成する高杯（152）、口径が体部径を上回る鉢（156 ～ 158）などが確認できている。以上の特徴から、河道２の出土土器の編年的位置を、廻間Ⅰ式３段階～廻間Ⅲ式１段階の範疇で捉えられると考える。

次に、土器集中部３である。口縁端部内面に内彎する文様帯を形成し、羽状に並ぶ３列の刺突文と竹管文を施しているパレススタイル壺（174）や、口縁部２段目外面に押引状の刺突文、頸部内面にハケを施すが、ヨコハケは羽状のハケの境に位置するＳ字甕（176）、小型の有稜高杯（177）が確認できていることから、土器集中部３から出土した土器の編年的位置を、廻間Ⅱ式１段階を中心とする範疇で捉えられると考える。

最後に遺物包含層であるが、痕跡的な受口状の口縁部をもち、口径が体部径を上回る鉢（178）を確認できていることから、その編年的位置は廻間Ⅰ式３段階を遡らないものと考える。

（８）小結

１区の発掘調査では、山中Ⅱ式２段階～廻間Ⅲ式１段階に属する遺物が出土し、層位から大きく１～３期の３時期に区分した。

このうち１期については、遺物包含層を確認できたのみであるが、隣接する２・３区で山中Ⅱ式期１段階や山中Ⅰ式期２段階に遡る河道を確認できていることや、遺物包含層が河道１に向かって緩やかに傾斜していることから、当調査区においても山中Ⅱ式期２段階において既に河道が流れて

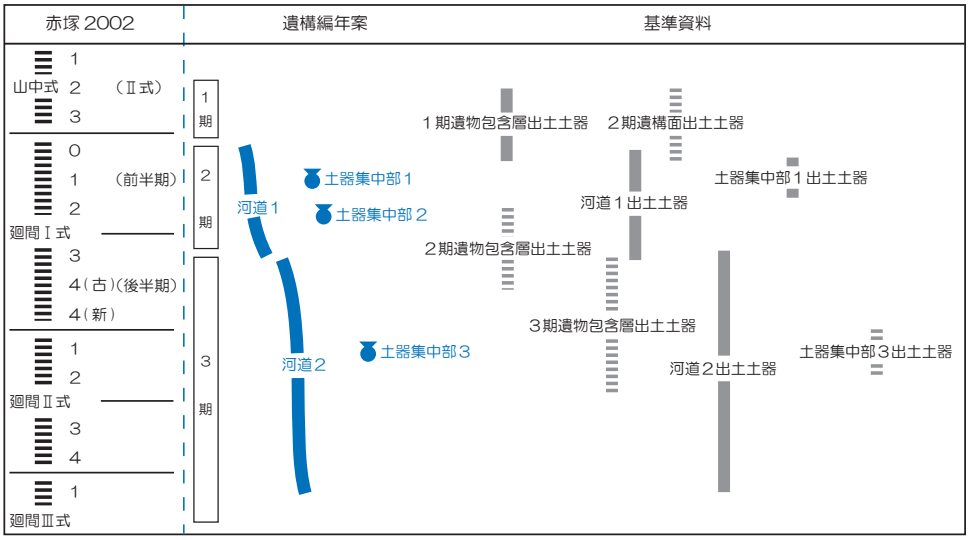
いた可能性がある。出土土器の上限は山中Ⅱ式２段階で、下限は廻間Ⅰ式０段階である。

２期では、調査区を南から北に幅約 5.7 mの河道１が流れている。埋土から出土した土器の編年的位置は、廻間Ⅰ式０段階～３段階の範疇に収まる。埋土に明確な一括堆積の特徴はなく、徐々に埋没した可能性が高い。河道１の東岸では、２カ所の土器集中部を確認した。周囲に他の遺構を確認できず、遺存状態も良好であり、さらに土器集中部３においては実用性の乏しいミニチュア土器のみで構成されていたため、いずれの土器集中部も河道１に関わる儀礼の痕跡である可能性が高いと判断している。なお、土器集中部２については、出土土器の諸特徴からその編年的位置を判断することは困難であったが、２期の遺構面直上で検出されたことから、廻間Ⅰ式０段階～３段階の範疇に収まるものと考えた。

３期では、河道１の埋没により幅約 3.2 mにまで規模を縮小した河道２が南から北に流れている。二分した埋土の上層が黒色を呈する粘質土であることから、埋没直前は滞水が著しかったものと推察する。周囲には土器集中部以外に遺構を確認できていないが、その一方で埋土からは大量の土器や種子、樹皮製の編みカゴなどが出土している。このことは、２期の河道１にひき続き、河道２においても、祭祀行為が行われていた可能性が高いことを示しているだろう。河道２の埋土から出土した土器の編年的位置は廻間Ⅰ式３段階～廻間Ⅲ式１段階の範疇に収まる。

以上のように、１区の発掘調査の結果、当調査区では山中Ⅱ式期２段階以降、廻間Ⅲ式期１段階までの人的活動を確認でき、当調査区を南から北に流れる河道のそばでは、廻間Ⅰ式期０段階から廻間Ⅲ式期１段階まで祭祀行為が行われた可能性が高いことを明らかにした。なお、２・３区の発掘調査によって、廻間Ⅰ式期４段階を中心とした時期に、急激な土砂流出による河道の縮小があったことを確認できており、河道１が大きく規模を縮小した原因にもこうした背景があった可能性がある。

最後に、１区の主な遺構・遺物の編年的位置を第 22 図に整理しておく。



第 22 図　１区の主な遺構の編年的位置

5　2区の調査

（1）層位と時期区分

調査区北壁の観察から、２区の層位を69層に分層した（第23図・第1表）。そのうち、50～70cmの現代の道路造成土と水田耕作土を除去した標高約6.0m以下では、１面の遺構面を確認でき、１本の河道を検出した。この河道は、埋積を繰り返し、その流路と規模を大きく３度にわたって変化させていたため、当調査区を１～３期の３時期に区分した。

（2）１期の遺構・遺物

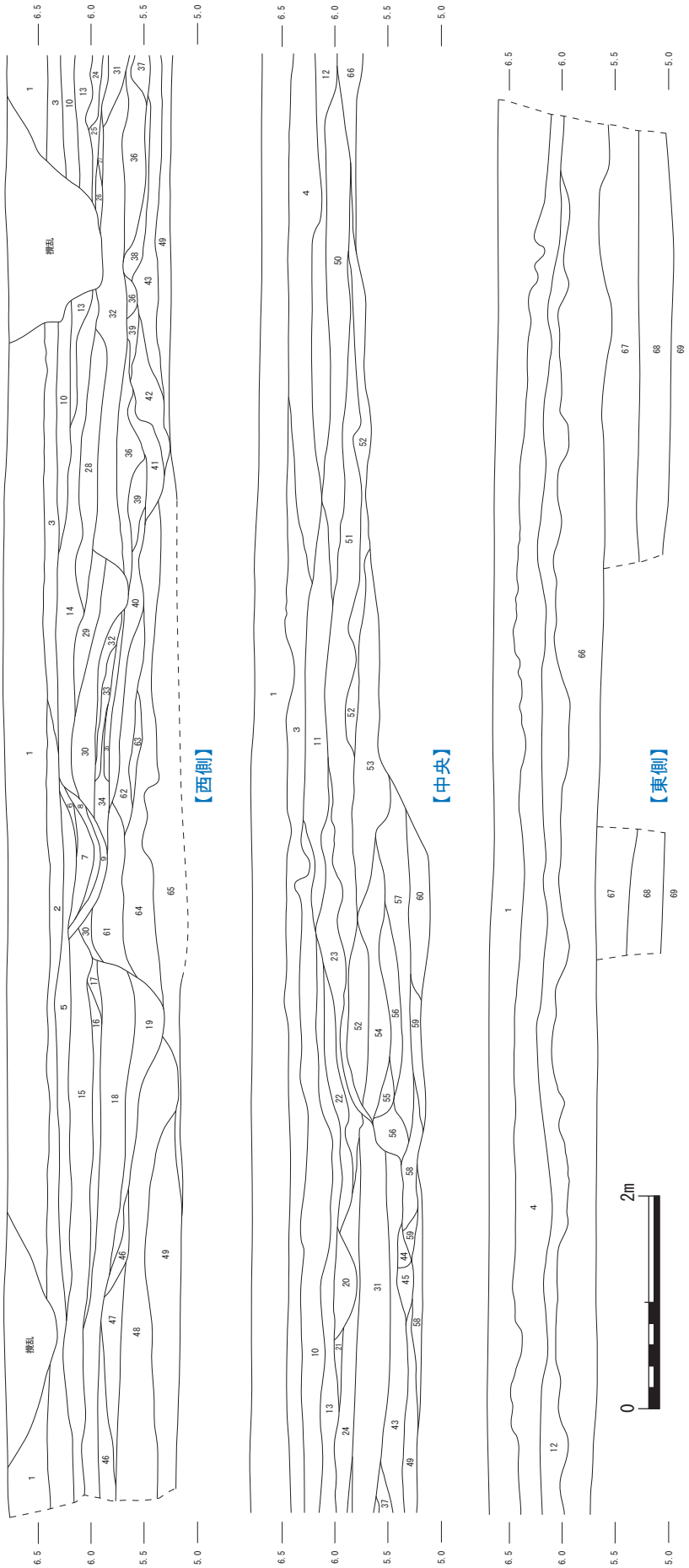
１期では、１本の河道（河道１）と１条の溝（溝１）を確認した（第24図）。

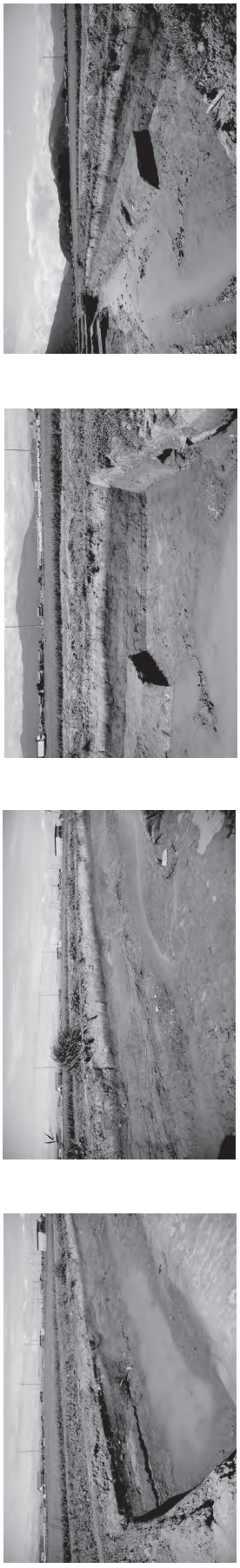
【河道１】

河道１は幅約7.4 m、深さ約0.5 mの規模をもつ。河道底の標高から、水は調査区を西から東に流れていたと判断した。埋土の大半は、互層状に堆積した灰色やオリーブ黒色を呈する粘質土層や砂質土層、砂層で占められており、後述する河道２のような一括堆積の特徴は看取できない。底には黒褐色を呈する粘質土が広く堆積しており、多量の遺物が出土した。また、河道の南側の法面では、梯子（266）が立てかけられた状態で検出できており、南岸に河道内への出入口が設けられていたことを明らかにできている。

この河道１から出土した遺物のうち、79点の土器と、埋土上層から出土した６点の土器、１点の木製品、５点の木器を図示した（第25～29図の179～269）。

179～190は壺である。179は外反する口縁部をもち、口縁端部は面をなしている。180は頸部と体部の外面境に複数の突帯を貼り付け、竹管文を施している。また、球形を呈する体部の外面に、５帯の直線文と４帯の刺突文を施している。赤彩は確認できない。181は直線的に開く短い口縁部をもち、口縁端部は面をなす。また、口縁部内面に縦方向の赤彩を施している。182は拡張した口縁端部外面に擬凹線文を施し、７カ所を赤彩している。口縁端部内面には、羽状に並ぶ３列の刺突文を施している。なお、この刺突文を描く文様帯上は基本的に赤彩していないが、円形に赤彩を施した部分を２カ所確認できている。183は拡張した口縁端部外面に擬凹線文を施している。口縁端部の内面には、平坦面を呈する文様帯を形成し、擬凹線文の他、その一部に赤彩や黒色での円形の彩色を確認できる。頸部と体部の外面境に２条の突帯を貼り付けるが、その間は赤彩していない。184は球形を呈する体部の外面に、４帯の直線文と刺突文を施し、さらにその下部を赤彩している。185は球形を呈する体部の外面に、５帯の直線文と４帯の刺突文を施し、さらにその下部を赤彩している。186は頸部径が広く、短くほぼ垂直に立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部を面取りしており、体部外面には煤が付着している。187～190は小型壺である。187はほぼ直線的に開く口縁部をもち、口縁端部を丸くおさめている。球形の体部をもち、口縁部と体部の外面境に横方向のミガキを施す。底部は上げ底した平底をもつ。188は球形の体部に、平底の底部をもつ。189は細い頸部からほぼ直線的に長く開く口縁部をもち、口縁端部を丸くおさめている。190は





2区北壁断面西側（南西から）

2区北壁断面中央（南西から）

2区北壁断面東側（南から）

2区北壁断面全景（南東から）

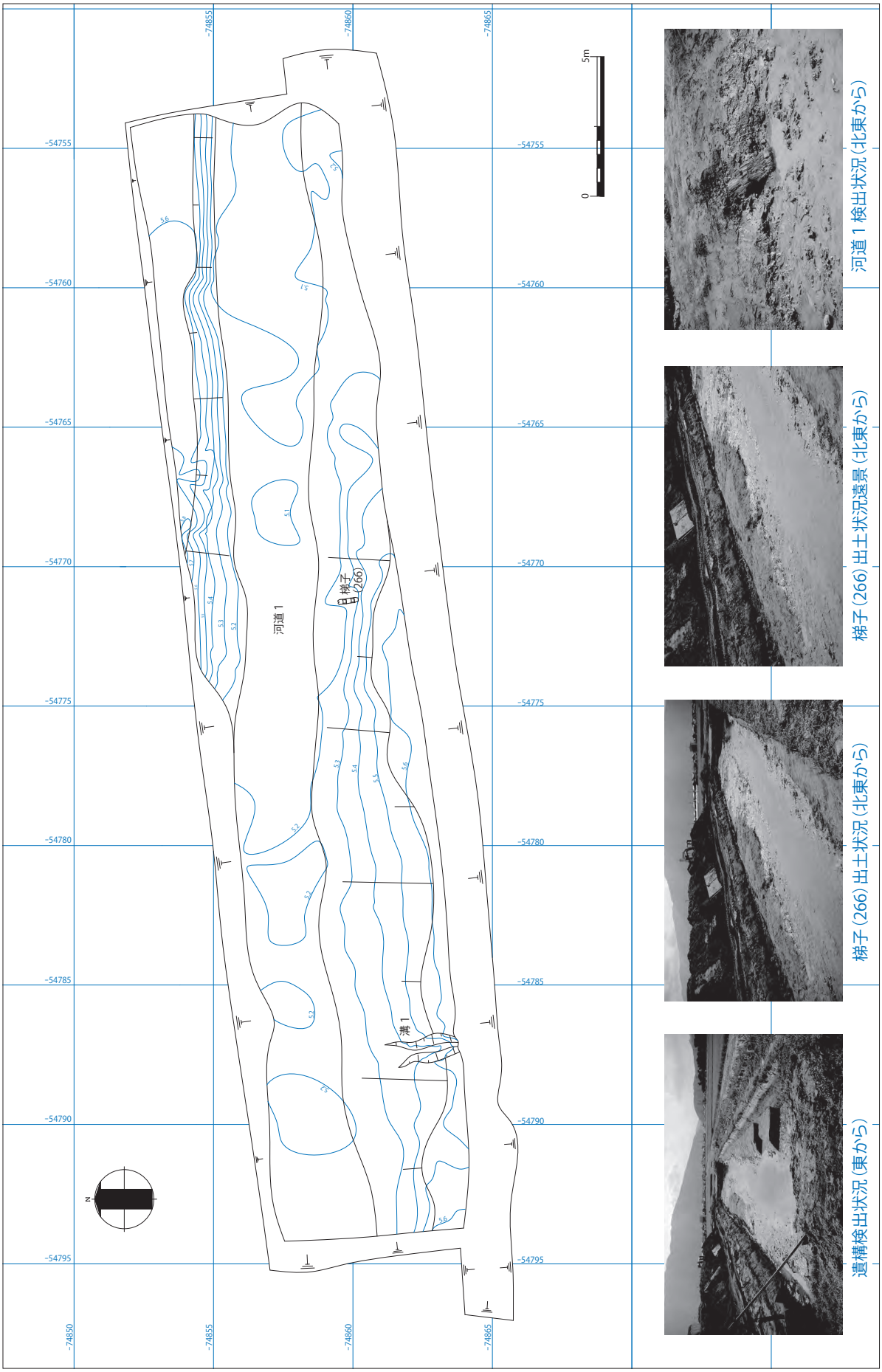
第23図　2区北壁断面図（S＝1/60）

第１表　２区北壁断面土層一覧

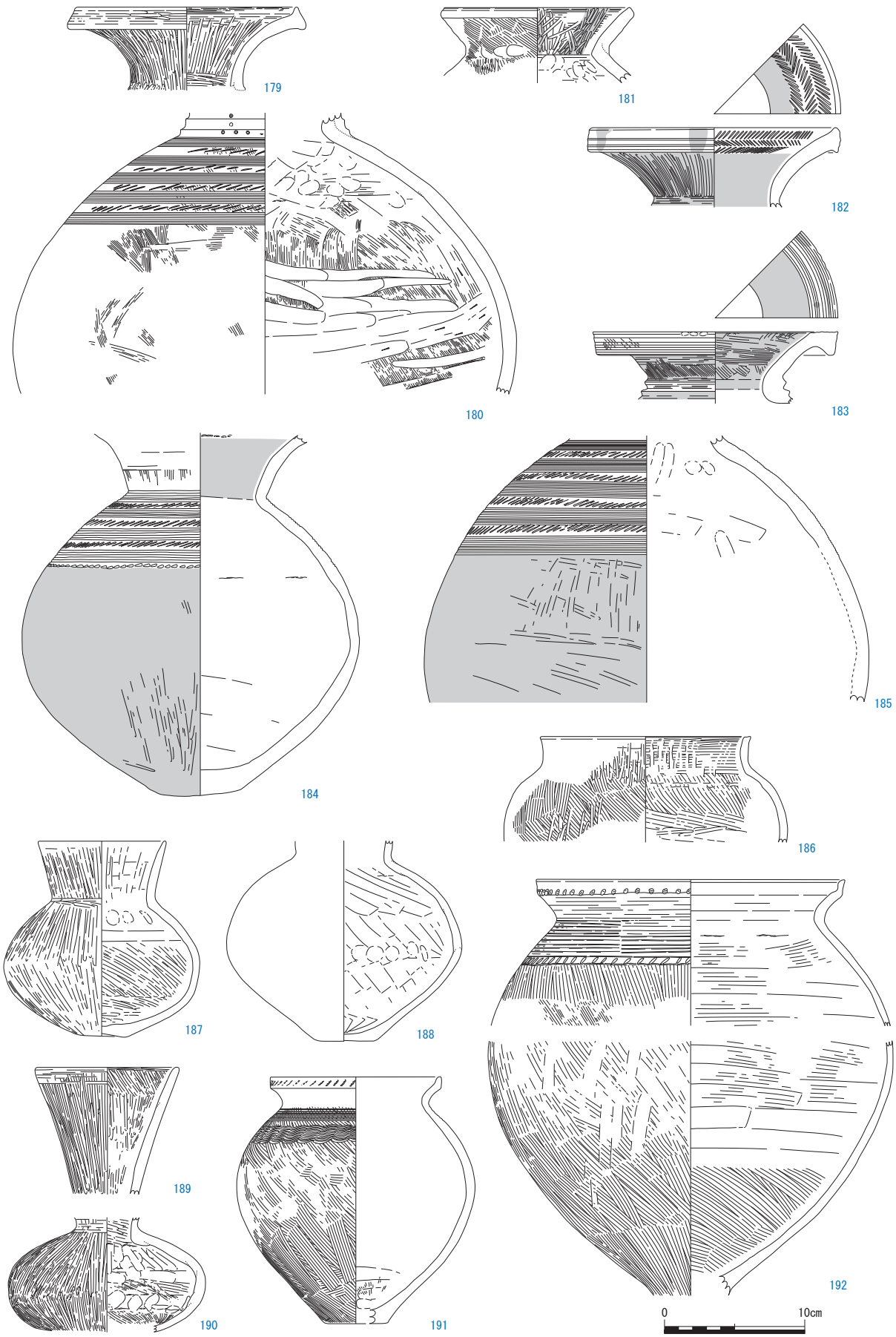
〔道路造成土〕	1	Hue2.5Y3/3	暗オリーブ褐色砂質土	
〔水田耕作土〕	2	Hue10YR1.7/1	黒色粘質土	
	3	Hue5Y4/1	灰色粘質土	
	4	Hue2.5Y4/2	暗灰黄色弱粘質土	
	5	Hue10YR3/1	黒褐色弱粘質土	
〔遺構埋土〕	6	Hue5Y3/2	オリーブ黒色砂質土	
	7	Hue2.5Y3/1	黒褐色粘質土	
	8	Hue2.5Y3/2	黒褐色粘質土	
	9	Hue2.5Y3/1	黒褐色粘質土	
〔遺物包含層〕	10	Hue5Y3/2	オリーブ黒色砂質土	３期
	11	Hue5Y4/1	灰色砂質土	３期
	12	Hue2.5Y3/1	黒褐色砂質土	３期
	13	Hue5Y4/1	灰色砂質土	３期
	14	Hue5Y5/1	灰色砂質土	３期
〔河道３埋土〕	15	Hue2.5Y3/2	黒褐色粘質土	３期
	16	Hue10YR3/1	黒褐色粘質土	３期
	17	Hue2.5Y4/1	黄灰色弱粘質土	３期
	18	Hue7.5Y4/1	灰色粘質土	３期
	19	Hue5Y4/1	灰色砂質土	３期
〔河道２埋土〕	20	Hue5Y4/1	灰色細砂	２期
	21	Hue5Y4/4	暗オリーブ色細砂	２期
	22	Hue5Y4/1	灰色細砂	２期
	23	Hue5Y5/2	灰オリーブ色細砂	２期
	24	Hue2.5Y4/4	オリーブ褐色粗砂	２期
	25	Hue2.5Y5/2	暗灰黄色細砂	２期
	26	Hue5Y5/2	灰オリーブ色細砂	２期
	27	Hue2.5Y4/1	黄灰色粘質土	２期
	28	Hue5Y4/2	灰オリーブ色砂質土	２期
	29	Hue5Y5/1	灰色粘質土	２期
	30	Hue5Y4/2	灰オリーブ色細砂	２期
	31	Hue2.5Y5/4	黄褐色細砂	２期
	32	Hue5GY4/1	暗オリーブ灰色細砂	２期
	33	Hue5Y4/2	灰オリーブ色細砂	２期
	34	Hue5Y4/2	灰オリーブ色粗砂	２期
	35	Hue2.5Y3/2	黒褐色粘質土	２期
	36	Hue7.5Y4/1	灰色粘質土	２期
	37	Hue5Y4/1	灰色細砂	２期
	38	Hue5Y5/2	灰オリーブ色粗砂	２期
	39	Hue5Y5/3	灰オリーブ色粘質土	２期
	40	Hue5Y5/2	灰オリーブ色細砂	２期
	41	Hue2.5GY4/1	暗オリーブ灰色細砂	２期
	42	Hue5Y5/3	灰オリーブ色細砂	２期
	43	Hue2.5Y5/3	黄褐色粘質土	２期
	44	Hue5Y4/2	灰オリーブ色細砂	２期
	45	Hue5Y4/1	灰色弱粘質土	２期
	46	Hue2.5Y4/3	オリーブ褐色細砂	２期
	47	Hue2.5Y4/4	オリーブ褐色粗砂	２期
	48	Hue5Y5/3	灰オリーブ色細砂	２期
	49	Hue5Y4/2	灰オリーブ色粗砂	２期
〔河道１埋土〕	50	Hue2.5Y4/2	暗灰黄色弱粘質土	１期
	51	Hue5Y4/1	灰色砂質土	１期
	52	Hue5Y4/2	灰オリーブ色粘質土	１期
	53	Hue7.5Y3/1	オリーブ黒色弱粘質土	１期
	54	Hue5Y5/2	灰オリーブ色細砂	１期
	55	Hue5Y5/2	灰オリーブ色細砂	１期
	56	Hue2.5GY4/1	暗オリーブ灰色粘質土	１期
	57	Hue5GY4/1	暗オリーブ灰色粘質土	１期
	58	Hue5Y4/1	灰色弱粘質土	１期
	59	Hue5Y5/3	灰オリーブ色粗砂	１期
	60	Hue10YR2/2	黒褐色粘質土	１期
	61	Hue7.5Y4/1	灰色粘質土	１期
	62	Hue2.5GY4/1	暗オリーブ灰色粘質土	１期
	63	Hue5Y2/2	オリーブ黒色粘質土	１期
	64	Hue7.5Y4/1	灰色弱粘質土	１期
	65	Hue5Y3/1	オリーブ黒色弱粘質土	１期
〔地山〕	66	Hue5Y4/2	灰オリーブ色砂質土	
	67	Hue2.5GY4/1	暗オリーブ灰色弱粘質土	
	68	Hue5Y4/1	灰色粘質土	
	69	Hue10Y6/2	オリーブ灰色砂礫	

やや扁平な体部をもつ。頸部は細い。

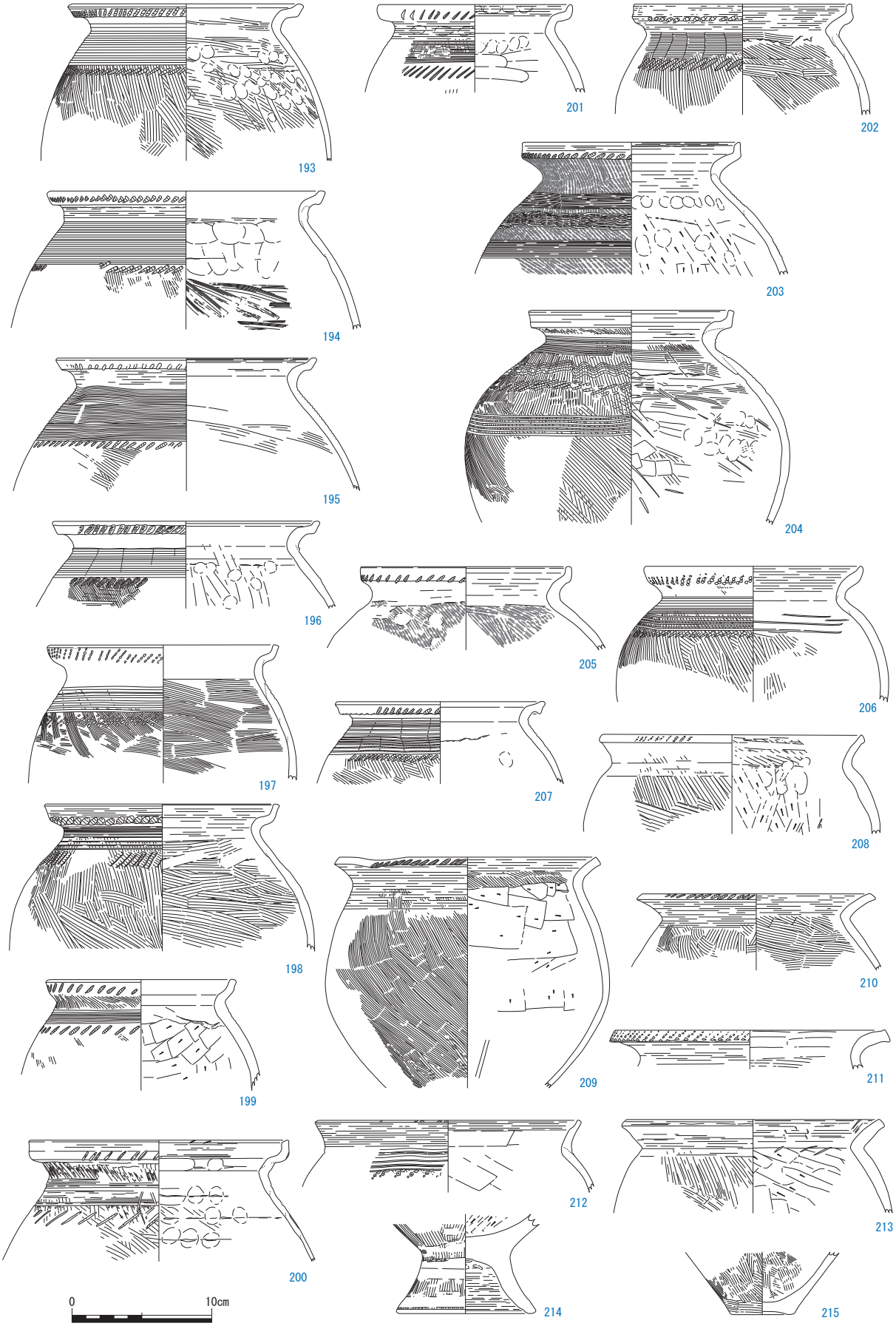
191 ～ 215 は甕である。191 ～ 207 は受口状の口縁部をもつ。191 は口縁端部外面に刺突文を施し、肩部外面には 1 帯の直線文と波状文を施している。体部の最大径を中位よりやや上にもつ。底部は平底である。192 は口縁屈曲部外面に刺突文を施し、肩部外面には 1 帯の直線文と刺突文を施している。体部の最大径を中位よりやや上にもつ。193 ～ 202 は口縁屈曲部外面か口縁端部外面に刺突文を施し、頸部外面や肩部外面付近に 1 帯の直線文と刺突文を施している。203 は口縁屈曲部外面に刺突文を施し、体部外面に 2 帯の直線文と 1 帯の波状文を施している。204 は口縁部に文様を施していないが、頸部外面と体部外面に、それぞれ 1 帯の直線文を施し、その間に波状文と刺突文を施している。205 は口縁屈曲部外面に刺突文を施しているが、体部には文様を施していない。206 は口縁部の形状がやや痕跡的であるが、口縁屈曲部外面に刺突文、肩部外面に直線文と刺突文を施している。207 は口縁端部を上部だけでなく下部にも拡張しており、口縁屈曲部外面に刺突文、体部外面に 1 帯の直線文と刺突文を施している。208 ～ 213 はく字状の口縁



第 24 図　2 区 1 期平面図（S＝1/200）



第 25 図　2 区 1 期河道 1 出土土器実測図 1 （S ＝ 1/4）



第 26 図　2 区 1 期河道 1 出土土器実測図 2（S ＝ 1/4）

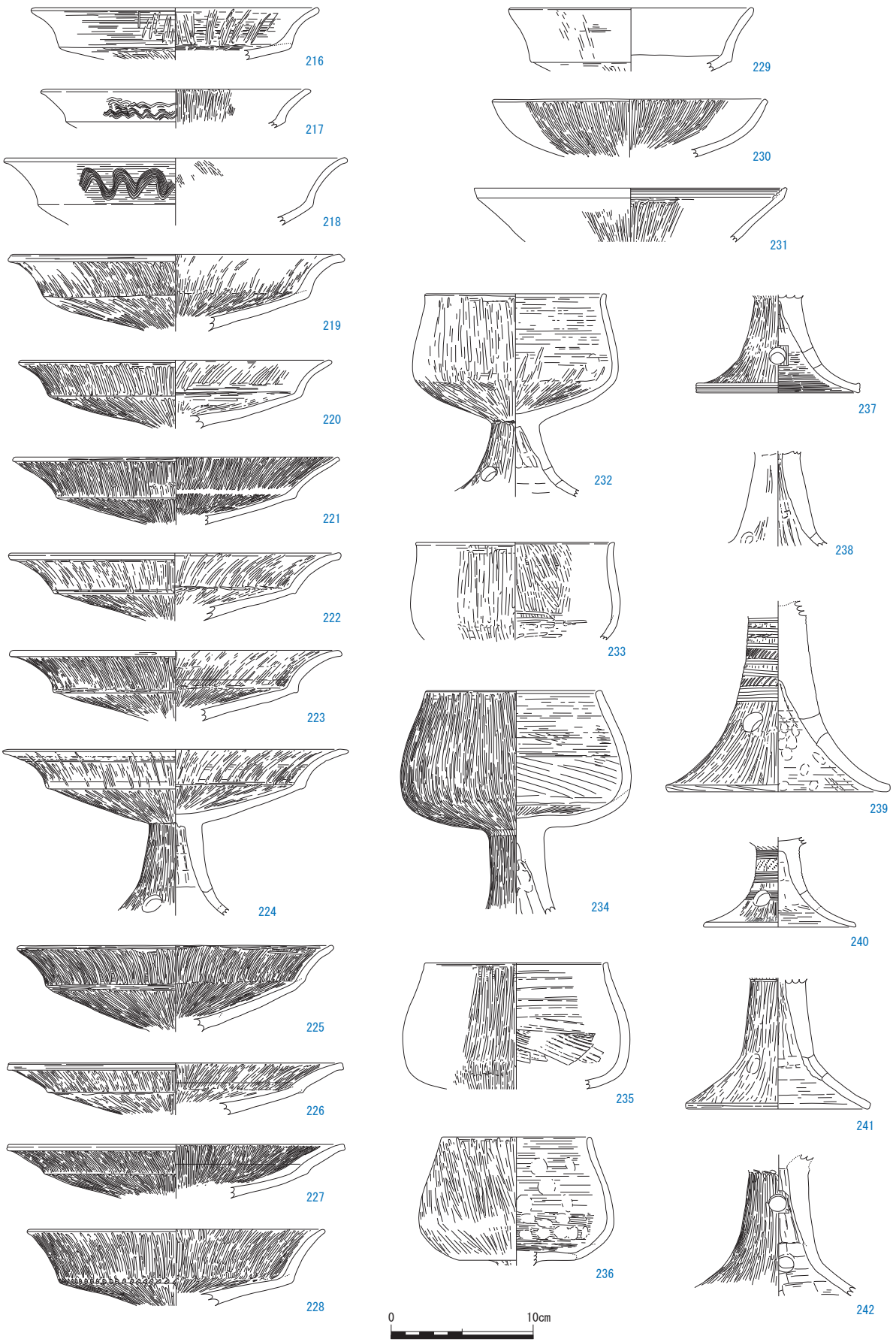
部をもつ。このうち、208 ～ 212 は口縁端部を面取りし、刺突文を施しているが、213 は文様を施していない。212 は肩部外面に直線文と刺突文を施している。214 は台付甕の脚部である。やや高く、外反して開いている。215 は底部で、やや上げ底した平底をもつ。

216 ～ 242 は高杯である。216 ～ 227 は杯部が浅く、外反する口縁部をもつ。217、219、221、223 ～ 227 は口縁端部を面取りしているが、216、218、220、222 は口縁端部を丸くおさめている。217 と 218 は口縁部外面に波状文を施している。228 と 229 は杯部が少し深い。どちらも口縁端部を丸くおさめるが、228 は口縁稜部外面に刺突文を施している。230 は杯部が椀形を呈している。口径が広く、杯部が浅い。口縁端部を面取りしている。231 は直線的に開く口縁部をもち、杯部は深い。口縁端部内面に有段の狭い文様帯を形成し、多条沈線文を施している。

232 ～ 236 はワイングラス形の杯部をもつ。232 は杯部に屈曲部をもち、杯底部にミガキを施している。脚部は円錐状を呈し、中位よりやや低い位置に、３方向の透孔を施している。233 は口径と杯部最大径にあまり差がない。杯部内面全体にミガキを施している。234 ～ 236 はしもぶくれ状の杯部をもつ。236 は杯部がやや長い。杯部内面について、234 はハケ調整後に、全体に丁寧なナデを施すことによって、底部以外のハケの痕跡をほとんど消し去っているが、235 と 236 のナデは上半のみで、下半にはハケの痕跡が残る。237 ～ 242 は脚部である。いずれも、柱状部と裾部の境に屈曲をもち、脚部内面にナデを施すことによって、前段階までの痕跡のほとんどを消し去っている。237 は脚部中位よりやや低い位置に４方向の透孔をもつ。裾端部に面をもち、２条の凹線が施されている。238 ～ 241 はいずれも３方向の透孔を脚部中位よりやや低い位置に施している。このうち、239 と 240 は外面に直線文と刺突文が施されている。242 は裾部と柱状部の境に、間隔が均等ではない３方向の透孔をもち、さらにその上段に１方向の透孔を施している。

243 ～ 249 は器台である。243 は柱状の中空脚をもち、３方向の透孔を裾部と柱状部の境に施している。脚部内面はナデとケズリにより、前段階までの痕跡のほとんどを消し去っている。中空部分の径は 2.7cm を測る。244 は円錐状の中空脚をもつが、中空部分の径は 4.7cm とやや広い。脚部中位に４方向の透孔をもつ。脚部内面はナデにより、前段階までの痕跡のほとんどを消し去っている。245 と 246 は円錐状の中空脚をもち、それぞれの中空部分の径は 2.5cm、2.8cm を測る。いずれも３方向に透孔を施している。脚部内面はナデにより、前段階までの痕跡のほとんどを消し去っている。なお、245 は面取りした口縁端部外面に、４つの円形浮文を３方向に施している。247 は外側にほぼ直線的に開く口縁部をもつ。口縁端部を面取りしている。248 は垂下して拡張させた口縁端部外面に擬凹線文を施している。中空部分の径は 3.0cm を測り、脚部には２つの透孔を２方向に施している。脚部内面はナデにより、それまでの痕跡のほとんどを消し去っている。249 は円錐状の中空脚をもつ。口縁部と裾部を欠損しているが、器高の低いものである可能性が高い。

250 ～ 255 は鉢である。250 ～ 254 は受口状の口縁部をもち、口縁屈曲部外面か口縁端部外面に刺突文を施している。また、頸部外面から肩部外面にかけて１帯の直線文と刺突文を施しているが、250 のみ直線文を施していない。250 ～ 253 は体部径が口径を上回っているが、254 だけは口径が体部径をわずかに上回っている。254 は体部外面中位に横方向のハケを施し、平底の底部をもつ。255 は有孔鉢の底部である。体部が直線的に立ち上がり、体部内面にハケを施している。



第 27 図　２区１期河道１出土土器実測図３（Ｓ＝１／４）

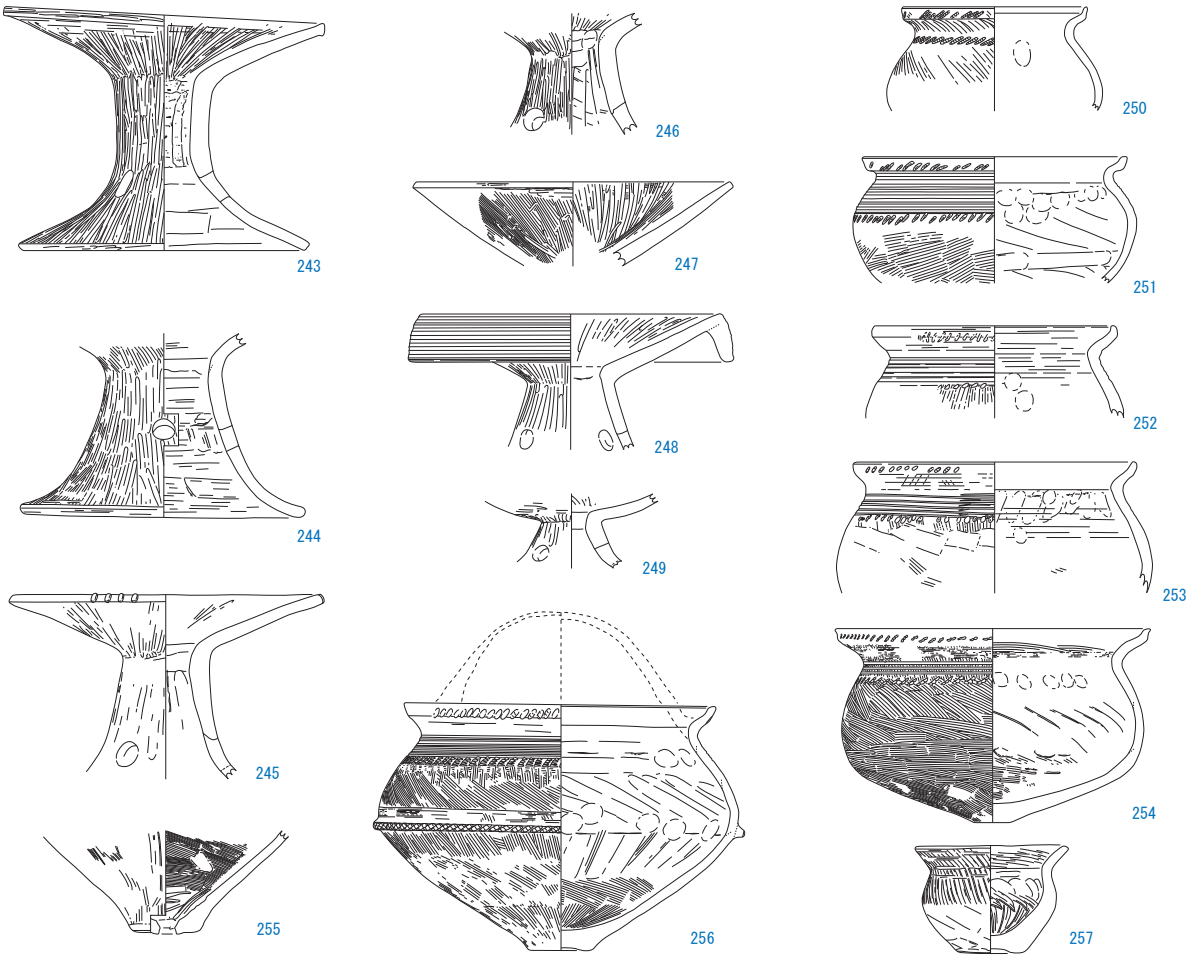
256 は手焙り形土器である。受口状の口縁部をもち、口縁端部を面取りしている。口縁端部外面に刺突文、肩部外面に直線文と刺突文を施している。また、体部外面中位には、刺突文を施した１条の突帯を貼り付けている。体部径が口径を上回っており、底部はやや上げ底状の平底である。覆部は欠損しているが、頸部内面より付加されている。257 はミニチュア土器である。甕形を呈し、く字状の口縁部とわずかに上げ底した平底をもつ。

258 は小型壺である。直線的に開く口縁部をもち、口縁端部を丸くおさめている。球形の体部をもち、体部外面に横方向のミガキを施す。底部はほぼ丸底を呈しており、わずかに上げ底している。259 は高杯である。脚部は円錐状を呈し、裾部が内彎している。中位より高い位置に上下一対の透孔を３方向に施している。脚部内面は、ハケによる成形の後、ナデを施しているが、ハケの痕跡が残っている。260・261 は器台である。260 はわずかに内彎して開く口縁部と、円錐状の脚部をもつ。口縁端部を面取りしている。中空部分の径は 2.2cm を測る。脚部内面は、ナデを施すことによって、それまでの痕跡をほとんど消している。脚部の中位より上に３方向の透孔をもつ。261 は外側にほぼ直線的に開く口縁部と円錐状の脚部をもつ。口縁端部を面取りしている。中空部分の径は 1.6cm を測る。脚部の中位より上に３方向の透孔を施している。脚部内面は、ナデを施すことによって、それまでの痕跡をほとんど消している。262・263 は鉢である。262 は受口状の口縁部をもち、口縁端部を丸くおさめている。口縁端部外面に刺突文、肩部外面に直線文と刺突文を施している。体部径が口径を上回っており、体部外面中位に横方向のハケを施している。底部はやや丸みを帯びている。263 はやや内彎気味に立ち上がる短い口縁部をもち、口縁端部に刻みを確認できる。頸部径と口径にあまり差がない。

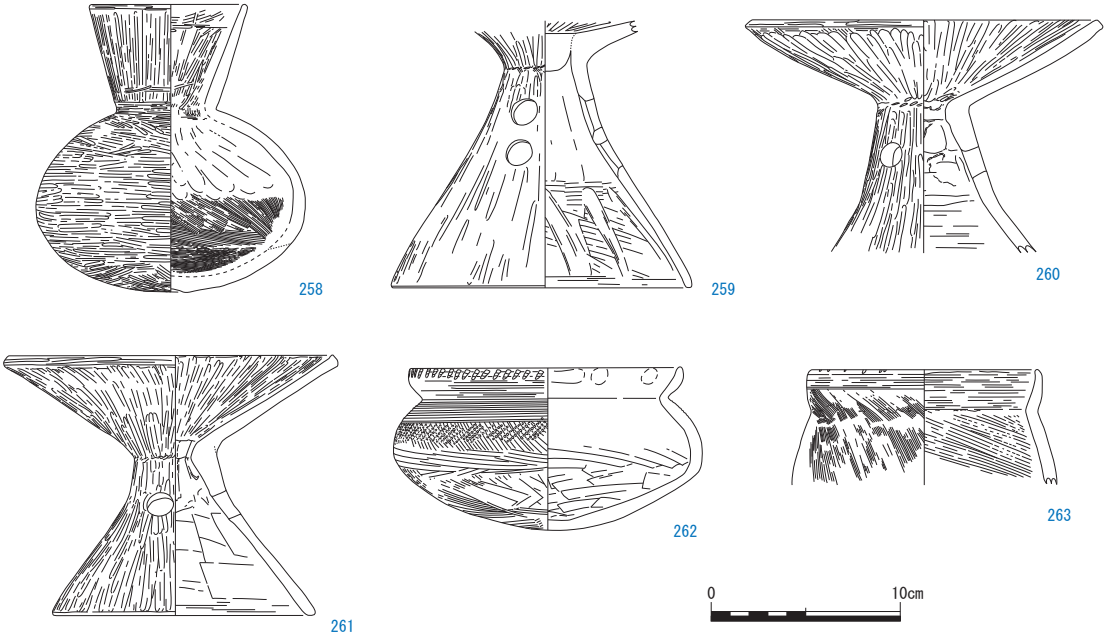
264 は鳥形を呈する木製品である。柾目材を丸彫りしており、立体的な表現になっているが、頭部と尾部の作出しが不明確である。また、翼部の表現も不明確で、穿孔も確認できない。未製品の可能性がある。265 は円形の柄孔をもつ鍬である。頭部から刃部までほぼ直線的に開いており、鍬表に舟形隆起をもつ。柾目材を用いており、柄の入射角度は約 70°を測る。266 は梯子である。両端をやや欠損しているが、残存状況は良好である。芯持材を半裁して削り込んでおり、裏面を平坦に、表面に足掛けを作り出している。長さが 81.6cm、幅は 20.5cm を測る。足掛けは計２カ所設けられ、側面から見るといずれも上部を直角に、下部を斜めに切り込んでいる。267 と 268 は木錘である。267 は長さ 32.5cm、幅 12.9cm を測る。芯持材を用いており、中央に溝を巡らせている。268 は芯持材を用いており、長さ 26.3cm、幅 12.0cm を測る。木錘に一般的な中央の溝を巡らせておらず、木錘とは別の用途に使用された可能性がある。269 は板材である。長さは不明であるが、幅 30.4cm、厚さ 4.0cm を測る。板目材を使用しており、下端から 217cm 付近の位置に長さ 26.0cm のほぞ穴を設けている。

【溝１】

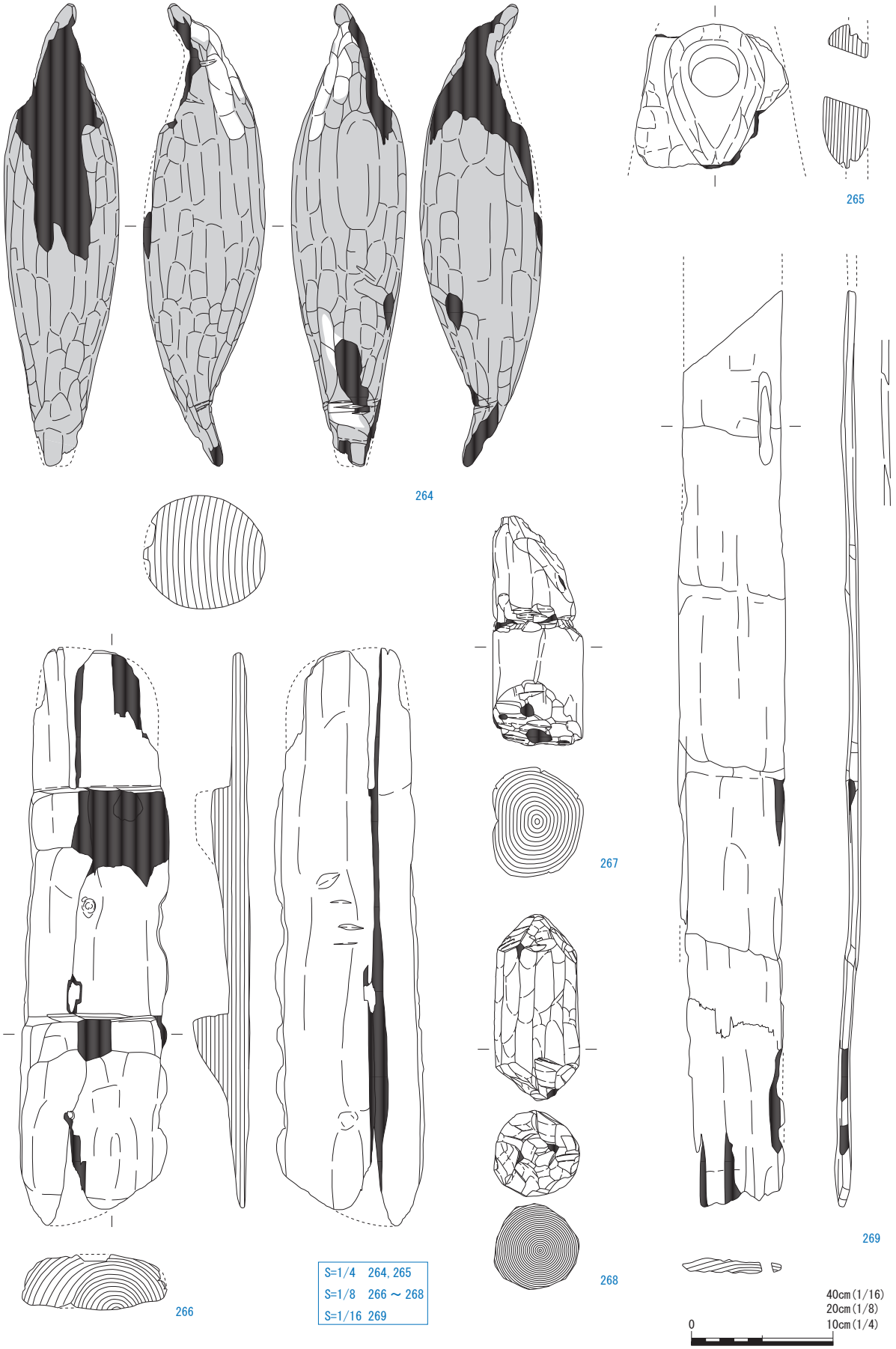
溝１は幅約 0.9 m、深さ約 0.1 mの規模を測る。河道１の掘り上げ後、南側法面で検出できた。埋土からは遺物を確認できていないが、調査区南壁の層位観察により、河道１と同じ遺構検出面から掘り込まれていることを確認できたため、河道１とほぼ同時期の遺構であると判断した。底の標高は河道内部に向けて徐々に下がっており、排水溝の可能性がある



上層



第 28 図　2 区 1 期河道 1 出土土器実測図 4（S ＝ 1/4）



第 29 図　2 区 1 期河道 1 出土木製品・木器実測図（S ＝ 1/4、1/8、1/16）

（3） 1期の年代

図示した84点の土器は、全て河道1から出土している。

まず、壺であるが、全体としては体部が球形を呈している。パレス壺では、口縁端部内面の文様帯を平坦面等で画するもの（183）と画さないもの（182）があり、頸部と体部の外面境にも突帯を貼り付けるもの（183）と、貼り付けないもの（184、185）がある。小型壺は、いずれも体部外面の調整に横方向のミガキを施しておらず、底部では、わずかに上げ底したもの（187）と突出していない平底のもの（188）がある。甕は受口状の口縁部をもつものが主体で、く字状の口縁部をもつものもあるが、S字状の口縁部をもつものはない。底部には平底のものと脚台をもつものがある。高杯は、杯部が浅く、口縁部が外反するものが中心であるが、杯部が少し深いもの（228、229）もあり、231は口縁端部内面に有段の狭い文様帯を形成し、多条沈線文を施している。この他に、浅い椀形を呈するもの（230）があるほか、ワイングラス形を呈する高杯には、杯部に屈曲部をもつもの（232）、口径と杯部最大径にあまり差がないもの（233）、しもぶくれ状を呈し、杯部内面下半にハケの痕跡が残るもの（234 ～ 236）がある。脚部では、3方向の透孔を脚部中位より下に施すものが主体であるが、4方向に施すものや、さらに上段に1方向の透孔を施すものも確認できている。なお、いずれもナデを施すことによって、脚部内面の前段階までの成形や調整の痕跡のほとんどを消し去っている。器台は、円錐状の中空脚をもつものが主体であるが、柱状の中空脚をもつもの（243）も確認できている。ただ、243は器高がやや高い。この他に、垂下して拡張させた口縁端部外面に擬凹線文を施したもの（248）も確認できている。脚部では、3方向の透孔を脚部中位かやや下に施すものが主体で、いずれもナデを施すことによって、脚部内面の前段階までの成形や調整の痕跡のほとんどを消し去っている。鉢は、受口状の口縁部をもち、体部径が口径を上回るものが主流であるが、口径と体部の最大径がほぼ同じもの（254）もある。また、254は平底の底部をもつ。

上層から出土した土器では、体部外面に横方向のミガキを施しており、底部がほぼ丸底を呈する小型壺（258）や、裾部が内彎する高杯（259）、底部がやや丸みを帯びる鉢（262）が確認できている。

以上の特徴から、1期の河道1出土土器の編年的位置を、山中Ⅱ式1段階～廻間Ⅰ式3段階の範疇で捉えられると考える。

（4） 2期の遺構・遺物

2期では、1本の河道（河道2）を確認した（第30図）。

【河道2】

河道2は幅約4.7 m、深さ約0.7 mの規模をもつ。河道底の標高から、水は調査区を西から東に流れていたと判断した。河道の北岸では、上端のさらに上部に、河道内部に向かって下がる緩やかな傾斜変換点を確認できている。また、河道南側の法面では、河道1で確認した梯子（266）とほ

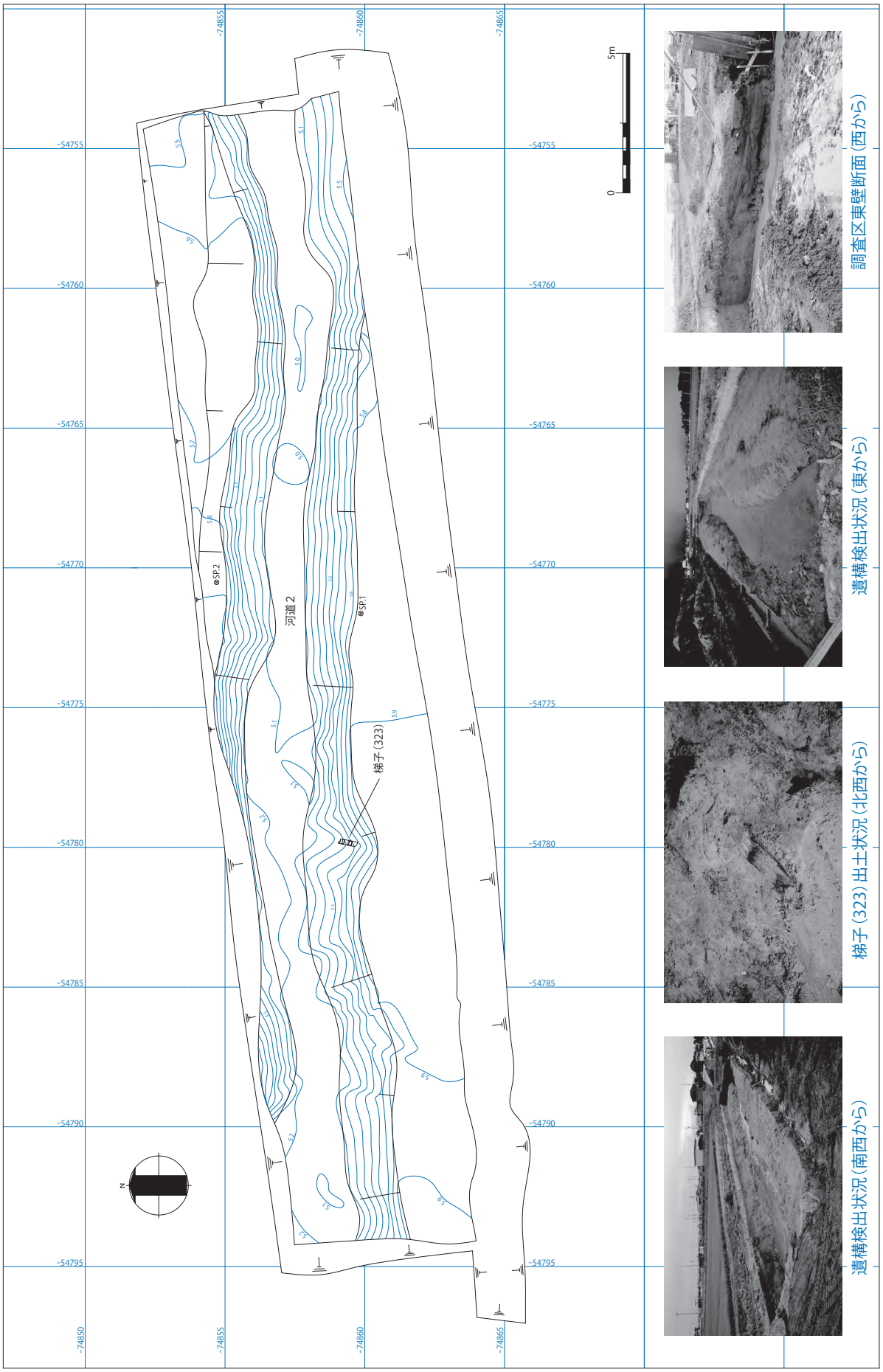
ぼ同じ位置に新たな梯子（323）を検出できた。河道１において梯子（266）が埋没した後、再び同じ場所に梯子（323）を設置したことを示しているだろう。

埋土は、その大半が、灰オリーブや黄褐色を呈する厚い粗砂層や砂礫層の一括堆積で占められており、大雨などによる多量の土砂流出によって、ごく短期間に規模を大きく縮小したものと判断した（第 31 図）。埋土からは多量の遺物が出土している。この河道２から出土した遺物のうち、53 点の土器と、１点の木器を図示した（第 32 ～ 34 図の 270 ～ 323）。

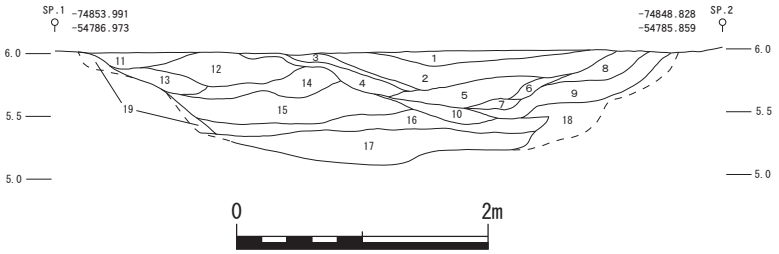
270 ～ 284 は壺である。270 はほぼ直線的に立ち上がる口縁部をもち、口縁端部を丸くおさめている。口縁部内外面ともにミガキを施している。271・272 はわずかに外反する口縁部をもち、いずれも口縁端部を面取りしていない。内外面ともにミガキを施しておらず、271 のみ口縁部内面の一部を赤彩している。273 はく字状の短い口縁部をもち、口縁端部を面取りしている。口縁部内外面及び体部外面にミガキを施している。274 と 275 は外反するやや長い口縁部をもち、口縁端部を面取りしている。274 は口縁端部外面に擬凹線文、口縁端部内面に羽状に並ぶ４列の刺突文を施しており、275 は口縁端部外面に刺突文を施している。276 は拡張した口縁端部外面に羽状に並ぶ２列の刺突文を施し、口縁端部内面には羽状に並ぶ２列の刺突文と直線文を施している。内外面ともにミガキを施していない。277 は拡張した口縁端部外面に５対の円形浮文を施し、口縁端部内面には横方向のミガキを施している。278 と 279 は拡張した口縁端部外面に擬凹線文を施している。278 は内外面ともにミガキを施していないが、279 は口縁部内面に横方向のミガキを施している。また、279 は頸部に直線文を施している。280 は肩部外面に３帯の直線文と刺突文を施し、直線文の下部を赤彩している。281 は体部外面に４条の突帯を付加しており、その上下を赤彩している。

282 ～ 289 は甕である。282 ～ 284 は口縁屈曲部までがやや長い受口状の口縁部をもつ。282 は口縁端部外面に刺突文、頸部外面に直線文を施している。283 は無文である。284 は口縁端部外面に刺突文、肩部外面に直線文と刺突文を施している。頸部径がやや狭く、口縁端部は内傾している。285 ～ 289 はく字状の口縁部をもつ。285 は面取りした口縁端部に刺突文を施しているが、286 ～ 288 は無文である。289 は口縁部がわずかに内彎しており、頸部の屈曲が弱い。口縁部外面のヘラ沈線に文様の可能性がある。

290 ～ 311 は高杯である。290 ～ 292 は浅い杯部をもつ。290 は口縁端部内面に直線文を施し、口縁部内外面ともに斜め方向のミガキを施している。291 は口縁端部がやや内彎している。口縁端部外面に１条の沈線、口縁部と杯部の外面境に３条の沈線を施している。292 は口縁部と杯部の内面境に段をもち、その稜を明確にしている。293 ～ 300 は杯部が深い。293 と 294 は直線的に開く口縁部をもち、口縁端部内面に有段で幅が非常に狭い文様帯を形成し、多条沈線文を施している。295 ～ 300 は内彎して立ち上がる口縁部をもち、口縁端部内面に有段の文様帯を形成し、多条沈線文を施している。295 ～ 297 は有段文様帯がやや狭く、298 ～ 300 は広い。301 は杯部が深い。杯底部から稜部までの長さが短く、口縁部はわずかに内彎して立ち上がる。口縁部内外面ともに横方向のミガキを施している。口縁部と杯底部の内面境に段をもち、その稜は明瞭である。302 ～ 305 は小型の高杯である。いずれも、口縁端部を丸くおさめており、口縁部と杯底部の内面境の稜を明瞭にしている。302 は無文であるが、303 は口縁端部内面に有段の文様帯を形



第 30 図　2 区 2 期平面図（S＝1/200）



河道２・３断面（北から）

〔河道３埋土〕	1	Hue7.5YR3/1	黒褐色粘質土	３期
	2	Hue2.5Y4/1	黄灰色粘質土	３期
	3	Hue10Y5/1	灰色細砂	３期
	4	Hue7.5Y5/2	灰オリーブ色粗砂	３期
	5	Hue10Y5/1	灰色細砂	３期
	6	Hue7.5Y4/1	灰色粘質土	３期
	7	Hue7.5Y5/2	灰オリーブ色粗砂	３期
〔河道２埋土〕	8	Hue7.5Y5/2	灰オリーブ色粗砂	２期
	9	Hue10Y4/1	灰色細砂	２期
	10	Hue2.5Y5/3	黄褐色粗砂	２期
	11	Hue7.5Y4/1	灰色弱粘質土	２期
	12	Hue7.5Y4/2	灰オリーブ色粗砂	２期
	13	Hue10Y5/1	灰色細砂	２期
	14	Hue10Y5/2	オリーブ灰色細砂	２期
	15	Hue10Y5/1	灰色細砂	２期
	16	Hue5Y5/2	灰オリーブ色砂礫	２期
	17	Hue10Y5/1	灰色砂礫	２期
〔河道１埋土〕	18	Hue10Y5/1	灰色細砂	１期
	19	Hue10Y4/1	灰色弱粘質土	１期

第 31 図　２区河道２・３断面図（S＝1/60）

成し多条沈線文、304 は口縁端部外面にやや幅の狭い直線文、305 は口縁端部外面にやや幅の広い直線文を施している。306 と 307 はワイングラス形の口縁部をもつ。いずれもやや小型である。306 は内彎から外彎する杯部をもち、口縁部内外面ともにミガキを施している。307 は杯部に屈曲部をもつ。杯部内外面ともにナデは上半のみで、下半にはハケの痕跡が残る。308 ～ 311 は脚部である。308 は柱状部と裾部の境にゆるやかな屈曲をもち、裾端部を面取りしている。脚部中位よりやや低い位置に３方向の透孔をもち、脚部内面はナデを施すことによって、前段階までの痕跡をほとんど消し去っている。309 は円錐状を呈し、やや短い。裾端部に面をもち、脚部のほぼ中位に３方向の透孔を施している。脚部内面はナデにより、それまでの痕跡をほとんど消し去っている。310 は円錐状を呈しており、裾部径がやや狭い。脚部中位よりやや低い位置に不規則な３方向の透孔を施している。脚部内面は裾端部のみ、ナデによってそれまでの痕跡を消し去っているが、上半にはハケの痕跡が残っている。311 は高さが低く、小型高杯の脚部である可能性が高い。脚部に屈曲をもち、裾端部は面をなしている。脚部中位に２つの透孔を２方向に施しており、裾部径は拡大していない。裾端部外面に多条沈線文を施している。

312 ～ 316 は器台である。312 はほぼ直線的に開く口縁部をもち、口縁端部を面取りしている。313 は緩やかに外反する口縁部をもつ。口縁端部を面取りしている。314 は直線的に開く口縁部をもつ。口縁端部外面は拡張されて面をなし、擬凹線文が施されている。315 は円錐状の中空脚をもつ。裾部径はやや狭いが、中空部分の径は 2.4cm を測る。内外面ともに丁寧なミガキを施している。316 は円錐状の中空脚であり、中空部分の径は 2.4cm を測る。脚部内面にハケの痕跡が残る。

317 ～ 322 は鉢である。317 は受口状の口縁部をもち、体部径が口径をわずかに上回っている。口縁端部外面にわずかに刺突文を施している。このほか、肩部外面の横方向のナデが直線文を意識したものである可能性がある。318 は受口状の口縁部をもち、体部径が口径を上回っている。口

縁屈曲部までがやや長く、口縁端部外面には４条の直線文を施している。体部外面を粗いハケで調整している。319 は受口状の口縁部をもつ。無文であり、体部径と口径がほぼ等しい。320 は受口状の口縁部をもつ。口縁端部を丸くおさめており、口径が体部径をわずかに上回っている。無文である。底部は平底であるがやや丸みを帯びる。321 と 322 は有孔の底部である。321 は平底を呈するが、322 はやや尖っている。

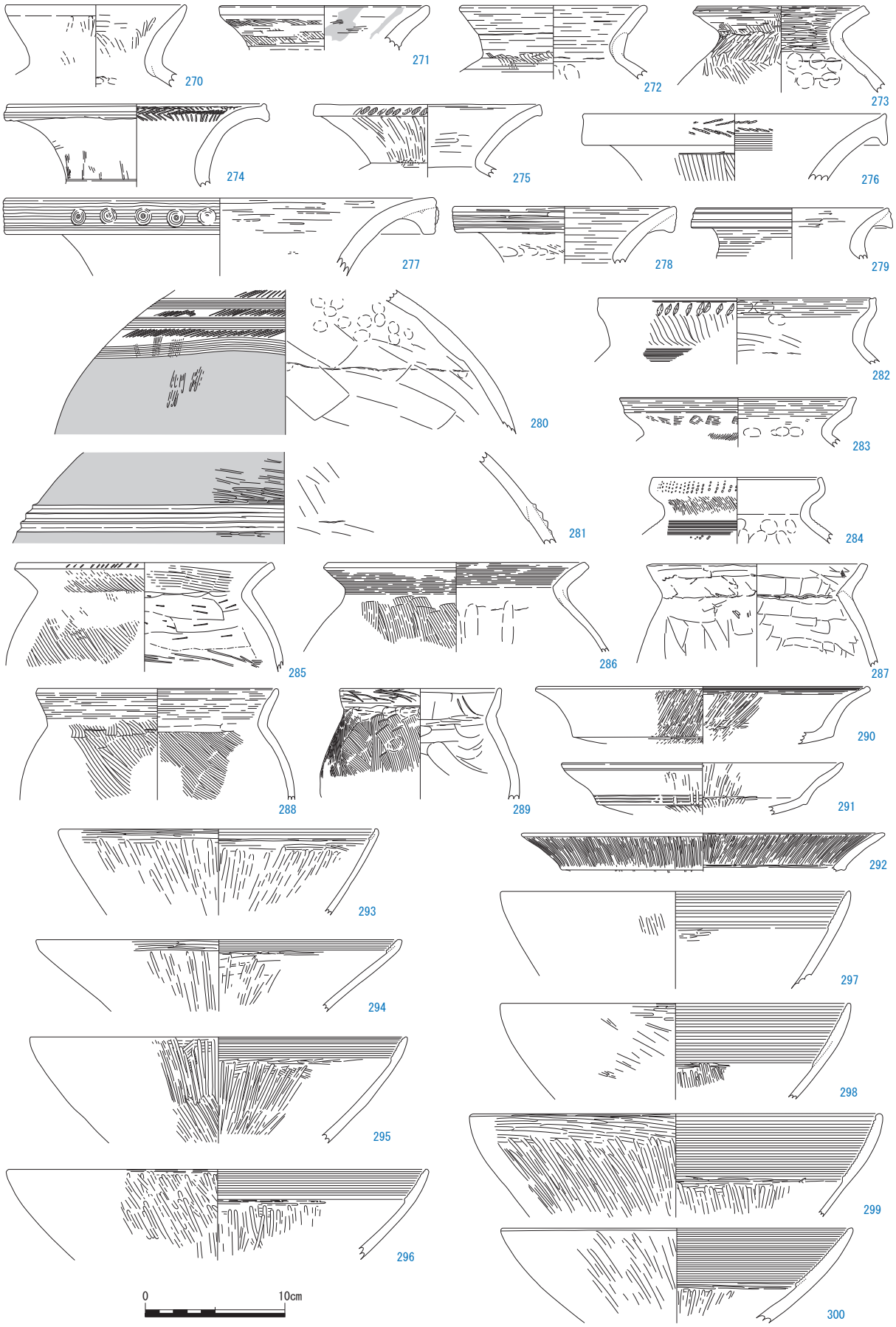
323 は梯子である。下部を欠損しているが、残存長は 116.4cm を測り、河道２の深さを上回るため、欠損したものを転用した可能性がある。柾目材を使用しており、裏面を平坦に、表面に足掛けを作り出している。幅は 18.4cm を測る。足掛けは計３カ所残存しており、側面から見るといずれも上部を直角に、下部を斜めに切り込んでいる。

（５）２期の年代

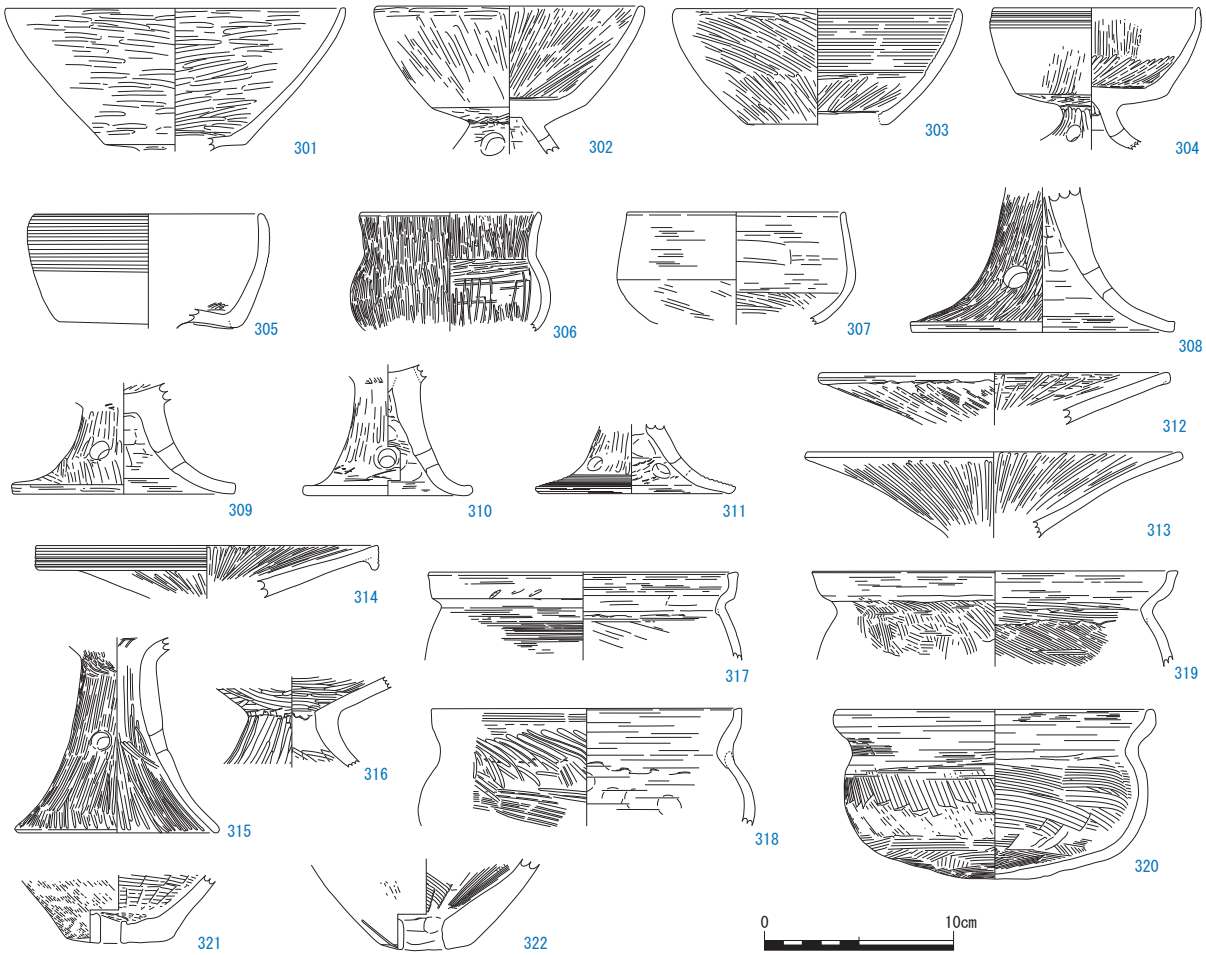
図示した 53 点の土器は、全て河道２から出土している。

まず、壺であるが、全体として無文のものが多く、加飾に乏しい。また、ミガキを施さないもの（271、272、276、278）も目立つ。広口壺では、口縁端部外面に羽状に並ぶ２列の刺突文を施すもの（276）や円形浮文を施すもの（277）があり、パレス壺では体部外面に４条の突帯を付加しているもの（281）がある。甕はく字状の口縁部をもつものが主体で、受口状の口縁部をもつものはやや少ない。S 字状の口縁部をもつものはない。壺と同様に全体として無文のものが多く、加飾に乏しい。高杯は、杯部が浅いものもあるが、深いものが主体をなしている。杯部の深いものの多くが、口縁端部内面に有段の文様帯を形成し、多条沈線文を施している。また、多条沈線文の幅には狭いものと広いものの両方が確認できる。この他に、小型ではあるもののワイングラス形を呈し杯部内面下半にハケの痕跡が残るもの（307）や、小型の高杯を確認できている。ただ、小型高杯に裾部径が口径を上回るものは確認できていない。脚部では、３方向の透孔を脚部中位より下に施すものが主体であるが、脚部内面のナデが裾端部に限定され、内面上半に成形や調整の痕跡を残すもの（310、311）も確認できる。器台では、柱状の中空脚をもつものは確認できておらず、円錐状の中空脚をもつものが主体である。口縁端部外面を拡張し、擬凹線文を施すもの（314）はあるが、口縁部に口径の縮小傾向や、内彎傾向を示すものは確認できない。鉢は、受口状口縁部をもつものが主体で、口径が体部径を上回るもの（320）が確認できる。また、底部は平底であるが、やや丸みを帯びている。

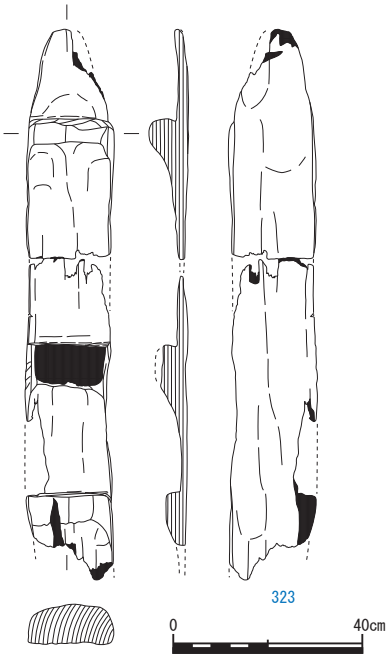
以上の特徴から、２期の河道２出土土器の編年的位置を、廻間Ⅰ式３段階～廻間Ⅰ式４段階古を中心とした範疇で捉えられると考える。



第 32 図　2 区 2 期河道 2 出土土器実測図 1（S ＝ 1/4）



第 33 図　２区２期河道２出土土器実測図２（S＝1/4）



第 34 図　２区２期河道２出土木器実測図（S＝1/16）

（6） 3期の遺構・遺物

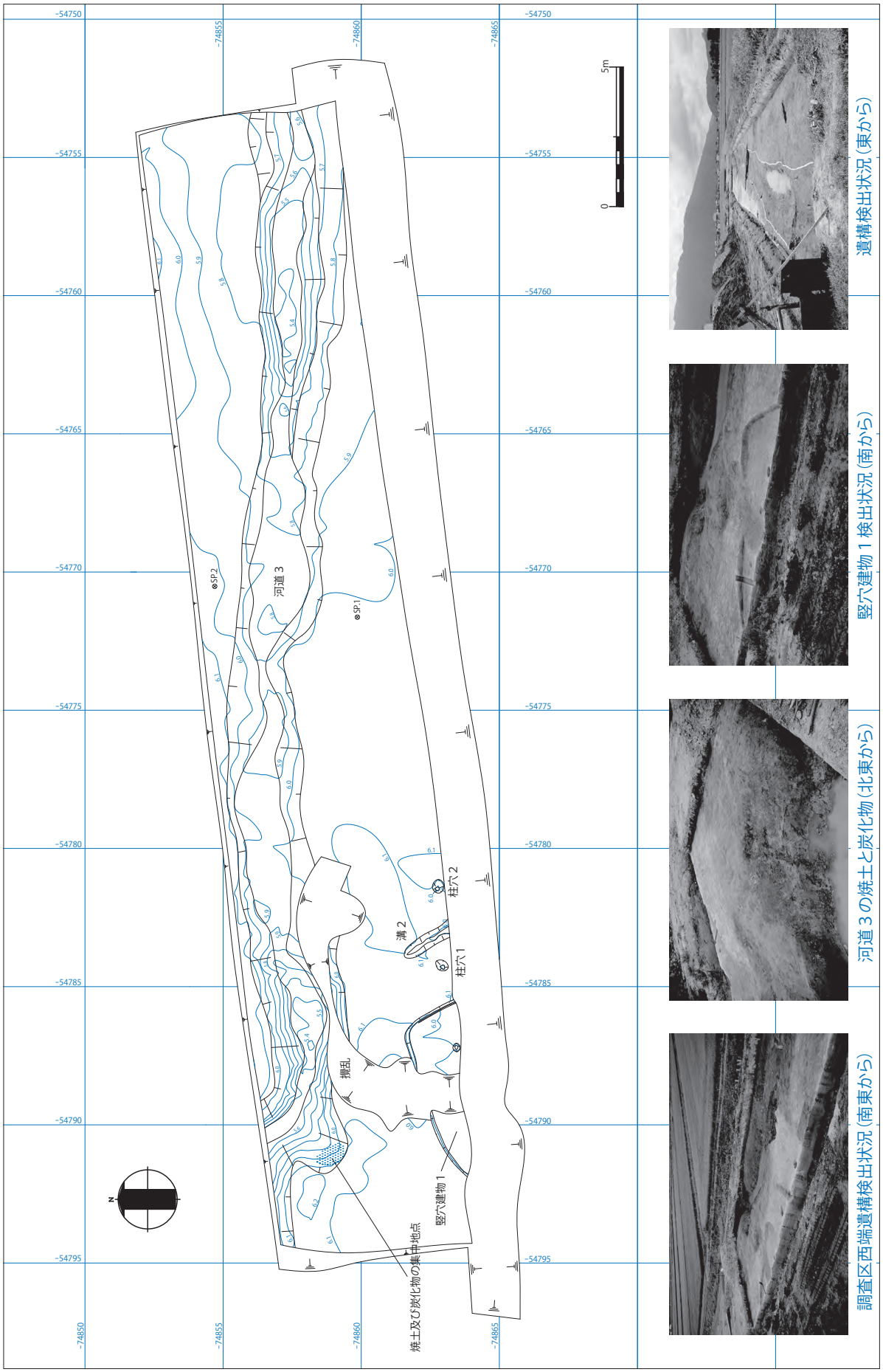
3期では、1本の河道（河道3）と1軒の竪穴建物（竪穴建物1）、1条の溝（溝2）、2個の柱穴（柱穴1、2）を確認した（第35図）。

【河道3】

河道3は幅約3.0 m、深さ約0.4 mの規模をもつ。河道2が埋没したものであることや河道底の標高から、河道1・2と同様、調査区を西から東に流れていたと考えた。埋土は、上層の黒褐色を呈する粘質土層（第23図15・16層）と、下層に堆積した灰色を呈する砂質・粘質土層（第23図17～19層）の大きく2つに区分することができる。埋土からは多量の土器が出土したほか、調査区西から4 mほどの南側法面で焼土と炭化物の集中地点を確認できた。

この河道3から出土した土器のうち、底（第23図19層）から出土した28点の土器と1点の木器、下層（第23図17～19層）から出土した82点の土器と1点の木製品と1点の木器、上層（第23図15・16層）から出土した66点の土器と2点の木製品と2点の木器を図示した（第36～42図の324～506）。

324～330は壺である。324はほぼ直線に開く口縁部をもち、口縁端部はやや内傾している。無文であり、口縁部内外面ともにミガキを施していない。325は口縁端部外面に擬凹線文を施し、口縁部内面には横方向のミガキを施している。326はわずかに内彎する短い口縁部をもち、口縁端部は面をなす。頸部外面に1条の突帯を貼り付けており、頸部内面にはやや幅広の面をもつ。無文であり、口縁部内外面ともに横方向のミガキを施している。327は短く直線的に開く口縁部をもち、口縁端部を面取りしている。口縁部に焼成前穿孔を行っている。短く直線的に立ち上がる頸部をもつ。無文であり、口縁部内外面ともにミガキを施していない。328は拡張した口縁端部外面に擬凹線文を施した後、4本の棒状浮文を付加している。口縁端部の内面には、突帯で画した文様帯を形成し、羽状に並ぶ4列の刺突文と1条の沈線を施している。口縁端部外面と口縁部内面の一部と頸部外面付近に赤彩を施している。329と330は頸部径が広く、口径・頸部径・体部径の差が小さい。ともに、わずかに内彎して立ち上がる口縁部をもつ。口縁部及び体部の外面に横方向のミガキを施しており、口縁部内面には縦方向のミガキを施している。330は無文であるが、329は口縁端部外面に多条沈線文を施している。331～333は甕である。いずれも無文で、331は受口状、332・333はく字状の口縁部をもつ。334～340は高杯である。334は杯部が深い。杯底部から稜部までの長さが短く、口縁部と杯底部の内面境が明瞭である。内彎して立ち上がる口縁部の内面には、有段の広い文様帯を形成し、多条沈線文を施している。口縁部内外面ともに、羽状に並ぶ2段の斜め方向のミガキを施している。335は内彎して開く裾部をもつ。脚部中位よりやや上に2対の透孔を2方向に施す。脚部内面では裾端部にナデを施しているが、ハケの痕跡が残っている。336～340は小型の高杯である。336は口縁部内外面ともに放射状の縦方向のミガキを施しており、無文である。口縁部と杯底部の内面境は明瞭でない。337は口縁部内外面ともに、らせん状の斜め方向のミガキを2段に分けて施しており羽状を呈する。口縁端部外面に多条沈線文を施している。裾部径は口径を上回っていない。口縁部と杯底部の内面境は明瞭である。338は口縁部外面に横方向のミガキ、口縁部内面にらせん状の斜め方向のミガキを2段に分けて施しており、



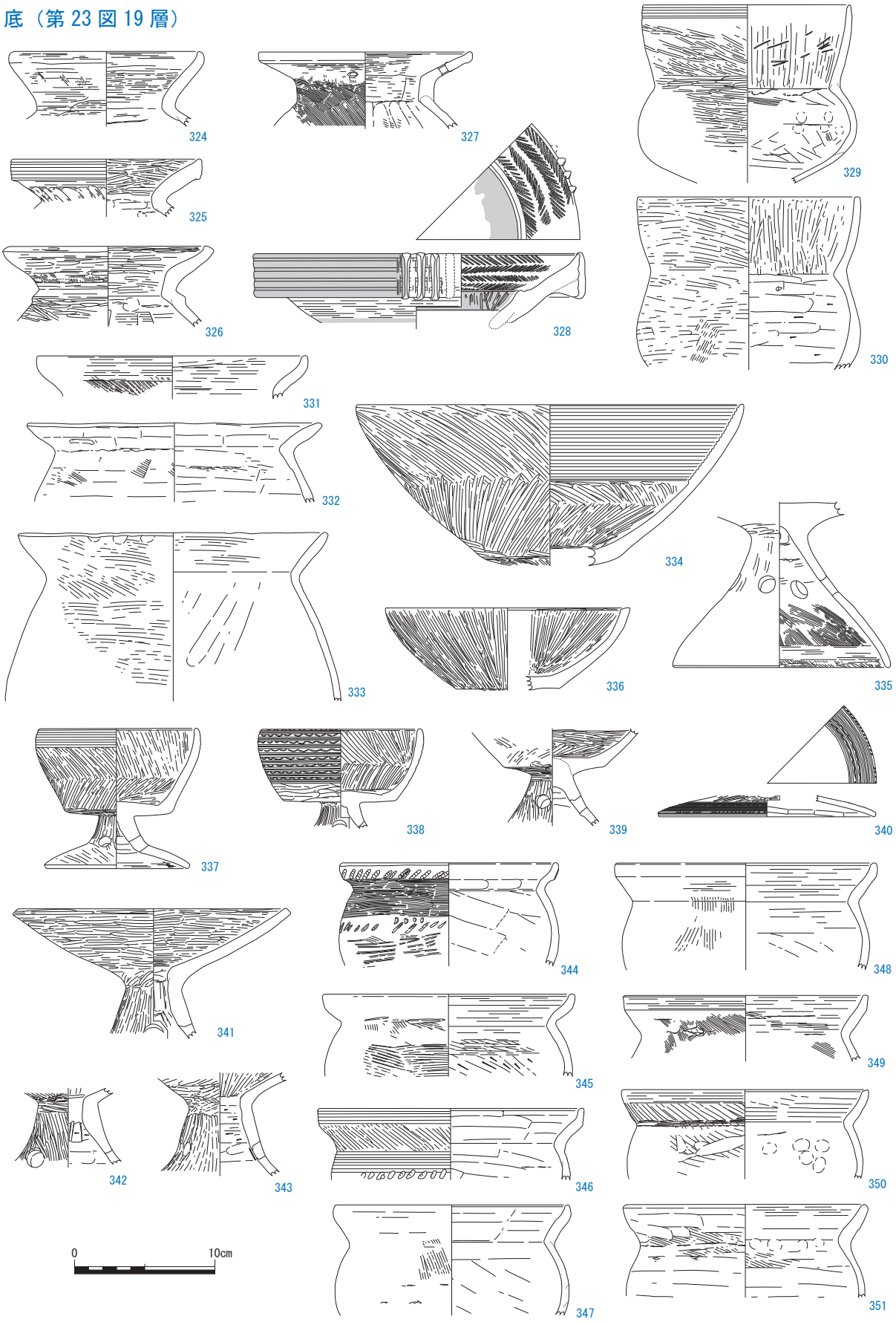
第 35 図　2 区 3 期平面図（S ＝ 1/200）

羽状を呈する。さらに、口縁部外面には、８帯の鋸歯状刺突文と２条１帯の直線文を交互に施している。口縁部と杯底部の内面境が明瞭である。339 は口縁部内面の上半に横方向のミガキ、下半にらせん状の斜め方向のミガキを施している。口縁部と杯底部の内面境は明瞭である。340 は拡大した裾部をもち、裾端部外面には刺突文と多条沈線文と連弧文を組み合わせた文様を施している。341 ～ 343 は器台である。341 はやや内彎気味に開く口縁部をもち、口縁端部を面取りしている。中空部分の径は 2.0cm を測り、脚部には 4 方向の透孔をもつ。口縁部内外面ともに横方向のミガキを施している。342 は円錐状の脚部をもち、中空部分の径は 2.0cm を測る。脚部内面はナデにより、成形や調整の痕跡を消している。343 は円錐状の脚部をもち、中空部分の径は 2.8cm を測る。脚部に２対の透孔を２方向に施している。脚部内面はナデにより、成形や調整の痕跡を消している。

344 ～ 351 は鉢である。344 ～ 349 は受口状の口縁部をもつ。344 は体部径が口径を上回っているが、345・347 はほぼ同じ、346・348 は口径が体部径を上回っている。344 は口縁部外面に刺突文、頸部外面から体部上半外面にかけて直線文と刺突文を施している。346 は口縁部外面に直線文、肩部外面に直線文と刺突文を施している。345・347 ～ 349 は無文である。350 はく字状の口縁部をもつが、口縁部外面に横方向のナデを施しており、受口状の口縁を志向した可能性がある。無文であり、口径が体部径をわずかに上回っている。351 はく字状の口縁部をもつ。無文であり、口径と体部径はほぼ等しい。

352 ～ 378 は壺である。352 はほぼ直線に開く口縁部をもち、口縁端部を面取りしている。無文であり、口縁部内外面ともにミガキを施していない。353 は外反する口縁部をもち、面取りした口縁端部に直線文を施している。体部外面に横方向のミガキを施している。354 は短く直線的に開く口縁部をもつ。頸部外面に粗い直線文を施しており、口縁端部外面及び口縁部内面、頸部内面に横方向のミガキを施している。口縁部から体部にかけてコ字状を呈しており、直線的に立ち上がる頸部をもつ。355 は短く直線的に開く口縁部をもち、口縁端部を面取りしている。無文であり、口縁部内外面ともにハケが残り、ミガキは施されていない。口縁部から体部にかけてコ字状を呈しており、直線的に立ち上がる頸部をもつ。356 は受口状の口縁部をもち、口縁屈曲部外面に刺突文を施している。口縁部外面に横方向のミガキを施している。357 は口縁端部外面に擬凹線文を施している。口縁部内外面や体部外面にミガキを確認できない。358 は拡張した口縁端部外面に擬凹線文を施し、口縁部内面及び頸部内面に横方向のミガキを施している。また、頸部内面にはヘラ沈線を確認できるが、詳細は不明である。359 は直線的に開く口縁部をもち、面取りされた口縁端部はやや内傾している。球形の体部とやや突出した上げ底状の平底をもつ。外面に横あるいは斜め方向のミガキを施しているが粗く、ハケの痕跡が残っている。口縁部内面に横方向のミガキを施している。外面全体を赤彩している。360 は短く直線的に開く口縁部をもつ。摩耗が著しく詳細は不明である。361 は体部外面に直線文と鋸歯状刺突文と刺突文を施している。文様帯の下部には横方向のミガキを確認できる。362 は球形の体部をもつ。体部上半に直線文と波状文と刺突文を施し、その下部に斜め方向のミガキを施している。363 と 364 は球形の体部をもつ。364 は外面だけでなく、内面にもミガキを施しており、底部をわずかに上げ底している。365 は体部片である。外面にヘラ沈線によって絵画表現がなされており、人面文を表している可能性がある。366 はわずかに内彎する短い口縁部をもつ。口縁部の下半に２対の穿孔が確認できる。鉢の可能性もあ

底（第 23 図 19 層）



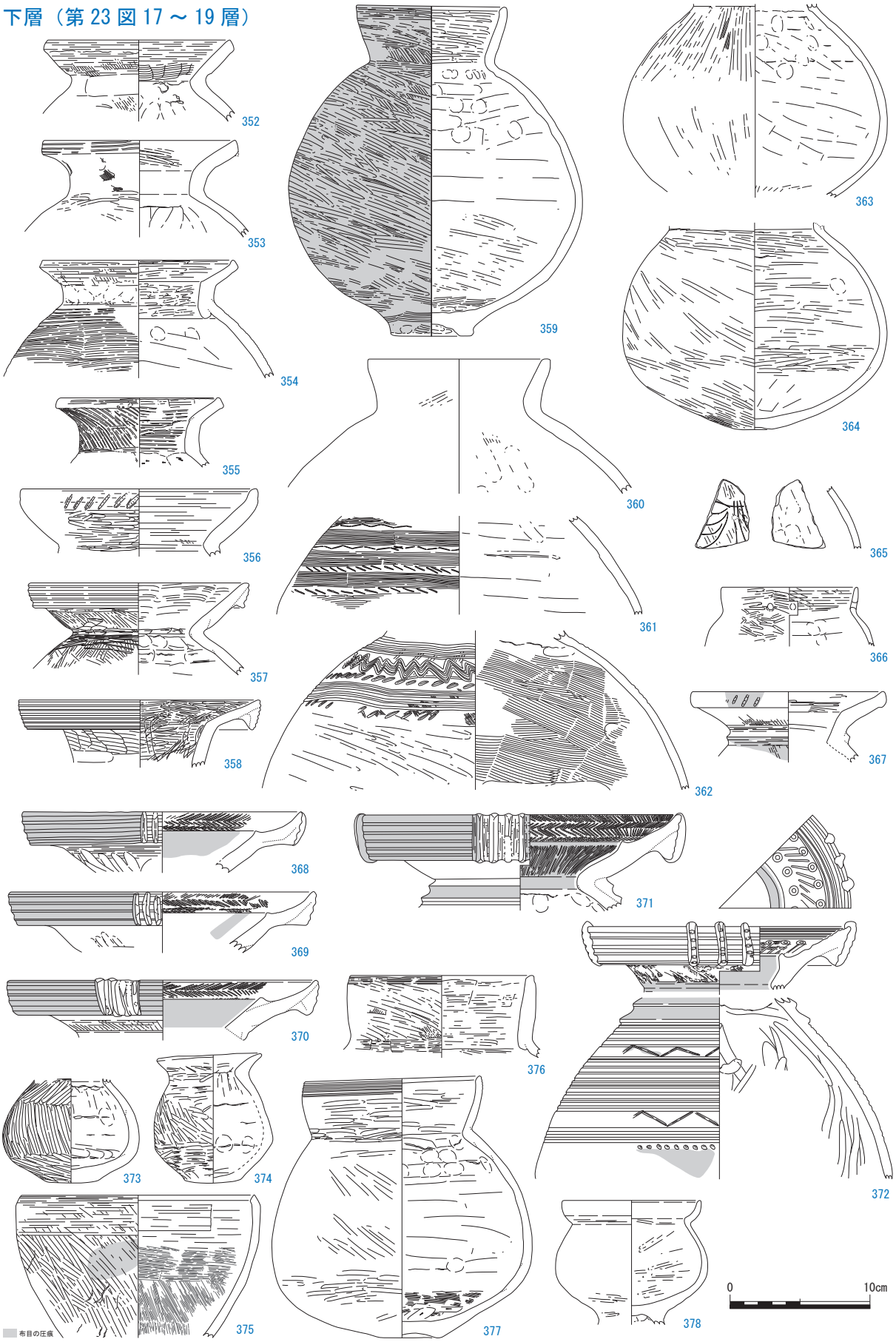
第 36 図　2 区 3 期河道 3 出土土器実測図 1（S＝1/4）

る。367 は口縁端部外面に刺突文を施し、頸部と体部の外面境には 1 条の突帯を貼り付けている。口縁端部外面と頸部外面以下を赤彩している。368 ～ 371 は口縁端部外面に擬凹線文を施した後、４本の棒状浮文を付加している。また、口縁端部内面の文様帯には、羽状に並ぶ 4 列の刺突文を施している。口縁端部外面と口縁部内面の一部を赤彩するほか、371 は頸部外面に 2 条の突帯を貼り付け、その間も赤彩している。また、371 のみ口縁部内面にミガキを確認できる。372 は拡張した口縁端部外面に擬凹線文を施した後、刻みを施した 3 本の棒状浮文を 4 方向に付加している。口縁端部内面の突帯で画した文様帯には直線文と竹管文と刺突文を施している。頸部と体部の外面境には 2 条の突帯を貼り付け、その下部には直線文と鋸歯状刺突文と刺突文を施している。頸部外面及び鋸歯状刺突文と体部外面下半、口縁部内面の一部を赤彩している。373・374 は壺形のミニチュア土器である。ともに外面にミガキを施しており、丁寧な作りである。やや突出した平底をもつ。375 は長頸壺の口縁部である。内彎して伸びる長い口縁部をもち、口縁端部は内傾している。口縁部内外面ともにミガキを施しておらず、口縁部外面に布目の圧痕が残る。376 と 377 は頸部径が広く、わずかに内彎して立ち上がる口縁部をもつ。口径と頸部径の差が小さい。376 は口縁部外面に斜め方向、口縁部内面に横方向のミガキを施している。377 は口縁端部外面に多条沈線文を施しており、口縁部内外面に横方向のミガキ、体部外面に斜め方向と横方向のミガキを施している。しもぶくれ状の体部をもち、体部径が口径や頸部径を大きく上回っている。底部は上げ底した平底をもつ。378 は脚台をもつ小型壺である。受口状の口縁部をもち、体部は球形を呈している。体部内外面ともにミガキを施している。

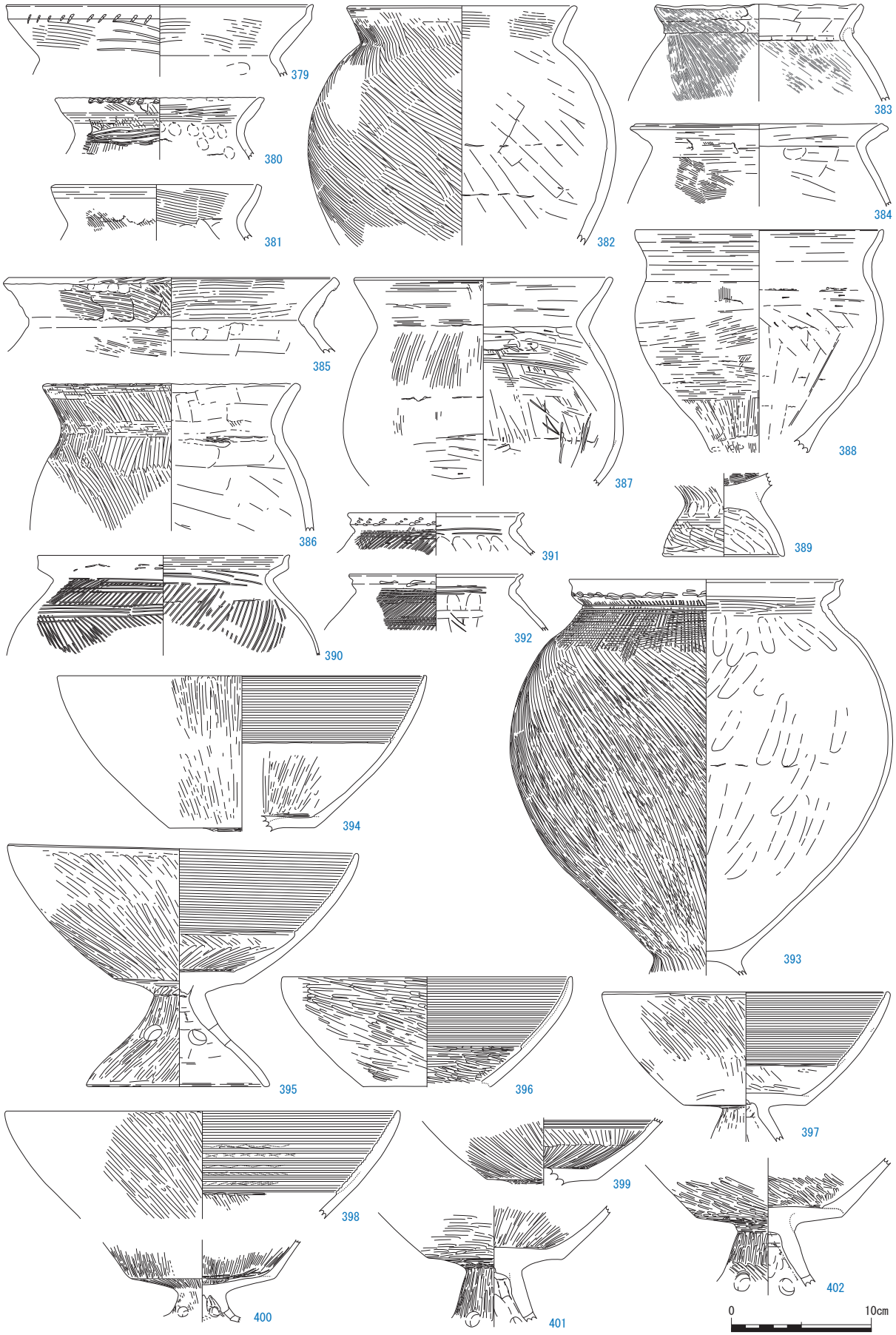
379 ～ 393 は甕である。379 は口縁屈曲部までがやや長い受口状の口縁部をもち、口縁屈曲部外面に刺突文を施す。380 ～ 388 はく字状の口縁部をもつ。380 と 386 は口縁端部に刺突文をもつが、それ以外は無文である。379 ～ 382・385 の口縁部内面に横方向のハケを確認できる。389 は台付甕の脚部である。高さが低く、内彎している。390 ～ 393 は S 字状の口縁部をもつ。いずれも口縁部 2 段目外面に押引状の刺突文と頸部内面にハケを施している。390 は体部外面に羽状のハケを施しており、頸部に接した位置と羽状ハケの中心にヨコハケを施している。体部内面もハケを施している。391 は頸部に接した位置、392 は頸部に接した位置とやや下がった位置にヨコハケを施している。393 はやや肩部が張った体部をもち、体部の外面に羽状のハケを施している。頸部に接した位置から羽状ハケの中心まで広くヨコハケを施している。

394 ～ 416 は高杯である。394 ～ 399 は杯部が深く、杯底部から稜部までの長さが短い。いずれも内彎して立ち上がる口縁部をもち、口縁部内面には有段で幅の広い文様帯を形成している。394 ～ 397 はこの文様帯に多条沈線文のみを施しているが、398 はその間に、羽状や×状を呈する刺突文を施している。394・395・399 は口縁部と杯底部の内面境に段をもつ。また、397 も段はもたないものの、その稜は明確である。394 は口縁部内外面ともに縦方向のミガキ、395 は口縁部外面に斜め方向、口縁部内面に羽状を呈する斜め方向のミガキ、396 は口縁部外面に斜め方向、口縁部内面に横方向のミガキ、397・398 は口縁部外面に斜め方向のミガキ、399 は口縁部外面に斜め方向、口縁部内面に羽状を呈する斜め方向のミガキを施している。395 は脚部に 2 対の透孔を 2 方向に施しており、内面では前段階までの成形や調整の痕跡をナデによって消している。400 は杯部が深く、口縁部内外面ともに縦方向のミガキを施している。脚部は低

下層（第 23 図 17 ～ 19 層）



第 37 図　2 区 3 期河道 3 出土土器実測図 2（S ＝ 1/4）

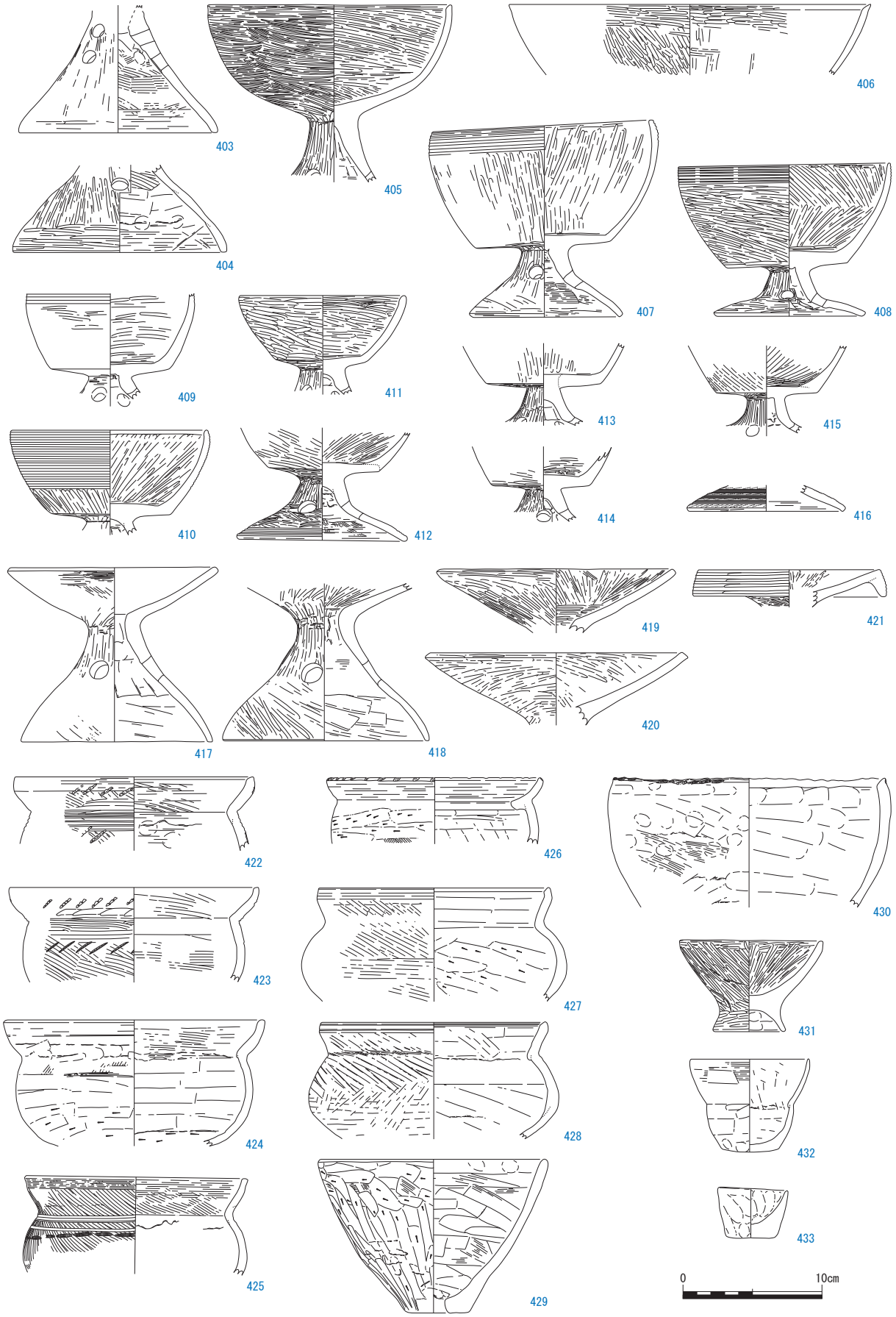


第 38 図　2 区 3 期河道 3 出土土器実測図 3（S＝1/4）

く、2対の透孔を2方向に施している。401は杯部が深く、脚部に2対の透孔を2方向に施している。口縁部外面に横方向、口縁部内面に斜め方向のミガキを施しており、口縁部と杯底部の内面境にわずかに段をもつ。402は杯部が深く、脚部に2対の透孔を2方向に施している。口縁部内外面ともに斜め方向のミガキを施しており、口縁部と杯底部の内面境に段をもつ。403は円錐状を呈し、ほぼ直線的に裾部が開く。中位よりやや高い位置に2段3方向の透孔を施している。脚部内面は、裾端部のみナデによって成形や調整の痕跡を消し去っているが、上半にはハケの痕跡が残っている。404は内彎して開く脚部をもつ。脚部外面に斜め方向のミガキ、裾端部外面には横方向のミガキを施している。脚部内面では、ナデによって成形や調整の痕跡を消し去っているが、上半にわずかにハケの痕跡が残っている。405・406は椀形の杯部をもつ。405は杯部が深く、面取りされた口縁端部は内傾している。口縁部内外面ともに丁寧な横方向のミガキが施されている。脚部外面には縦方向のミガキを施し、脚部内面では、ナデによって成形や調整の痕跡を消し去っている。406は口径が広く、面取りされた口縁端部は内傾している。口縁部内外面ともにミガキを施している。407～416は小型の高杯である。いずれも、口縁部と杯底部の内面境の稜を明瞭にしており、拡大した裾部をもつものはない。407～409は口縁端部外面にやや幅の狭い直線文、410は幅の広い直線文を施している。407・413は口縁部内外面ともにほぼ縦方向のミガキ、408は口縁部外面に斜め方向、口縁部内面に羽状を呈する斜め方向のミガキ、409・411・414は口縁部内外面ともに横方向のミガキ、410・412・415は口縁部内外面ともに斜め方向のミガキを施している。412は裾端部外面に直線文を施している。脚部内面では、408はナデによって成形や調整の痕跡を消し去っているが、407・412はハケの痕跡が残っている。416は裾部外面に直線文と刺突文を施している。

417～421は器台である。417は内彎する口縁部と裾部、円錐状の脚部をもつ。中空部分の径は1.5cmを測る。口縁端部外面に横方向のミガキを施している。脚部中位よりやや上に3方向の透孔をもち、脚部内面はナデを施すことによって、前段階までの痕跡をほとんど消している。418は内彎する裾部と円錐状の脚部をもつ。裾端部外面にらせん状の斜め方向のミガキを施しており、脚部内面はナデを施すことによって、前段階までの痕跡のほとんどを消している。中空部分の径は2.0cmを測る。脚部の中位よりわずかに上に3方向の透孔をもつ。419はほぼ直線的に開く口縁部をもち、口縁端部を面取りしている。口縁部内外面ともに斜め方向のミガキを施しているが、口縁部と脚部の内面境付近には横方向のミガキを施している。420はわずかに内彎して開く口縁部をもち、口縁端部を面取りしている。口縁部内外面ともに横方向のミガキを施している。421は拡張した口縁端部外面に擬凹線文を施している。

422～430は鉢である。422～425は受口状の口縁部をもつが、その形状は痕跡的である。423・424は口径が体部径をわずかに上回っているが、425はほぼ等しい。424は無文であるが、422は口縁屈曲部外面に刺突文、肩部外面に直線文と刺突文、423は口縁屈曲部外面と肩部外面に刺突文、425は肩部外面に直線文と刺突文を施している。426はく字状の口縁部をもち、口縁端部に刺突文を施している。口径が体部径をわずかに上回っており、体部外面にはケズリを施している。427・428は径が広く、やや低い体部をもつ。体部外面にハケ、体部内面にケズリを施している。429はほぼ直線的に立ち上がる体部をもち、底部には穿孔がある。口縁部外面に縦方向の



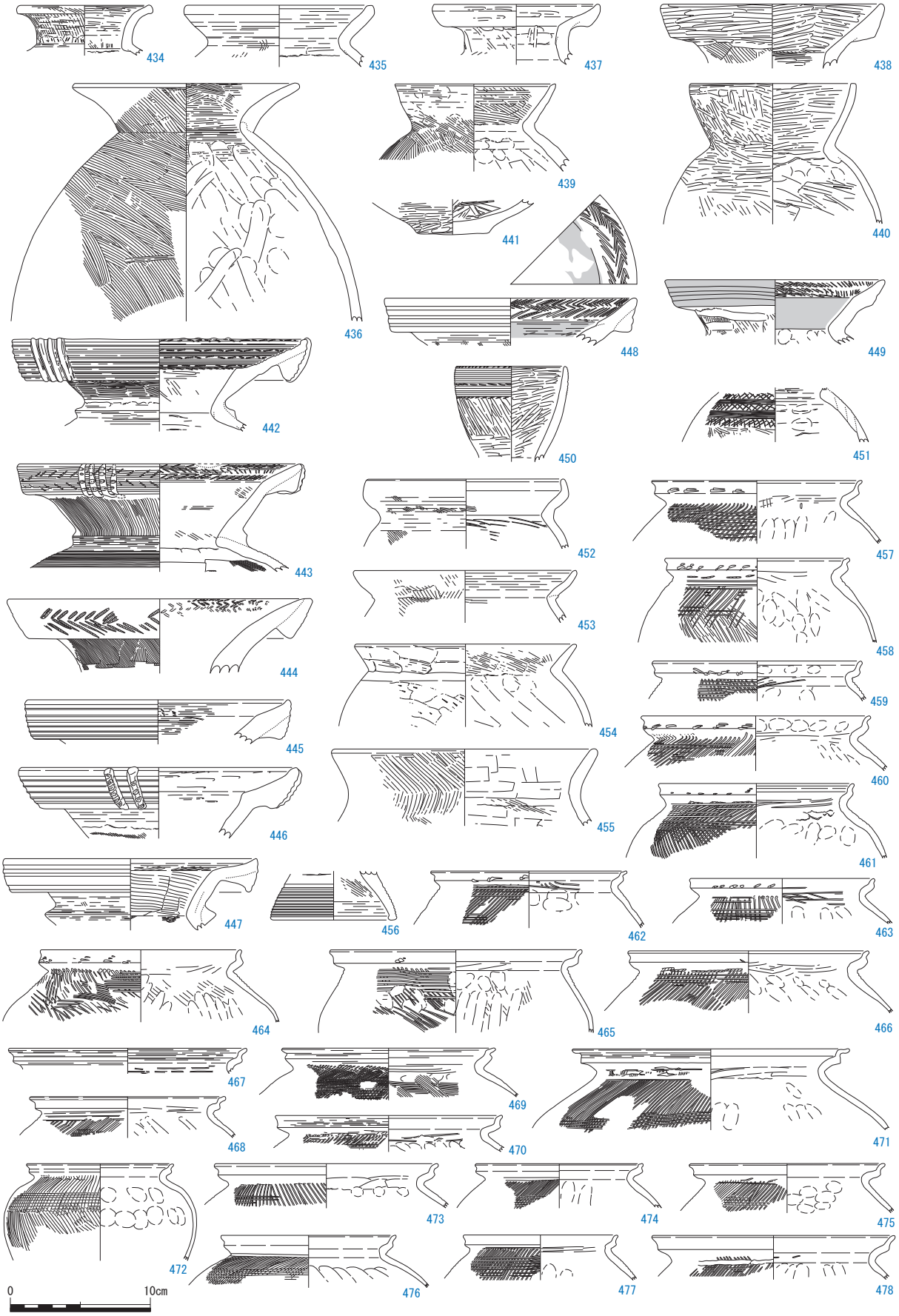
第 39 図　2 区 3 期河道 3 出土土器実測図 4（S＝1/4）

ケズリを施している。430 は内彎して立ち上がる口縁部をもち、面をなした口縁端部に刺突文を施している。431 ～ 433 はミニチュア土器である。431 は鉢形を呈しており、脚部内面以外は丁寧にミガキを施している。432 は甕形を呈し平底の底部をもつ。433 は直線的な体部と平底をもつ。

434 ～ 451 は壺である。434 は外反する口縁部をもち、口縁部内面に横方向のミガキを施している。435 は短く直線的に開く口縁部をもつ。ミガキを施していない。436 は外反する口縁部と、しもぶくれ状の体部をもつ。437 は有段状の口縁端部と直線的に立ち上がる頸部をもつ。口縁端部の内外面に横方向のミガキを施している。438 は有段状の口縁部をもち、口縁端部外面及び口縁部内面に横方向のミガキを施している。439・440 は短く直線的にのびる口縁部をもつ。いずれも無文で、439 はミガキを施していないが、440 はミガキを施している。441 はやや突出した平底の底部である。外面に横方向のミガキを施している。442 は拡張した口縁端部外面に擬凹線文を施した後、４本の棒状浮文を５方向に付加している。口縁端部の内面には、内彎する幅広の文様帯を形成し、羽状に並ぶ５帯の刺突文とその間に４帯の直線文を施している。口縁部と体部の外面境には１条の突帯を貼り付けている。443 は有段状の口縁部にヨコハケ後、羽状の刺突文を施し、さらにその表面に刺突を施した４本の棒状浮文を貼り付けている。口縁端部内面は面をなしており、ヨコハケ後に羽状に並ぶ刺突文を施している。口縁部と体部の外面境に１条の突帯を貼り付け、その下部には直線文を施している。ミガキを施していない。444 は拡張した口縁端部外面に羽状の刺突文を施している。口縁端部内面には文様帯を形成していないが、羽状の刺突文を施している。445 は有段状の口縁端部外面に擬凹線文を施している。口縁端部内面にはわずかに内彎する文様帯を形成しており、刺突文を確認できる。446 は有段状の口縁端部外面に擬凹線文を施した後、２本１組の刺突文を施した棒状浮文を付加している。口縁端部内面には内彎した文様帯を形成しているが、文様は施していない。447 は拡張した口縁端部をもち、口縁端部外面に３条の凹線文を施している。口縁端部内面には内彎した文様帯を形成しているが、文様は施していない。口縁部と体部の外面境に１条の突帯を貼り付けている。448 は有段状の口縁端部外面に擬凹線文を施している。口縁端部内面にはわずかに内彎する文様帯を形成しており、羽状に並ぶ刺突文を施している。口縁部内面の赤彩部分にミガキを施していない。449 は有段状の口縁端部外面に擬凹線文を施している。口縁端部内面にはわずかに内彎する文様帯を形成しており、刺突文を施す。口縁端部外面と口縁部内面の赤彩部分にミガキを施していない。450・451 は小型壺である。450 はわずかに内彎して長く立ち上がる口縁部をもち、口縁端部外面には刺突文と直線文を施している。口縁部外面に横方向と縦方向のミガキを施し、口縁部内面に横方向のミガキを施している。451 は体部外面上半に直線文と×状を呈する刺突文を施している。

452 ～ 478 は甕である。452 は無文であり、受口状の口縁部をもつ。453 ～ 455 はく字状の口縁部をもつ。いずれも無文で、454 は体部外面にケズリを施しており、455 はやや頸部の屈曲が緩やかである。456 は台付甕の脚部である。高さが低く、裾部外面に直線文を施している。457 ～ 478 はＳ字状の口縁部をもつ。457 ～ 465 は口縁部２段目外面に押引状の刺突文、頸部内面にハケを施している。また、頸部に接した位置にヨコハケを施しているが、このうち 464 はヨコハケが明確ではない。466 ～ 470 は口縁部２段目外面に刺突文を施してはいないが、頸部内面にはハケを施しており、口縁端部内面に明瞭な面をもつ。466・468 は頸部に接した位置にヨコハケを

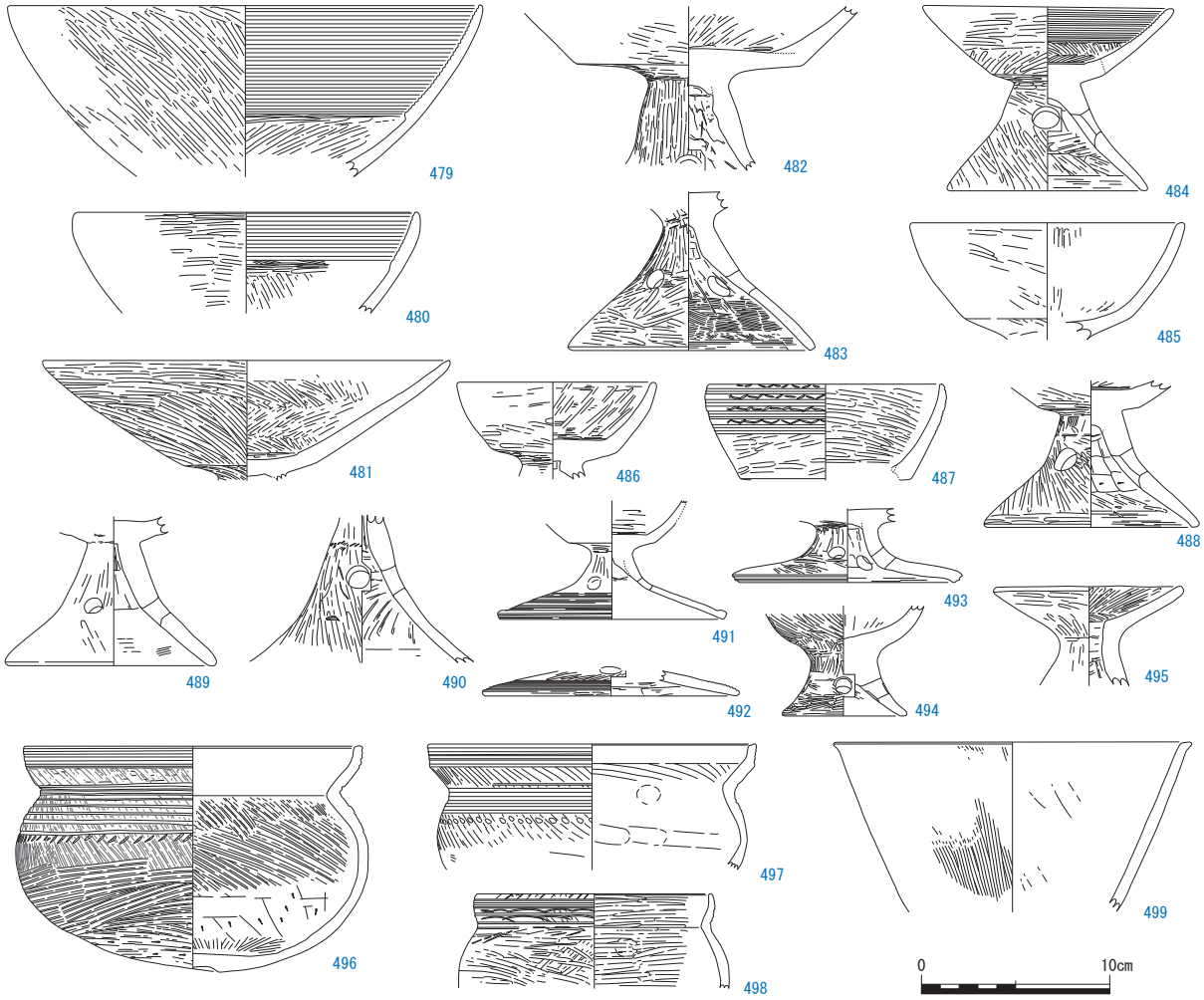
上層（第 23 図 15・16 層）



第 40 図　2 区 3 期河道 3 出土土器実測図 5（S＝1/4）

施しているが、469・470 は頸部からやや下がった位置にヨコハケを施している。471 は口縁部２段目外面に刺突文を施してはおらず、頸部内面にハケも施していない。口縁端部内面に明瞭な面をもつが、頸部外面に１条の沈線を施しており、頸部からやや下がった位置にヨコハケをもつ。472 ～ 478 は口縁部２段目外面に刺突文を施しておらず、口縁端部内面の明瞭な面や頸部内面のハケもない。ヨコハケの位置も頸部からやや下がる。472・473 は頸部調整技法をもたないが、474 ～ 477 は頸部外面に１条の沈線を施している。478 は頸部外面にナデを施している。

479 ～ 494 は高杯である。479・480 は杯部が深く、内彎して立ち上がる口縁部をもつ。口縁部内面には有段の文様帯を形成し、多条沈線文を施している。口縁部外面のミガキは 479 が斜め方向、480 は横方向である。481 は杯底部から稜部までの長さが短く、直線的に大きく開く口縁部をもつ。口縁部外面では上半に横方向、下半に斜め方向のミガキを施し、内面では羽状に並ぶ３段の斜め方向のミガキを施している。口縁部と杯底部の内面境に段をもち、その稜は明確である。482 は杯部が深く、口縁部内外面ともに斜め方向のミガキを施している。口縁部と杯底部の内面境に段をもち、その稜は明確である。483 は円錐状を呈し、わずかに内彎して裾部が開く。中位よりやや高い位置に２対２方向の透孔を施しており、脚部外面にミガキを施している。脚部内面は裾端部のみ、ナデによって前段階までの成形や調整の痕跡を消し去っているが、ハケの痕跡が残っている。484 ～ 493 は小型の高杯である。484 は口縁部内面に文様帯を形成し、多条沈線文を施しているが無段である。口縁部外面上半に横方向、下半に斜め方向のミガキを施し、口縁部内面には羽状を呈する斜め方向のミガキを施している。脚部中位よりやや上に４方向の透孔をもち、脚部内面ではナデにより前段階までの痕跡を消し去っている。口縁部と杯底部の内面境に段をもち、その稜は明確である。485 はやや内彎して立ち上がる口縁部をもつ。口縁部と杯底部の内面境に段はなく、その境は明瞭ではない。486 はわずかに内彎して立ち上がる口縁部をもち、口縁部外面に横方向のミガキ、口縁部内面に斜め方向のミガキを施している。口縁部と杯底部の内面境に段はないが、横方向のミガキによりその境は明瞭である。487 は口縁端部外面に鋸歯状の刺突文と直線文を施している。口縁部内外面ともに横方向のミガキを施す。488 は脚部が円錐状を呈し、裾部がわずかに内彎して開く。中位よりやや高い位置に３方向の透孔を施しており、脚部外面にはミガキを施している。脚部内面はケズリとナデによって前段階までの成形や調整の痕跡を消しているが、一部にハケの痕跡が残る。口縁部と杯底部の内面境にわずかな段をもつ。489 は脚部が円錐状を呈し、直線的に裾部が開く。脚部のほぼ中位に３方向の透孔を施している。口縁部と杯底部の内面境は明瞭でない。490 は脚部が円錐状を呈し、やや外反して裾部が開く。脚部の中位よりやや高い位置に３方向の透孔を施している。脚部内面はナデによって前段階までの成形や調整の痕跡を消している。491 は拡大した裾部をもち、裾部径が口径を上回っている。口縁部内面には横方向のミガキを施しており、口縁部と杯底部の内面境には段をもつ。裾部外面には３帯の直線文を施している。492 は拡大した裾部をもち。裾端部外面に直線文を施している。493 は脚部高が低く、２対の透孔を２方向に施している。裾端部に２条の凹線を施している。494 は内彎して椀形に立ち上がる口縁部と短い脚部をもつ。外面に丁寧なミガキを施しており、脚部には４方向の透孔をもつ。495 は器台である。脚部は残存していないが、口径が小さく、脚部径が口径を上回っている可能性が高い。



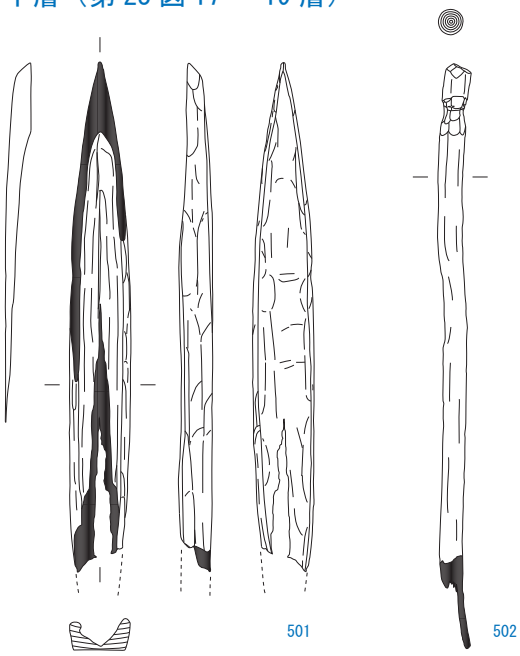
第 41 図　2 区 3 期河道 3 出土土器実測図 6（S＝1/4）

496 ～ 499 は鉢である。496 は受口状の口縁部をもち、口縁端部外面に直線文、頸部外面から肩部外面にかけて 8 条の沈線、その下部に刺突文を施している。底部は丸底であり、底部外面が小さく凹んでいる。底部外面及び体部内面下半にケズリを施している。497 は受口状の口縁部をもち、口縁端部外面と頸部外面に直線文、その下部に刺突文を施している。498 はわずかに内彎して立ち上がる短い口縁部をもつ。口縁端部に刺突文、口縁部外面に直線文と連弧文、頸部外面に直線文を施している。口径と頸部径の差が小さく、口縁部内面と体部内外面に横方向のミガキを施している。499 はほぼ直線的に立ち上がる体部をもち、口縁端部を面取りしている。

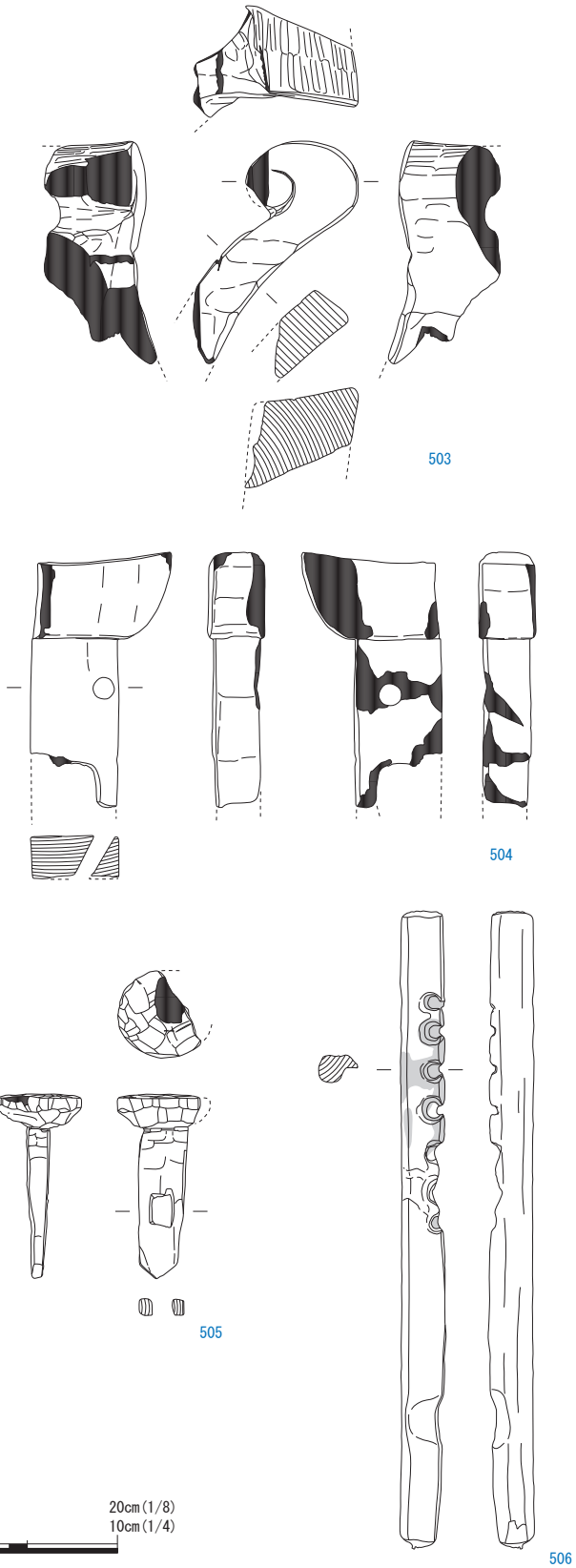
500 は方形の柄孔をもつ鍬である。鍬表に舟形隆起をもつ。柾目材を用いており、柄の入射角度は約 60 度を測る。501 は舟形の木製品である。一方を欠損しているため長さは不明であるが、幅は 3.2cm を測る。柾目材を用いている。502 は芯持ち材の先端を加工し、頭部を作り出した部材である。樹皮は残存していない。503 は渦巻き状を呈する木製品である。柾目材を用いている。用途は不明である。504 は端を曲線で装飾している他、小孔と透かし彫りを施している。用途は不明である。505 は栓である。長さは 10.2cm、笠部の径は約 5.0cm を測る。軸の中央に方形のほぞ穴が設けられている。506 は火きり臼である。完形品で長さ 35.3cm、幅 2.5cm、厚み 1.5cm を測る。火きり穴は本体の右側に 7 カ所設けられており、いずれも使用痕が残っている。

底（第 23 図 19 層）

下層（第 23 図 17 ～ 19 層）



上層（第 23 図 15・16 層）



S=1/4　500, 501, 503 ～ 506
S=1/8　502

0　20cm（1/8）
10cm（1/4）

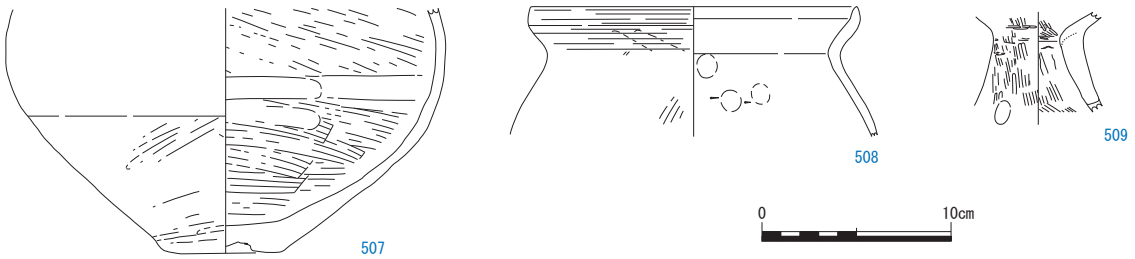
第 42 図　２区３期河道３出土木製品・木器実測図（S ＝ 1/4、1/8）

【竪穴建物１】

竪穴建物１は河道１・２が埋積した後に造られた。部分的な検出であったため、規模は不明であるが、床面から直径約 30cm、深さ 10cm ほどの柱穴を１カ所確認できている。また、調査区南壁では、壁体溝も確認できた。

この竪穴建物１から出土した土器のうち、床面から出土した１点の土器と、埋土から出土した２点の土器を図示した（第 43 図の 507 ～ 509）。

507 は壺の体部である。床面から出土した。球形を呈し、わずかに突出した平底をもつ。底部外面がわずかに凹んでいる。508 は受口状の口縁部をもつ甕である。摩耗が著しく詳細は不明であるが、無文である。509 は円錐状の中空脚をもつ器台である。中空部分の径は 2.2cm を測り、透孔が３方向に施されている。脚部内面にナデを施しているが、ハケの痕跡が残っている。



第 43 図　２区３期竪穴建物１出土土器実測図（S ＝ 1/4）

【溝２・柱穴１・２】

溝２は幅約 50cm、深さ約 10cm の溝である。竪穴建物１と同じ主軸をもつ。埋土に遺物を確認できなかった。柱穴１・２は溝２の東西で確認できた。直径は 40 ～ 50cm 程度で、深さは約 10cm である。どちらも埋土に遺物を確認できなかった。

【遺構面・遺物包含層】

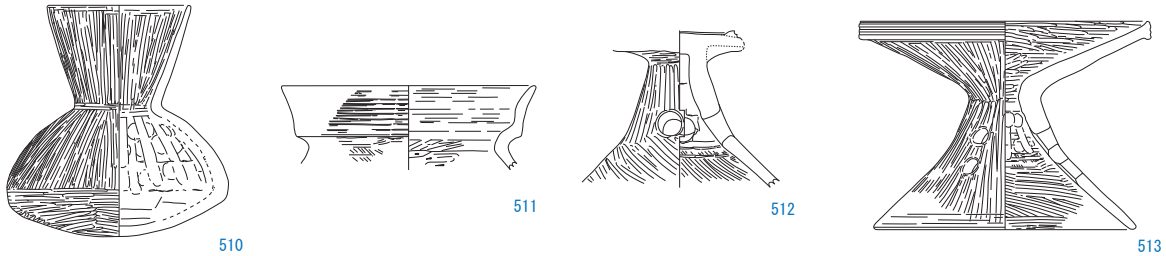
３期では、15・20 ～ 25・28 ～ 30・32・50・51・66 層上面が遺構面であり、10 ～ 14 層が遺物包含層である。ただし、北壁断面を基準とすると調査区東側から西に約 13.3 mの範囲については１～３期の遺構検出面は等しく、調査区東側から西に約 13.3 ～ 19.9 mの範囲については２期と３期の遺構検出面が等しい。この遺構面と遺物包含層から出土した遺物から 27 点の土器と土製品を図示した（第 44 図の 510 ～ 536）。

510 は小型壺である。直線的に開く口縁部をもち、口縁端部を丸くおさめている。体部はややしもぶくれ状を呈し、体部最大径よりも下部の外面に横方向のミガキを施している。底部は丸底である。511 は甕である。拡張した有段の口縁部をもち、口縁端部がやや外反している。口縁端部外面に擬凹線文を施している。頸部内面に削り残しがあり、斜め方向のハケの痕跡が残っている。512 は高杯である。脚部は円錐状を呈し、４方向に透孔を施している。脚部外面では上半に縦方向のミガキ、下半にらせん状の斜め方向のミガキを施している。脚部内面の下半にハケの痕跡が残る。杯底部から稜部までの長さが短く、口縁部と杯底部の内面境に段をもつ。513 は器台である。ほぼ直線的に開く口縁部と円錐状の脚部をもつ。拡張した口縁端部に擬凹線文を施しており、中空

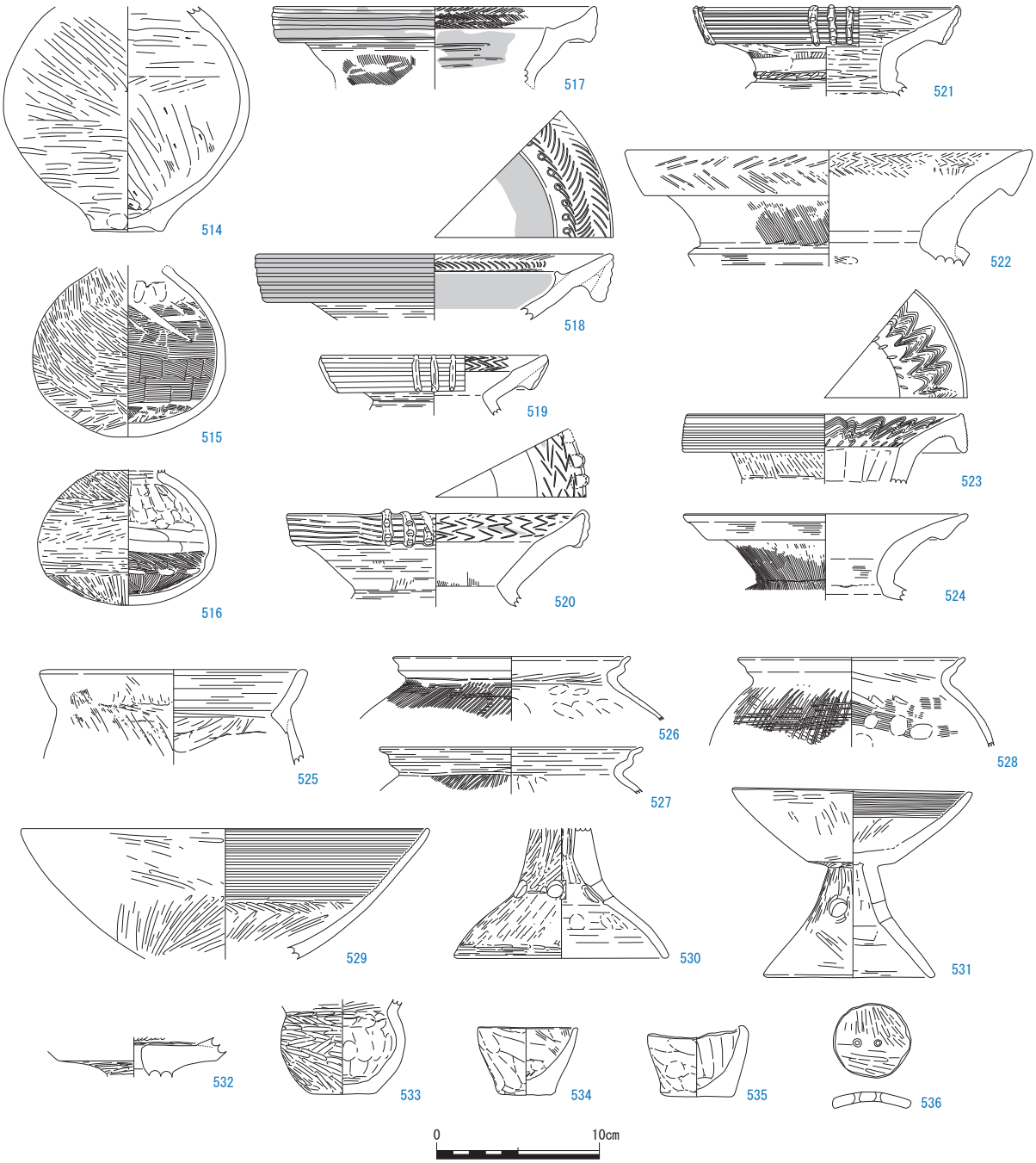
部分の径は 1.4cm を測る。口縁部と脚部の外面に縦方向のミガキを施し、口縁部内面に横方向のミガキを施している。脚部中位よりやや上に２段３方向の透孔をもち、脚部内面にはハケの痕跡が残っている。

514 ～ 524 は壺である。514 は球形の体部をもち、底部は上げ底した平底をもつ。体部外面上半に斜め方向、下半に横方向のミガキを施している。515 は球形の体部をもつ。底部の形態は丸底に近いが、小さな平底である。体部外面にらせん状の斜め方向のミガキを施しており、体部内面には３段に分けてハケを施している。516 は小型壺の体部で、丸底をもつ。体部はしもぶくれ状を呈し、体部最大径付近の外面に横方向のミガキを施している。517 は拡張した口縁端部外面に擬凹線文を施し、口縁端部の内面には、内彎する文様帯を形成し、羽状に並ぶ４列の刺突文を施している。口縁部内面に横方向のミガキを施している。口縁端部外面と口縁部内面を赤彩している。518 は拡張した口縁端部外面に擬凹線文を施している。口縁端部の内面には突帯で画した文様帯を形成し、羽状に並ぶ３列の刺突文と竹管文を施している。口縁端部外面と口縁部内面を赤彩している。519 は有段状の口縁端部外面に擬凹線文を施した後、３本の棒状浮文を４方向に付加している。口縁端部の内面には有段の文様帯を形成し、羽状に並ぶ４列の刺突文を施している。520 は有段状の口縁端部外面に擬凹線文を施した後、その表面に刺突を施した３本の棒状浮文を付加している。口縁端部内面は面をなしており、羽状に並ぶ５列の刺突文を施した後、その一部を赤彩している。521 は有段状の口縁端部外面に擬凹線文を施した後、その表面に刺突を施した３本の棒状浮文を４方向に付加している。短く直線的に立ち上がる頸部をもち、頸部と体部の外面境に刺突を施した１条の突帯と１条の沈線を施している。口縁部内面には有段の文様帯を形成しているが施文していない。口縁部及び頸部内面に横方向のミガキを施している。522 は有段状の口縁端部外面に羽状の刺突文を施しており、頸部と体部の外面境に１条の突帯を貼り付けている。口縁端部内面には文様帯を形成していないが、羽状に並ぶ４列の刺突文を施している。523 は拡張した口縁端部外面に擬凹線文を施している。口縁端部内面は面をなしており、波状文と刺突文を施している。524 は無文で有段状の口縁端部をもつ。525 ～ 528 は甕である。525 はく字状の口縁部をもつ。526 ～ 528 は S 字状の口縁部をもつ。526 は口縁端部内面に明瞭な面をもつが、頸部外面に１条の沈線を施している。頸部外面では頸部にほぼ接した位置にヨコハケをもち、頸部内面にもハケを施している。527 は口縁端部内面に明瞭な面をもつが、頸部外面に１条の沈線を施している。528 は体部外面に羽状のハケをもち、羽状のハケの境にヨコハケを施している。頸部内面にハケを施している。529 ～ 532 は高杯である。529 は杯部が深い。内彎して立ち上がる口縁部の内面には、無段の文様帯を形成し多条沈線文を施している。口縁部内外面ともに、羽状に並ぶ２段の斜め方向のミガキを施している。530 は脚部が円錐状を呈し、裾部は内彎して開く。脚部の中位に２対の透孔を２方向に施しており、脚部内面ではナデによって成形や調整の痕跡を消し去っている。脚部外面に斜め方向のミガキ、裾端部外面には横方向のミガキを施している。531 は口縁部内面に無段の文様帯を形成し、多条沈線文を施している。口縁端部外面に横方向のミガキを施している。脚部中位よりやや上に３方向の透孔をもち、脚部内面はナデにより前段階までの痕跡が消されている。532 は焼成後に杯底部に穿孔している。口縁部と杯底部の内面境に段をもつ。533 ～ 535 はミニ

遺構面



遺物包含層



第 44 図　2 区 3 期遺構面及び遺物包含層出土土器・土製品実測図（S ＝ 1/4）

チュア土器である。533 のみ外面に丁寧なミガキを施している。536 は双孔円盤である。直径は約 4.8cm で、２カ所を穿孔している。やや反っており、凸面にミガキ、凹面にナデが施されていることから、壺の体部片を２次利用した可能性が高い。

（７）３期の年代

図示した 205 点の土器は、河道３・竪穴建物１・遺構面・遺物包含層から出土している。

まず、河道３であるが、底から、口縁端部内面に突帯で画した文様帯を形成するパレス壺（328）や、頸部径が広く口径・頸部径・体部径の差が小さい壺（329・330）、口縁部内外面に羽状に並ぶ２段のミガキを施し、口縁部内面に有段の広い文様帯を形成する高杯（334）、裾部が拡大し裾端部外面に文様を施す小型高杯（340）、口縁部内外面に横方向のミガキを施し、口径が縮小していない器台（340）などを確認できている。また、埋土下層では、口縁端部外面に付加した棒状浮文に刻みをもち、口縁端部内面の突帯で画した文様帯に直線文と竹管文と刺突文を施したパレス壺（372）や、口縁部内面の有段の広い文様帯に多条沈線文とともに羽状や×状を呈する刺突文を施す高杯（398）を確認できている。S 字甕は全て口縁部外面に押引状の刺突文と頸部内面のハケをもち、器台に口径が縮小するものを確認できていない。埋土上層では、口縁部外面の刺突文や頸部内面のハケ、口縁端部内面の明瞭な面をもたず、頸部調整技法をもち、外面のヨコハケの位置が頸部からやや下がる S 字甕（477）、杯底部から稜部までの長さが極端に短く、直線的に大きく開く口縁部をもつ高杯（481）、口縁部内面に無段の文様帯を形成する小型高杯（484）、裾部が拡大し裾端部外面に文様を施す小型高杯（491・492）、口径が縮小した器台（495）などを確認できている。以上の特徴から、河道３の底及び埋土下層の出土土器の編年的位置を、廻間Ⅰ式４段階古～廻間Ⅱ式１段階の範疇、埋土上層の出土土器の編年的位置の下限を廻間Ⅲ式４段階で捉えられると考える。

次に、竪穴建物１であるが、河道２が埋積した跡に造られており、埋土から中空部分の径がやや広い中空脚をもつ器台（509）を確認できていることから、その編年的位置を、廻間Ⅰ式４段階古～新までの範疇で捉えられると考える。

最後に遺構面・遺物包含層であるが、遺構面からは丸底の小型壺（510）や、口縁部内面に横方向のミガキを施し、口径が縮小していない器台（513）を確認できており、遺物包含層からは口縁端部内面に明瞭な面をもつが、頸部調整技法が施される S 字甕（527）や、口縁部内面に無段の文様帯を形成し、口縁部内外面に羽状に並ぶミガキを施した高杯（529）を確認できていることから、その編年的位置は廻間Ⅰ式４段階新～廻間Ⅲ式４段階の範疇で捉えられると考える。

（８）小結

２区の発掘調査では、山中Ⅱ式１段階～廻間Ⅲ式４段階に属する遺物が出土し、層位の観察からこれを大きく１～３期の３時期に区分した。

このうち、１期では調査区を西から東に幅約 7.4 mの河道１が流れている。埋土から出土した土

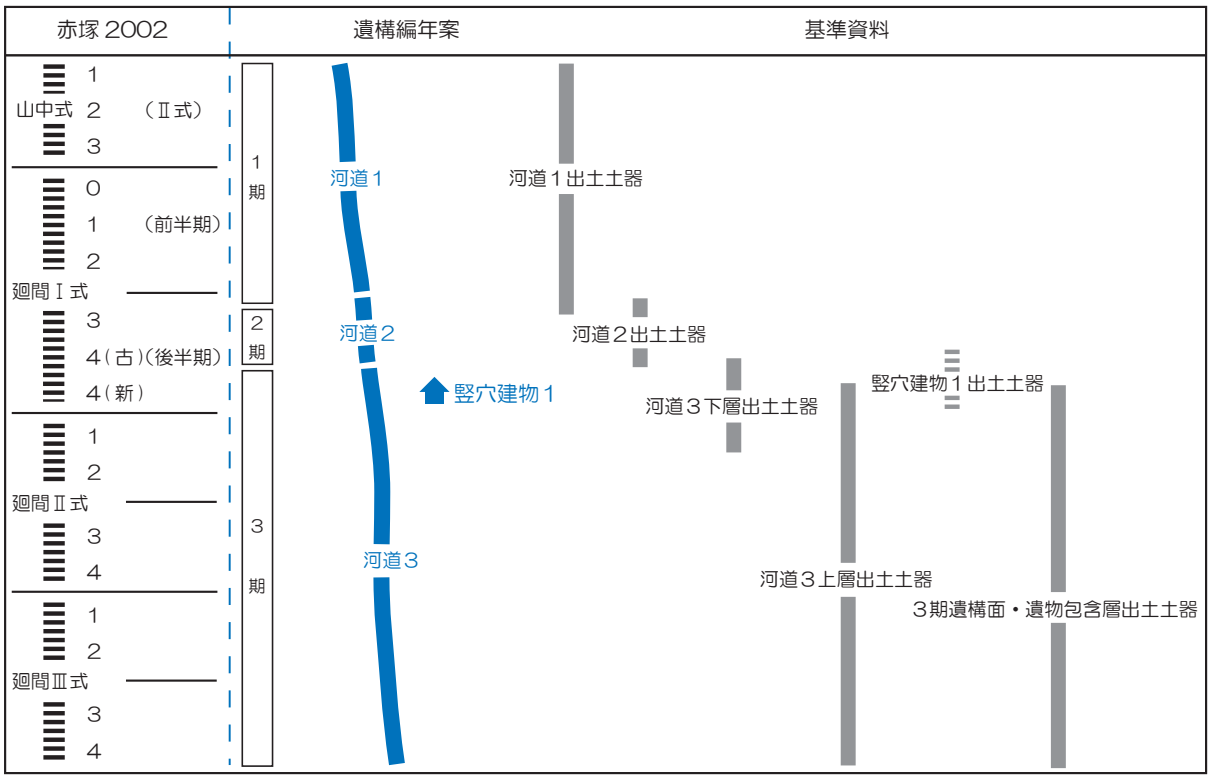
器の編年的位置は、山中Ⅱ式１段階～廻間Ⅰ式３段階の範疇であり、山中Ⅱ式期１段階には既に河道１が存在していたことが分かる。また、埋土からは多量の土器の他に、鳥形木製品や木製農具、建築部材が出土しており、さらに河道１の南岸には梯子（266）が立て掛けられていた。そのため、当調査区の周辺には集落や農地があり、河道１を生活用水等に利用していた可能性が高まった。

２期では、河道１が埋積によってその規模を幅約 4.7 mまで縮小し、河道２となる。河道２の埋土の大半は粗砂層や砂礫層の一括堆積で占められており、大雨などにより多量の土砂流出があり、ごく短期間のうちに、その規模を大きく縮小した可能性が高い。埋土から出土した土器の編年的位置も廻間Ⅰ式３段階～廻間Ⅰ式４段階古のごく短い範疇に収まっている。ただ、この粗砂層や砂礫層は河道２の内部に収まっており、外部への堆積は確認できていない。なお、河道１において梯子（266）が埋没した地点には、新しく梯子（323）が設置されており、１期に引き続き、２期においても河道２が生活用水等に利用されていただろう。

３期では、河道２が急激な埋没により、幅 3.0 m、深さ約 0.4 mの規模にまで縮小し河道３となる。埋土の上層は黒色を呈する粘質土であることから、埋没直前は滞水が著しかっただろう。埋土から出土した土器の編年的位置の上限は廻間Ⅰ式４段階古であり、下限は廻間Ⅲ式４段階である。南側法面に焼土と炭化物の集中地点が確認できたことや、埋土から多量の土器が出土していることから、河道に関わる儀礼が行われていた可能性がある。また、河道３の南岸で、河道２が埋没した跡地に竪穴建物１が建てられており、その埋土から出土した土器の編年的位置の下限が廻間Ⅰ式４段階新であることから、竪穴建物１は河道２が埋没した直後のものであった可能性が高い。なお、３期の遺構面や遺物包含層から出土した土器の編年的位置の下限も河道３と同じ廻間Ⅲ式４段階であり、当調査区では河道３の埋没とともにその人的活動を確認できなくなる。

以上のように、２区の発掘調査の結果、当調査区では山中Ⅱ式期１段階以降、廻間Ⅲ式期４段階に至るまで、西から東に河道が流れており、その周囲には集落や農地があった可能性が高いことを明らかにできた。また、当調査区で確認できた河道は徐々にその規模を縮小していくが、とくに廻間Ⅰ式期３段階～廻間Ⅰ式期４段階古のごく短い期間に多量の土砂の一括堆積によって、大きくその規模を縮小したことを明らかにした。ただ、土砂は河道外に及んでおらず、当調査区内では、この現象が洪水を伴ったかどうかについては判断できなかった。

最後に、２区の主な遺構・遺物の編年的位置を第 45 図に整理しておく。



第 45 図　２区の主な遺構の編年的位置

6　3 区の調査

（1）層位と時期区分

調査区北壁の観察から、３区の層位を 66 層に分層した（第 46・47 図、第２表）。そのうち、50 ～ 70cm の現代の道路造成土と水田耕作土を除去した標高約 6.8m 以下では、５面の遺構面を確認できている。また、その中で全時期にわたって埋積を繰り返し、その流路と規模を変化させていく１本の河道を検出できており、この河道の変化が大きく５度にわたっていることも明らかにできた。そして、そのうち２期目の変化において、環濠が埋没したことも確認できている。そのため、２期目をさらに２つに分け、当調査区を１～６期に区分した。

（2）１期の遺構・遺物

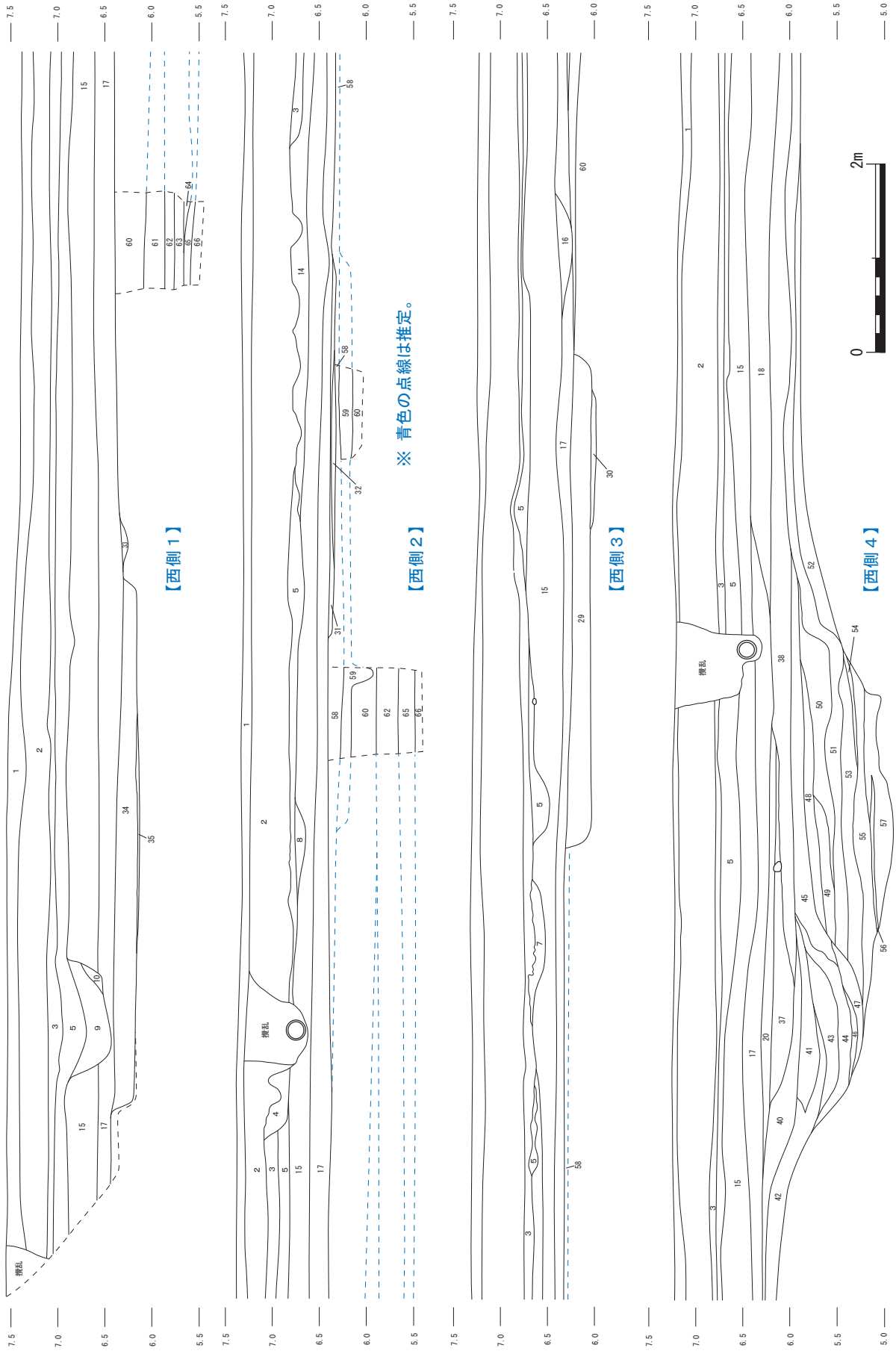
１期では、分流する２本の河道（河道１・２）と１カ所の土器集中部（土器集中部１）を確認した（第 48 図）。なお、当期の遺構検出については西側を中心に、十分に精査する時間を確保できなかった。そのため、調査区に３カ所のサブトレンチを設定し、下層の状況把握を行った（第 46 図）。

【河道１】

河道１は南岸を確認できていないため正確な規模は不明であるが、幅７ m以上、深さは約 0.9 mを測る。河道底の標高とその後の埋没状況から、水は調査区を西から東に流れていたと判断した。調査区西端から約 25 m東の地点で河道２と分流しており、両河道の間には中州が形成されている。この河道１から出土した遺物のうち、48 点の土器を図示した（第 49・50 図の 537 ～ 584）。

537 ～ 545 は壺である。537 は受口状の口縁部と球形を呈する体部をもつ。頸部外面から肩部外面にかけて１帯の直線文と刺突文を施している。底部は平底である。538 は頸部径が広く、体部内外面ともにハケを施しているが、口縁端部内外面にはナデを施している。口縁部付近に２カ所の透孔を確認できている。底部はやや突出した平底をもつ。539 は平底の底部である。540 は頸部径が広く、外側に開く口縁部をもつ。底部外面にハケを施した後、ミガキを施している。突出した平底をもつ。541 は頸部径が広く、短くほぼ垂直に立ち上がる口縁部をもつ。底部外面にハケを施した後、ミガキを施している。542 は小型の無頸壺である。球形を呈する体部に平底をもち、体部外面には丁寧なミガキを施している。543 ～ 545 は小型壺である。543 と 544 は球形の体部をもつが、545 の体部はややしもぶくれ状を呈しており、体部外面下半に横方向のミガキを施している。

546 ～ 557 は甕である。546 ～ 548 は受口状の口縁部をもつ。546 は口縁端部外面に刺突文を施し、口縁端部を面取りしている。体部の最大径を中位よりやや上にもち、底部は平底である。体部外面にヘラ沈線によって絵画表現がなされているが詳細は不明である。547 は口縁屈曲部外面に刺突文を施し、肩部外面に直線文を施している。548 は口縁端部外面に刺突文を施し、肩部外面には直線文と刺突文を施している。549 ～ 555 はく字状の口縁部をもつ。このうち、550 ～



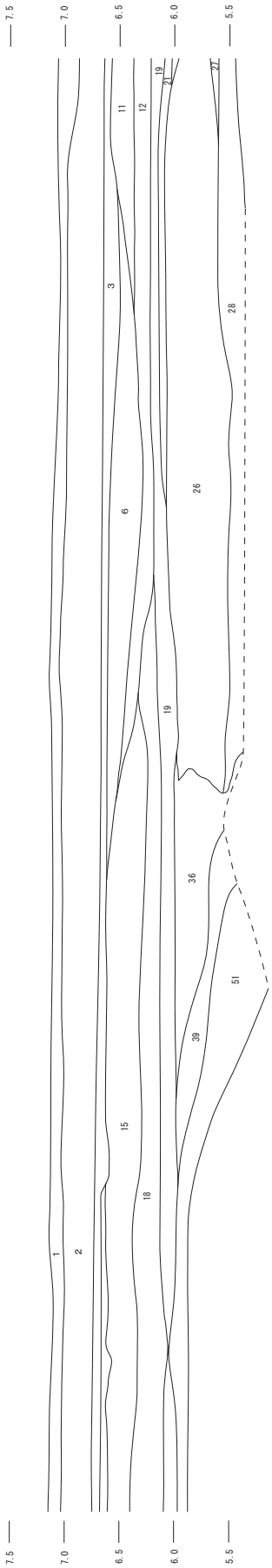
第 46 図　3 区北壁断面図 1（S＝1/60）

553、555 は口縁端部を面取りし刺突文を施しているが、549・554 は刺突文を施していない。555 は台付で体部の最大径をほぼ中位にもつ。556 は平底の底部であり、やや突出している。557 は台付甕の脚部である。

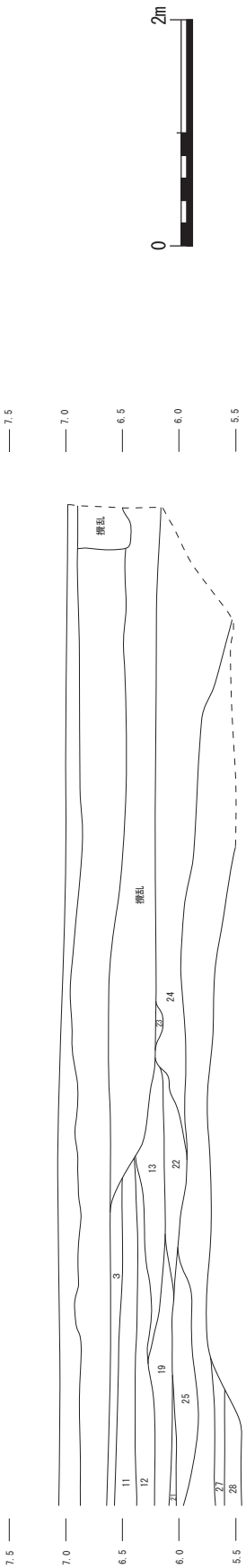
558 ～ 568 は高杯である。558 ～ 560 は杯部が浅く、外反する口縁部をもつ。558 は口縁端部を面取りしているが、559・560 は丸くおさめている。558 のみ口縁部と杯部の内面境に横方向のミガキを施しているが、いずれも口縁部内面境の稜はあまり明確ではない。560 は円錐状に開く脚部をもち、中位には３方向の透孔を施している。脚部内面はナデによって成形や調整の痕跡を消し去っているが、上半にハケの痕跡が残っている。561・562 はワイングラス形の杯部をもつ。561 は口径と杯部最大径にあまり差がなく、杯部内面全体にミガキを施している。562 は杯部がしもぶくれ状を呈している。杯部内面にミガキを施しておらず、杯底部内面にハケの痕跡が残っている。563 ～ 567 は柱状部と裾部の境に屈曲をもち、屈曲に合わせて３方向の透孔を施している。いずれも、裾部内面にナデを施し、前段階までの成形や調整の痕跡のほとんどを消し去っている。563 ～ 565 は柱状部外面に直線文をもつ。568 は脚部が円錐状を呈している。

569 ～ 578 は器台である。569 ～ 576 は柱状の中空脚をもつ。このうち、569 ～ 572・576 は中空部分の径が広いが、573 ～ 575 はやや狭い。また、569・571・573 は柱状部と口縁部・裾部の境が明確であるが、570・576 は口縁部・裾部ともに不明瞭、572・574・575 は口縁部との境は明確であるが、裾部との境は不明瞭である。573 のみ脚部内面にナデを施しておらず、裾端部内面にハケの痕跡が残っている。577 は円錐状の中空脚をもつ。透孔は施されていない。578 は装飾器台の口縁部である。面取りした口縁端部に擬凹線文を施した後に円形浮文を貼り付けており、口縁端部内面には刺突文と竹管文を施している。

579 ～ 583 は鉢である。579 はく字状の口縁部と球形を呈する体部をもつ。無文である。580 ～ 583 は受口状の口縁部をもつ。580 は口縁端部外面に刺突文を施しており、口縁端部を面取りしている。球形のやや高い体部をもち、底部外面はケズリによってほぼ丸底を呈している。581 は口縁端部外面に刺突文を施し、頸部外面から肩部外面にかけて直線文と波状文を施している。球形を呈する体部をもち、体部径が口径を上回っている。582 は口縁端部外面に波状文、頸部外面から体部外面にかけて２帯の直線文とその間に波状文を施している。口径が体部径を上回っている。583 は肩部外面に直線文と刺突文を施している。体部はややしもぶくれ状を呈しており、口径と体部径がほぼ等しい。584 は小型壺と器台を結合させ、１個体とした土器である。小型壺の底部と器台の口縁部をそれぞれに製作しており、その接合部外面には横方向のミガキを施している。



【東側２】

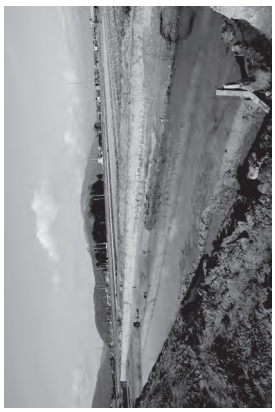


【東側１】

３区北壁断面全景（南東から）

３区北壁環濠西肩断面近景（南から）

３区北壁環濠断面（南から）

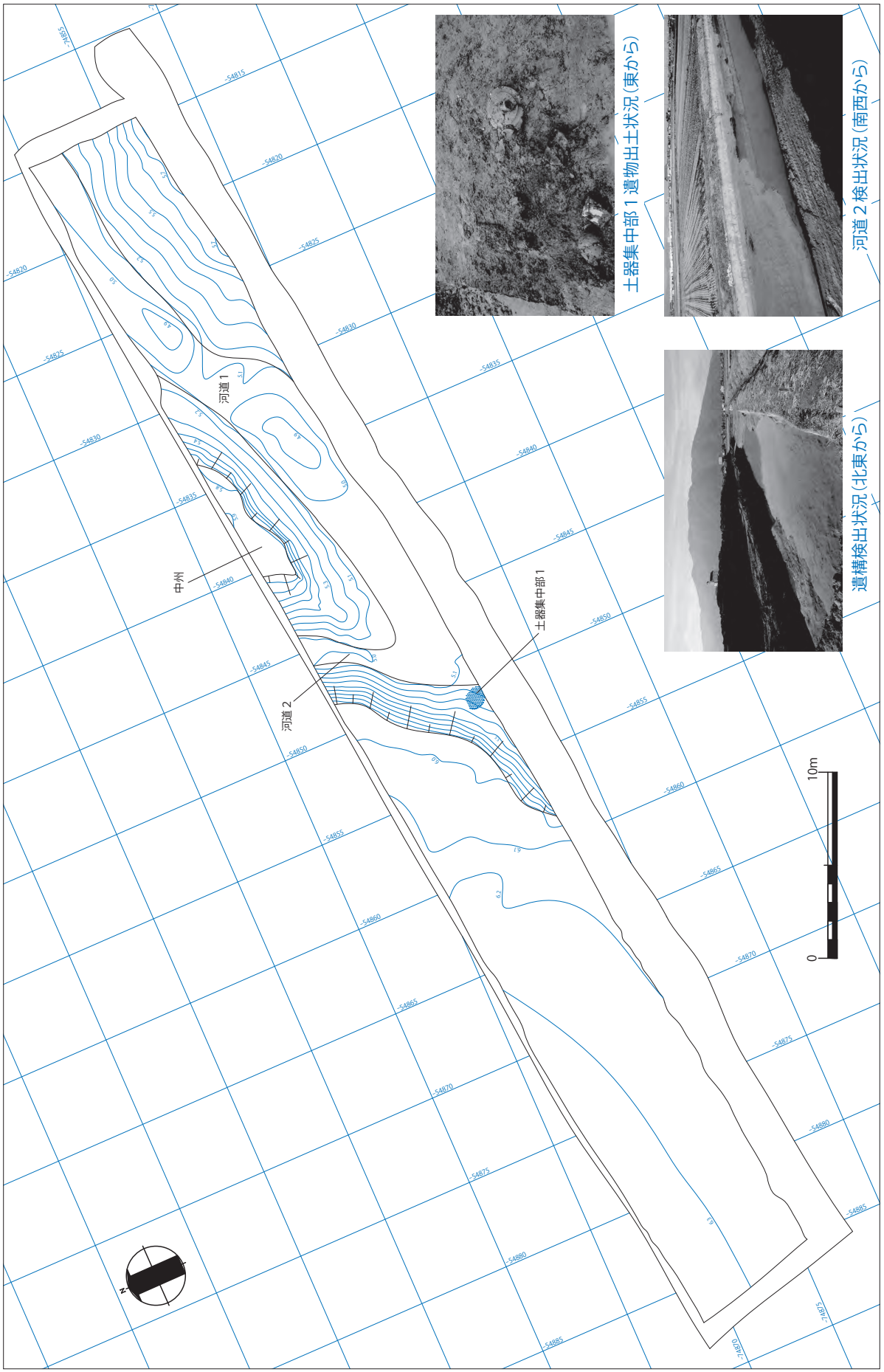


３区北壁断面東側（南から）

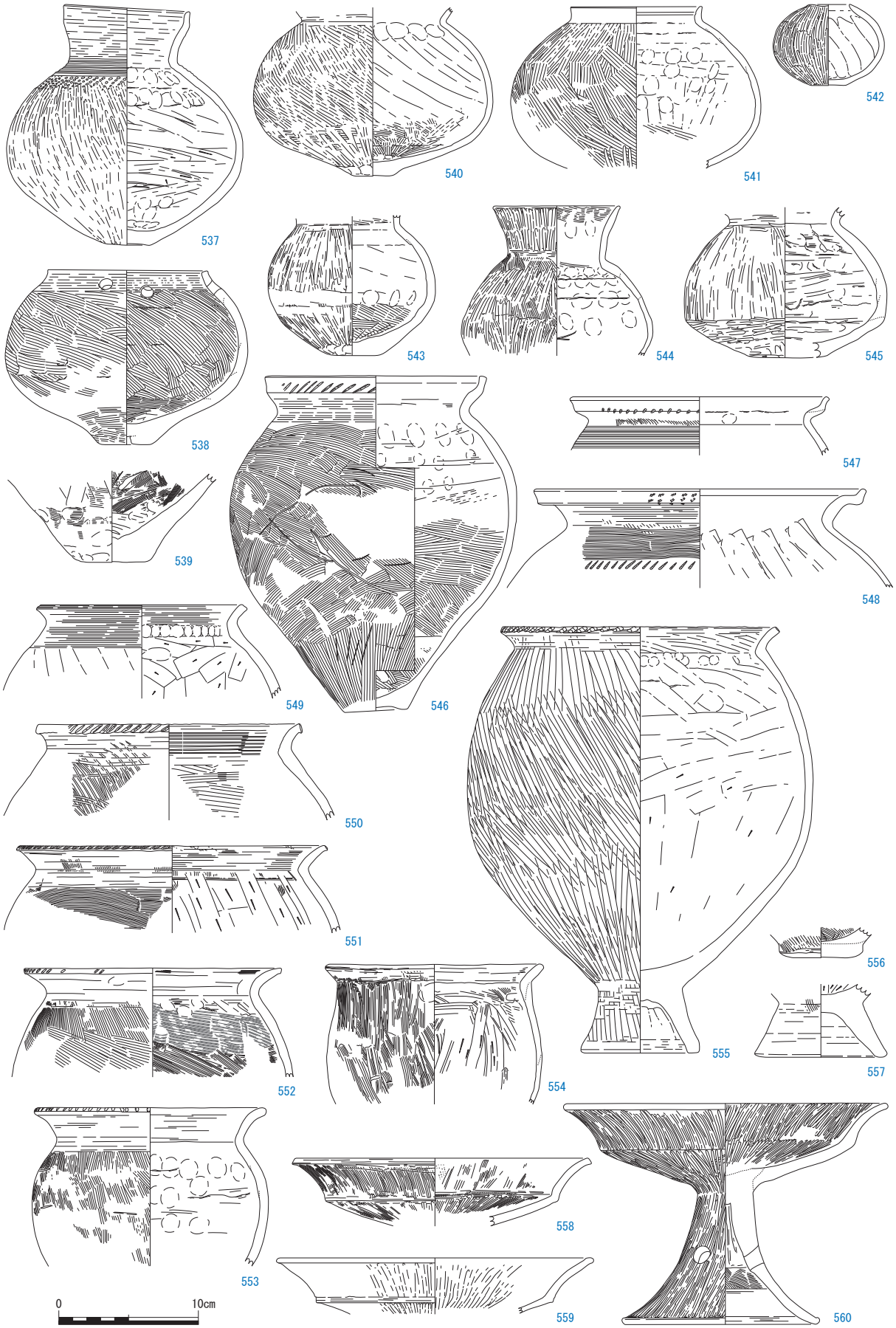
第 47 図　３区北壁断面図２（S＝1/60）

第２表　３区北壁断面土層一覧

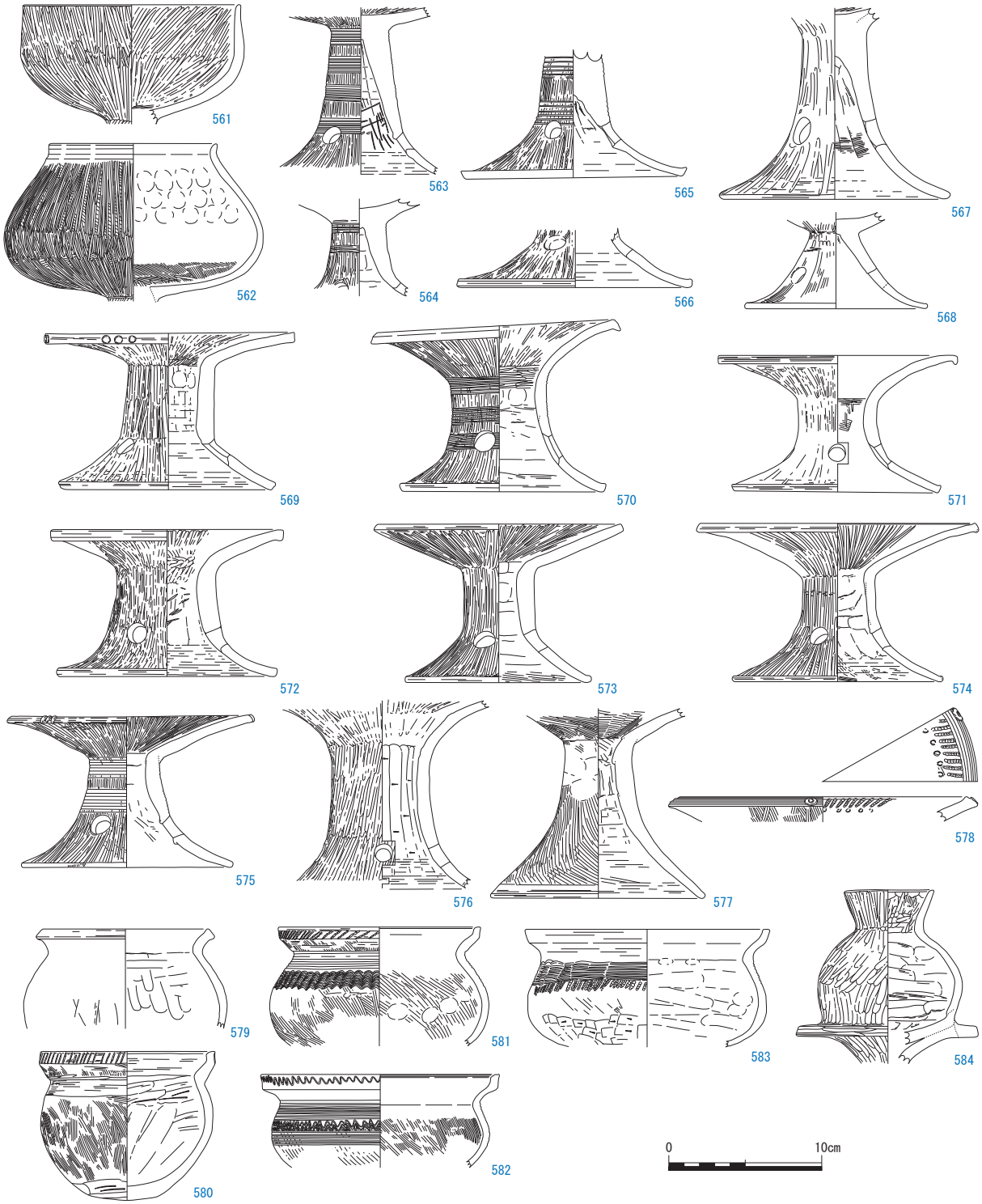
〔道路造成土〕	1	Hue10YR4/2	灰黄褐色砂質土	
	2	Hue10YR5/2	灰黄褐色弱粘質土	
〔水田耕作土〕	3	Hue10YR6/3	にぶい黄橙色砂質土	
	4	Hue2.5Y6/1	黄灰色砂質土	
〔遺物包含層〕	5	Hue10YR3/1	黒褐色弱粘質土	６期
〔河道６埋土〕	6	Hue2.5Y3/1	黒褐色弱粘質土	６期
〔溝２埋土〕	7	Hue10YR3/1	黒褐色弱粘質土	６期
〔溝３埋土〕	8	Hue10YR3/1	黒褐色弱粘質土	６期
〔土坑７埋土〕	9	Hue2.5Y3/2	暗灰黄色砂質土	６期
	10	Hue2.5Y6/1	黄灰色砂質土	６期
〔遺物包含層〕	11	Hue5Y3/2	オリーブ黒色砂質土	５期
	12	Hue2.5Y4/2	暗灰黄色砂質土	５期
	13	Hue2.5Y4/1	黄灰色砂質土	５期
	14	Hue2.5Y6/2	灰黄色砂質土	５期
	15	Hue2.5Y6/2	灰黄色砂質土	５期
〔遺構埋土〕	16	Hue10YR4/1	褐灰色弱粘質土	５～６期
〔遺物包含層〕	17	Hue2.5Y5/1	黄灰色砂質土	５期
	18	Hue2.5Y6/1	黄灰色砂質土	５期
	19	Hue7.5Y4/1	灰色砂質土	５期
	20	Hue5Y6/1	灰色細砂	５期
	21	Hue2.5Y2/1	黒色砂質土	５期
	22	Hue5Y4/1	灰色粘質土	５期
〔河道５埋土〕	23	Hue5Y5/1	灰色粗砂	５期
	24	Hue5Y5/2	灰オリーブ色粗砂	５期
	25	Hue5Y6/1	灰色砂礫	５期
	26	Hue5Y5/2	灰オリーブ色細砂	５期
	27	Hue5Y4/2	灰オリーブ色弱粘質土	５期
	28	Hue5Y4/2	灰オリーブ色粗砂	５期
〔竪穴建物８埋土〕	29	Hue10Y4/1	灰色弱粘質土	２～５期
〔竪穴建物８貼床〕	30	Hue2.5Y3/1	黒褐色弱粘質土	２～５期
〔竪穴建物３埋土〕	31	Hue2.5Y4/1	黄灰色砂質土	２～５期
〔竪穴建物３貼床〕	32	Hue5Y2/1	黒色弱粘質土	２～５期
〔溝１埋土〕	33	Hue5Y3/1	オリーブ黒色砂質土	１～５期
〔竪穴建物 11 埋土〕	34	Hue5Y4/1	灰色砂質土	１～５
〔竪穴建物 11 貼床〕	35	Hue5Y2/1	黒色弱粘質土	１～５
〔河道４埋土〕	36	Hue7.5Y4/1	灰色細砂	３～４
〔遺物包含層〕	37	Hue5Y5/1	灰色細砂	3
	38	Hue10Y4/1	灰色砂質土	3
〔河道３埋土〕	39	Hue2.5GY4/1	暗オリーブ灰色細砂	2
〔環濠埋土〕	40	Hue5Y4/1	灰色砂質土	2
	41	Hue5Y3/2	オリーブ黒色弱粘質土	2
	42	Hue5Y5/2	灰オリーブ色砂質土	2
	43	Hue2.5GY4/1	暗オリーブ灰色細砂	2
	44	Hue5Y3/2	オリーブ黒色弱粘質土	2
〔遺物包含層〕	45	Hue5Y4/2	灰オリーブ色弱粘質土	2
〔環濠埋土〕	46	Hue5Y5/1	灰色細砂	2
	47	Hue5Y5/2	灰オリーブ色砂質土	2
〔河道２埋土〕	48	Hue5GY4/	暗オリーブ灰色砂質土	1
	49	Hue10Y4/1	灰色細砂	1
	50	Hue2.5GY4/1	暗オリーブ灰色砂質土	1
〔河道１・２埋土〕	51	Hue7.5Y4/2	灰オリーブ色細砂	1
〔河道２埋土〕	52	Hue5Y5/1	灰色細砂	1
	53	Hue7.5Y3/1	オリーブ黒色砂質土	1
	54	Hue7.5Y3/1	オリーブ黒色弱粘質土	1
	55	Hue2.5GY4/1	暗オリーブ灰色砂礫	1
	56	Hue7.5Y4/1	灰色砂質土	1
	57	Hue7.5Y4/1	灰色砂礫	1
〔遺物包含層〕	58	Hue5Y4/1	灰色粘質土	1
〔遺構埋土〕	59	Hue5Y4/2	灰オリーブ色弱粘質土	1
〔地山〕	60	Hue2.5GY5/1	オリーブ灰色砂質土	
	61	Hue2.5GY5/1	オリーブ灰色砂質土	
	62	Hue2.5GY5/1	オリーブ灰色砂質土	
	63	Hue2.5GY4/1	暗オリーブ灰色砂質土	
	64	Hue2.5GY4/1	暗オリーブ灰色粘質土	
	65	Hue7.5Y5/2	灰オリーブ色粘質土	
〔遺物包含層〕	66	Hue7.5Y3/2	オリーブ黒色粘質土	



第 48 図　3 区 1 期平面図（S ＝ 1/300）



第 49 図　3 区 1 期河道 1 出土土器実測図 1 （S ＝ 1/4）



第 50 図　3 区 1 期河道 1 出土土器実測図 2（S＝1/4）

【河道２】

河道２は幅約 7.3 m、深さ約 0.9 mの規模をもつ。調査区西端から約 25 m東の地点で河道１から分流し、北東方向に流れていく。埋土の大半は、互層状に堆積した灰色やオリーブ黒色を呈する粘質土層、砂質土層、砂礫層などで占められており、一括堆積や人的活動による埋土の特徴は看取できなかった。そのため、２期の環濠は、当河道が自然に埋没した後に掘削されたものと判断している。この河道２から出土した遺物のうち、17 点の土器を図示した（第 51 図の 585 ～ 601）。

585 ～ 593 は壺である。585 は外反する口縁部をもつ。面をなした口縁端部には刺突文を施し、肩部外面には２帯の直線文と刺突文を施している。体部最大径をほぼ中位にもち、底部は上げ底状の平底で突出している。586 は球形の体部と上げ底状の平底をもつ。587 はほぼ直線的に開く口縁部をもち、口縁端部を面取りしている。体部外面にハケ後、まばらにミガキを施している。588 は外反する口縁部をもち、口縁端部を丸くおさめている。口縁部と体部の外面境に横方向のミガキを施している。底部外面中央が小さく凹む平底をもつ。589 は扁平な体部をもち、体部外面にタガ状に粘土を付加した文様帯を形成している。文様帯上には波状文と刺突文を施した後に、棒状浮文を貼り付けている。底部は平底でやや突出している。590 は外反する口縁部をもち、垂下して拡張させた口縁端部外面に擬凹線文を施している。褐色の特徴的な胎土をもつ。591 ～ 593 は小型壺である。591 は細い頸部からほぼ直線的に長く開く口縁部をもち、口縁端部を丸くおさめている。592 はわずかに外反して開く口縁部をもつ。口縁端部を丸くおさめている。593 はほぼ直線的に立ち上がる口縁部をもつ。体部はわずかに扁平化しており、底部は平底である。底部外面に斜め方向と横方向のミガキを施している。

594 ～ 598 は甕である。594・595 は受口状の口縁部をもつ。594 は頸部外面から肩部外面にかけて強いヨコナデ状の直線文と刺突文、595 は口縁屈曲部外面に刺突文、肩部外面に２帯の直線文と１帯の刺突文を施している。596 ～ 598 は台付甕の脚部である。

599・600 は高杯である。599 は柱状部と裾部の境に屈曲をもち、屈曲にあわせて透孔を施している。柱状部外面に５帯の直線文を施している。600 は円錐状の脚部で、裾部内面にナデを施し、前段階までの痕跡のほとんどを消し去っている。

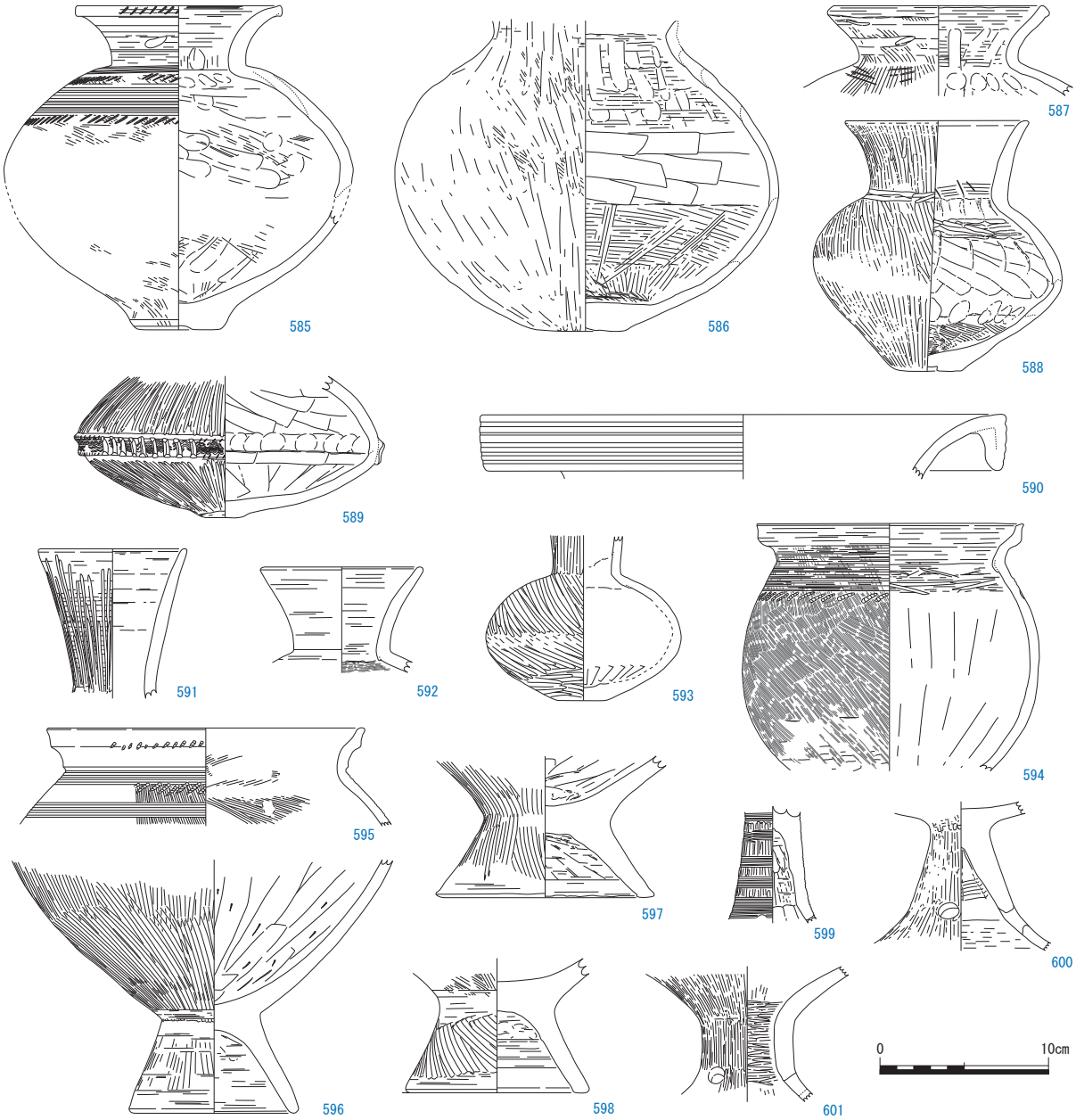
601 は器台である。柱状の中空脚をもち、中空部分の径が広い。中空部分内面に横方向のミガキを施している。

【土器集中部１】

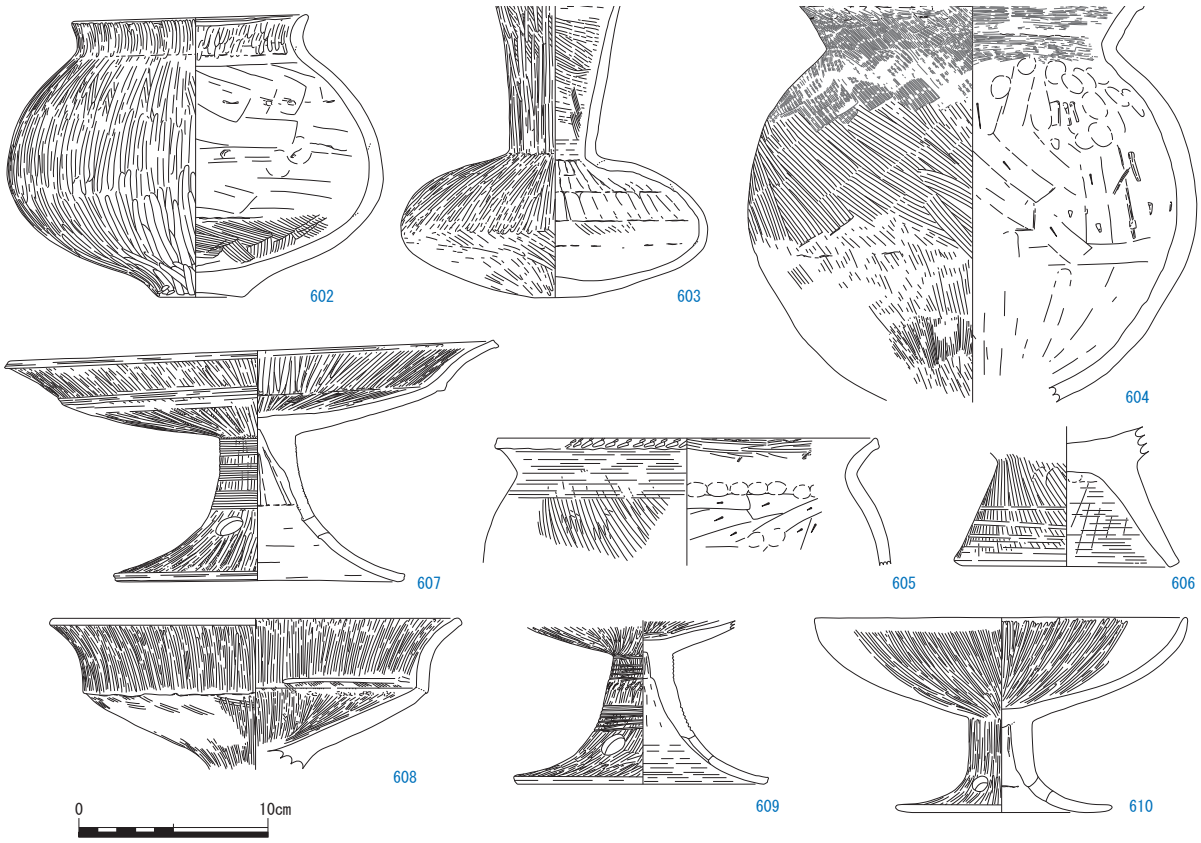
土器集中部１は河道１・２の分流地点より、やや上流の河道１北岸法面に位置しており、東西 1.4 m、南北 1.0 mの規模をもつ。出土した土器のうち、９点を図示した（第 52 図の 602 ～ 610）。

602・603 は壺である。602 は頸部径が広く、短く外側に開く口縁部と球形を呈する体部、突出した平底をもつ。口縁端部内面に横方向のミガキを施している。603 は小型壺で、細い頸部からほぼ直線的に長く開く口縁部と扁平な体部をもつ。底部は平底であるがやや丸みを帯びている。604 ～ 606 は甕である。604 はく字状の口縁部と球形の体部をもつ。605 はく字状の口縁部をもつ。口縁端部を面取りし、刺突文を施している。606 は台付甕の脚部である。607 ～ 610 は高杯

である。607 は杯部が浅く、外反する口縁部をもつ。柱状部と裾部の境に屈曲をもち、屈曲に合わせて３方向の透孔を施している。柱状部外面に３帯の直線文を施しており、裾部内面はナデにより、前段階までの成形や調整の痕跡を消し去っている。口縁部と杯底部の内面境の稜はあまり明確ではない。608 は浅い杯部をもつが、杯底部がやや斜め上方に開いている。609 は柱状部と裾部の境に屈曲をもち、屈曲に合わせて３方向の透孔を施している。柱状部外面に２帯の直線文と刺突文を施しており、裾部内面はナデにより、前段階までの成形や調整の痕跡を消し去っている。610 は椀形の杯部をもつ。口径が広く、杯部が浅い。口縁端部を丸くおさめている。柱状部と裾部の境には屈曲をもち、屈曲に合わせて３方向の透孔を施している。



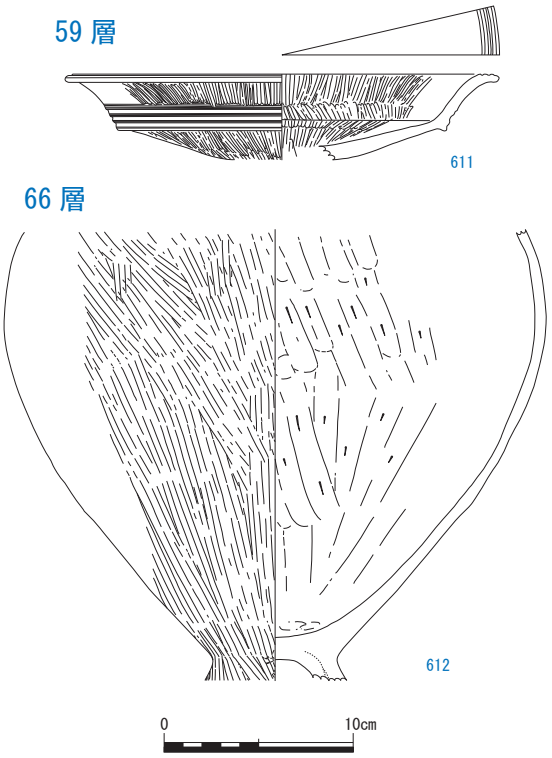
第 51 図　３区１期河道２出土土器実測図（S＝1/4）



第 52 図　3 区 1 期土器集中部 1 出土土器実測図（S ＝ 1/4）

【サブトレンチ】

1 期では、分流する 2 本の河道（河道 1・2）と 1 カ所の土器集中部（土器集中部 1）を確認できたが、河道 2 の西側については、遺構検出作業に十分な時間を確保できなかった。そのため、調査区北壁に沿って、調査区西端から約 11 m、19 m、23 mの 3 カ所にサブトレンチを設定し、下層の状況を確認した（第 46 図）。その結果、全ての調査地点の下層で河道 2 の西岸を形成する 60 層と同じ特徴をもつ土層を確認できたほか、調査区西端から約 19・23 m の調査地点では、60 層の上層において、土器を含み、遺構埋土の可能性が高い 59 層を確認できている。また、60 層より下層の 66 層からも土器を確認できた。ここでは、この 59 層と 66 層から出土した土器から、それぞれ 1 点ずつを図示した（第 53 図の 611・612）。



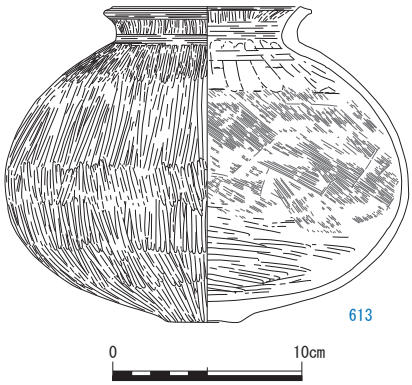
第 53 図　59・66 層出土土器実測図（S ＝ 1/4）

611 は高杯である。59 層から出土した。杯部が浅く、強く外反させた口縁端部の内面と、杯底部と口縁部の外面境に３条の擬凹線文を施している。612 は台付甕である。体部内面にケズリを施している。

【遺構面・遺物包含層】

１期では、河道２の西側について十分な遺構検出を行えていないが、東側においては河道１と河道２の間に形成された中州を検出できている。この中州上に堆積した 51・52 層からは土器が出土しており、これを当期における遺構面・遺物包含層からの出土と判断し、この出土土器から１点を図示した（第 54 図の 613）。

613 は壺である。頸部径が広く、短く外側に開く口縁部と球形を呈する体部、突出した平底をもつ。口縁端部を面取りしており、底部内面にミガキを施している。



第 54 図　51・52 層出土土器実測図（S＝1/4）

（３）１期の年代

図示した 77 点の土器は、河道１・河道２・土器集中部１・サブトレンチ・遺構面・遺物包含層から出土している。

まず、河道１であるが、全体としては、球形の体部をもつ壺が多く、高杯も浅い杯部と柱状の脚部をもつものが多い。また、器台も、そのほとんどが柱状の中空脚をもつ。しかし、その一方で、少量ではあるが、しもぶくれ状の杯部をもつワイングラス形の高杯（562）や、脚部が円錐状を呈する器台（577）、底部がほぼ丸底を呈する鉢（580）、口径が体部径とほぼ等しいか、あるいは上回る鉢（582・583）なども確認できている。ただ、赤彩を施した壺は確認できていない。以上の特徴から、河道１の出土土器の編年的位置を、山中Ⅰ式２段階～山中Ⅱ式１段階を中心とした範疇で捉えられると考える。

次に、河道２である。河道１と同様に、球形の体部をもつ壺が多く、高杯も柱状の脚部をもつものが主体である。また、赤彩を施した壺も確認できていない。ただ、円錐状の脚をもつ高杯（600）が確認できている。以上の特徴から、河道２の出土土器の編年的位置を、山中Ⅰ式３段階～山中Ⅱ式１段階を中心とした範疇で捉えられると考える。

次に土器集中部１であるが、頸部径が広く、球形の体部をもつ壺（602）や、細く長い口縁部と扁平な体部をもつ小型壺（603）、浅い杯部に柱状の脚部をもつ高杯（607）、口径が広く、浅い杯部と丸くおさめた口縁端部をもつ椀形高杯（610）を確認できる。一方、杯底部がやや上方に立ち上がり、少し深みを増した高杯（608）も確認できている。そのため、土器集中部１の出土土器の

編年的位置を、山中Ⅰ式３段階～山中Ⅱ式２段階を中心とした範疇で捉えられると考える。ただ、土器集中部１は、河道１の北岸法面に位置しているため、その下限は山中Ⅱ式１段階に収まる可能性がある。

59 層から出土した高杯（611）については、強く外反させた口縁端部の内面と、杯底部と口縁部の屈曲部外面に３条の擬凹線文を施していることから、その編年的位置を、山中Ⅱ式１段階と考える。66 層から出土した土器（612）や中州上から出土した頸部径の広い壺（613）については、その諸特徴のみから、編年的位置を絞り込むことは困難であった。

（４）２期の遺構・遺物

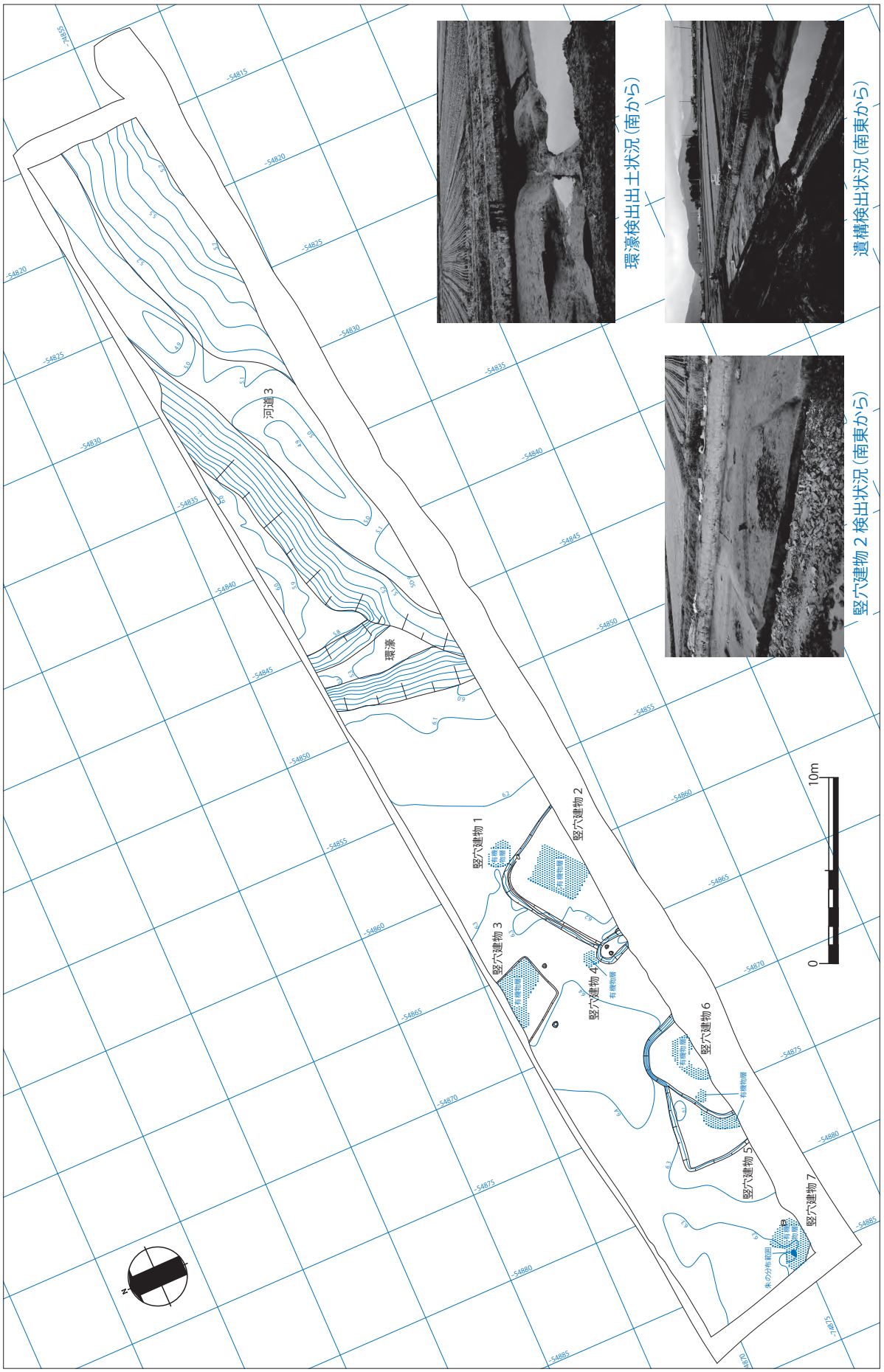
２期では、１本の河道（河道３）と１条の環濠、７軒の竪穴建物（竪穴建物１～７）、２本の柱穴を確認した（第 55 図）。

【河道３】

河道３は、河道１が埋没によって、やや流路を東に変えた河道であり、発掘調査においては３期まで継続すると判断した。しかし、後に詳述する出土品整理の結果、出土土器の編年的位置の下限が山中Ⅱ式２段階に収まることを確認できた。その結果、続く河道４から出土した土器の編年的位置が山中Ⅱ式２段階～廻間Ⅰ式４段階古とやや広い範疇で捉えることができることや、当期において掘削された環濠が、廻間Ⅰ式期１段階以降、廻間Ⅰ式期２段階にかけて埋没したことと整合しないことが明らかになり、発掘調査時に、３期に属する河道埋土を誤って河道４と同時に掘り下げた可能性が高まった。

南岸を確認できていないため正確な規模は不明であるが、幅は約９m以上あり、深さは約 1.0 mを測る。埋没過程と河道底の標高から、水は調査区を西から東に流れていたと判断した。当期では調査区西端から約 25 m東の地点で河道１より分流していた河道２は埋没しており、河道２跡には新たに環濠が掘削されている。この河道３から出土した遺物のうち、９点の土器と、１点の木器を図示した（第 56・57 図の 614 ～ 623）。

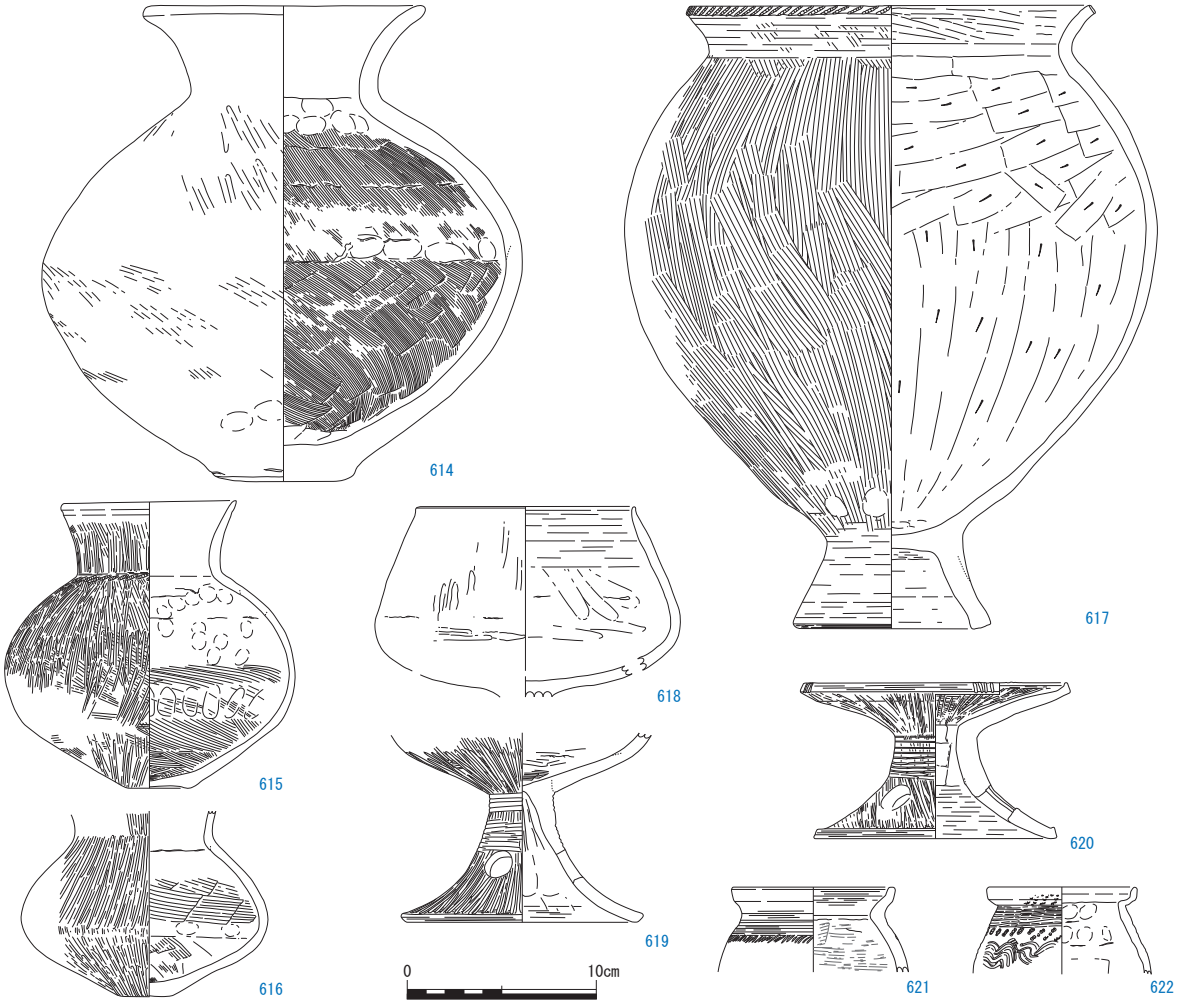
614 ～ 616 は壺である。614 は外反する口縁部と球形の体部をもつ。底部は平底でやや突出している。615 はわずかに外反する直口の口縁部をもち、口縁端部外面に１条の強いナデを施している。球形の体部をもち、頸部外面に１帯の刺突文を施している。底部は平底でやや上げ底している。616 は体部が菱形を呈し、平底をもつ。617 は甕である。く字状の口縁部をもち、面取りした口縁端部に刺突文を施している。体部は球形を呈しており、体部内面では頸部付近までケズリを施している。脚台をもつ。618・619 は高杯である。618 はワイングラス形で、ややしもぶくれ状の杯部をもつ。杯部内面にミガキを施しておらず、口縁端部はわずかに外反している。619 は円錐状の脚部をもち、脚部内面はナデにより、前段階までの成形や調整の痕跡のほとんどが消されている。脚部外面上半に２帯の直線文を施しており、脚部のほぼ中位に３方向の透孔をもつ。裾端部を面取りしている。620 は器台である。柱状の中空脚をもつが、中空部分の径はやや狭い。柱



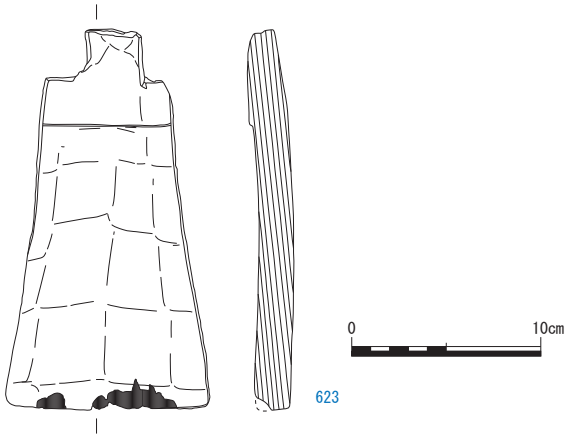
第 55 図　３区２期平面図（S＝1/300）

状部と口縁部の境は明確であるが、裾部との境はやや不明瞭である。脚部内面はナデにより、前段階までの痕跡のほとんどが消されている。621・622 は鉢である。ともに受口状の口縁部をもち、621 は肩部外面に直線文を意識した強い横方向のナデと刺突文、622 は口縁屈曲部外面に刺突文、頸部外面から体部外面にかけて、直線文、刺突文、波状文を施している。

623 はほぞをもち、台形を呈する木器である。板目材を使用している。用途は不明である。



第 56 図　3 区 2 期河道 3 出土土器実測図（S ＝ 1/4）



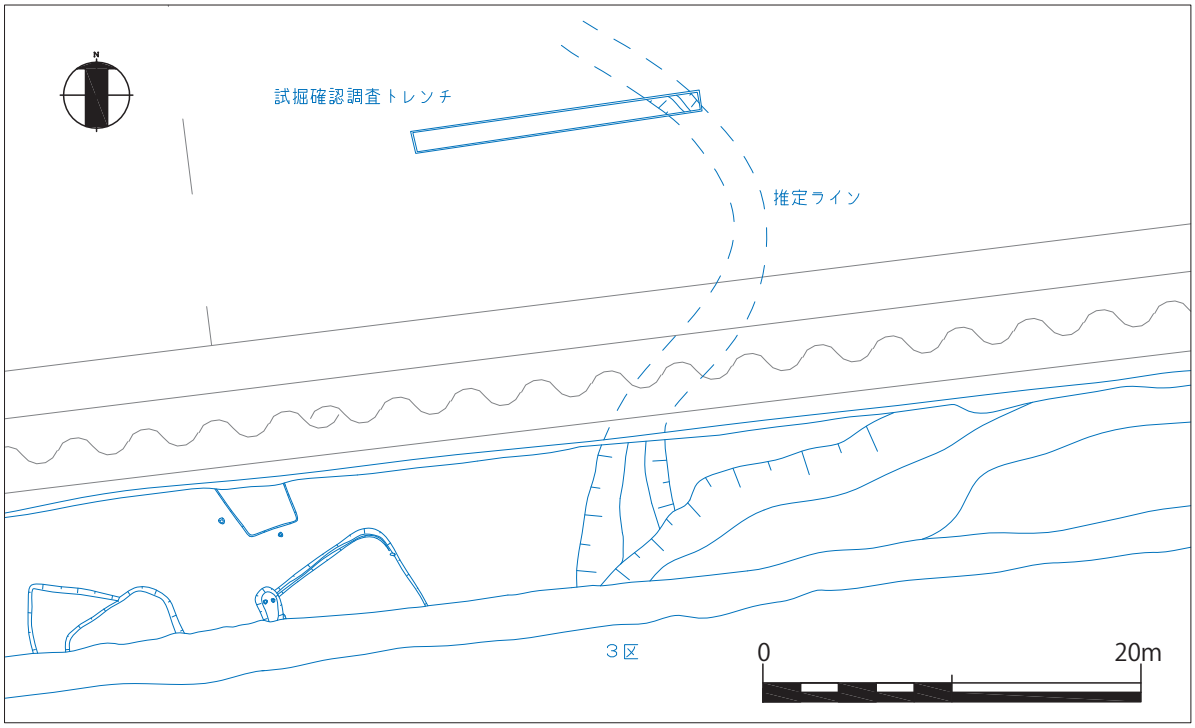
第 57 図　3 区 2 期河道 3 出土木器実測図（S ＝ 1/4）

【環濠】

環濠は幅約 3.0 m、深さ約 0.7m の規模をもつ。河道 1 から分流していた河道 2 の埋没後、河道 3 に接続して南北方向に掘削している。なお、北側隣接地に計画された工場新築工事に伴う試掘確認調査の結果、環濠は、北に蛇行して延長することが明らかになっている（第 58 図）。埋土は、調査区北壁断面の観察により、底に溜まった灰色細砂層（第 46 図 46 層）と暗オリーブ色砂質土層（第 46 図 47 層）、その上層に堆積したオリーブ黒色弱粘質土層（第 46 図 44 層）、埋土の中程にあたる暗オリーブ灰色細砂層（第 46 図 43 層）、環濠西側より堆積し、環濠の西肩部に埋積する灰オリーブ色砂質土層（第 46 図 42 層）、環濠埋土の上層に堆積する灰色砂質土層（第 46 図 40 層）とオリーブ黒色弱粘質土層（第 46 図 41 層）の大きく 5 つに区分することができる。

この環濠から出土した遺物のうち、底から出土した 1 点の土器と、下層から出土した 3 点の土器、埋土中程から出土した 1 点の土器、上層から出土した 2 点の土器、西肩部から出土した 11 点の土器、出土層位を判定できなかった 13 点の土器と 2 点の木器を図示した（第 59 ～ 61 図の 624 ～ 656）。

624 は甕である。く字状の口縁部をもち、口縁端部を面取りしているが刺突文は施していない。頸部外面がやや面をなしており、体部は球形を呈している。625 は甕である。く字状の口縁部をもち、口縁端部を丸くおさめている。体部は球形を呈し、体部内面はナデを施している。626 は高杯である。杯部が深く、口縁部と杯底部の内面境は明瞭でない。内外面ともハケ後にミガキを施しているがまばらで、ハケの痕跡がかなり残っている。627 は器台である。円錐状の脚部をもち、中空部分の径は 2.0cm を測る。脚部の内面にナデを施しているがハケの痕跡が残っており、中位よりやや高い位置に 3 方向の透孔を施している。628 は高杯の脚部である。裾部の厚みが約 0.4cm とやや薄い。わずかに内彎する脚部をもち、脚部中位よりやや上に 5 方向の透孔を施している。629



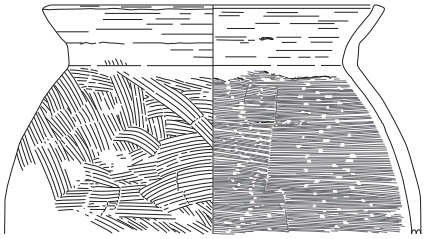
第 58 図　環濠推定図（S ＝ 1/400）

は高杯の脚部である。円錐状を呈しており、脚部中位よりやや上に上下一対の透孔を３方向に施している。脚部内面にナデは施されておらず、ハケの痕跡が残っている。630 は器台である。円錐状の脚部をもち、裾部がわずかに内彎している。中空部分の径は 1.8cm を測り、脚部のほぼ中位に３方向の透孔を施している。口縁部と脚部の外面境に横方向のミガキを施している。裾部内面は、一部に縦方向のミガキを施しているが、ハケの痕跡のほとんどが残っている。631・632 は壺である。631 は脚部をもつ。口縁端部と裾端部を欠損している。しもぶくれ状の体部をもち、外面では、文様を施す体部上半のみハケ後にミガキを施している。口縁端部内面に羽状に並ぶ３列の刺突文と円形の刺突文を施し、体部外面上半には４帯の直線文とその間に刺突文を施し、さらに最も下位の直線文上には円形の刺突文を施している。文様帯上は赤彩しておらず、口縁部外面と体部外面下半、脚部外面、脚部内面の一部に赤彩を施している。632 はく字状の口縁部をもち、口縁端部を面取りしている。体部は球形を呈している。口縁部外面に縦方向、内面に横方向のミガキを施しており、体部内面にはケズリを施している。633 ～ 637 は甕である。633 は受口状の口縁部をもち、口縁屈曲部外面に刺突文を施し、肩部外面には直線文と刺突文を施している。634 ～ 637 はく字状の口縁部をもつ。全て口縁端部を面取りし、刺突文を施し、球形の体部をもつが、637 のみ体部内面にケズリを施していない。638 ～ 640 は高杯である。638 は浅い杯部をもち、口縁端部を面取りしている。639 はワイングラス形の杯部をもつ。ややしもぶくれ状を呈しており、杯部内面にはミガキを施していない。640 は中実の脚部である。柱状部と裾部の境に屈曲をもち、屈曲に合わせて３方向の透孔を施している。641 は鉢である。く字状の口縁部とやや扁平化した体部に平底をもつ。肩部外面に１帯の直線文と刺突文を施し、体部外面下半には横方向のケズリを施している。

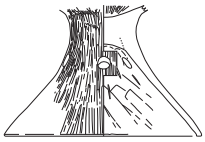
642 は小型の無頸壺である。わずかに垂直に立ち上がる口縁部と扁平な体部をもち、底部は平底である。口縁端部外面から体部上半にかけて横方向のミガキを確認できる。643 ～ 646 は甕である。643 ～ 645 は受口状の口縁部をもつ。643 は無文であるが、644 は口縁屈曲部外面に刺突文と肩部外面に直線文、645 は口縁端部外面に刺突文、肩部外面に直線文と刺突文を施している。646 はく字状の口縁部をもつ。口縁端部を面取りし、刺突文を施している。また、肩部外面に、直線文と刺突文を施している。647 ～ 651 は高杯である。647 は杯部が浅く、外反する口縁部をもつ。口縁端部を面取りしている。648 は杯部が少し深い。外反する口縁部をもち、口縁端部を面取りしている。649 はわずかに内彎して立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部を丸くおさめている。650 は脚部外面に直線文をもち、３方向の透孔を施している。杯底部内面にハケの痕跡が残っており、ワイングラス形を呈する杯部をもつ可能性が高い。651 は低い脚部に３方向の透孔をもつ。652 ～ 654 は鉢である。652 はく字状の口縁部をもち、口縁端部を面取りしている。無文で球形の体部をもつ。653 は受口状の口縁部をもち、口縁端部外面に刺突文、肩部外面に直線文と刺突文を施している。体部はやや扁平で、体部径が口径を上回っている。654 は受口状の口縁部をもち、口縁端部を面取りしている。無文で、口径が体部径を上回っている。

655・656 は木器である。655 は両端を欠損しているが、棒状の柾目材の先端を加工し、頭部を作り出している部材である。樹皮は残存していない。656 は先端に長方形の欠込みをもつ棒状の部材である。柾目材を使用しており、長さ 78.6cm を測る。下端が炭化している。

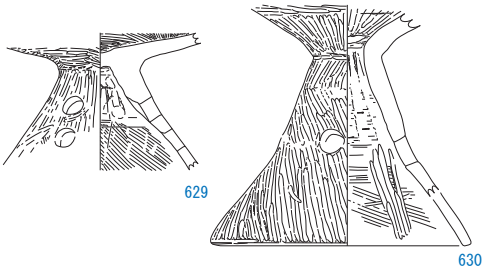
底（第 46 図 47 層）



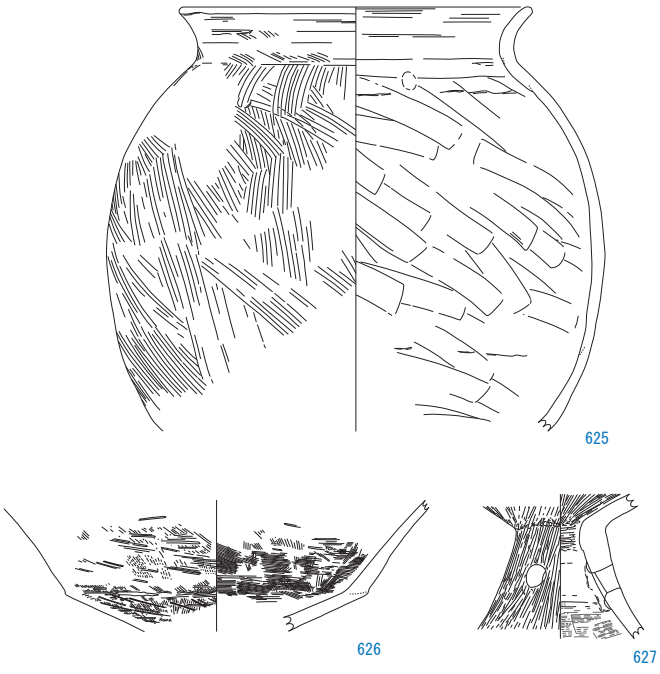
中層（第 46 図 43 層）



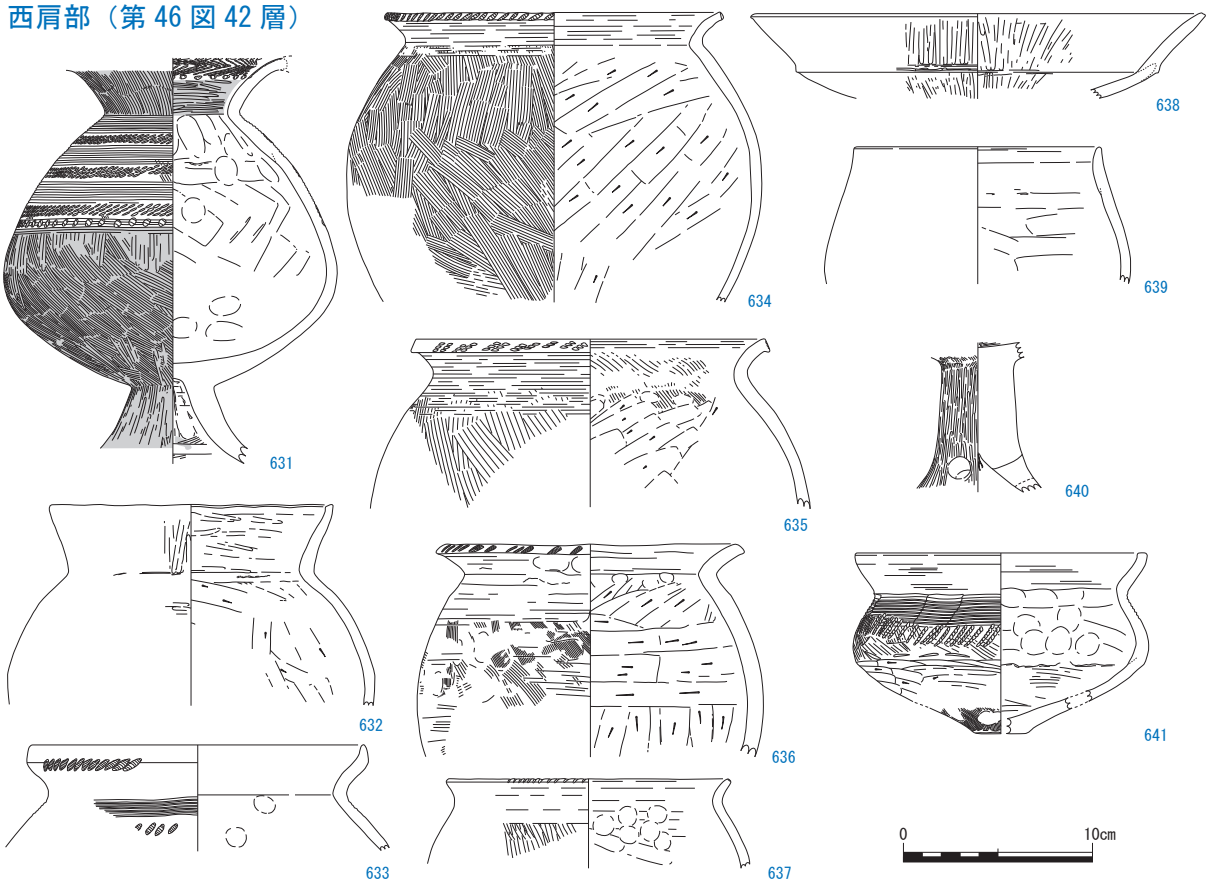
上層（第 46 図 41 層）



下層（第 46 図 44 層）



西肩部（第 46 図 42 層）



第 59 図　3 区 2 期環濠出土土器実測図 1（S＝1/4）

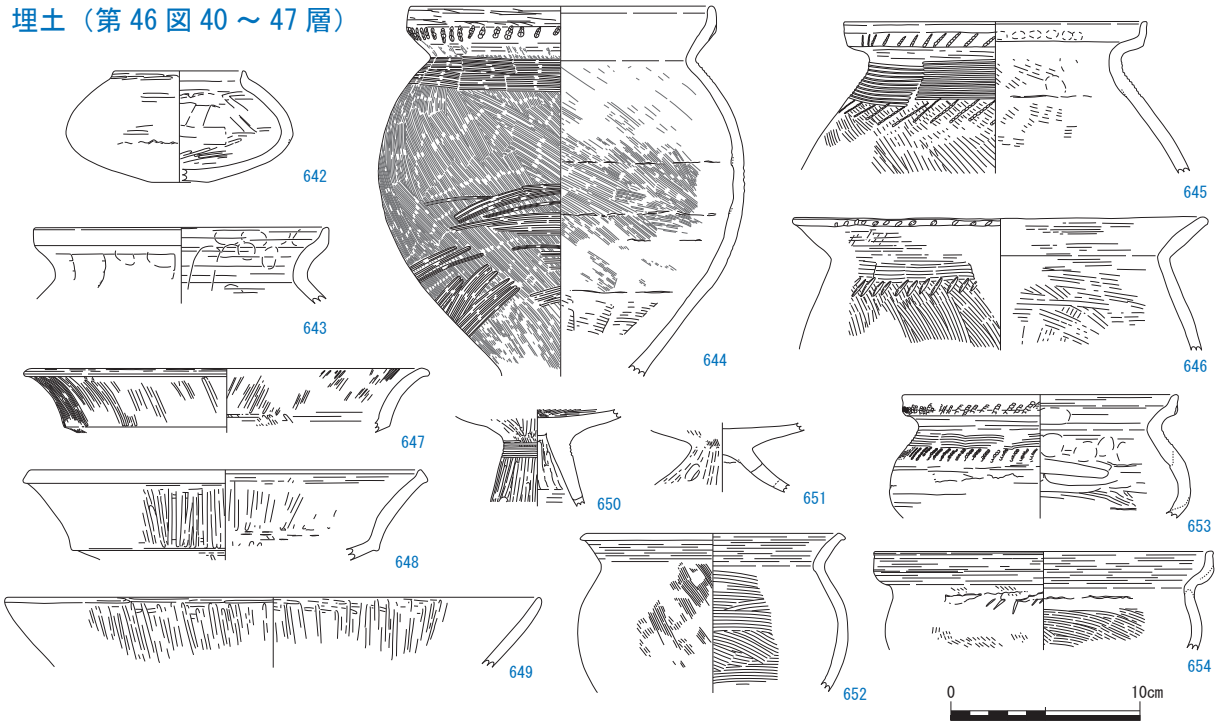
【竪穴建物１～７】

竪穴建物は環濠の西側で７軒確認できている。竪穴建物１については掘り方を確認できなかったが、他の竪穴建物の床面で検出できている有機物層と同様の有機物層を確認できたため竪穴建物と判断した。竪穴建物２は平面形が方形を呈している。隅が一カ所しか残存していないため、正確な規模は不明であるが、一辺約７m程度の規模をもつと推定している。床面中央からやや北東よりの位置に有機物層、北西壁に沿って壁体溝を確認できている。また、北東壁沿いに長軸約 25cm の石が据えられていた。竪穴建物３は平面形がややいびつな方形を呈している。南西壁面の長さは約 2.6 mを測る。床面中央からやや北東よりの位置に有機物層を確認できた。また、南東壁と南西壁のすぐ外側には、それぞれ柱穴を１カ所確認できている。竪穴建物４は掘り方を確認できなかったが、他の竪穴建物の床面で検出できている有機物層と同様の有機物層を確認できたため竪穴建物と判断した。竪穴建物５は平面形が方形を呈している。隅が一カ所しか残存していないため、正確な規模は不明である。床面から有機物層を確認できている。竪穴建物６は平面形が方形を呈している。１辺は約 5.6 mを測り、床面中央部と北壁付近で有機物層を確認できた。竪穴建物７は掘り方を確認できなかったが、他の竪穴建物の床面で検出できている有機物層と同様の有機物層を確認できたため竪穴建物と判断した。有機物層の範囲の一部に、朱が含まれている。

この７軒の竪穴建物から出土した遺物のうち、竪穴建物２から出土した３点の土器と、竪穴建物５から出土した１点の土器と１点の土製品、竪穴建物６から出土した２点の土器、竪穴建物５か６のどちらからの出土であるか判定できなかった５点の土器を図示した（第 62 図の 657 ～ 668）。

657 は甕である。受口状の口縁部をもつ。口縁屈曲部外面に刺突文、肩部外面に直線文を施している。658 は高杯である。杯部が浅く、強く外反する口縁部をもつ。口縁端部を丸くおさめている。659 は鉢である。く字状の口縁部と球形を呈する体部をもつ。660 は高杯である。杯部が浅く、外反する口縁部をもつ。口縁端部を面取りしている。口縁部と杯部の内面境に横方向のミガキを施している。661 は筒型の土製品である。正確な天地は不明である。口径 8.2cm、底径 7.6cm、器高は 13.7cm を測る。両端部ともに面取りしており、端部外面にはそれぞれ波状文と刺突文を施している。端部内面はナデ、筒部内面には横方向のケズリを施しているが、一部にハケの痕跡が残っている。662 は高杯である。杯部が浅く、外反する口縁部をもつ。口縁端部を面取りしている。口縁部と杯部の内面境がやや不明瞭である。663 は器台である。柱状の中空脚をもち、中空部分の径が広い。柱状部と口縁部・裾部の境が不明瞭である。柱状部外面に２帯の直線文を施している。664・665 は甕である。664 は受口状の口縁部をもち、口縁端部を面取りしている。665 はく字状の口縁部をもち、面取りした口縁端部に刺突文を施している。体部は球形を呈している。666・667 は鉢である。666 は受口状の口縁部をもつ。丸くおさめた口縁端部に刺突文、肩部外面に直線文を施している。体部は球形を呈している。667 は受口状の口縁部をもち、口縁端部を面取りしている。口縁端部外面に刺突文、肩部外面に直線文と刺突文を施している。668 はミニチュア土器である。鉢形を呈している。

埋土（第 46 図 40 ～ 47 層）



第 60 図　3 区 2 期環濠出土土器実測図 2（S＝1/4）

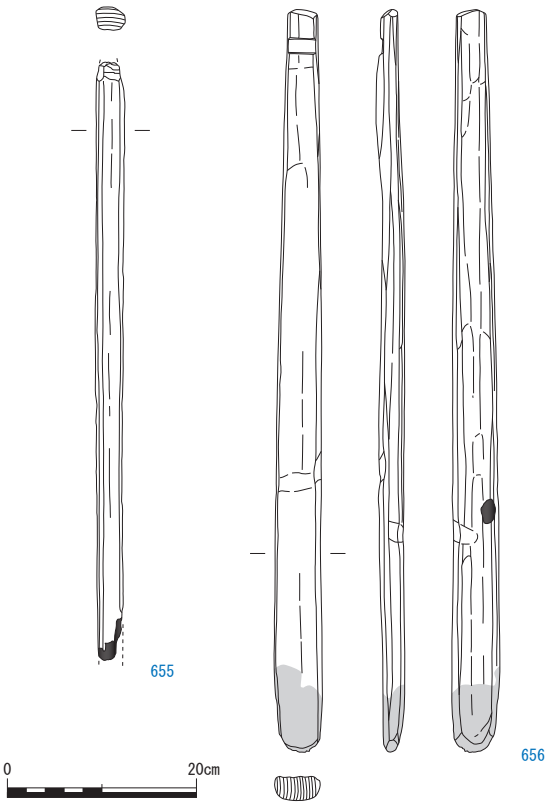
（5） 2 期の年代

図示した 51 点の土器は、河道 3・環濠・竪穴建物 2・竪穴建物 5・竪穴建物 6 から出土している。

まず、河道 3 であるが、壺は体部が球形を呈するもの（614・615）が主体を占める。高杯では、ワイングラス形の杯部をもつもの（618・619）を確認できているが、ともに杯部内面にミガキを施していない。また、619 は杯底部にハケの痕跡を残している。器台では、柱状の中空脚をもつもの（620）を確認できているが、中空部分の径はやや狭い。以上の特徴から、河道 3 の出土土器の編年的位置を、山中Ⅱ式 1 段階～山中Ⅱ式 2 段階の範疇で捉えられると考える。

次に環濠であるが、埋土下層からは、杯部がやや深い高杯（626）や、中位よりやや高い位置に透孔をもつ円錐状の器台脚部（627）を確認できている。また埋土中層か

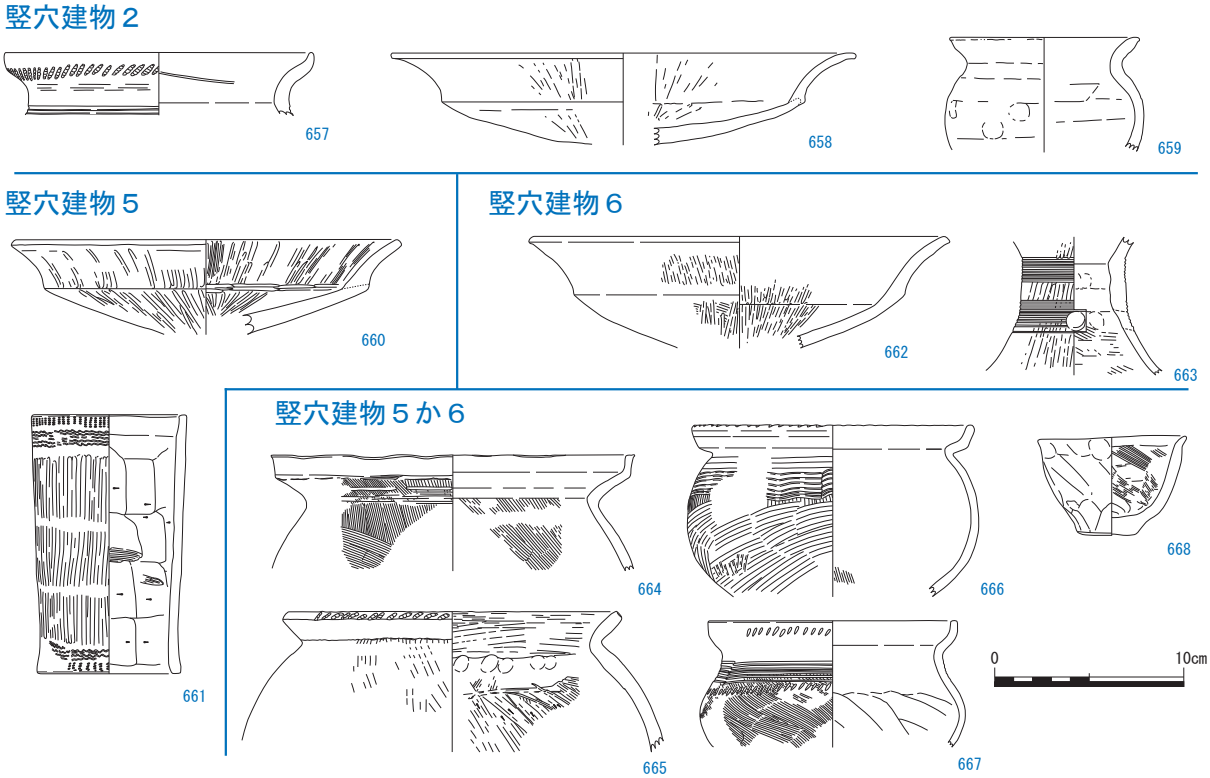
埋土（第 46 図 40 ～ 47 層）



第 61 図　3 区 2 期環濠出土木器実測図（S＝1/8）

らは、わずかに内彎する裾部と中位よりやや高い位置に透孔をもつ高杯脚部（628）、埋土上層からは、脚部中位よりやや上に上下一対の透孔もつ高杯（629）や、裾部がわずかに内彎する器台（630）を確認できた。一方、西肩部では、しもぶくれ状の体部をもつパレス壺（631）や、杯部が浅い高杯（638）、ワイングラス形の杯部をもつ高杯（639）、やや扁平化した体部に平底をもち、体部径が口径を上回る鉢（641）を確認できている。以上の諸特徴から、環濠西肩部から出土した土器の編年的位置を山中Ⅱ式２段階、下層から上層にかけて出土した土器の編年的位置を廻間Ⅰ式１段階～廻間Ⅰ式２段階の範疇で捉えられると考える。そのため、この環濠は山中Ⅱ式期２段階に掘削され、廻間Ⅰ式期１段階より維持されなくなり、廻間Ⅰ式期２段階になって完全に埋没したと考える。

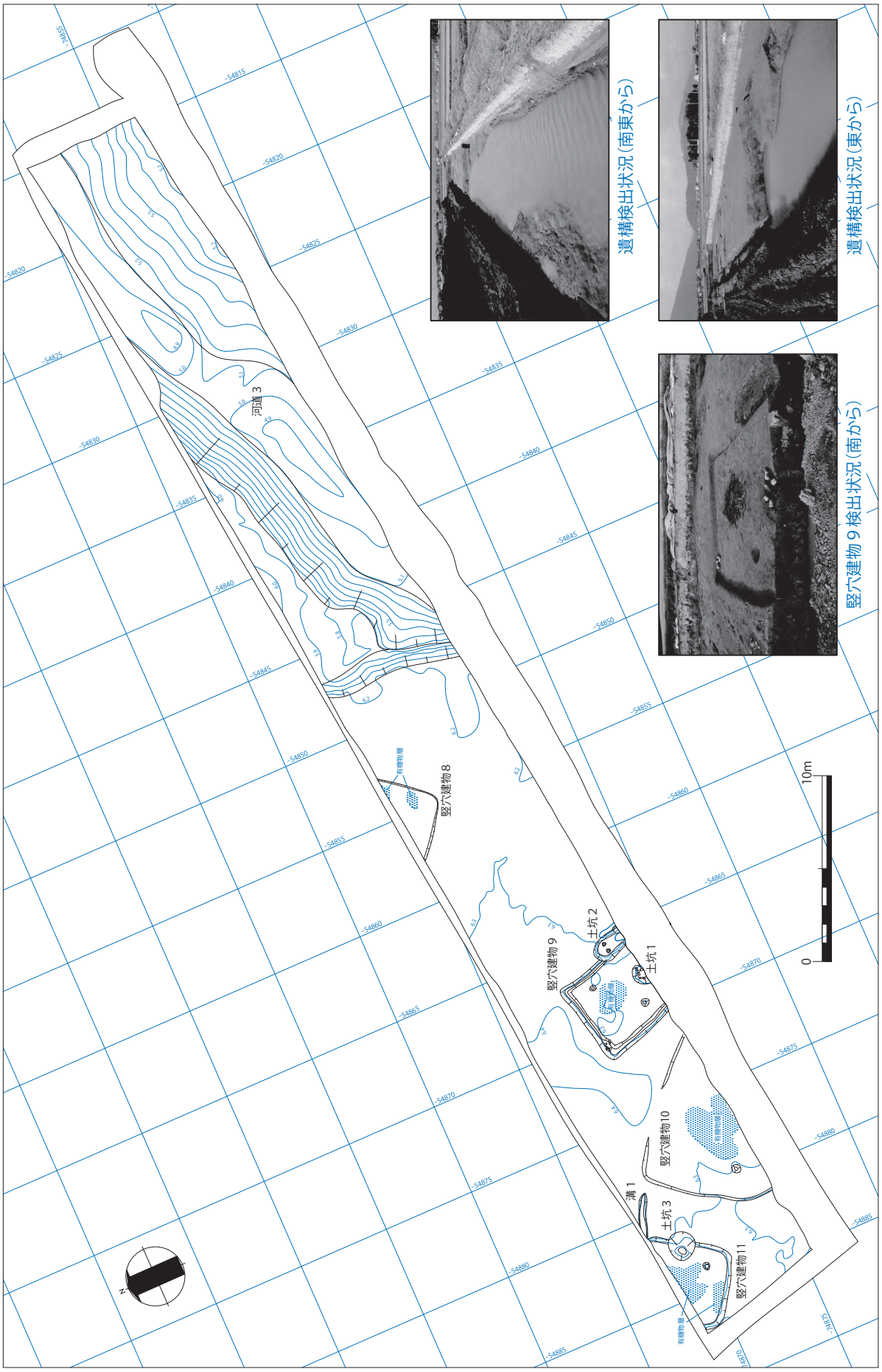
竪穴建物２・５・６については、竪穴建物２から杯部が浅く口縁端部を丸くおさめる高杯（658）と体部が球形を呈する鉢（659）、竪穴建物５からは杯部が浅い高杯（660）、竪穴建物６からは柱状の中空脚をもち、柱状部と口縁部・裾部の境は不明瞭な器台（663）を確認できている。また、竪穴建物５か６の判断が困難であった出土土器には、体部が球形を呈する鉢（666）が出土している。以上の諸特徴から、竪穴建物２・５・６の出土土器の編年的位置をいずれも山中Ⅱ式２段階を中心とした範疇で捉えられると考える。



第 62 図　３区２期竪穴建物２・５・６出土遺物実測図（S＝1/4）

（６）３期の遺構・遺物

３期では、環濠は埋没をはじめ、河道３の北岸と西側微高地の間に階段状の地形が形成される。西側微高地では、４軒の竪穴建物（竪穴建物８～11）と３基の土坑（土坑１～３）、１条の溝（溝１）を確認した（第 63 図）。



第 63 図　３区３期平面図（S＝1/300）

【河道３】

河道３は、河道１が埋没によって、やや流路を東に変えた河道であり、発掘調査においては、２期から３期まで存続した可能性が高いと判断した。しかし、出土品整理の結果、出土土器の編年的位置の下限が山中Ⅱ式２段階に収まることを確認できたことで、続く河道４から出土した土器の編年的位置が山中Ⅱ式２段階～廻間Ⅰ式４段階古とやや広い範疇で捉えることができることや、２期において掘削された環濠が、廻間Ⅰ式期１段階以降、廻間Ⅰ式期２段階にかけて埋没したことと整合しないことが明らかになり、発掘調査時に、３期に属する河道埋土を誤って河道４と同時に掘り下げた可能性が高まった。

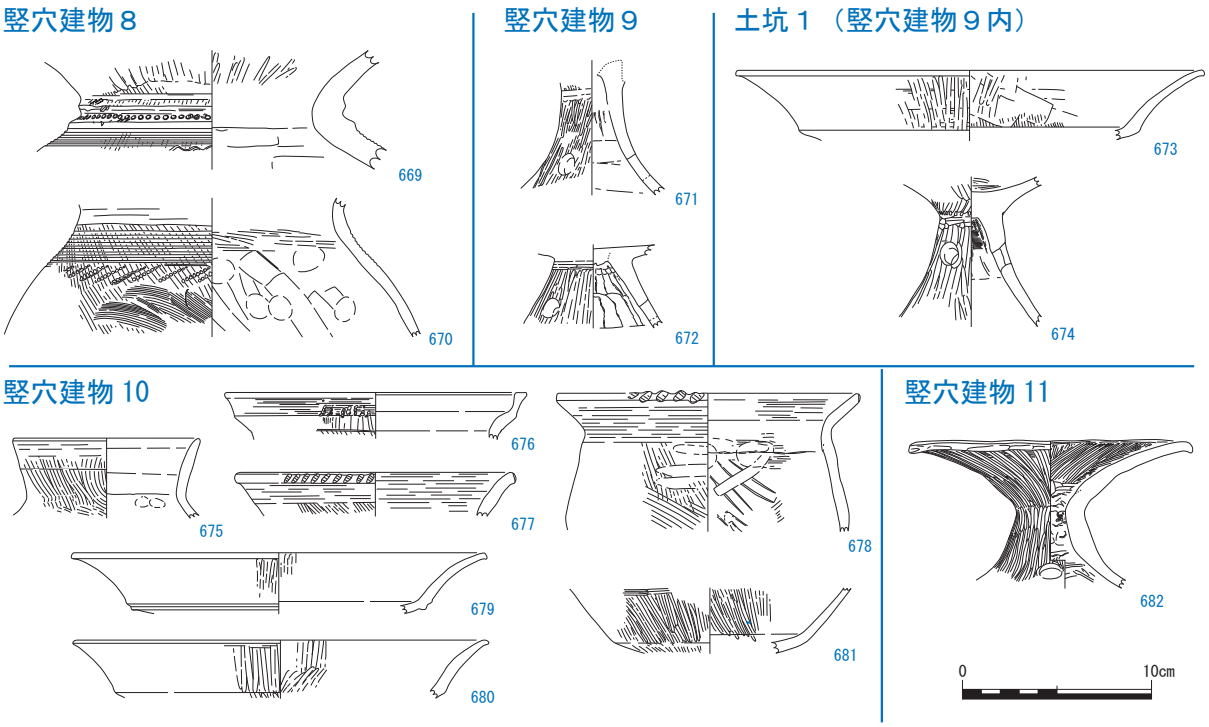
【竪穴建物８～11、土坑１】

３期の竪穴建物は階段状の地形の西側微高地で４軒確認できている。竪穴建物８は平面形が方形を呈している。隅が１カ所しか残存していないため、正確な規模は不明である。床面の一部に有機物層を確認できたが、壁体溝は確認できなかった。竪穴建物９は平面形が方形を呈している。残存した北壁幅は約 4.5 mを測る。床面では、中央部で有機物層を確認できており、ガラス玉が出土した。また、有機物層の北東側と南西側の２カ所で柱穴、南側に土坑１を確認できている。土坑１は直径 1.2 mを測り、内部には石が据えられていた。このほか、北西隅付近で集石、壁に沿って壁体溝を確認した。竪穴建物 10 は平面形が方形を呈している。隅が１カ所しか残存していないため、正確な規模は不明であるが、北東壁で 7.9 m以上、北西壁で 6.9 m以上の規模をもつ。床面では、中央部で有機物層を確認できたほか、有機物層の西側で１カ所の柱穴を確認できた。壁体溝は確認できていない。竪穴建物 11 は平面形が方形を呈している。残存した南西壁幅は約 4.1 mを測る。床面では、中央部と南西壁に沿って有機物層を確認できており、有機物層の南側に１カ所の柱穴も確認できた。壁体溝は確認できていない。

ガラス玉

この４軒の竪穴建物から出土した土器のうち、竪穴建物８から出土した２点の土器と、竪穴住居９から出土した２点の土器、竪穴建物９の床面で検出した土坑１から出土した２点の土器、竪穴建物 10 から出土した７点の土器、竪穴建物 11 から出土した１点の土器を図示した（第 64 図の 669 ～ 682）。

669 は壺である。頸部外面に２条の突帯を貼り付け、さらにその間に竹管文を施している。また、肩部外面には直線文と波状文を施している。670 は壺かあるいは甕の体部である。肩部外面に直線文と刺突文、頸部内面に横方向のハケを施している。671 ～ 674 は高杯である。671 は円錐状に開く脚部をもち、３方向に透孔を施している。脚部内面はナデによって、それまでの痕跡を消し去っている。672 は脚部と杯部の外面境の径がやや広い。３方向に透孔を施し、脚部内面はナデによってそれまでの痕跡を消し去っている。673 は浅い杯部をもつ。口縁部内外面ともに縦方向のミガキを施しているが、外面では横方向のナデ、内面ではハケや工具を使用したナデの痕跡が残っている。674 は円錐状に開く脚部をもつ。脚部中位よりやや上に３方向の透孔を施し、杯部と脚部の外面境に刺突文を施している。脚部内面はナデによって成形や調整の痕跡を消し去っているが、上半にはハケの痕跡が残っている。ワイングラス形か椀形の杯部をもつ可能性が高い。675 は壺



第 64 図　３区３期竪穴建物８～１１・土坑１出土土器実測図（S＝1/4）

である。直線的に立ち上がる口縁部をもち、口縁端部を丸くおさめている。676 ～ 678 は甕である。676 は受口状の口縁部をもち、口縁屈曲部外面に刺突文を施している。677･678 はどちらも、く字状の口縁部をもち、丸くおさめた口縁端部に刺突文を施している。679 ～ 681 は高杯である。679 は浅い杯部をもち、口縁端部を面取りしている。口縁部と杯底部の外面境に１条の沈線を施している。680 は杯部が浅く、口縁端部を丸くおさめている。681 は杯底部から稜部までの長さがやや短く、杯部もやや深い。直線的に開く口縁部をもつ。682 は器台である。円錐状の中空脚をもち、中空部分の径は 1.6cm を測る。口縁端部に横方向のミガキを施している。

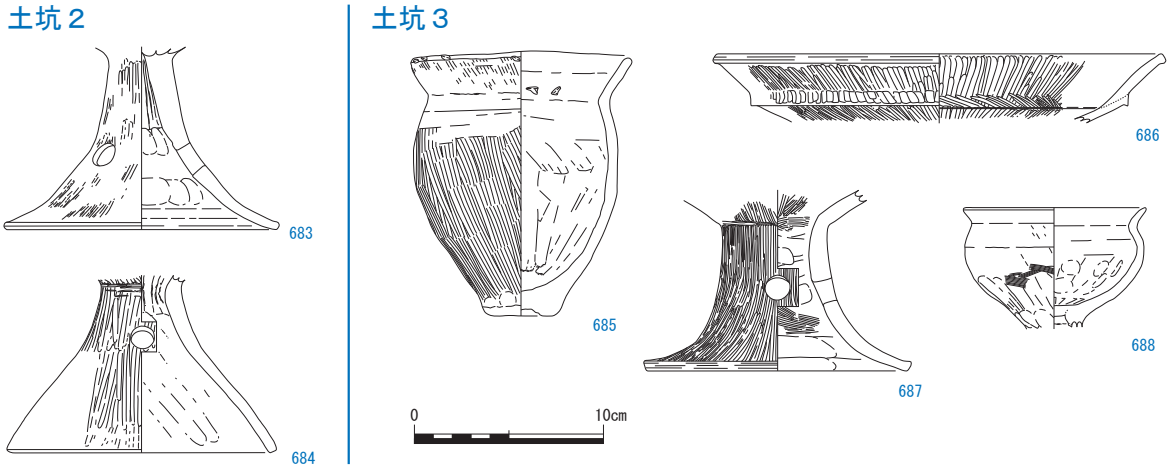
【土坑２・３】

土坑２は竪穴建物９の東壁を掘削して設置されており、平面形は楕円形を呈している。短径は約 1.2 m、深さは約 0.2 mを測る。底部に柱穴を２カ所確認できている。土坑３は、平面形が円形を呈しており、直径は 1.5 m、深さは約 0.2 mを測る。発掘調査では、竪穴建物 11 の南東壁を掘削して設置されたと判断したが、後に詳述する出土品整理の結果から誤りであった可能性もある。

これらの土坑２・３から出土した遺物のうち６点の土器を図示した（第 65 図の 683 ～ 688）。

683 は高杯である。柱状部と裾部の境に屈曲をもち、屈曲に合わせて３方向の透孔を施している。脚部内面では上部に粘土を窄めた痕跡がわずかに残るものの、全体に丁寧な横方向のナデを施すことによって、粘土を窄めた痕跡のほとんどを消し去っている。684 は器台である。内彎して開く裾部をもつ。脚部中位より上部に透孔を施しているが、数は不明である。脚部内面はナデにより、それまでの痕跡を消し去っている。685 は甕である。小型で、く字状の口縁部をもち、丸くおさめた口縁端部には、まばらに刺突文を施している。体部はやや長胴形を呈しており、底部は平底で、やや上げ底している。686 は高杯である。杯部は浅く、短く外反する口縁部をもつ。口縁

端部を面取りしている。杯底部と口縁部の外面境をわずかに突出させている。687 は器台である。柱状の中空脚をもち、４方向の透孔を脚部中位に施している。柱状部と口縁部の境が明瞭で、中空部分の径は 3.3cm を測る。脚部内面では裾端部のみナデを施しており、上部にはハケの痕跡が残っている。688 は脚台をもつ小型壺である。く字状の口縁部をもち、体部は球形を呈している。体部内外面ともにミガキを施さず、主にナデで調整している。



第 65 図　３区３期出土坑２・３出土土器実測図（S＝1/4）

【溝１】

溝１は竪穴建物 11 の北東側で検出した。幅約 0.4 m、深さ約 0.1 mの規模をもつ。埋土に遺物を確認できなかった。

【遺構面・遺物包含層】

３期では、40 ～ 42･44･45･51･58･60 層上面が遺構面である。しかし、そのほとんどの範囲が、２期や４・５期の遺構検出面に等しいため、ここでは３期の遺物包含層の出土遺物を、階段状の地形を呈し、河道３の北岸に堆積した 37･38 層のみに限定し、遺構面についても、その下面だけを対象とした。ただし、38 層の下面にあたり、かつ 51 層の上面にあたる範囲は２期の遺構面に等しい。遺物包含層と遺構面の出土の区別はできなかった。この 37･38 層と、38 層の下面にあたり、かつ 51 層の上面から出土した遺物のうちから 30 点の土器を図示した（第 66・67 図の 689 ～ 718）。

689 ～ 700 は甕である。689 ～ 693 は受口状の口縁部をもつ。689 は竹管状の工具を５本束ねて使用し、口縁屈曲部外面に刺突文、肩部外面に１帯の直線文と刺突文を施している。体部最大径を中位よりやや上部にもつ。690 は口縁端部外面に刺突文、肩部外面に１帯の直線文と刺突文を施している。やや長胴形の体部をもつ。691 は口縁屈曲部外面に刺突文、肩部外面に１帯の直線文と刺突文を施している。球形の体部をもつ。692 は口縁屈曲部外面に刺突文、肩部外面に１帯の直線文を施している。693 は無文で体部外面に荒いハケを施している。球形の体部をもつ。694 ～ 700 は、く字状の口縁部をもつ。このうち、694 ～ 698 は口縁端部を面取りし、刺突文を施しているが、699 は口縁端部の面取りのみであり、700 は口縁端部を丸くおさめ、刺突文も施していない。体部では、695 は体部最大径を中位より上部にもち、697・699・700 は球形、696 は菱形、698 はやや長胴形を呈している。

701 ～ 708 は高杯である。701 ～ 704 は杯部が浅く、外反する口縁部をもつ。702・704 は口縁端部を面取りしているが、701・703 は口縁端部を丸くおさめている。701 は柱状の脚部をもち、裾部との境に３方向の透孔を施している。また、脚部内面はナデを施すことによって、前段階までの痕跡を消し去っている。704 は口縁部外面に波状文を施している。705 は杯部がやや深く、直線的に開く口縁部をもつ。706・707 はワイングラス形の杯部をもつ。706 は杯部に屈曲部をもつ。杯底部外面にはミガキを施しているがややまばらで、間にハケの痕跡が残っている。脚部内面にはナデを施している。707 は杯部がややしもぶくれ状を呈する。杯部内面にはミガキを施しているが、まばらで、間にハケの痕跡が残っている。708 は円錐状に開く脚部で、脚部中位より上部に、２段３方向の透孔を施している。脚部内面はナデを施しておらず、ハケの痕跡が残っている。

709 ～ 713 は器台である。709 と 710 は柱状の中空脚をもつ。709 は３方向の透孔を裾部と柱状部の境に施している。中空部分の径は 3.8cm を測る。口縁部と柱状部の内外面境には横方向のミガキを施している。また、脚部内面はナデとケズリにより、前段階までの成形や調整の痕跡のほとんどを消し去っている。710 は中空部分の径が 3.6cm を測り、３方向に透孔をもつ。711 ～ 713 は円錐状の中空脚をもつ。711 は中空部分の径が 2.8cm を測り、脚部のほぼ中位に３方向の透孔をもつ。脚部内面では裾端部のみナデを施しているが、上部にハケの痕跡が残っている。712 は垂下して拡張させた口縁端部をもつ。口縁部と脚部の内外面境のミガキが施されなかった部分にハケの痕跡が残っている。713 は中空部分の径が 2.2cm を測り、脚部にはやや小さめの透孔を３方向に施している。口縁端部を面取りし、さらに横方向のミガキを施している。脚部内面にはハケの痕跡が残っている。

714 ～ 716 は鉢である。714 は受口状の口縁部をもち、口縁屈曲部外面に刺突文を施している。また、肩部外面には１帯の直線文と波状文を施している。体部はやや扁平で、口径と体部径はほぼ等しい。715 は受口状の口縁部をもつが、その形状は痕跡的である。口縁端部外面に刺突文、肩部外面に直線文と刺突文を施している。716 は扁平な体部に平底をもつ。

717 はミニチュア土器である。口縁端部がつまみ出されており、やや外反している。

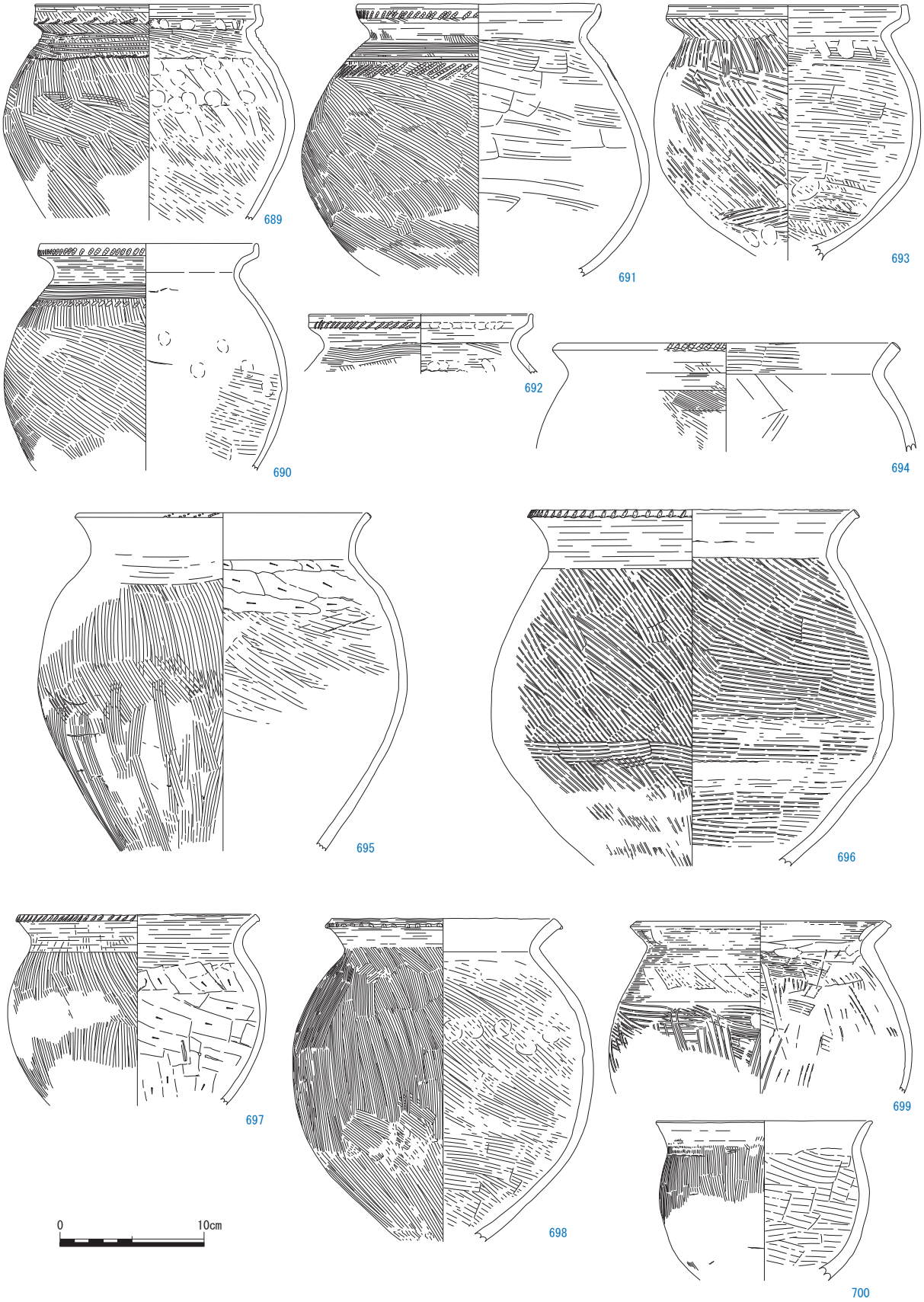
718 は鳥形土器である。完形品で、全長 13.8cm、幅 8.2cm、器高 9.9cm を測る。頭部はない。外面の主だった調整はナデ、ユビオサエ、ケズリであるが、翼部の一部にミガキが施されている。

（７） ３期の年代

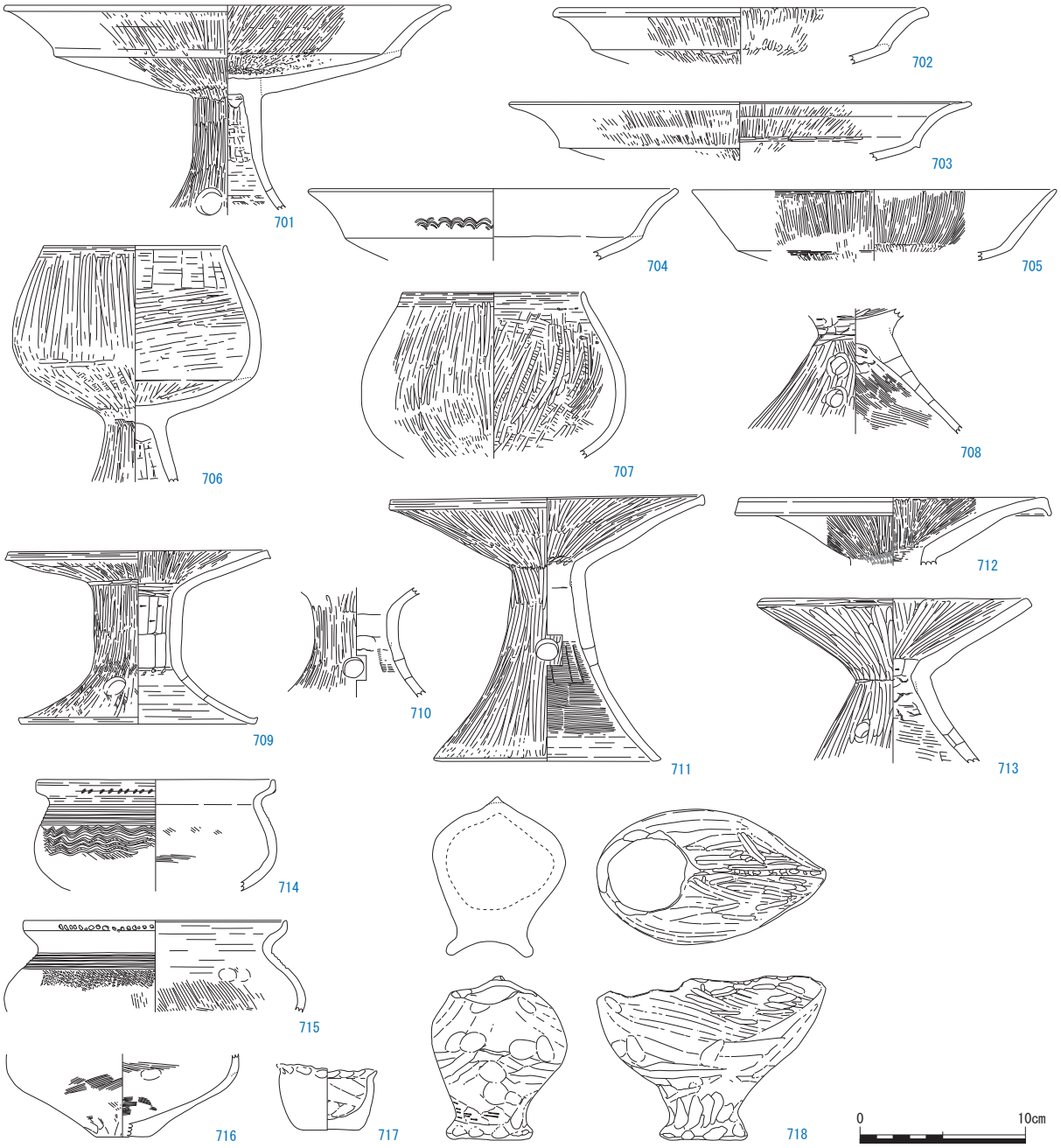
図示した 50 点の土器は、竪穴建物８～ 11・土坑１～３・遺構面・遺物包含層から出土している。

まず、竪穴建物８であるが、頸部外面にやや不明瞭な２条の突帯を貼り付け、さらにその間に竹管文を施す壺（669）を確認できている。また、体部と頸部の境がやや不明瞭な土器（670）も確認できている。資料は少ないが、これらの土器の諸特徴から、竪穴建物８から出土した土器の編年的位置を、山中Ⅱ式３段階～廻間Ⅰ式２段階の範疇で捉えておきたい。

次に竪穴建物９であるが、埋土や内部の土坑１から、浅い杯部をもつ高杯（673）や柱状の痕跡を残し、やや低い位置に透孔をもつ高杯（671）を確認できる一方で、脚部中位より高い位置に透孔をもつ高杯（672・674）もある。竪穴建物８と同様に資料は少ないが、これらの土器の諸特徴から、



第 66 図　3 区 3 期遺構面・遺物包含層出土土器実測図 1 （S ＝ 1/4）



第 67 図　3 区 3 期遺構面・遺物包含層出土土器実測図 2（S＝1/4）

竪穴建物 9 や土坑 1 から出土した土器の編年的位置を、山中Ⅱ式 3 段階～廻間Ⅰ式 2 段階の範疇で捉えておきたい。

竪穴建物 10 については、口縁部と杯底部の外面境に 1 条の沈線を施し、浅い杯部をもつ高杯（679）を確認できているが、その一方で杯部がやや深い高杯（681）もある。そのため、竪穴建物 10 の出土土器の編年的位置については、山中Ⅱ式 1 段階～廻間Ⅰ式 1 段階の範疇で捉えられると考える。

竪穴建物 11 については、円錐状の中空脚のやや低い位置に透孔をもち、口縁部の縮小化や内彎傾向が見られない器台（682）を確認できており、その編年的位置については山中Ⅱ式 3 段階～廻

間Ⅰ式２段階の範疇で捉えておきたい。ただ、竪穴建物 11 は土坑３に掘削されており、この土坑３からは山中Ⅱ式を中心とした土器が出土しているため、遺構の切り合いの判断が間違っていなければ、竪穴建物 11 の出土土器の下限は廻間Ⅰ式０段階に止まるだろう。

土坑２については、柱状部と外反する裾部をもつ高杯（683）を確認できた一方、裾部が内彎し、脚部中位より上部に透孔をもつ器台（684）も確認できている。資料数は少ないが、これらの土器の諸特徴と、土坑２が竪穴建物９を掘削して設置されていることから、土坑２から出土した土器の編年的位置を、山中Ⅱ式３段階～廻間Ⅰ式２段階の範疇で捉えられると考える。

土坑３については、杯部が浅く、杯底部と口縁部の外面境をわずかに突出させる高杯（686）と、位置が脚部中位ではあるが、４方向に透孔を施し、柱状の中空脚をもつ器台（687）を確認できている。これらの土器の諸特徴から、土坑３から出土した土器の編年的位置を、山中Ⅱ式１段階～３段階の範疇で捉えられると考える。ただ、土坑３は竪穴建物 11 を掘削して設置されており、この遺構の切り合いの判断が間違っていなければ、出土土器の編年的位置の下限は、廻間Ⅰ式前半まで降る可能性がある。

最後に遺構面・遺物包含層であるが、く字状の口縁部をもち、口縁端部の面取り後、刺突文を施す甕（694 ～ 697）や、杯部が浅く柱状の脚部をもつ高杯（701）や口縁部外面に波状文を施す高杯（704）、ワイングラス形の杯部をもつが、杯部内外面にハケの痕跡が残る高杯（706・707）、柱状の中空脚をもち、柱状部と口縁部や裾部の境が明瞭な器台（709）を確認できている一方、やや杯部が深い高杯（705）や脚部中位より上部に２段３方向の透孔をもち、脚部内面にハケの痕跡が残る高杯（708）、円錐状の中空脚をもち、脚部内面にハケの痕跡が残る器台（711・713）も確認できている。以上の特徴から、遺構面・遺物包含層の出土土器の編年的位置を、山中Ⅱ式１段階～廻間Ⅰ式１段階の範疇で捉えられると考える。

（８）４期の遺構・遺物

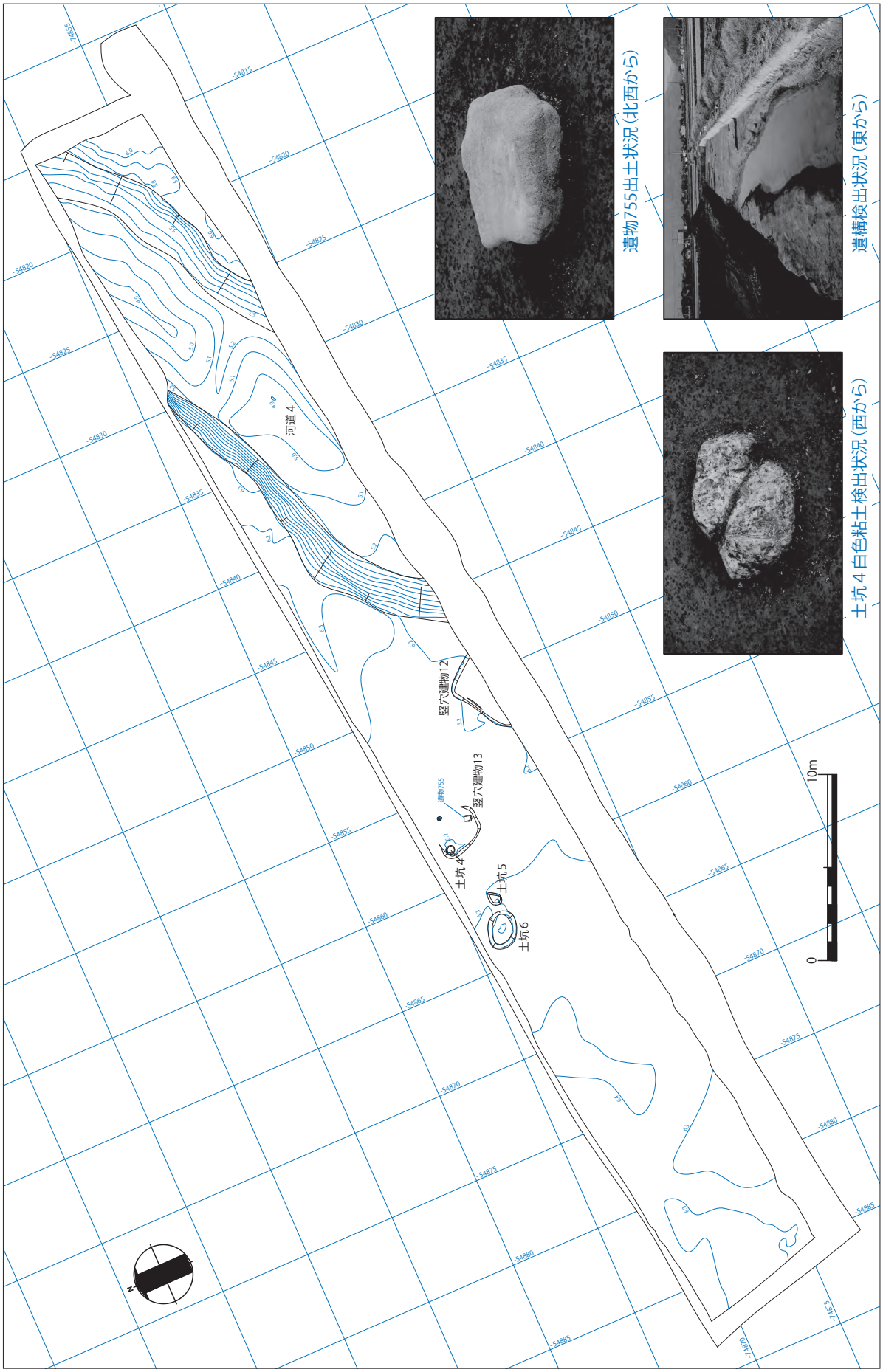
４期では、河道３の北岸に形成されていた階段状の地形が埋没し、河道も流路をやや東に変える（河道４）。この河道４の西側では、２軒の竪穴建物（竪穴建物 12･13）と３基の土坑（土坑４～６）を確認できた（第 68 図）。

【河道４】

河道４は幅約 8.5 m、深さ約 1.2 mの規模をもつ。河道３の埋没等によってやや流路を東に変えた。河道３と同様、調査区を西から東に流れていたと考えている。

この河道４から出土した土器のうち、埋土から出土した 31 点の土器と、南岸の遺構検出面から出土した２点の土器を図示した（第 69・70 図の 719 ～ 751）。

719 ～ 723 は壺である。719 は外反する口縁部をもち、口縁端部を面取りしている。口縁端部内面には、刺突文を施している。720 は拡張した口縁端部外面に擬凹線文を施し、頸部と体部の外面境には１条の沈線を施している。口縁部内面には横方向のミガキを施している。赤彩は見られ



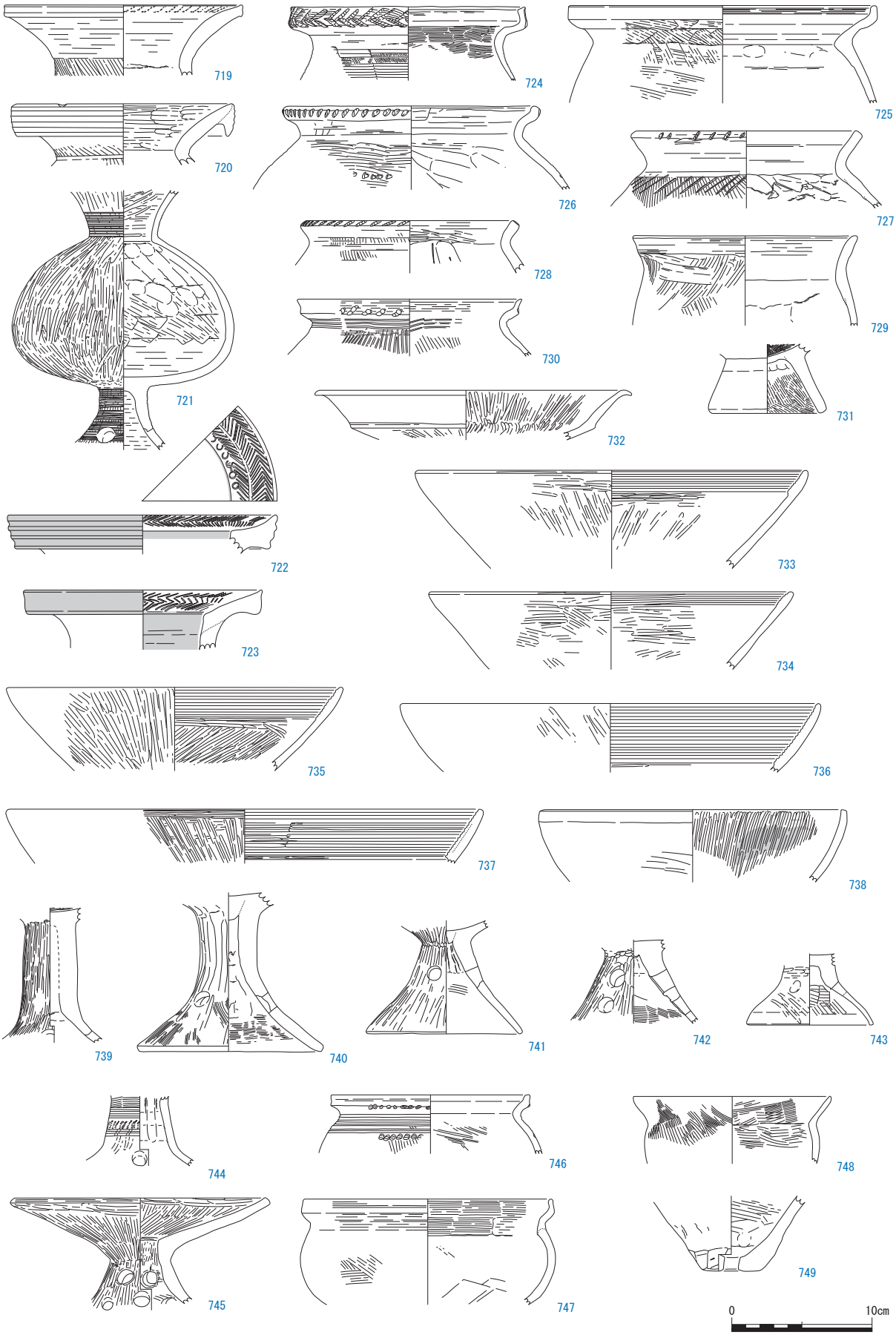
第 68 図　３区４期平面図（S＝1/300）

ない。721 は脚台をもつ壺である。細い頸部からほぼ直線的に開く口縁部をもち、体部はしもぶくれ状を呈している。口縁部外面と脚部外面に直線文を施している。722 は口縁端部外面に擬凹線文を施している。口縁端部の内面には、内彎する文様帯を形成し、羽状に並ぶ３列の刺突文と円形の刺突文を施している。口縁端部外面と頸部内面に赤彩を施しているが、文様帯上には赤彩していない。723 は、口縁端部内面が面をなし、羽状に並ぶ３列の刺突文を施している。口縁端部外面と頸部内面に赤彩を施しているが、文様帯上は赤彩していない。

724 ～ 731 は甕である。724 は受口状の口縁部をもつ。口縁端部外面に羽状の刺突文、肩部外面に直線文を施している。体部の厚みが約 0.4cm とやや薄い。725 は受口状の口縁部をもつ。無文である。726 は受口状の口縁部をもつが、その形状は痕跡的である。口縁端部外面と肩部外面に刺突文を施している。727 ～ 729 はく字状の口縁部をもつ。727 は口縁端部を面取りし、刺突文を施している。また、肩部外面にも刺突文を施している。728 は口縁端部を面取りし、刺突文を施している。また、体部内面では頸部屈曲部付近までケズリを施している。729 は無文で口縁端部を丸くおさめている。頸部の屈曲がやや緩い。730 は S 字状の口縁部をもつ。口縁部２段目外面に刺突文を施し、頸部外面にヨコハケを施している。また、頸部内面に独立したハケを確認できるほか、体部内面にもハケを施している。731 は台付甕の脚部である。脚部内面にハケの痕跡が残っている。

732 ～ 743 は高杯である。732 は杯部が浅く、口縁端部を強く外反させている。733 ～ 737 は杯部が深い。733 は直線的に開く口縁部をもち、口縁端部内面には有段で幅が非常に狭い文様帯を形成し、多条沈線文を施している。734 は直線的に開く口縁部をもち、口縁端部内面には幅が非常に狭い文様帯を形成し、多条沈線文を施している。ただ、口縁端部内面に形成された文様帯は肥厚してはいるが､明瞭な段は形成していない。735 はわずかに内彎して立ち上がる口縁部をもち、口縁端部内面には幅が狭い有段の文様帯を形成し、多条沈線文を施している。736 は内彎して立ち上がる口縁部をもち、口縁端部内面にはやや幅の狭い有段の文様帯を形成し、多条沈線文を施している。737 はわずかに内彎して立ち上がる口縁部をもち、口縁端部内面にはやや幅の狭い有段の文様帯を形成し、多条沈線文を施している。738 は椀形の口縁部をもつ。杯部が深く、口縁部内面の一部に主が付着している。739 は柱状部と裾部の境に屈曲をもち、屈曲に合わせて透孔を施している。740 は柱状部と裾部の境にゆるやかな屈曲をもち、屈曲に合わせて３方向の透孔を施している。裾端部内面にナデを施しているが、上部にハケの痕跡が残っている。741 は脚部が円錐状を呈しており、裾部がわずかに内彎している。脚部中位よりやや高い位置に３方向の透孔をもつ。脚部内面は遺存状態が悪いが､ハケの痕跡を確認できる。742 は脚部が円錐状を呈しており、脚部中位よりやや高い位置に、上下一対の透孔を３方向に施している。脚部内面にはハケの痕跡が残っている。743 は脚部が円錐状を呈しており、裾部は内彎している。脚部中位よりやや高い位置に透孔をもつ。脚部内面は裾端部のみ、ナデによって調整の痕跡を消し去っているが、上部にはハケの痕跡が残っている。

744 と 745 は器台である。744 は柱状の中空脚をもち、中空部分の径は 2.8cm を測る。柱状部と裾部の境が明瞭で、屈曲に合わせて透孔を施している。また、柱状部外面には直線文と刺突文を

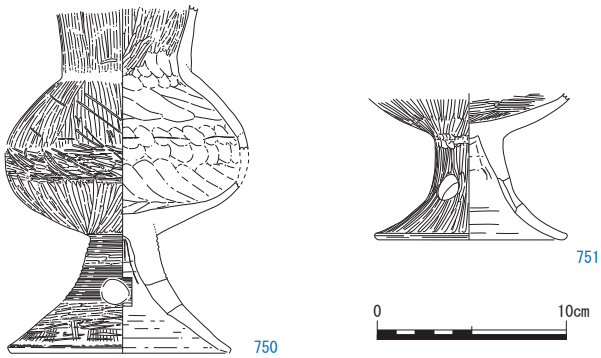


第 69 図　3 区 4 期河道 4 出土土器実測図（S ＝ 1/4）

施しており、柱状部内面では、ナデを施し、それまでの成形や調整の痕跡を消し去っている。745は円錐状の中空脚をもち、中空部分の径は2.4cmを測る。ほぼ直線的に開く口縁部をもち、口縁端部を面取りしている。３個一対の透孔を２方向に施している。

746～749は鉢である。746・747は受口状の口縁部をもつ。746は口縁屈曲部外面に刺突文、肩部外面に１帯の直線文と刺突文を施している。体部径が口径を上回っている。747は無文で、口径と体部径がほぼ等しい。748はく字状の口縁部をもち、口縁端部を丸くおさめている。口径が体部径を上回っている。749は有孔の底部である。体部が直線的に立ち上がり、体部内面にハケを施している。

750は脚台をもつ壺である。ほぼ直線的に開く口縁部をもち、体部は球形を呈している。体部最大径付近の外面に横方向のミガキを施している。脚部では中位に３方向の透孔を施し、外面に２帯の直線文を施している。また脚部の内面では、ナデを施すことによって、前段階までの成形や調整の痕跡のほとんどを消し去っている。751は脚台である。底部内面にミガキを施していることから、椀形の杯部をもつ高杯である可能性が高い。脚部中位に３方向の透孔を施し、脚部内面ではナデを施すことによって、前段階までの成形や調整の痕跡のほとんどを消し去っている。



第70図　３区４期河道４南岸遺構面出土土器実測図（S＝1/4）

【竪穴建物12・13、土坑４～６】

４期の竪穴建物は河道４の西側で２軒確認できている。竪穴建物12は平面形が方形を呈している。隅が１カ所しか残存していないため、正確な規模は不明である。床面に有機物層を確認できなかった。北西壁の一部に沿って壁体溝を確認できている。竪穴建物13は平面形がややいびつな方形を呈している。東側の遺存状態は悪いが、西壁面が残存しており、その長さは約2.3 mとやや小さい。床面からは、北西コーナー付近で、白色粘土を埋納した土坑（土坑４）を確認できたほか、南壁面付近で台石（755）を確認できている。土坑４は直径0.5 mを測る。深さは６cmほどで、内部には白色粘土が盛り上げられていた。土坑５・６は竪穴建物13の東側約４m付近で並んで確認できた。土坑５は平面形がややいびつな楕円形を呈しており、長径は約0.9 m、短径は約0.6 m、深さは約0.1 mを測る。土坑６は平面形が楕円形を呈しており、長径は約2.0 m、短径は約1.6 m、深さは約0.2 mを測る。

これらの竪穴建物12・13、土坑５・６から出土した遺物のうち７点を図示した（第71図の752～758）。

752～754は甕である。752はく字状の口縁部をもち、口縁端部を面取りしている。頸部外面に１条の沈線、肩部外面にヨコハケを施している。体部外面はハケを施しているが、上半は荒く、

下半は細かい。753 はく字状の口縁部をもつ。器高は 10.7cm と小さく、底部は丸底である。754 はく字状の口縁部をもち、面取りした口縁端部に刺突文を施している。755 は台石である。長さが 46.0cm、幅 34.6cm、厚み 14.2cm を測る。表面が凹んでおり、使用によって滑らかになっている。756 は高杯である。内彎して開く裾部をもち、脚部中位には３方向の透孔を施している。757 は甕である。受口状の口縁部をもつが、その形状は痕跡的である。758 は鉢である。有孔の底部と、内彎した口縁部をもつ。体部内面にわずかに朱の痕跡が残っている。

（９） ４期の年代

図示した 39 点の土器は、河道４・竪穴建物 12・竪穴建物 13・土坑５・土坑６から出土している。

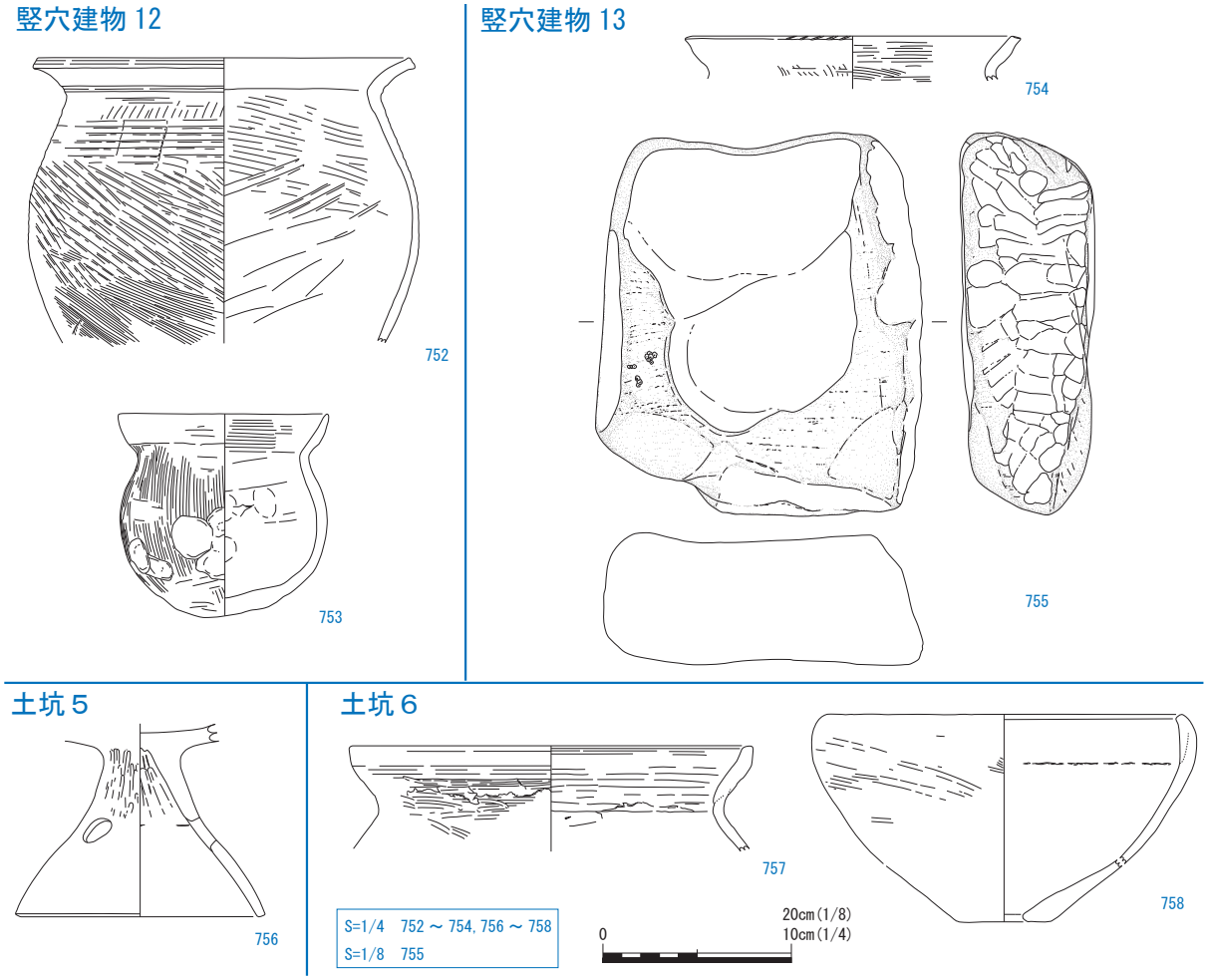
まず、河道４であるが、当調査区ではじめて口縁部２段目外面に刺突文を施し、体部内面にハケを施したＳ字甕（730）を確認できたほか、杯部が深く、口縁端部内面に有段で幅の狭い文様帯をもつ高杯（733）や有段でやや幅の狭い文様帯をもつ高杯（736・737）、脚部中位よりやや高い位置に上下一対の透孔を３方向に施す高杯（742）、内彎した裾部をもつ高杯（738）を確認できている。ただ、その一方で、杯部が浅く、口縁端部を強く外反させた高杯（732）や、柱状を呈し、柱状部と裾部の境に合わせて透孔を施す高杯（739）、柱状の中空脚をもつ器台（744）といった、古い特徴をもつものも確認できた。そのため、河道４の出土土器の編年的位置を、山中Ⅱ式２段階～廻間Ⅰ式４段階古と、やや広い範疇で捉えることができる。このことは、３期にまで続くとした河道３の出土土器の編年的位置の下限が山中Ⅱ式２段階に収まることや、２期において掘削された環濠が、廻間Ⅰ式期１段階以降、廻間Ⅰ式期２段階にかけて埋没したことと整合しておらず、発掘調査時に、前段階の３期に属する河道埋土を誤って河道４と同時に掘り下げた結果を示している可能性が高い。

次に、竪穴建物 12 であるが、面取りした口縁端部に刺突文を施さず、頸部外面に１条の沈線、肩部外面にヨコハケを施したく字状の口縁部をもつ甕（752）や、丸底とく字状の口縁部をもつ小型甕（753）を確認できている。資料は少ないが、これらの土器の諸特徴から、竪穴建物 12 の出土土器の編年的位置を、廻間Ⅰ式１～４段階新の範疇で捉えておきたい。

竪穴建物 13 については、面取りした口縁端部に刺突文を施したく字状の口縁部をもつ甕（754）を確認できているが、その特徴から、編年的位置を絞り込むことは困難であった。

土坑５については、脚部中位に透孔をもち、裾部が内彎する高杯（756）を確認できていることから、その出土土器の編年的位置を、廻間Ⅰ式１段階～廻間Ⅰ式３段階の範疇で捉えておきたい。

土坑６については、痕跡的な受口状口縁部をもつ甕（757）や有孔鉢（758）を確認できているが、その特徴から、編年的位置を絞り込むことは困難であった。



第 71 図　３区４期竪穴建物 12・13、土坑５・６出土遺物実測図（S＝1/4、1/8）

（10）５期の遺構・遺物

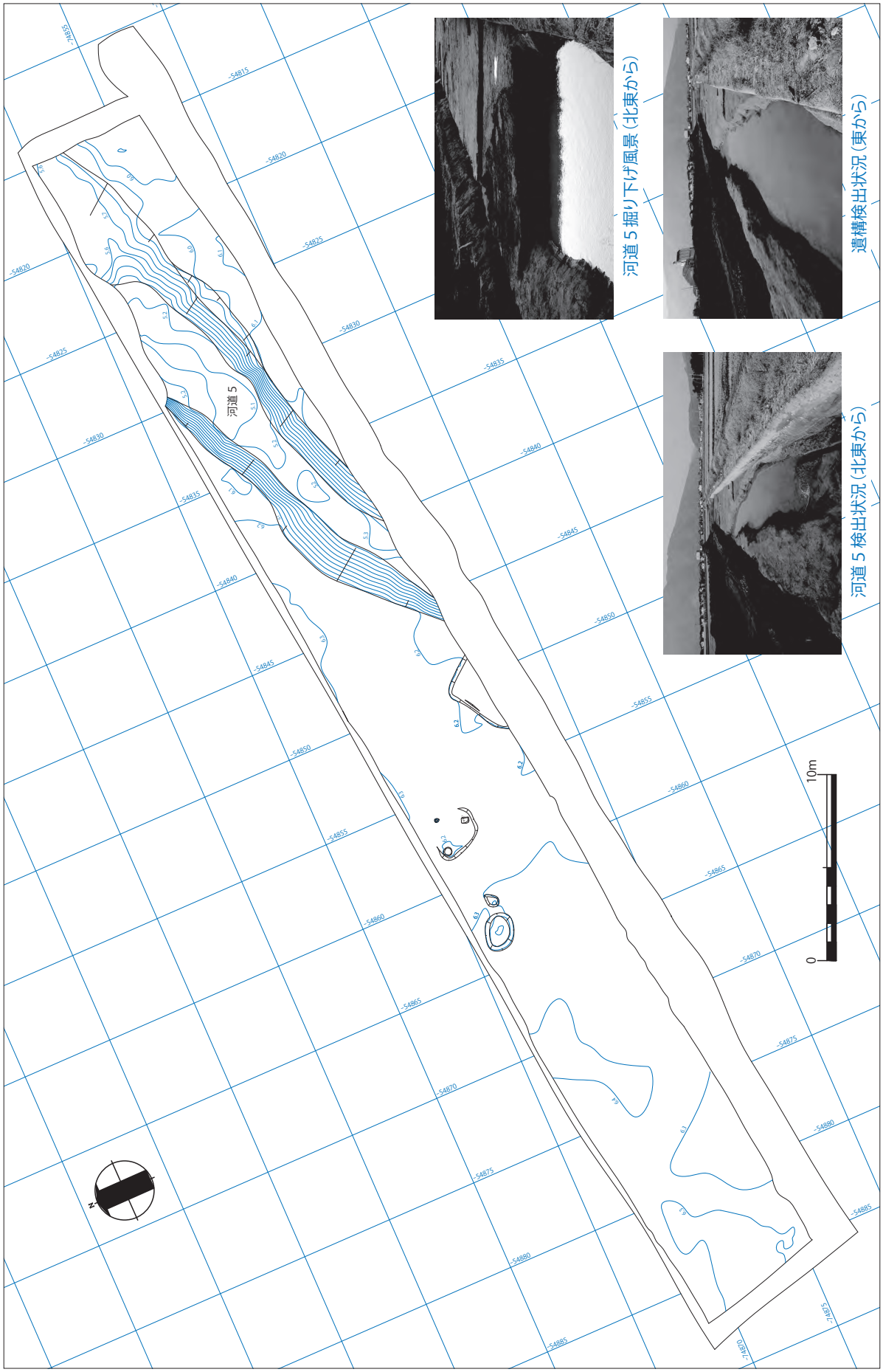
５期では、１本の河道（河道５）を確認した（第 72 図）。

【河道５】

河道５は幅 4.3 ～ 6.0 m、深さ約 1.0 mの規模をもつ。河道４の埋没によってやや規模を縮小した河道であることや、河道底の標高から、水は調査区を西から東に流れていたと判断した。埋土は、その大半が、灰オリーブ色を呈する厚い粗砂層や砂礫層の一括堆積で占められており、２区の河道２に対応している。大雨などによる多量の土砂流出によって、ごく短期間でその規模を大きく縮小したと考えた。

この河道５から出土した遺物のうち、18 点の土器を図示した（第 73 図の 759 ～ 776）。

759 ～ 764 は壺である。759 は外反する口縁部をもち、面をなした口縁端部外面に３条の凹線文を施している。口縁部内面には横方向のミガキを施している。760 は２段に屈曲して外反する口縁部をもち、口縁部内面上段に、ヘラ沈線によって絵画表現を行っている。絵画表現の内容は不明である。761 は直線的に開くやや短い口縁部をもつ。762 は口縁端部外面に擬凹線文を施している。また、口縁端部内面には羽状に並ぶ３列の刺突文を施しているが、粘土を付加するなどの文様帯は



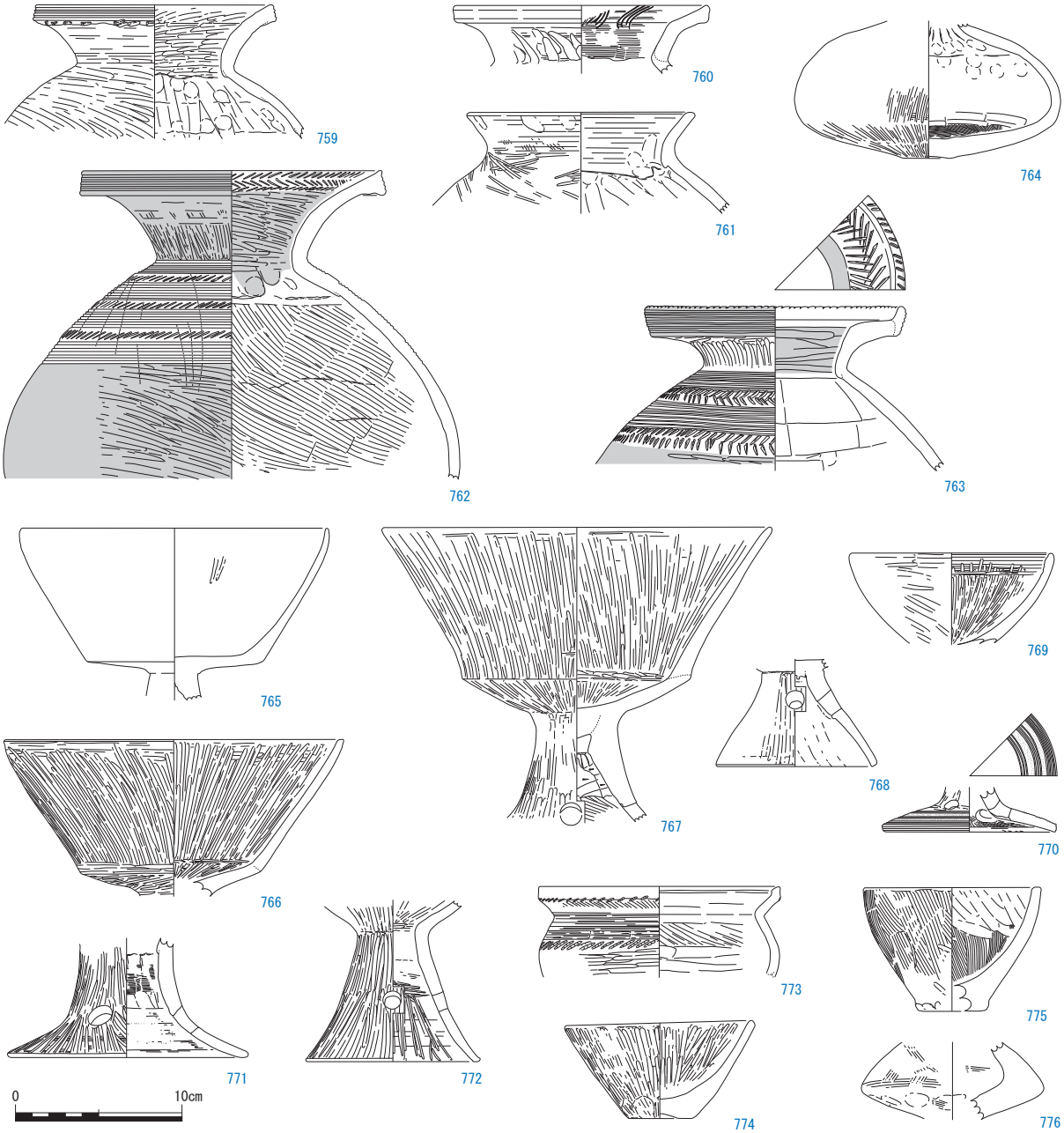
第 72 図　３区５期平面図（S＝1/300）

形成していない。体部外面上半に４帯の直線文と、３帯の刺突文を施している。文様帯上を赤彩していないが、口縁端部内面の一部には赤彩を確認できる。763 は受口状に拡張した口縁端部に刺突文、口縁端部外面に擬凹線文を施し、体部外面上半には２帯の直線文と羽状に並ぶ２帯の刺突文を施している。また、口縁端部の内面にも、羽状に並ぶ２列の刺突文を施している。体部外面の文様帯上を赤彩していないほか、頸部外面にも赤彩が見られない。764 は小型の壺である。体部は扁平で、平底の底部をもつ。765 ～ 770 は高杯である。765 ～ 767 は深い杯部をもつ。765 は口縁端部がわずかに内彎している。766 は直線的に開く口縁部をもつ。767 はやや内彎して立ち上がる径の小さい杯底部から、わずかに外反して立ち上がる口縁部をもつ。口縁部と杯底部の内面境に横方向のミガキを施している。脚部では透孔が３方向に施され、脚部内面にはハケの痕跡が残る。768 はわずかに内彎して開く裾部をもち、脚部中位よりやや上部に３方向の透孔を施している。脚部内面にはナデを施し、前段階までの調整の痕跡を消し去っている。769 は小型で、椀形を呈する杯部をもつ。口縁端部内面には幅が非常に狭い文様帯を形成し、多条沈線文を施している。口縁端部に形成された文様帯は肥厚してはいるが、明瞭な段はない。770 は小型高杯の脚部である。柱状部と裾部の屈曲にあわせて、２つの透孔を２方向に施している。裾部径は拡大していない。裾部外面に３帯の直線文と、その間に刺突文を施している。また、裾端部にも直線文を施している。脚部内面は裾端部のみ、ナデによってそれまでの痕跡を消し去っているが、上半にはハケの痕跡が残っている。771・772 は器台である。771 は柱状の中空脚をもち、柱状部と裾部の境に３方向の透孔を施している。裾部内面はナデにより、それまでの痕跡を丁寧に消し去っている。772 は円錐状の脚部をもつ。脚部中位に透孔をもつが、数は不明である。口縁部と脚部の内面境には、横方向のミガキを施している。また、裾部の内面に縦方向のミガキを施している。773 ～ 775 は鉢である。773 は受口状の口縁部をもち、体部径と口径がほぼ等しい。口縁屈曲部外面に刺突文を施しているほか、肩部外面に直線文を意識したヨコナデと刺突文を施している。また、体部最大径付近の外面には横方向のミガキを確認できる。774 は上げ底した平底に、直線的に開く口縁部をもつ。体部内外面ともにミガキを施している。底部内面が使用によって滑らかになっているほか、体部内面にわずかに朱の痕跡が残っている。775 は平底に内彎して立ち上がる口縁部をもつ。体部外面はハケ後、その一部分にミガキを施し、体部内面ではハケ後、その上半にナデを施している。776 は器種を判断できなかった。算盤玉形の体部をもち、器壁は厚い。内面に付着物があるが詳細は不明である。

【遺構面・遺物包含層】

５期では、36 ～ 40・42・51・58・60 層上面が遺構面であり、11 ～ 15 層及び 17 ～ 24 層が遺物包含層である。ただし、37 ～ 39 層上面では４期と５期の遺構検出面、40・42 層上面では３～５期の遺構検出面、58 層上面では２～５期の遺構検出面、51・60 層上面では１～５期の遺構検出面が等しい。この遺構面直上から出土した遺物のうちから４点、また遺物包含層から出土した遺物のうちから 31 点の土器を図示した（第 74・75 図の 777 ～ 811）。

777・778 は壺である。777 は直線的に開く口縁部をもつ。口縁端部を丸くおさめている。778



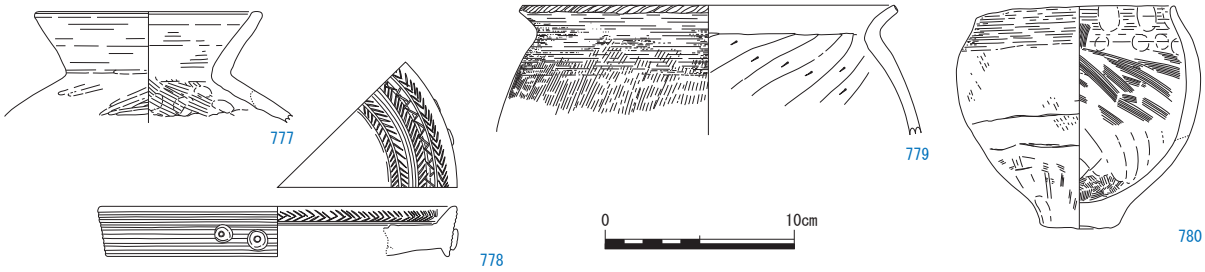
第 73 図　3 区 5 期河道 5 出土土器実測図（S ＝ 1/4）

は上下に拡張させた口縁端部の外面に擬凹線文と円形浮文を施し、口縁端部内面には、羽状あるいは鋸歯状に並ぶ刺突文と凹線文を施している。779 は甕である。く字状の口縁部をもち、面取りした口縁端部に刺突文を施している。体部内面では頸部付近までケズリを施している。780 は鉢である。球形の体部に、やや突出した平底の底部をもつ。口縁部は内傾しており、口縁端部を丸くおさめている。

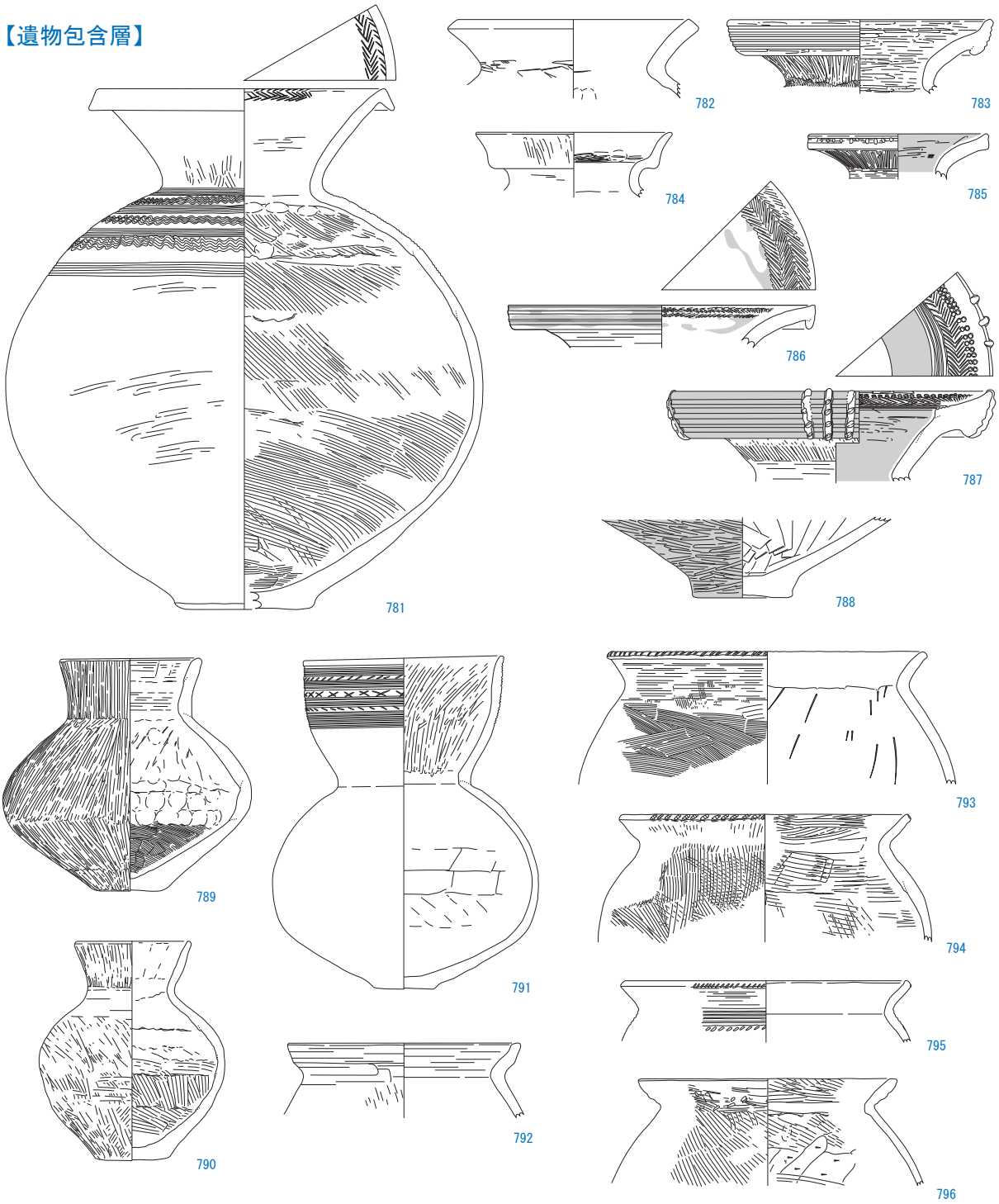
781 ～ 791 は壺である。781 は直線的に開く口縁部をもち、口縁端部を垂下させて拡張している。体部は球形を呈しており、底部はやや突出した平底である。口縁端部内面に羽状に並ぶ 3 列の刺突文、体部外面上半には 4 帯の直線文と、その間に波状文を施している。782 は短く直線的に立

ち上がる口縁部をもち、口縁端部を面取りしている。783 は上下に拡張させた口縁端部の外面に擬凹線文を施し、口縁部内面には横方向のミガキを施している。784 は有段の口縁部をもつ。785 は外反して開く口縁部をもち、口縁端部外面に刺突文を施している。口縁部内面は横方向のミガキを施した後、赤彩している。786 は垂下して拡張させた口縁端部外面に擬凹線文を施し、口縁端部の内面には、羽状に並ぶ３列の刺突文を施している。口縁端部外面及び口縁部内面を赤彩しているが、口縁端部内面の刺突文を施した文様帯上は赤彩していない。787 は拡張した口縁端部外面に擬凹線文を施した後、刻みを施した３本の棒状浮文を４方向に付加している。口縁端部の内面には、粘土を付加した有段の文様帯を形成し、２列の竹管文と羽状に並ぶ２列の刺突文、４条で１帯の直線文を施している。口縁端部外面及び口縁部内面を赤彩しているが、口縁端部内面の文様帯上は赤彩していない。口縁部内面に横方向のミガキを施している。788 は突出した平底をもち、体部及び底部外面を赤彩している。体部外面には横方向のミガキを施している。789 は小型で、短くほぼ直線的に開く口縁部をもち、口縁端部を丸くおさめている。体部は菱形を呈し、底部は平底である。790 は小型で、ほぼ直線的に開く口縁部と球形の体部をもつ。底部は平底である。791 はやや内彎気味に立ち上がる口縁部をもち、口縁部外面に４帯の直線文とその間に刺突文を施している。球形の体部に平底をもつ。792 ～ 798 は甕である。792 は受口状の口縁部をもち、口縁端部を面取りしている。器壁が 0.5 ～ 0.9cm とやや厚い。793 ～ 797 はく字状の口縁部をもつ。793 は口縁端部に刺突文を施しており、体部内面では頸部付近までケズリを施している。794 は口縁端部に刺突文を施し、口縁部内面に横方向のハケを施している。795 は口縁端部に刺突文を施し、肩部外面に直線文と刺突文を施している。796 は無文で、体部内面にケズリを確認できる。797 は無文で、口縁部内面に横方向のハケを施している。798 は S 字状の口縁部をもち、口縁部２段目外面に押引状の刺突文を施している。頸部内面にハケをもち、体部外面のヨコハケは頸部に接して施されている。799 ～ 808 は高杯である。799・800 は浅い杯部をもち、どちらも口縁端部を丸くおさめている。800 は口縁部外面に波状文を施している。801 ～ 804 は深い杯部をもつ。801 は杯底部から稜部までの長さがやや短く、口縁部内外面ともに縦方向のミガキを施している。脚部に３方向の透孔をもつ。802 は直線的に開く口縁部をもち、口縁端部内面には有段で幅が非常に狭い文様帯を形成し、多条沈線文を施している。また、口縁端部外面及び口縁部内面の文様帯下部に横方向のミガキを施している。脚部では、２対の透孔を２方向に施し、外面に横方向のミガキを施しているが、透孔を施した脚部中位付近にはハケの痕跡が残っている。脚部内面では、ナデにより前段階までの痕跡を消している。803 は直線的に開く口縁部をもち、口縁端部内外面に横方向のミガキを施した痕跡が残っている。また、杯底部外面から稜部外面にかけてや、口縁部と杯底部の内面境にも横方向のミガキを施している。脚部では中位よりやや上に４方向の透孔をもち、裾部外面に斜め方向のミガキを施している。また、脚部内面では、裾端部付近にナデを施し、前段階までの痕跡を消しているが、上半にはハケの痕跡が残っている。804 は口縁部内外面及び脚部の裾外面に斜め方向のミガキを施し、杯部と脚部の外面境には横方向のミガキを施している。杯底部は中心がやや高く、杯底部と口縁部の内面境にはわずかに段がある。内彎する脚部をもち、脚部中位よりやや上部に３方向の透孔をもつ。脚部内面はナデにより、前段階までの痕跡が消されてい

【遺構面】



【遺物包含層】



第 74 図　3 区 5 期遺構面・遺物包含層出土土器実測図 1（S＝1/4）

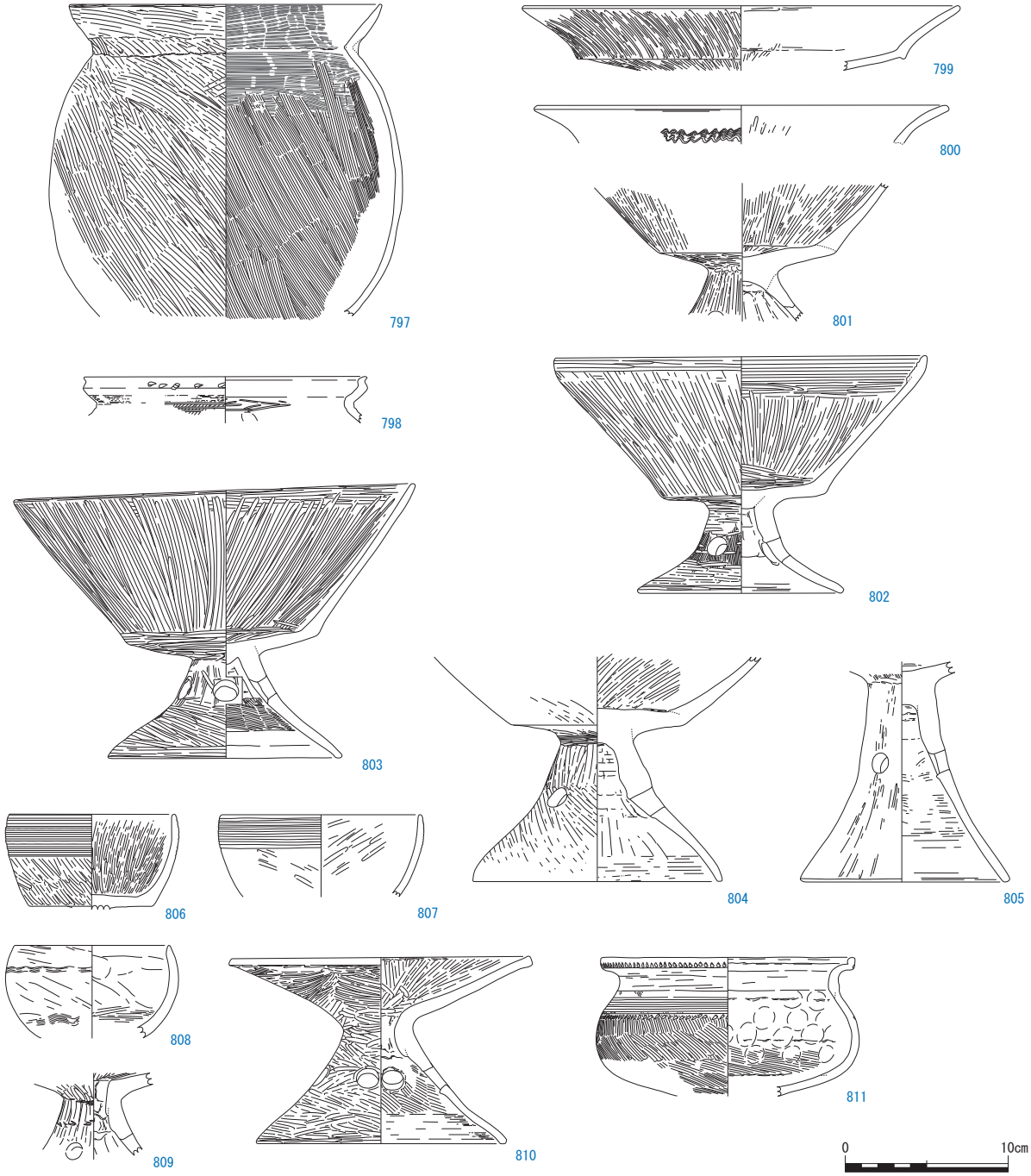
る。805 は円錐状の脚部をもち、３方向の透孔を脚部中位よりやや上に施している。脚部内面ではナデによってそれまでの痕跡を消し去っている。806 ～ 808 は小型高杯である。806 は口縁部が箱形を呈し、口縁端部外面に直線文と鋸歯状の刺突文を施し、幅の広い文様帯を形成している。口縁部外面に斜め方向のミガキを施している。807 はわずかに内彎して立ち上がる口縁部をもち、口縁端部外面にやや幅広の直線文を施している。口縁部内外面ともに斜め方向のミガキを施している。808 は口縁部が球形を呈し、面取りした口縁端部はやや内傾している。口縁部外面に波状文らしい痕跡が残るが、磨耗が著しいため詳細は不明である。809・810 は器台である。809 は円錐状の脚部をもち、３方向の透孔を施している。810 は直線的に開く口縁部と円錐状の脚部をもつ。中空部分の径は 1.6cm を測る。口縁部及び脚部外面には横方向のミガキを施し、脚部の中位よりやや上に４方向の透孔を施している。脚部内面では裾端部のみナデを施しており、上半はハケの痕跡が残っている。811 は鉢である。受口状の口縁部をもち、口縁端部外面に刺突文、肩部外面に直線文と刺突文を施している。体部はやや扁平で、体部径が口径を上回っている。

（11） ５期の年代

図示した 53 点の土器は、河道５・遺構面・遺物包含層から出土している。

まず、河道５であるが、壺では全体としてやや加飾に乏しく、ミガキを施さないもの（760）もあるが、斜め方向や横方向のミガキを施すもの（759・761・762）が目立つ。高杯はすべて杯部が深いが、杯底部から稜部までの長さが極端に短いものはない。また、口縁部が大きく開くものもない。脚部では内彎した裾部をもつもの（768）が含まれる。小型の高杯では、口縁端部内面に明瞭な段をもたない幅が非常に狭い文様帯をもつもの（769）や、裾部径が拡大していないもの（770）を確認できている。器台では、円錐状の脚部をもつもの（772）だけでなく、柱状部をもつもの（771）も確認できている。このように、やや出土土器の編年的位置を判断する資料数は少ないが、以上の諸特徴から、河道５の出土土器の編年的位置は、廻間Ⅰ式０段階～廻間Ⅰ式４段階古の範疇で捉えられると考える。ただ、河道５は、２区の河道２と同一遺構であり、さらに埋土が一括堆積の特徴を示していることから、河道５の所属時期の上限は廻間Ⅰ式期３段階までに収まるだろう。

次に遺構面・遺物包含層であるが、壺では横方向のミガキを施すものが目立つ一方で、体部が球形を呈する広口壺（781）や口縁端部内面に有段でわずかに内彎する文様帯をもつパレス壺（787）、菱形の体部をもち、外面に縦方向のミガキのみを施す小型壺（789）も確認できている。甕は、口縁端部に刺突文を施すく字状の口縁部をもつ甕（793 ～ 795）と、刺突文を施さないもの（796・797）を確認できている。また、口縁部２段目外面に押引状の刺突文を施すＳ字甕（798）も確認できている。高杯では、杯部の浅いものや（799）、口縁部外面に波状文を施すもの（800）を確認できているが、杯部が深く、口縁端部内面に有段の幅が非常に狭い文様帯をもち、脚部外面に横方向のミガキを施すもの（802）や、裾部が内彎し、脚部外面に斜め方向のミガキを施すもの（804）も確認できている。また、器台でも口縁部及び脚部外面に横方向のミガキを施すもの（810）を確認できている。以上の諸特徴から、遺構面・遺物包含層の出土土器の編年的位置を、山中Ⅰ式３段階～廻間Ⅰ式４段階新の範疇で捉えられると考える。



第 75 図　3 区 5 期遺構面・遺物包含層出土土器実測図 2（S＝1/4）

（12）６期の遺構・遺物

６期では、２本の河道（河道６・７）と２条の溝（溝２・３）、２基の土坑（土坑７・８）、59 本の柱穴、１つの不明遺構（不明遺構１）を確認した（第 76 図）。

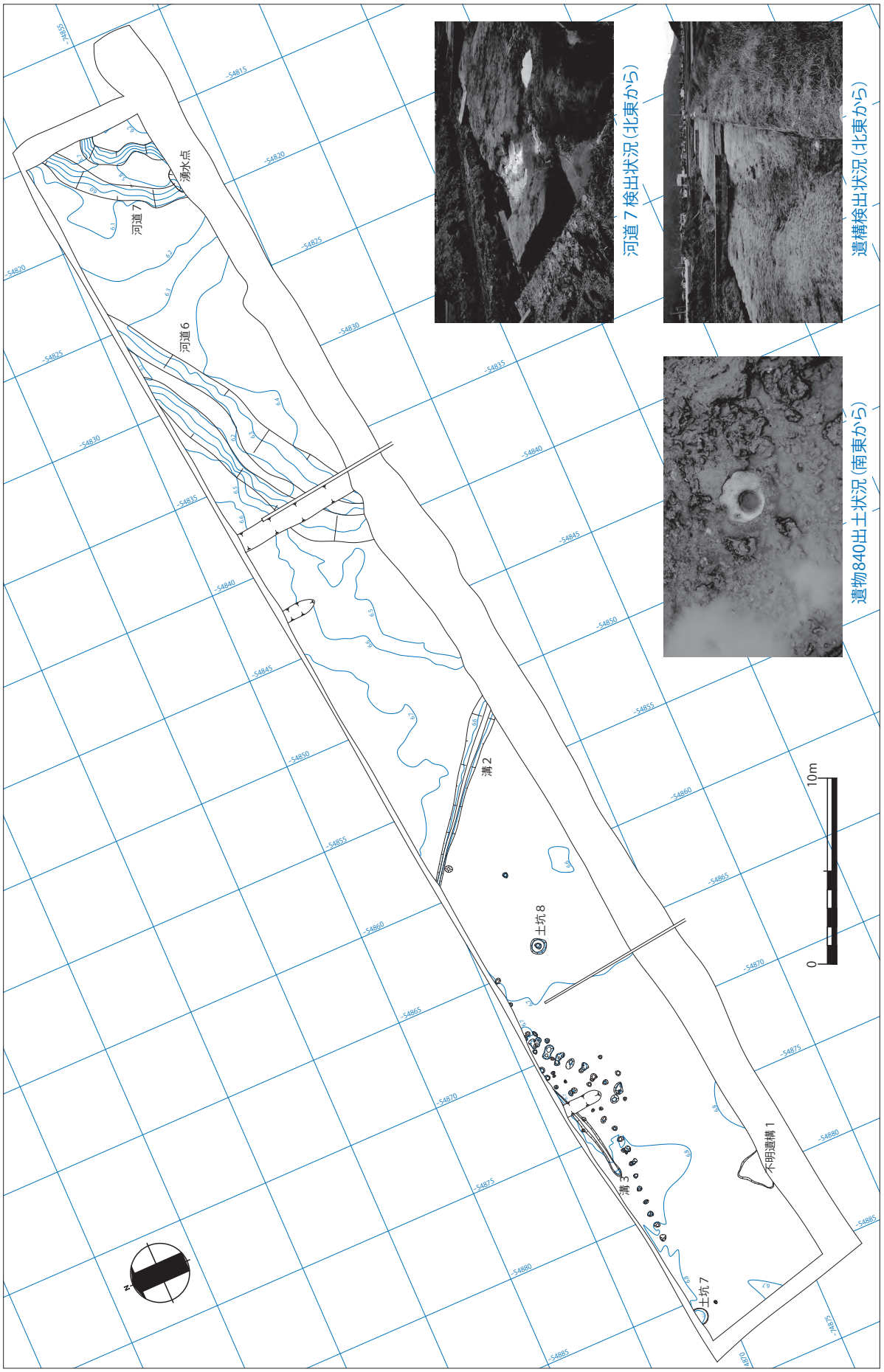
【河道６】

河道６は幅約 3.0 m、深さ約 0.3 mの規模をもつ。河道５が埋没して生まれていることや河道底の標高から、調査区を西から東に流れていたと考えた。埋土は、黒褐色を呈する粘質土層（第 47

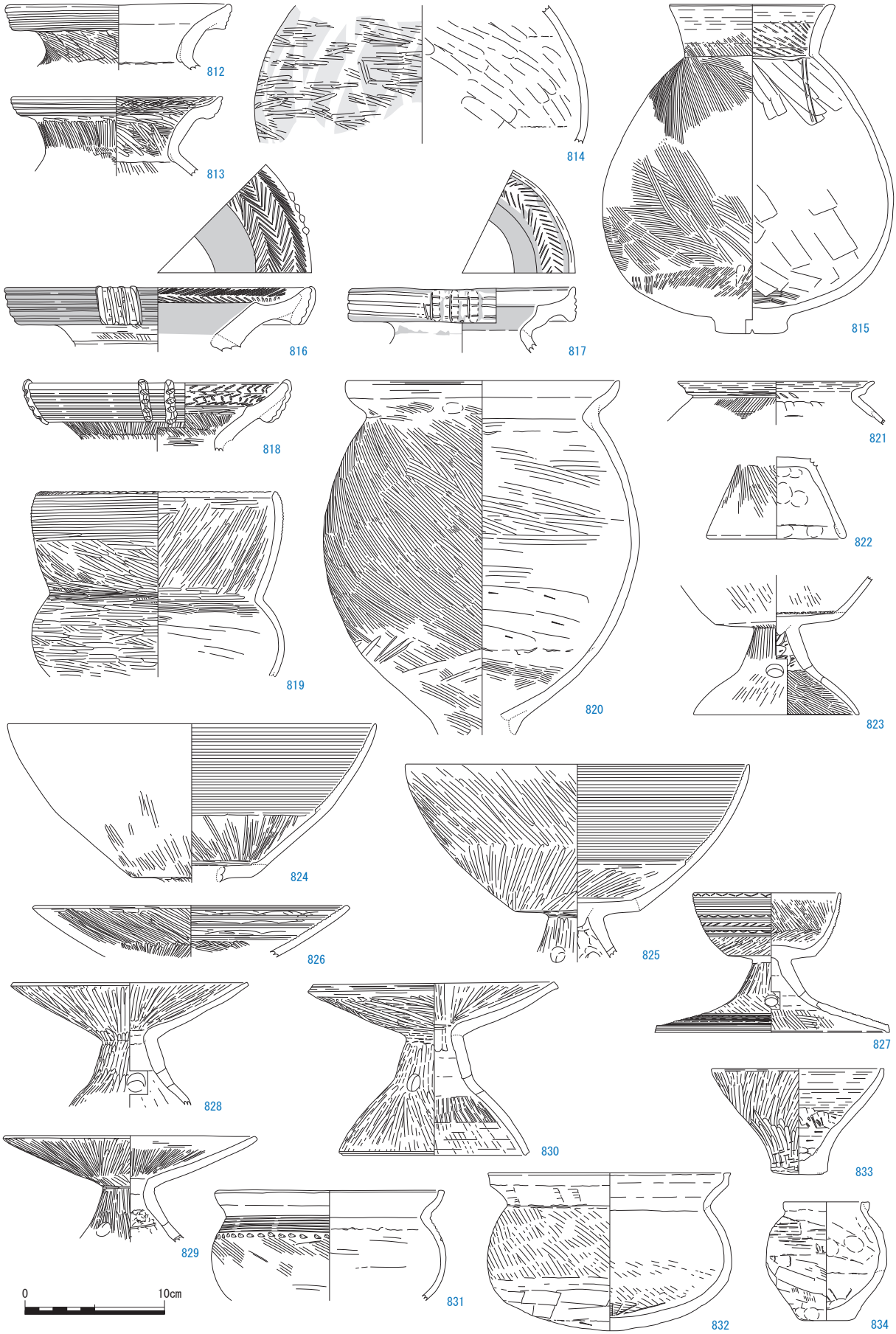
図６層）からなっており、２区の河道３に対応している。埋土から多量の土器が出土した。

この河道６から出土した土器のうち、23 点の土器を図示した（第 77 図の 812 ～ 834）。

812 ～ 819 は壺である。812 は外反する口縁部をもち、拡張した口縁端部外面に擬凹線文を施している。口縁部内外面ともにミガキを施していない。813 は拡張した口縁端部外面に擬凹線文を施している。口縁端部内面に内彎した文様帯を形成しているが、刺突文が施された範囲は全周の４分の１程度である。口縁屈曲部外面や口縁端部内面に、横方向のミガキを確認できる。814 は体部で、ややしもぶくれ状を呈している。横方向のミガキを施した外面には、籠目の痕跡が残っている。815 はわずかに外反する短い口縁部に、しもぶくれ状の体部、突出した平底をもつ。内外面ともにミガキを施しておらず、平底の外面中央に小さな孔が残る。816 は拡張した口縁端部外面に擬凹線文を施した後、４本の棒状浮文を付加している。口縁端部の内面には、内彎した文様帯を形成しており、羽状に並ぶ４列の刺突文を施している。口縁端部外面と口縁部内面に赤彩を施しているが、文様帯上は赤彩していない。817 は拡張した口縁端部外面に擬凹線文を施した後、３本の棒状浮文を付加している。ただ、棒状浮文は残存しておらず、その痕には割付のための沈線のみが残されていた。口縁端部内面には、内彎した文様帯を形成しており、羽状に並ぶ２列の刺突文を施している。口縁端部外面や口縁部内面、頸部外面の一部を赤彩している。818 は拡張した口縁端部外面に擬凹線文を施した後、刻みを施した２本の棒状浮文を４方向に付加している。口縁端部内面には、内彎した文様帯を形成しており、羽状に並ぶ５列の刺突文を施している。口縁部内面の一部と頸部内面に横方向のミガキを確認できる。赤彩していない。819 は頸部が広く、やや内彎して伸びる長い口縁部をもつ。内傾した口縁端部に刺突文、口縁端部外面に多条沈線文を施している。口縁部内面の一部や体部外面に横方向のミガキを確認できる。820 ～ 822 は甕である。820 は痕跡的な受口状の口縁部をもち、口縁端部を面取りしていない。体部の最大径を中位にもち、脚台をもつ。体部内面下半にケズリを確認できる。821 は S 字状の口縁部をもつ。口縁端部を丸くおさめ、口縁端部内面に明瞭な面をもたない。頸部外面に１条の沈線、頸部外面からやや下がった位置にヨコハケを施している。822 は S 字甕の脚台部である。直線的に開く裾部をもち、裾端部を内側に折り返している。823 ～ 827 は高杯である。823 は杯部が深い。口縁部と杯底部の内面境には横方向のミガキを施し、その境を明瞭にしている。内彎して開く脚部をもち、脚部中位に３方向の透孔を施している。口縁部内外面及び裾部外面に斜め方向のミガキを確認できる。裾部内面にはハケの痕跡が残っている。824 は杯部が深く、わずかに内彎して立ち上がる口縁部をもつ。口縁部内面には有段の文様帯を形成し、多条沈線文を施している。口縁部と杯底部の内面境に段をもち、口縁部内面にらせん状に施された斜め方向のミガキを確認できる。825 は杯部が深く、内彎して立ち上がる口縁部をもつ。口縁部内面には有段の文様帯を形成し、多条沈線文を施している。口縁部外面はらせん状の斜め方向のミガキを２段に分けて羽状に施しており、口縁部内面でも斜め方向のミガキを確認できる。口縁部と杯底部の内面境に段をもち、脚部には２対の透孔を２方向に施している。826 はわずかに内彎して開く口縁部をもち、口縁端部を面取りしている。口縁部の内面に無段の文様帯を形成し、４帯の直線文とその間に３帯の連弧文を施している。口縁部外面はらせん状の斜め方向のミガキを２段に分けて羽状に施しており、口縁部内面でも斜め方向のミガキ



第 76 図　３区６期平面図（S＝1/300）



第 77 図　3 区 6 期河道 6 出土土器実測図（S ＝ 1/4）

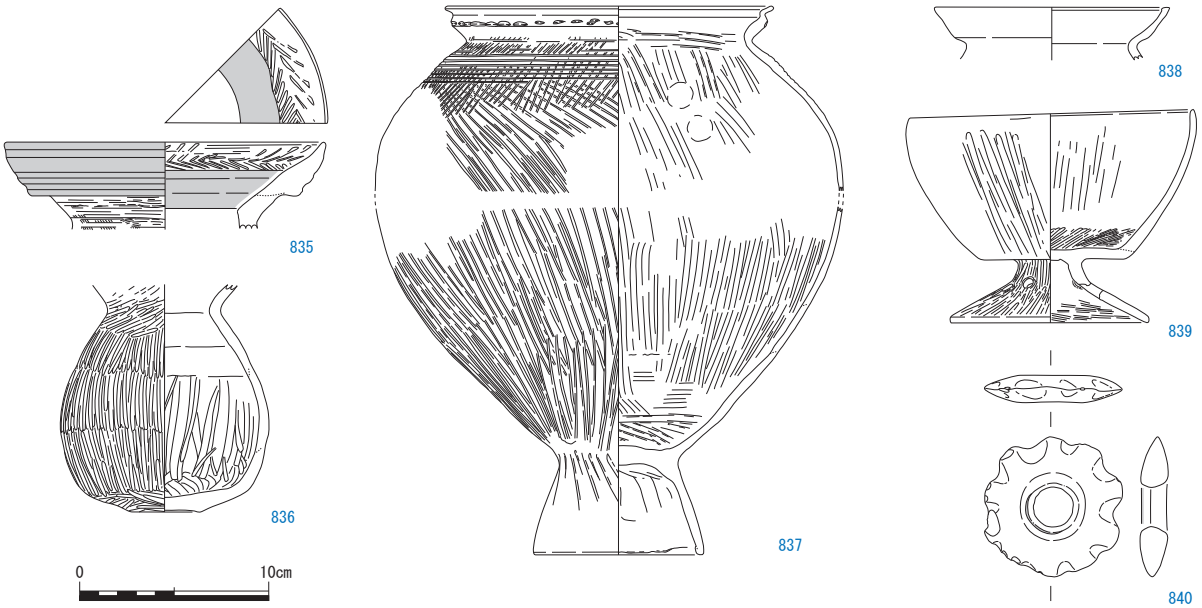
を確認できる。827 は小型の高杯である。口縁部は箱形を呈し、口縁端部外面に直線文と刺突文を組み合わせた幅広の文様帯を形成している。口径を上回る径をもつ裾部の外面には 4 帯の直線文とその間に 3 帯の刺突文を施しており、裾端部にも直線文を施している。口縁部外面や裾部外面に斜め方向のミガキ、口縁部内面に羽状を呈する 2 段の斜め方向のミガキを確認できる。裾部内面にハケの痕跡が残っている。828 ～ 830 は器台である。828 はほぼ直線的に開く口縁部をもち、口縁端部を面取りしている。中空部分の径は 2.0cm を測る。脚部では均等ではないが 4 方向に透孔をもち、裾部は内彎している。829 はわずかに内彎する口縁部をもち、口縁端部を面取りしている。中空部分の径は 1.8cm を測り、脚部には 3 方向の透孔をもつ。830 はわずかに内彎する口縁部をもち、口縁端部を面取りしている。中空部分の径は 2.4cm を測る。脚部では裾部が内彎しており、脚部中位よりやや上に 3 方向の透孔を施している。口縁部外面や裾部外面に斜め方向のミガキを確認できる。また、脚部内面は裾端部のみ、ナデによって成形や調整の痕跡を消し去っているが、上半にはハケの痕跡が残っている。831 ～ 833 は鉢である。831 は受口状の口縁部をもつが、その形状は痕跡的である。体部はやや扁平で、口径と体部径がほぼ等しい。832 は受口状の口縁部をもつ。口縁端部屈曲部までの口縁部がやや長い。やや扁平な体部に丸底をもち無文である。口径と体部径がほぼ等しい。833 は平底で、ほぼ直線的に開く口縁部をもつ。体部外面に丁寧なミガキを施している。834 はミニチュア土器で、球形の体部に平底をもつ。

【河道７】

河道 7 は幅約 0.9 m、深さ約 0.3 mの小規模な河道で、河道底の標高から、調査区を南西から北東に流れていたと判断した。また、X=-74838.8,Y=-54836.5 付近で湧水点の可能性がある窪みを確認できている。埋土の大半は灰色を呈する弱粘質土や砂で占められており、埋土からは土器や石器が出土している。

この河道 7 から出土した遺物のうち、 5 点の土器と 1 点の石器を図示した（第 78 図の 835 ～ 840）。

835・836 は壺である。835 は拡張した口縁端部外面に擬凹線文を施している。口縁端部の内面に、やや内彎した文様帯を形成し、羽状に並ぶ 2 列の刺突文を施している。口縁端部外面と口縁部内面を赤彩しているが、文様帯上は赤彩していない。口縁部内外面ともにミガキを確認できない。836 は小型で、しもぶくれ状の体部と平底をもつ。体部外面は縦方向のミガキを施しているが、頸部と底部付近には斜め方向のミガキを施している。837・838 は甕である。837 は S 字状の口縁部をもつ。口縁部 2 段目外面に押引状の刺突文を施し、頸部内面にハケを施す。体部外面に羽状のハケを施しており、ヨコハケは頸部からやや下がった位置に施されている。体部は肩部の張りがやや強調されており、体部内面にはハケを確認できる。838 は下半がわずかに屈曲する口縁部をもち、口縁部内外面ともに横方向のナデが施されている。畿内に見られる布留式甕の形態的特徴をもつ。839 は高杯である。杯部が深く、口縁部は内彎している。脚部は低く、柱状部と裾部の屈曲にあわせて、２対の透孔を２方向に施している。杯底部内面に斜め方向のミガキ、裾部内面にハケを確認できる。840 は多頭石斧である。直径 7.4cm、厚み 1.4cm、穿孔径 2.1cm を測る。石材には緑色凝灰岩を使用している。



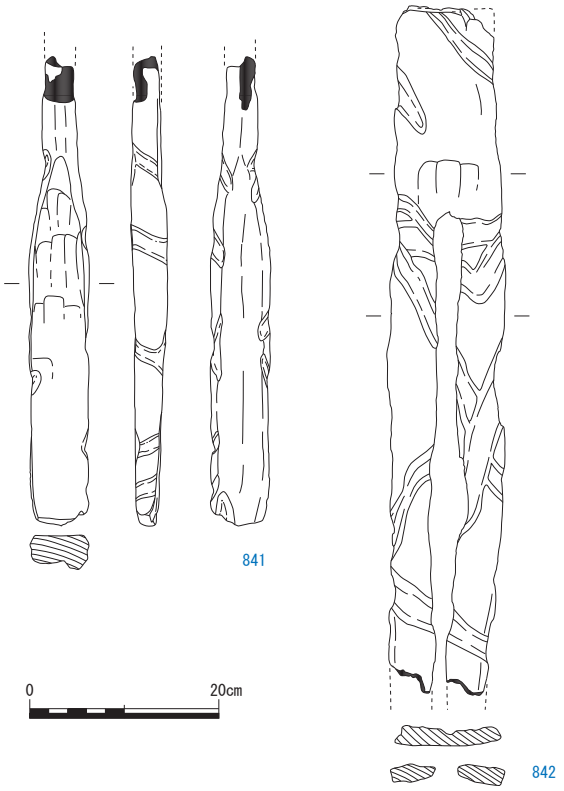
第 78 図　3 区 6 期河道 7 出土遺物実測図（S ＝ 1/4）

【溝 2 ・ 3】

溝 2 は幅約 0.3 ～ 1.2 m、深さ約 0.1 mを測る。北西から南東に向かうほど幅が広くなり、溝底の標高もわずかであるが低くなる。河道 6 に接続しており、排水路としての機能を果たした可能性があるだろう。埋土は黒褐色を呈する弱粘質土で占められており、土器片や木器が出土している。溝 3 は幅 0.3 ～ 0.4 m、深さ約 0.1 mを測る。埋土は黒褐色を呈する弱粘質土で占められており、土器片が出土している。

この溝 2 ・ 3 から出土した遺物のうち、溝 2 の埋土から出土した 2 点の木器を図示した（第 79 図の 841 ～ 842）。

841 は櫂である。板目材を用いている。水かき部分の長さ 38.9cm、水かき部分の幅 6.0cm、水かき部分の厚み 3.5cm を測る。水かき部分の側面に 11 箇所の幅 2.4cm の圧痕を確認できるが詳細は不明である。842 は板状の木製品である。柾目材を使用しており、幅約 11cm、厚み約 2.0cm を測る。中央に幅約 2.0cm の抉りと、抉り部分を中心に幅約 3.0cm の圧痕を確認できるが詳細は不明である。



第 79 図　3 区 6 期溝 2 出土木器実測図（S ＝ 1/8）

【土坑７・８、柱穴、不明遺構１】

土坑７は直径 0.5 mを測る。深さは 0.4 mほどで、埋土は暗灰黄色の砂質土が大半を占める。土坑８は直径 0.9 mを測る。底部で直径 0.3 mを測る凹みを検出できた。柱穴は 59 本確認できており、全て溝２より西側で検出している。直径は 0.2 ～ 0.5 mを測るものが中心で浅いものが多い。調査区西側を中心に列をなしているが、詳細は不明である。不明遺構１は平面形がややいびつな方形を呈し、一辺の長さは約 1.9 mを測る。竪穴建物の可能性があるが詳細を明らかにできなかった。

図示はできていないが、これらのうち、一部の柱穴を除く大半の遺構から、土器の小片が出土している。

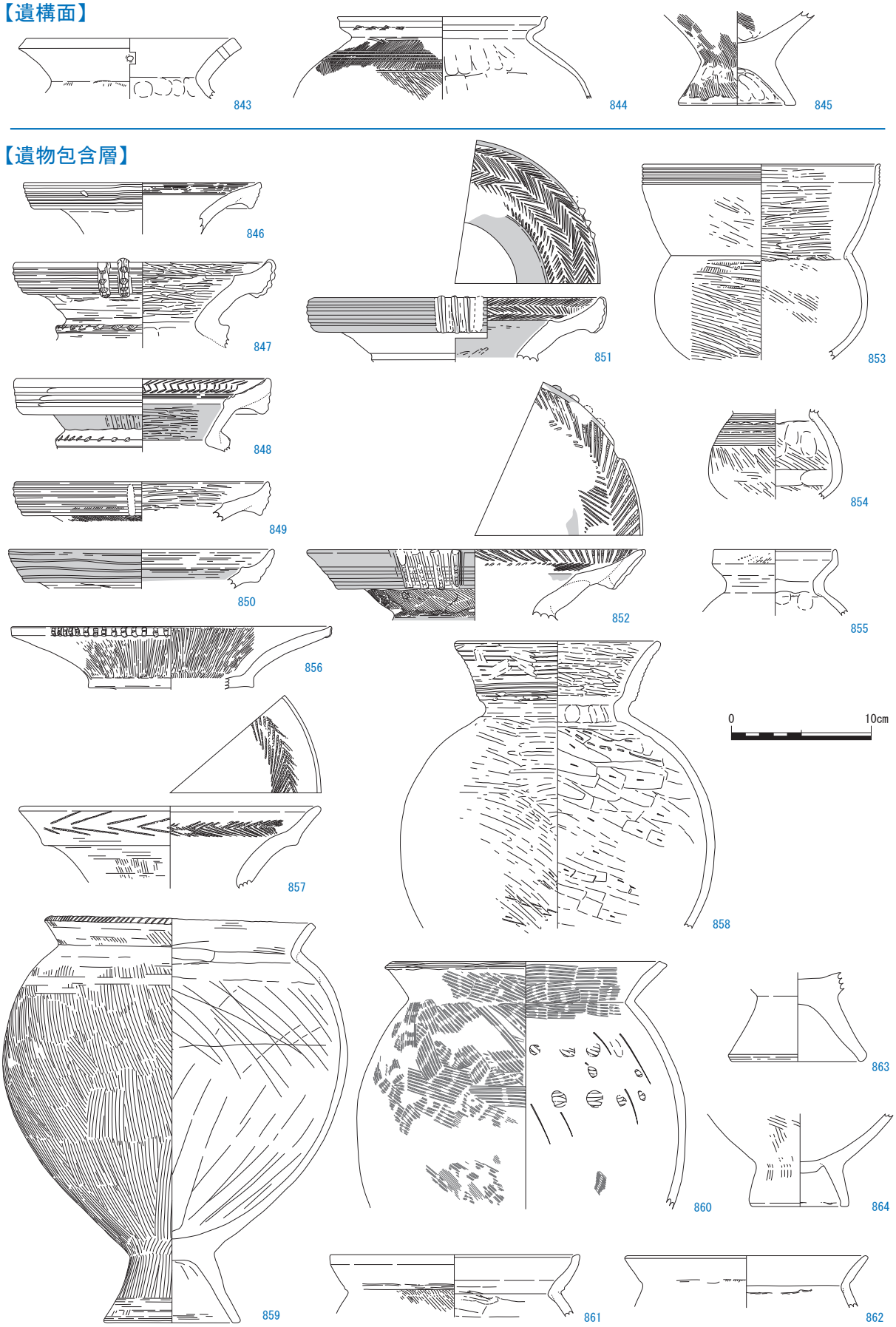
【遺構面・遺物包含層】

６期では、14・15 層上面が遺構面であり、５層が遺物包含層である。この遺構面直上から出土した遺物のうち３点の土器、そして５層から出土した遺物のうち 48 点の土器と１点の土製品を図示した（第 80・81 図の 843 ～ 894）。

843 は壺である。短く外反する口縁部の１方向にのみ透孔を施している。口縁端部に面をもつ。844・845 は甕である。844 はＳ字状の口縁部をもつ。口縁部２段目外面に押引状の刺突文を施す一方、頸部外面には１条の沈線を施している。体部外面に羽状のハケをもち、羽状のハケの境にはヨコハケが施されている。肩部の張りが強調されている。845 は台付甕の脚部である。高さがやや低く、直線的に開いている。

846 ～ 858 は壺である。846 は外反する口縁部をもち、拡張した口縁端部外面に擬凹線文を施している。口縁部内面に有段の文様帯を形成し、文様を意識した横方向のナデを施している。847 は拡張した口縁端部外面に擬凹線文を施した後、刻みを施した２本の棒状浮文を付加している。また、頸部と体部の外面境に刻みを施した１条の突帯を貼り付けている。口縁端部の内面に、内彎した文様帯を形成しているが、文様は施されていない。848 は拡張した口縁端部外面に擬凹線文を施しており、頸部と体部の外面境に刻みを施した１条の突帯と１条の沈線を施している。口縁端部内面には、有段の文様帯を形成し、羽状に並ぶ３列の刺突文と２条の沈線を施している。口縁部内外面に赤彩を確認できるが、文様帯上は赤彩していない。849 は拡張した口縁端部外面に擬凹線文を施した後、棒状浮文を付加している。口縁端部内面に有段でやや内彎した文様帯を形成しているが、文様は施されていない。850 は有段状の口縁端部外面に擬凹線文を施している。口縁端部内面には、内彎した文様帯を形成してしているが、文様を施しておらず、ミガキも確認できない。口縁端部外面と口縁部内面に赤彩を確認できるが、口縁端部内面に作りだした文様帯上は赤彩していない。851 は拡張した口縁端部外面に擬凹線文を施した後、４本の棒状浮文を付加している。口縁端部内面には、内彎した文様帯を形成しており、羽状に並ぶ５列の刺突文を施している。口縁端部外面と口縁部内面に赤彩を確認できるが、棒状浮文と口縁端部内面の文様帯上は赤彩していない。852 は有段状の口縁端部外面に擬凹線文を施した後、４本の棒状浮文を付加している。口縁端部内面に、やや内彎した文様帯を形成しており羽状に並ぶ２列の刺突文を施している。口縁端部外面と口縁部内面、頸部外面に赤彩を確認できるが、棒状浮文と口縁端部内面の文様帯上は赤彩し

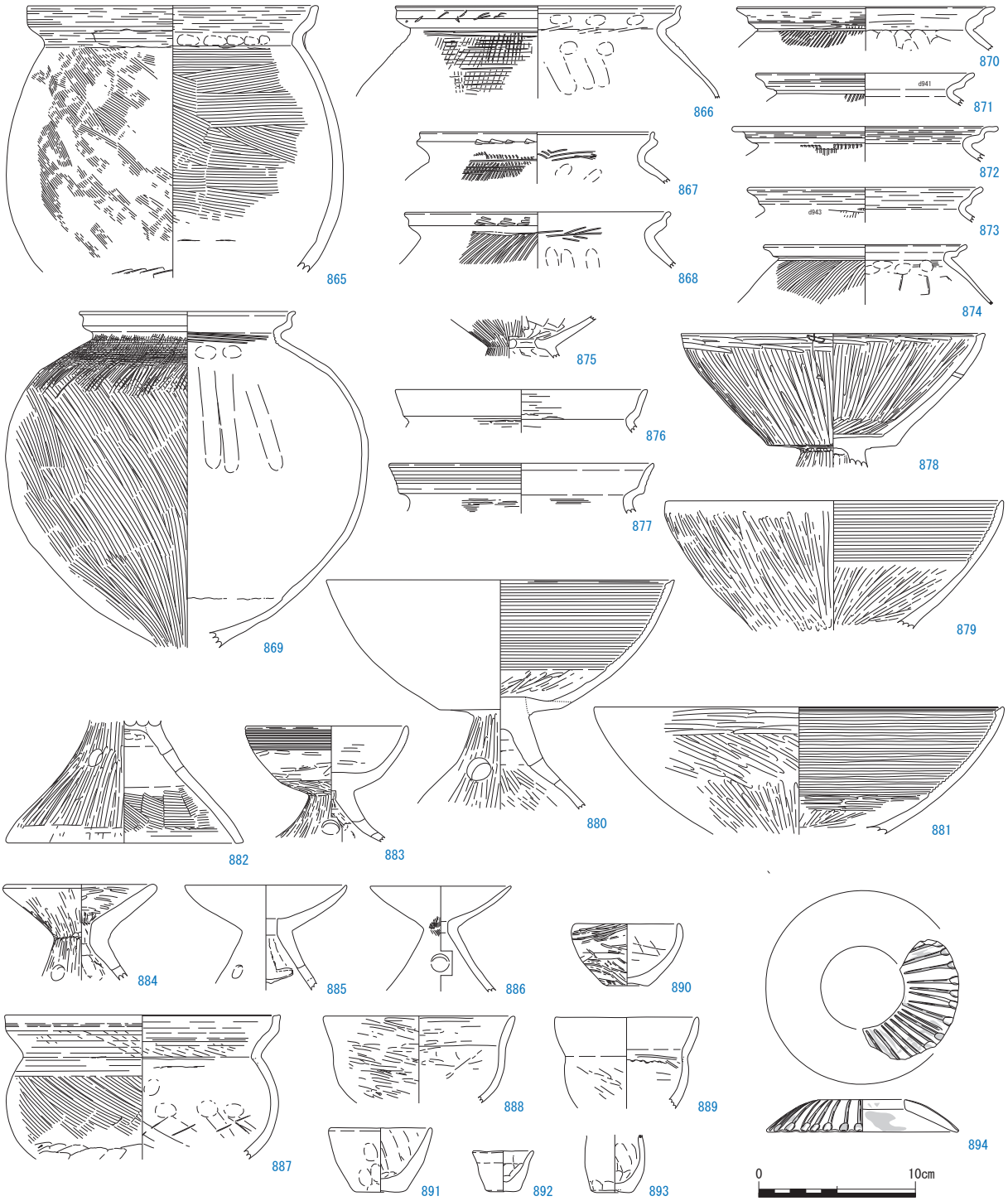
【遺構面】



第 80 図　3 区 6 期遺構面・遺物包含層出土土器実測図 1（S＝1/4）

ていない。853 はほぼ直線的に開く口縁部をもち、口縁端部がわずかに内彎している。口径と頸部径の差が小さく、口縁部及び体部の外面に斜め方向のミガキ、口縁部内面に横方向のミガキを確認できる。口縁端部外面に多条沈線文を施している。854 は小型で、体部はしもぶくれ状を呈している。肩部外面に 3 帯の直線文と、その間に 2 帯の刺突文を施している。855 は受口状の口縁部をもち、口縁端部を丸くおさめている。口縁端部外面に刺突文を確認できる。856 は二重口縁をもち、面をなした口縁端部に棒状浮文を付加している。口縁部内外面ともに縦方向のミガキを施している。857 は二重口縁をもち、口縁部上段の内外面に羽状に並ぶ 2 列の刺突文を施している。858 は有段の口縁部をもち、口縁部外面に擬凹線文を施している。球形を呈する体部の外面に横方向のミガキを施し、内面では頸部付近までケズリを施している。北陸に一般的な特徴をもつ。859 ～ 877 は甕である。859 はく字状の口縁部をもち、面取りした口縁端部に刺突文を施している。体部は最大径を中位よりやや上にもち、脚台をもつ。体部内面のケズリは頸部屈曲部付近まで確認できる。860 はく字状の口縁部をもち、面取りした口縁端部にハケを確認できる。口縁部内面に横方向のハケを施している。861・862 はく字状の口縁部をもつ。861 は口縁部がわずかに内彎しており、862 は口縁部外面の下半にわずかに屈曲を確認できる。863・864 は台付甕の脚部である。864 は脚台がやや低い。865 は受口状の口縁部をもち、体部内外面ともにハケを施している。866 ～ 874 は S 字状の口縁部をもつ。866・867 は口縁部 2 段目外面に押引状の刺突文、頸部内面にハケを施している。体部外面のヨコハケは頸部に接している。867 は口縁部 2 段目がやや短く、口径が口縁屈曲部径を下回っている。868 は口縁部 2 段目外面に押引状の刺突文を施すが、口縁端部内面の面取りを確認できない。頸部内面にハケを施している。体部外面に羽状のハケをもち、頸部外面に沈線を意識した強いナデを施している。869 は頸部内面にハケをもち、体部外面に羽状のハケと頸部に接したヨコハケを施している。肩部の張りが強調されている。口縁端部内面に面取りを確認できない。870・871 は体部外面に羽状のハケ、頸部外面に 1 条の沈線を施している。口縁端部内面を面取りしていない。872 は頸部外面に沈線を意識した強いナデを施し、口縁端部内面に幅の広い面をもつ。873 は体部外面に羽状のハケを施している。口縁端部内面を面取りしていない。また、残存した範囲内では、体部外面のヨコハケも確認できていない。874 は口縁部の S 字状の屈曲がやや不鮮明である。頸部外面に 1 条の沈線を施している。875 は S 字状口縁台付甕の底部である。焼成前に底部に外面から穿孔している。876・877 は有段状の口縁部をもつ。877 は口縁端部外面に擬凹線文を施している。いずれも、北陸に一般的な形態的特徴をもつ。878 ～ 883 は高杯である。878 は深い杯部をもつ。口縁部はやや内彎して立ち上がり、口縁端部は内傾している。口縁部と杯底部の内面境に明瞭な段をもつ。口縁端部内外面に横方向のミガキを確認できる。焼成後、口縁部を内側から穿孔しており、杯部がひび割れている。879 は杯部が深く、わずかに内彎して立ち上がる口縁部をもつ。口縁部内面に有段の文様帯を形成し、多条沈線文を施している。口縁部内面にらせん状に施された斜め方向のミガキを確認できる。880 は杯部が深く、内彎して立ち上がる口縁部をもつ。口縁部内面に有段の文様帯を形成し、多条沈線文を施している。口縁部内面にらせん状に施された斜め方向のミガキを確認できる。内彎して開く脚部に 3 方向の透孔を施しており、裾部の内面にはハケの痕跡が残っている。881 は杯部が深く、内彎して立ち上

がる口縁部をもつ。口縁部内面に有段の文様帯を形成し、多条沈線文を施している。口縁部内外面ともに、らせん状に施された斜め方向のミガキと横方向のミガキを確認できる。882 は内彎して開く脚部をもち、脚部中位より上に 3 方向の透孔を施している。裾端部の内外面にナデが施されているが、脚部の内面にはハケの痕跡が残っている。883 は小型の高杯である。わずかに内彎して立ち上がる口縁部をもち、口縁端部外面に多条沈線文を施している。口縁部内外面ともに横方向のミガキを施し、脚部では 3 方向に透孔を施している。884 ～ 886 は器台である。いずれも脚部が



第 81 図　3 区 6 期遺構面・遺物包含層出土土器実測図 2（S ＝ 1/4）

残存していないが、口径が小さく、脚部径が口径を上回っている可能性が高い。884 の口縁部の内面に横方向のミガキを確認できる。887 ～ 889 は鉢である。887 は受口状の口縁部に扁平な体部をもつ。無文で、口径と体部径がほぼ等しい。888 は小型で緩やかに外反する短い口縁部をもち、口径が体部径を上回っている。口径と頸部径の差が小さく、内外面ともに横方向のミガキを施している。889 は小型でわずかに内彎する口縁部をもち、口径が体部径を上回っている。口径と頸部径の差が小さく、体部外面に斜め方向のミガキを確認できる。890 ～ 893 はミニチュア土器である。890 は小型で内彎する口縁部と平底をもつ。口縁部外面に細かいミガキを確認できる。891 は直線的に開く口縁部と平底、892 はわずかに外反する口縁部と平底、893 は平底をもつ。894 は貝輪形土製品である。外径 12.0cm、内径 5.4cm、器高 2.1cm を測る。表面に放射状の線刻と外縁に沿った押圧痕を確認できる。内外面ともに赤彩を施している。

（13） ６期の年代

図示した 81 点の遺物は、河道６・河道７・溝２・溝３・遺構面・遺物包含層から出土している。このうち、木器のみの図示にとどまった溝２・３以外の遺構及び遺構面、遺物包含層から出土した土器について、その編年的位置の検討を行う。

まず、河道６であるが、しもぶくれ状を呈し、外面に横方向のミガキを施した壺体部（814）や、口縁端部外面に棒状浮文を付加し、口縁端部内面に内彎した文様帯をもつパレス壺（816 ～ 818）、口縁端部内面に明瞭な面をもたず、頸部外面に１条の沈線と頸部外面からやや下がった位置にヨコハケを施す S 字甕（821）を確認できている。また、高杯では、口縁部内面に有段で多条沈線文を施した文様帯をもち、口縁部外面に羽状のミガキをもつもの（825）や、口縁部内面に無段の文様帯をもち、口縁部外面に羽状のミガキをもつもの（826）のほか、口径を上回る裾部径をもち、口縁部内面に羽状のミガキを施す小型の高杯（827）もある。このほか、口径は縮小していないが、裾部が内彎している器台（828･829）や、無文で、やや扁平な体部と丸底をもつ鉢（832）も確認できている。以上の諸特徴から、河道６の出土土器の編年的位置を、廻間Ⅰ式４段階古～廻間Ⅲ式１段階の範疇で捉えられると考える。

次に河道７であるが、拡張した口縁端部外面が有段状を呈し、口縁端部内面の文様帯に刺突文を施すパレス壺（835）や、しもぶくれ状の体部をもち小型化が著しい壺（836）、口縁部に押引状の刺突文を施し、頸部内面にはハケを施すが、ヨコハケの位置は頸部からやや下がっており、肩部もやや張る S 字甕（837）、内彎する深い口縁部に低脚をもつ高杯（839）が確認できている。これらの諸特徴から、河道７の出土土器の編年的位置を、廻間Ⅱ式２段階を中心とした範疇で捉えられると考える。

最後に遺構面・遺物包含層であるが、遺構面からは、口縁部に押引状の刺突文を施すが、頸部外面に１条の沈線をもち、ヨコハケが頸部から下がって位置に施される S 字甕（844）を確認できている。遺物包含層からは、面取りした口縁端部に刺突文を施すく字状口縁台付甕（859）や、口縁部に押引状の刺突文を施し、頸部内面にハケ、体部外面に頸部に接したヨコハケをもつ S 字甕（866･

867)、口縁部内面にやや幅広で有段の文様帯を形成し、多条沈線文を施している高杯（879）を確認できている一方で、二重口縁をもつ壺（856）や二重口縁をもち口縁部上段の内外面に羽状に並ぶ２列の刺突文を施す柳ケ坪型壺（857)、口縁端部内面の面取りを行わず、頸部外面に１条の沈線を施すＳ字甕（870･871)、口径が縮小した器台（884 ～ 886）も確認できている。そのため、その編年的位置は廻間Ⅰ式４段階新～廻間Ⅲ式４段階の範疇で捉えられると考える。

（14）小結

３区の発掘調査では、山中Ⅰ式２段階～廻間Ⅲ式４段階に属する遺物が出土し、層位から大きく６時期に区分した。

１期では、幅約７ｍ以上の河道１が調査区を西から東に流れており、調査区西端から約 25 ｍ東の地点で、河道１から河道２が分流していた。そのため、両河道の間には中州が形成されている。河道１・２から出土した土器の編年的位置は山中Ⅰ式２段階～山中Ⅱ式１段階を中心としたもので、この２本の河道以外に明確な遺構を確認できなかった。しかし、河道１の北岸法面において１箇所の土器集中部を確認できていることや、河道１・２から多量の遺物を確認できたこと、サブトレンチの北壁断面において遺構埋土の可能性が高い 58 層を確認できたことなどから、１期には既に、当調査区の周辺に集落などが形成されていた可能性が高い。

２期では、河道１がやや東に流路を変え、河道３となる。河道３から出土した土器の編年的位置は山中Ⅱ式１段階～山中Ⅱ式２段階を中心としたものである。一方、河道２は埋没し、その跡地には環濠が掘削された。河道２の埋土に、人為的な堆積の特徴が見られないことと、当調査区の北側で確認できている環濠の延長状況から、環濠は自然に埋没しつつあった河道２の地形を利用して掘削された可能性がある。また、河道３に接続されていることから、水を湛えたものであっただろう。環濠の西側では、７棟の竪穴建物を確認できており、それらのうち竪穴建物２・５・６からは、山中Ⅱ式２段階を中心とした土器を確認できた。そのため、当期においては確実に集落が形成されており、その集落は環濠を備えたものであった。

３期では、維持されなくなった環濠が埋没し、河道３の北岸に階段状の地形が形成される。これにより、環濠と河道３の間に形成されていた島状の高まりは、テラス状の地形に変化した。このテラス状の地形に堆積した 37･38 層からは、山中Ⅱ式１段階～廻間Ⅰ式１段階を中心とした土器が出土している。環濠の埋土に人為的な堆積の特徴はなく、出土した土器から環濠が明確に維持されなくなり、埋没をはじめた時期は廻間Ⅰ式期１段階であったと判断した。その後、徐々に埋没していき、廻間Ⅰ式期２段階には完全に姿を消している。階段状の地形の西側では、山中Ⅱ式期１段階～廻間Ⅰ式期２段階に収まる４棟の竪穴建物（８～ 11）を確認できており、環濠埋没後も集落は維持されていた。

４期では、河道３の北岸に形成されていた階段状の地形が埋没して平坦になり、河道３も流路をやや東に変え、河道４となる。河道４から出土した土器の編年的位置は山中Ⅱ式２段階～廻間Ⅰ式４段階古を中心としたものである。河道４の北岸では、２棟の竪穴建物と２基の土坑を確認できて

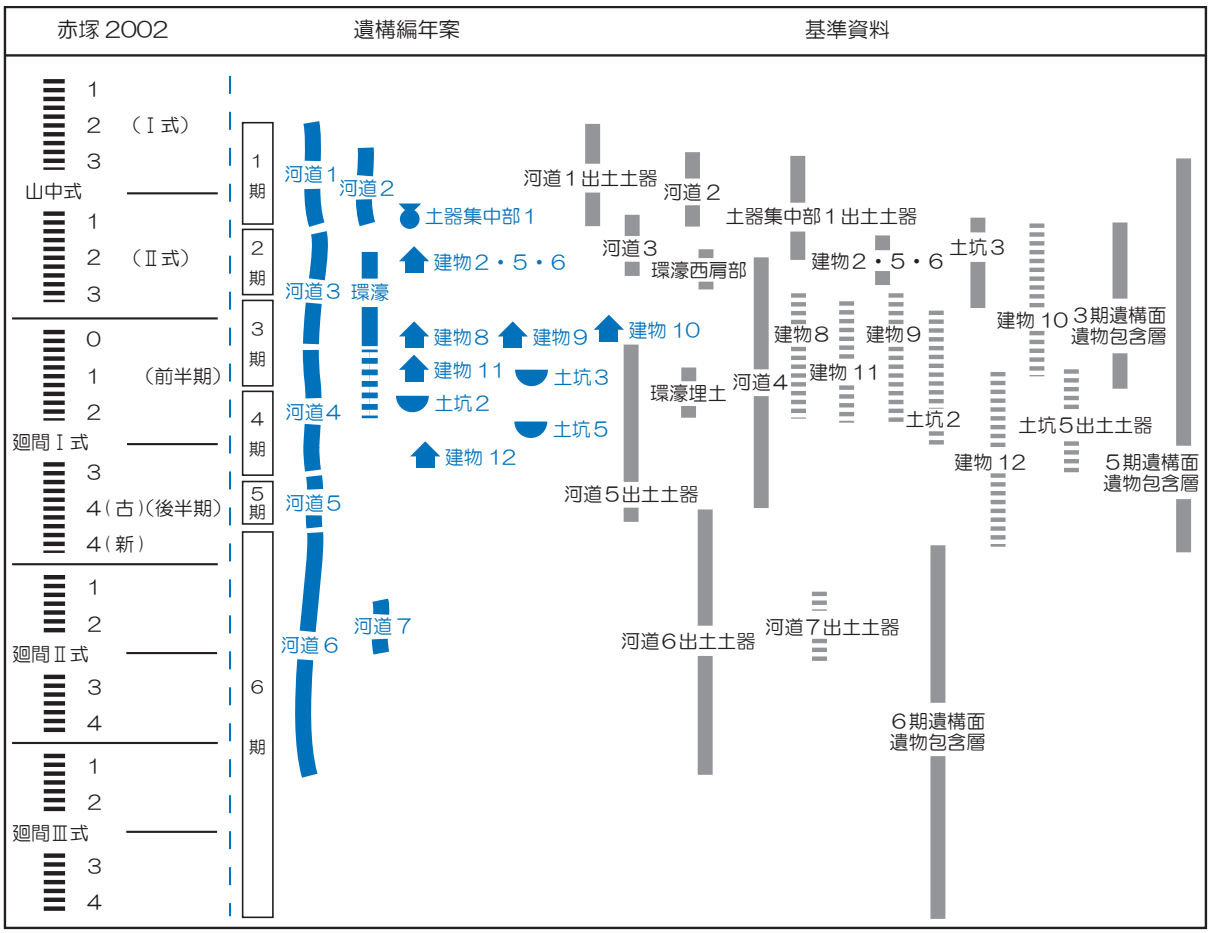
おり、このうち１棟の竪穴建物からは廻間Ⅰ式０～４段階新、１基の土坑からは廻間Ⅰ式１段階～廻間Ⅰ式３段階の土器が出土している。河道と集落域の間に明瞭な境はない。

５期では、河道４が規模を幅 4.3 ～ 6.0 mに縮小し、河道５となる。河道５は、埋土の大半が、粗砂層や砂礫層の一括堆積で占められており、大雨などによる多量の土砂流出によって、ごく短期間に、その規模を大きく縮小した可能性が高い。埋土から出土した土器の編年的位置は廻間Ⅰ式０段階～廻間Ⅰ式４段階古とやや幅をもつが、２区の河道２と同一の遺構であり、河道５の所属時期の上限は廻間Ⅰ式期３段階に収まるだろう。そのため、４期において確認した２棟の竪穴建物と２基の土坑は、当期においても存続していたであろうが、それらの埋土に河道５と同じ特徴をもつものはなく、当調査区の周辺においては、河道５を埋め尽くした土砂が、河道５を超えて微高地にまで影響を及ぼすことはなかったと判断できる。ただ、当期と６期の間には厚い遺物包含層が形成されていることから、その後まもなく、遺構面上においても堆積は進んだであろう。

６期では、河道５が大きく規模を縮小し河道６となる。河道６は、埋没状況などから、２区の河道３と同一である可能性が高い。埋土から出土した多量の土器の編年的位置は廻間Ⅰ式４段階古～廻間Ⅲ式１段階の範疇に収まる。埋土は黒褐色を呈する粘質土であり、埋没直前は滞水が著しかった可能性が高い。河道６の東側では河道７、河道６の西側では、河道６に接続したであろう溝２を確認できている。また、溝２の西側では、５期までは多数検出できた竪穴建物を確認できなくなった一方、多数の柱穴を確認できるようになった。６期になって、当調査区の地形環境が、周辺より相対的に低下した可能性を示すものと考える。

以上のように、３区の発掘調査の結果、日吉遺跡では、少なくとも山中Ⅰ式期２段階には、人的活動を開始しており、山中Ⅱ式期２段階には、環濠集落を形成したことを明らかにできた。この環濠は、廻間Ⅰ式期１段階には維持されなくなり、廻間Ⅰ式期２段階には完全に埋没している。また、２区でも確認できた廻間Ⅰ式期３段階の河道を大きく縮小させた急激な土砂流出が、集落域にまで及ばなかったことも明らかにできた。

最後に、３区の主な遺構・遺物の編年的位置を第 82 図に整理しておく。



第 82 図　３区の主な遺構の編年的位置

7 結　語

平成 19 年度からの２年間にわたる発掘調査の結果、日吉遺跡における集落の変遷と、これをとりまく自然環境の変化を明らかにできた。ここでは、その成果をまとめて、報告における結語としたい。

日吉遺跡での人的活動の端緒は山中Ⅰ式期２段階である。ただ、竪穴建物が明確に確認できるようになるのは、山中Ⅱ式期２段階であった。環濠が掘削されるのも、同じ山中Ⅱ式期２段階であり、日吉遺跡は、成立後まもなく集落に環濠を備えた。しかし、この環濠が維持されるのは廻間Ⅰ式期０段階までであり、２段階には完全に埋没する。そして、環濠が維持されなくなる廻間Ⅰ式期０段階以降、環濠跡東側の河道下流部において、河川祭祀の痕跡とわかる土器集中部を複数確認できるようになった。この廻間Ⅰ式期０段階は、列島が長周期変動期に入る時期であり、環境が不安定になったことが指摘されている*。河川祭祀跡の増加は、こうした環境の変化と無関係ではなかっただろう。そして、廻間Ⅰ式期４段階（古）頃に、急激な土砂流出によって、日吉遺跡を西から東に流れる河道は、その規模を大きく縮小した。

しかし、日吉遺跡における人的活動は廻間Ⅲ式期４段階まで続く。規模を縮小した河道からは、前段階に引き続き、多量の土器や種子が出土しており、急激な土砂流出後も、河川祭祀は継続された。そして、廻間Ⅱ式期１段階に入ると、明確な竪穴建物を確認できなくなり、代わって柱穴が増える。当調査区付近が、周囲に比べ、相対的に低地化した可能性を示すものであろう。

以上、弥生時代から古墳時代への移行期に、養老町域においてなされた集落変遷の一端を明らかにした。すなわち、山中Ⅰ式期２段階から廻間Ⅲ式期４段階まで継続して人的活動が行われる日吉遺跡において、環濠が維持されなくなるとともに、自然環境が悪化し始めるのが廻間Ⅰ式期０段階であり、廻間Ⅰ式期４段階（古）以降、日吉遺跡を取り巻く地形環境は大きく変化し、当調査地点は周囲に比べ相対的に低地化した可能性が高いことを示した。

中でも、廻間Ⅰ式期０段階は、象鼻山山頂部において造墓の端緒となる象鼻山３号墳（上円下方壇）が築造された画期である。そのため、日吉遺跡において確認できた集落の変遷は、象鼻山においてなされた一連の造墓活動と同じ社会的背景をもつ可能性が高い。そして、この社会的背景を、小地域を越えた支配層の連合の意義が増大し、伊勢湾沿岸部を中心に新たな政治的まとまりが形成されたと評価するならば、日吉遺跡と象鼻山古墳群における調査結果は、当地域において古墳が出現するプロセスのみならず、日本列島の弥生時代から古墳時代への社会変化を考える上でも重要な意義をもつであろう。そして、象鼻山に明確な造墓を確認できない廻間Ⅰ式期後半から、象鼻山１号墳が築造される廻間Ⅲ式期Ⅰ段階までの間に、日吉遺跡をとりまく自然環境が大きく悪化したことには、東海地方に前方後方墳が出現する意義を明らかにする手掛かりがあるように思う。

＊　中塚　武 2012「気候変動と歴史学」『環境の日本史１』吉川弘文館
　　赤塚次郎 2013「２・３世紀の東海と関東」『ふたかみ邪馬台国シンポジウム 13　邪馬台国時代の関東と近畿』

第４章　考　　察

1　日吉遺跡にみる養老町域の土器様相とその画期

養老町教育委員会　中島和哉

（1）　はじめに

弥生時代から古墳時代への社会の変革を考える上で、集落・墳墓・土器を一体のものとしてとり上げ、その関連性を明らかにし、これらの変遷から当該期の社会背景を探ることが重視されている。そうした中、本調査では、弥生時代から古墳時代への移行期の土器が多く出土し、それらの出土地点についても、遺跡の変遷にあわせて情報を収集することができた。また、日吉遺跡の西 2.5km に位置する象鼻山古墳群が、この変革期に造墓活動を活発化させたことも明らかにしている*。

そのため、日吉遺跡において出土した土器を整理し、養老町域における弥生時代から古墳時代への移行期の土器様相を明らかにし、集落や墳墓の変遷と関連付けることができたならば、西濃地域における当該期の動態を知る上で、重要な情報を提供できるだろう。

本考察では、日吉遺跡から出土した土器について、形態と出土地点から得られる情報を基に分類・整理し、器種ごとの変遷を明らかにするとともに、その様相から養老町域における弥生時代から古墳時代への移行期の社会背景を探ることを目指した。

（2）　西濃地域における土器編年研究

西濃地域における弥生時代から古墳時代への移行期の土器編年研究は、資料の少ない段階においては、旧伊勢湾沿岸部という地縁的まとまりを背景に、大参義一や赤塚らによって提示・再整理された山中様式や廻間様式に、西濃地域において明らかにできた土器様相を比較し、その相違点を整理する方向で進められていった**。

しかし、資料が増加するにつれて、尾張低地部の海部・中島郡に限定して設定された廻間様式を基礎として整備された編年案では、西濃地域の土器様相の実態を捉えることが困難になる。こうした状況を踏まえ、内堀信雄と横幕大祐は、西濃地域の出土資料を基にして、西濃地域独自の編年案を提示した***。

両氏によって提供された西濃地域独自の編年案の基礎は、その後、高木宏和と恩田知美によって、さらに細分化が試みられる****。高木は、資料が少ない中で、他地域との併行関係を重視した細

---

*　中島和哉編 2010『象鼻山古墳群発掘調査報告書 - 第１～４次発掘調査の成果 -』養老町教育委員会

**　大参義一 1968「弥生土器から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集』XLV Ⅱ
赤塚次郎 1992「山中式土器について」『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 40 集
赤塚次郎 1990「廻間式土器」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 10 集
中井正幸 1994「美濃における庄内式併行期の土器様相－西美濃を中心に」『庄内式土器研究Ⅵ』

***　内堀信雄・横幕大祐 1998「山中～宇田式併行期の美濃西部土器編年」『土器・墓が語る－美濃の独自性～弥生から古墳へ～』

****　高木宏和・藤田英博 2002「美濃」『弥生土器の様式と編年－東海編』
恩田知美 2004「美濃地方における弥生時代後期から古墳時代初頭の土器様相」『美濃の考古学』第７号

分案を提示し、資料が不足する時期については、将来的な資料の充実をまつ空白期間を設けた。一方、恩田は現状で得られている資料を一連のものとして捉え、土器型式の変遷を重視した細分案を提示し、新出資料が報告された場合には、その都度修正を加えていくとした。

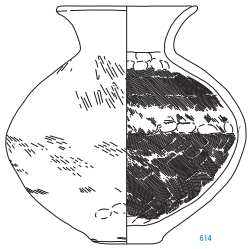
以上のように、西濃地域の土器編年研究は、尾張低地部の研究に端緒をもち、資料の充実とともに様々な角度から分析・検討が加えられ、独自の編年案をもつに至った。しかし、資料不足である点は現在も変わらず、尾張低地部の土器編年研究が、広範囲に及ぶ土器様式の交流や、古墳出現期に独自の様式を維持する過程など、弥生時代からの変化を詳細に捉える努力がなされてきたことと対比すると、さらなる研究が必要である。

そのような現状の中、日吉遺跡では、良好な遺構一括資料はやや少ないものの、一つの遺跡の中で、弥生時代から古墳時代への移行期の土器の出土地点を土層ごとに把握することができている。そのため、西濃地域の土器編年研究に対し、層位を含めた土器の前後関係についての情報を提供することができる。

（3） 日吉遺跡出土土器の形態と分類

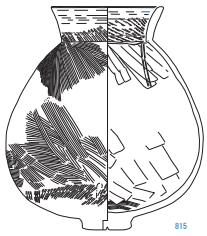
日吉遺跡において普遍的に出土した壺・甕・高杯・器台・鉢の５つの器種について、主に口縁部の形態から、壺を８つ、甕を３つ、高杯を７つ、器台を２つ、鉢を５つに分類した。その詳細は第

壺A



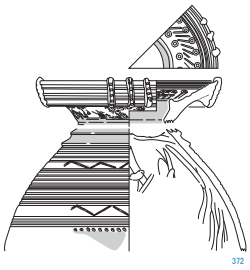
大型で外反する口縁部をもつ。

壺B



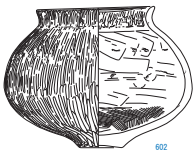
大型で短く直線的に伸びる口縁部をもつ。

壺C



大型で、拡張した口縁端部外面に擬凹線文をもち、各部に赤彩を中心とした加飾を施す。

壺D

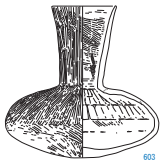


頸部径が広く、短く立ち上がる口縁部をもつ。

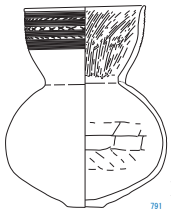
壺E

小型の壺。

E１ (1) 頸部径がやや広く、外反する口縁部をもつ。

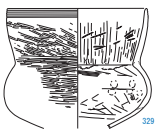


E２ (2) 頸部径が狭く、長い口縁部をもつ。



E３ (3) 内彎して立ち上がる口縁部をもつ。

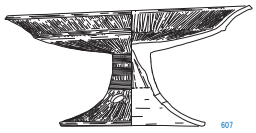
壺F



頸部径が広く、口径・頸部径・体部径の差が小さい。

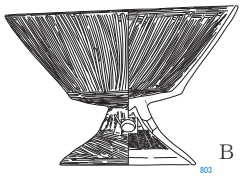
第 83 図　日吉遺跡出土土器の形態と分類１

高杯A



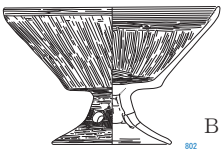
大型で杯部が浅い。

高杯B

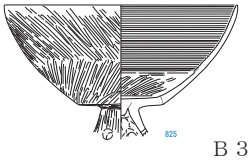


大型で杯部が深い。

B１ (1) 口縁端部内面に文様帯なし。



B２ (2) 口縁端部内面に幅の狭い文様帯。

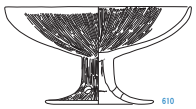


B３ (3) 口縁端部内面に幅の広い文様帯。

高杯C

杯部がワイングラス形を呈する。

高杯D

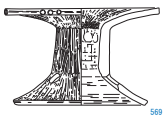


杯部が椀形を呈する。

高杯E

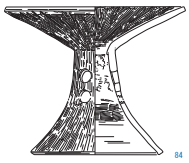
小型で杯部が深い。

器台A



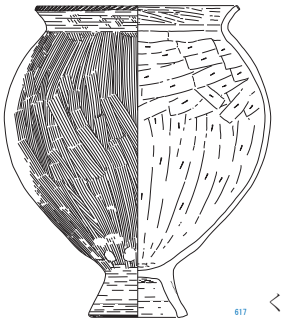
柱状の中空脚をもつ。

器台B



円錐状の中空脚をもつ。

甕A

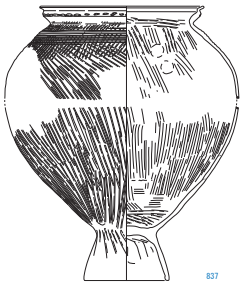


くの字状の口縁部をもつ。

甕B

受口状の口縁部をもつ。

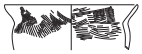
甕C



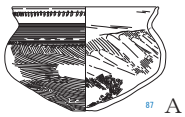
S字状の口縁部をもつ。

鉢A

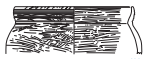
口縁部と体部境に屈曲をもつ。



A１ (1) く字状の口縁部をもつ。

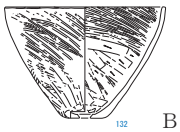


A２ (2) 受口状の口縁部をもつ。



A３ (3) 内外面ともにミガキを施す。

鉢B



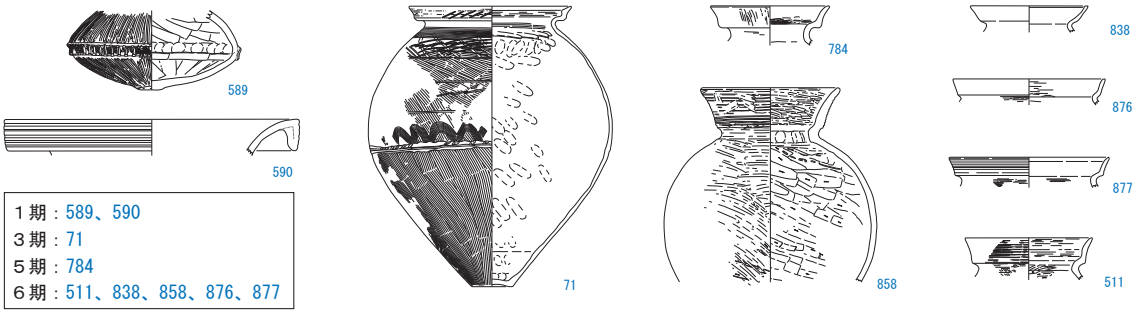
直線的に開く体部をもつ。

B１ (1) 底部に穿孔をもつ。

B２ (2) 底部に穿孔をもたない。

第 84 図　日吉遺跡出土土器の形態と分類２

83・84 図のとおりである。なお、当地域に系譜が追えず、他の地域から単発的に持ち込まれた可能性が高いものや、これらをモデルとして当地域で製作された可能性の高いものについては外来系土器とし、普遍的に出土する器種とは別に整理した（第 85 図）。



第 85 図　日吉遺跡から出土した主な外来系土器

（4）　日吉遺跡出土土器編年案作成の方法

３区の調査において、調査区北壁土層に５つの遺構面を確認できており、そのうちの１面については、環濠の埋没を伴うことから、２時期に分けた。その結果、３区を１～６期に区分できている（第 46・47 図、第２表）。そのため、この３区の土層の前後関係を基礎とし、これに１区の遺構一括出土土器群や、３区と同一と判断できる２区の遺構からの出土土器、そしてそれらと層位的に前後関係をもつ土器を加えて編年案を作成した。

（5）　日吉遺跡出土土器の変遷と様相

１期の様相

３区の河道１・２、土器集中部１、51・52・59 層の出土土器を基準に設定した。

壺はＡ・Ｄ・Ｅ１・Ｅ２、甕はＡ・Ｂ、高杯はＡ・Ｃ・Ｄ、器台はＡ、鉢はＡ２が主体となる。ミガキは、屈曲部などに合わせて部分的に施されたものを除けば、いずれも縦方向に丁寧に施すものが中心であり、体部では最大径をほぼ中位にもち、球形を呈するものが目立つ。赤彩を施した器種は確認できていない。

高杯Ａは口縁部が短く外反しており、柱状の脚部と裾部の境に屈曲をもち、屈曲に合わせて３方向の透孔を施すものが主体である。脚部内面についても裾部を中心にナデによって成形や調整の痕跡を消し去っているものが多い。また、部分的ではあるが加飾も目立つ。器台はそのほとんどがＡであり、高杯Ａと同様に脚部に３方向の透孔を施している。脚部内面についても、ナデによって成形や調整の痕跡を消し去っているものが多い。また、加飾についても、高杯と同様に部分的ではあるが目立つ。柱状部と口縁部・裾部の境が明確であるもののほか、口縁部・裾部ともに柱状部との境が不明瞭であるものや、柱状部と裾部との境のみが不明瞭であるものがあり、形にやや差異があ

る。外来系土器としては、扁平な体部をもち、体部外面にタガ状に粘土を付加した文様帯を形成する壺（589）や、褐色の特徴的な胎土をもつ広口壺（590）を確認できている。前者は瀬戸内地域、後者は畿内に系譜を追えるものと考える。

２期の様相

３区の河道３と環濠西肩部から出土した土器を基準に設定した。

資料が少ないため、確かな判断は難しいが、概ね１期の様相と似た特徴を示している。ただ、当期を境に、壺Ｄや高杯Ｄが姿を消す。一方、次の３期では新たな型式が多く出現する。

３期の様相

３区の３期遺構面・遺物包含層出土土器を基準とし、これに１区土器集中部１から出土した良好な一括資料を加えて設定した。このうち、１区土器集中部１から出土した土器は、高杯ではＢ１、器台ではＢを主体とするほか、高杯や小型壺の口縁部に内彎したものを確認できているが、３期遺構面・遺物包含層出土土器では、高杯、器台ともにＡを主体とし、いずれの器種においても器形に内彎志向を確認できないことから、１区土器集中部１出土土器を、３期遺構面・遺物包含層出土土器に型式的に後出する資料と考え、３期をさらに前半期と後半期に二分した。また、壺Ａ・Ｃと鉢Ｂ１については、１区土器集中部１に層位的に先行する１区１期遺物包含層から出土した土器の中に確認でき、この１区１期遺物包含層出土土器の型式が３区３期遺構面・遺物包含層出土土器によく似た特徴を示していたため、これを３期前半期の資料に加えている。

前半期は、壺はＡ・Ｃ、甕はＡ・Ｂ、高杯はＡ、器台はＡ・Ｂ、鉢はＡ２を主体としており、新たに高杯Ｂ、鉢Ｂ１、器台Ｂが当期を境に出現する。壺Ｃについても、明確に確認できるのは当期からであるが、口縁端部内面にやや内彎する文様帯をもつものが含まれることや、２区河道１出土土器の中に一定量の出土を確認できていることから、前段階の２期には既に存在していた可能性が高い。

壺は、口縁端部内面の文様帯の形状に変化をもたないものが主体であるが、口縁端部内面にやや内彎する文様帯を形成する壺Ｃ（４）も確認できている。甕では、当段階より、Ａ・Ｂともに文様を欠くものを確認できるようになる。器壁の薄いものは確認できない。高杯は、前段階と変わらずＡが主体を占めており、口縁部外面に波状文を施すものも確認できている。また、高杯Ｃも当段階までは確認できている。器台では、Ｂが出現し、その当初から、Ａとともに当期の主体となる。なお、器台Ａが脚部の透孔を主に柱状部と裾部の外面境に施し、脚部内面についてもナデによって成形や調整の痕跡を消し去ることが多いのに対し、器台Ｂでは、透孔を脚部の中位に施し、脚部内面については、裾端部を中心として、ナデによって成形や調整の痕跡を消し去るが、上半にはハケの痕跡を残すものが多い。鉢では、資料数がやや少ないが、前段階に引き続きＡ２が主体を占め、わずかに突出した平底を基本とする。

後半期では、壺はＡ・Ｃ・Ｅ１、甕はＡ・Ｂ、高杯はＢ１、器台はＢ、鉢はＡ１・Ａ２が主体となる。高杯や器台の主要型式がＡからＢに変化するほか、壺Ｅ３が新たに出現し、高杯Ｂにおいて

も口縁部や脚部が内彎するものを確認できるようになる。また、ミガキについては、前段階に引き続き、縦方向に施すものが主体だが、小型壺の体部外面などで横方向に施されるものも確認できるようになる。

壺では、Ｅ１・Ｅ３の体部に横方向のミガキを施すものが増加するほか、Ｅ１の底径が縮小し、丸底状を呈するようになる。また、Ｅ１に体部の最大径を下半にもち、しもぶくれ状を呈するもの（70）も確認できる。甕では、当段階において初めて薄甕（71）を確認できるが、受口状の口縁部に平底をもち、体部の中位には波状文と、１条の沈線と刺突文を施した１帯の貼付突帯を付加するなど、近江湖南地域の特徴を備えたものであった。一方、当段階に甕Ｃは確認できていない。高杯は、当段階からＢが主体を占めるようになり、口縁部や脚部が内彎するもの（80）も確認できる。脚部に施される透孔は３方向が中心であり、位置も脚部の中位ほどまで上がる。また、透孔の数についても、上下一対の透孔を３方向に施すもの（78･79）や、３方向に施した透孔の上段に、さらに１方向の透孔を加えるもの（80）を確認できるようになる。このほか、裾部内面の成形や調整の痕跡をナデによって消し去っているものが多い中で、ナデを施さず、ハケの痕跡を完全に残すものもある。器台も、高杯と同様に、当段階からＢが主体を占める。また、脚部に施される透孔について３方向のものが中心であることや、その位置が脚部のほぼ中位にまで上がること、透孔の数について、上下一対の透孔を３方向に施すものが確認できるようになる点も同様である。ただ、口縁部や脚部に内彎志向を確認できず、脚部内面においても、ナデを施さず、ハケの痕跡を完全に残したものは確認できていない。鉢ではＡ２において、口径が体部径を上回り、さらに口縁部や肩部に文様を施さないものを確認できるようになる。

４期の様相

３区の河道４出土土器のうち、３区の３期遺構面・遺物包含層出土土器より新相を呈するものを基準とし、これに５期の基準資料が出土した３区河道５と同一遺構と判断できる２区河道２に先行する２区河道１上層から出土した資料を加えて設定した。

壺はＡ・Ｃ・Ｅ１、甕はＡ・Ｂ、高杯はＢ、器台もＢ、鉢はＡ２が主体となる。当期を境に、甕Ｃ、高杯Ｂ２、高杯Ｂ３が新たに出現する。ミガキについては、前段階よりも、さらに横方向に施す器種が増え、小型壺の体部外面のほかに、大型壺の口縁部内面や高杯・器台の口縁端部などでも確認できるようになる。このほか、壺Ｅ１と鉢Ａの丸底傾向がさらに進んだ。

壺では、Ｃが比率を増し、赤彩を施したものが目立つ。また、そのほとんどが口縁端部内面の文様帯の形状に変化をもつ。ただ、赤彩や口縁端部内面の文様を欠く壺Ｃも確認できる。甕では、Ｃの占める割合はまだ低い。全て赤塚によるＳ字甕Ａ類の特徴を備えている*。高杯では、Ｂ２・Ｂ３が新たに出現するが、両者に前後関係は確認できていない。ともに、口縁端部内面の文様帯を、粘土を付加し有段としており、無段のものはない。口縁部が内彎するものもあるが顕著ではない。器台では、脚高がやや低くなり始め、中空部分の径もやや縮小する。透孔の位置は脚部中位よりやや上がる。明確に内彎志向を確認できるものはないが、口縁部や脚部にやや内彎を見てとれる。こ

＊　赤塚次郎 1990「廻間式土器」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 10 集

のほか、口縁部が強く開き、口縁端部からくびれ部までの高さが低いものが少量確認できるようになった。鉢では、体部の扁平化と底部の丸底志向が顕著になる。

５期の様相

同一遺構と判断できる３区の河道５と２区の河道２の出土土器を基準とし、これに３区５期遺物包含層出土土器を加えて設定した。なお、３区河道５と３区５期遺物包含層では、層位的に３区河道５が先行する。そのため、３区河道５及び２区河道２出土土器と、３区５期遺物包含層出土土器は前半期と後半期に２分できた可能性があるが、資料数が少ないことから、本考察では一括して取り扱った。

壺はＡ・Ｂ・Ｃ、甕はＡ・Ｂ、高杯はＢ、器台もＢ、鉢はＡ２が主体となる。当期を境に、壺Ｂと高杯Ｅ、鉢Ｂ２が新たに出現しており、全体的に小型化した器種が目立つ。ただ、壺Ｅは当期を境に数を減らしていく。このほか、前段階に比べ、横方向のミガキを施す頻度が格段に増加した。

壺では、Ｂが一定量確認できるようになるとともに、Ｃの比率が前段階よりさらに増した。Ａ・Ｂ・Ｃの多くに、横方向かやや斜め方向のミガキを確認できる。また、第 86 図に図示していないが、Ｅ１だけでなく、Ａ・Ｂ・Ｃにおいても、最大径を中位よりやや下にもつ体部を確認できるようになった。このほか、Ｃで口縁端部外面に棒状浮文を施し、口縁端部内面に粘土を付加した有段の文様帯をもつものを確認できるようになる。甕は、４期の様相と似た特徴を示しており、Ｃの比率は変わらず低く、全て赤塚によるＳ字甕Ａ類の特徴を備えている*。高杯では、Ｂにおいて杯底部径が縮小する一方、口縁部は長くなり、杯部の深さが顕著になる。また、脚部の短脚化が明瞭になった。高杯Ｅに裾部径が口径を上回るものを確認できていない。器台では、Ｂの脚高が、前段階に比べ、さらに低くなった。鉢では、Ａ２において、体部の扁平化と底部の丸底化が顕著であるが、まだ底部にわずかに平らな面が残る。また、Ｂ２の体部内面にわずかに朱の痕跡を確認できており、これに朱の精製に関わる器種であった可能性がある。このほか、外来系土器としては、３区５期遺物包含層から有段の口縁部をもつ壺（784）を確認できている。北陸地域に系譜が追えるものであろう。

６期の様相

同一遺構と判断できる３区の河道６と２区の河道３から出土した土器と、３区の河道６と同じ遺構面から検出できた河道７から出土した土器、２区３期遺構面及び遺物包含層出土土器、３区６期遺構面及び遺物包含層出土土器を基準として設定した。なお、３区河道６、２区河道３、３区河道７、２区３期遺構面、３区６期遺構面と、２区３期遺物包含層、３区６期遺物包含層では、層位的に３区河道６、２区河道３、３区河道７、２区３期遺構面、３区６期遺構面が、２区３期遺物包含層、３区６期遺物包含層に先行するため、これらから出土した土器をさらに前半期と後半期に二分した。ただ、当期の基準資料の型式変化は著しく、今後さらに細分する必要がある。

前半期は、壺はＡ・Ｂ・Ｃ、甕はＡ・Ｂ・Ｃ、高杯はＢ、器台もＢ、鉢はＡ２を主体としており、新たに壺Ｆが当期を境に出現する。前段階に引き続き、小型化した器種が目立ち、中でも壺Ｅの小

＊　赤塚次郎 1990「廻間式土器」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 10 集

型化が顕著である。このほか、受口状口縁部をもつ器種に、口縁端部屈曲部までがやや長いものが目立つ。

壺では、A・B・Cともに体部がしもぶくれ状を呈するものが増えたほか、Cの加飾が顕著になった。甕では、当段階より急激にCの比率が増す。その内訳は、赤塚によるS字甕A類の特徴を備えたものが大半であるが、B類やC類の特徴を備えたものも確認できる*。高杯では、Bにおいて、杯底部の長さが極端に短くなり、口縁部が直線状かあるいはやや内彎して大きく開くものが主体となる。また、口縁部外面に斜め方向のミガキを２段に分けて羽状に施すものも目立つ。このほか、Ｂ３の口縁端部内面の文様帯を、粘土を付加せず、無段としたものが出現した。なお、当段階の基準とした資料の中に、Ｂ２において、口縁端部内面の文様帯を、粘土を付加せず、無段としたものを確認できていないが、１区河道２上層出土土器において、口縁端部内面の文様帯を無段としたＢ２とＢ３が共存していることから、当段階に、Ｂ２においてもＢ３と同じ変化を辿った可能性が高いと考えている。器台Ｂでは、裾部が内彎するものが目立つようになる。また、口縁部が縮小し、底径が口径を大きく上回るようになるのも当段階からである。鉢では、Ａ２において、底部が丸底化した。このほか、外来系土器として、３区６期河道７から布留式甕の形態的特徴を備えた甕（838）や、２区３期遺構面から拡張した有段の口縁部をもち、口縁端部外面に擬凹線文を施す甕（511）を確認できている。前者は畿内、後者は北陸地域に系譜を追えるものであろう。

後半期はやや資料が少なく、確かな傾向を把握できていないが、当期を境に新たに二重口縁壺や鉢Ａ３が出現する。壺においてはCの比率が高く、他にFと縮小が著しい壺Eを確認できる。甕では、前段階に引き続き、Cが一定量を占めるが、その内訳としては、S字甕A類の特徴を備えたものがやや減少し、代わって、B類やC類の特徴を備えたものが増加した*。高杯は、前段階から大きな変化はない。器台Bは底径が口径を大きく上回るものが主体となる。鉢では、これまで主体であったＡ１やＡ２をはじめ、ほとんどの型式が確認できなくなる。なお、外来系土器としては、内外面ともに横方向のミガキを施す鉢Ａ３（888）に布留式の小型精製土器である可能性があるほか、有段の口縁部をもつ壺（858）や甕（876、877）も確認できている。鉢Ａ３（888）については畿内、有段の口縁部をもつ土器については北陸地域に系譜を追えるものであろう。

（6） 日吉編年と山中・廻間編年の併行関係について

弥生時代から古墳時代への移行期の土器は、地域的土器様式を離脱し、広く斉一性を有する土器様式へと変化していく。そのため、当地域における弥生時代から古墳時代への移行期の土器様相を明らかにする上で、他地域の土器様式との比較も必要になるであろう。

そのため、ここで西濃地域の土器編年研究の端緒となり、広範囲に及ぶ土器様式の交流や、古墳時代前期に斉一性の高い土器をもつに至る過程など、弥生時代からの変化を詳細に捉える努力がなされてきた尾張低地部の土器編年の中から、赤塚が提示あるいは再整理した山中・廻間編年と、日

＊　赤塚次郎 1990「廻間式土器」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 10 集

吉編年との併行関係について整理しておく*。

赤塚は山中様式をⅠ式とⅡ式に二分し、さらにⅠ式を３段階、Ⅱ式を３段階に細分した。そして、山中Ⅱ式１段階の主な特徴として、大型で杯部の浅い高杯において、脚部が大きく外反し、透孔がほぼ３方向に統一され、1/3 上位に施されることが多くなることや、杯部の形状が明確に下部が内彎、上部が外彎となり、口縁部外面下位に擬凹線文を施すものが多くなることなどを示している。

また、廻間様式においては、これをⅠ～Ⅲ式に大別し、さらにⅠ式を０～４段階新の６段階、Ⅱ式を４段階、Ⅲ式を４段階に細分している。そして、廻間Ⅰ式０段階の主な特徴として、大型で杯部が深く口縁部が内彎志向を呈する高杯や、円錐状の中空脚をもつ器台の出現、高杯・器台の脚部の透孔が中位かあるいはやや上位に施されること、Ⅰ式３・４段階の主な特徴として、大型で杯部の深い高杯において、杯部が脚部を凌駕するようになることや、パレス壺の口縁端部内面の文様帯が内彎するものが出現すること、Ⅱ式１段階の主な特徴として、大型で杯部の深い高杯の杯部に羽状を呈するミガキを施すものが出現することや、杯底部の長さが極端に短くなること、口縁部が縮小し、底径が口径を大きく上回る器台や、S 字甕の B 類が出現することなどを指摘している。

以上から、日吉１期を山中Ⅱ式１段階、日吉３期前半を廻間Ⅰ式０段階、日吉４期を廻間Ⅰ式３段階、日吉６期前半を廻間Ⅱ式１段階の変化に対応すると考えた。ただ、日吉６期前半は、型式変化が著しく、廻間Ⅰ式４段階から廻間Ⅲ式１段階までを含む可能性がある。また、S 字甕が廻間Ⅰ式３段階併行期においてようやく出現することや、S 字甕が甕の主体を占めるようになるのが廻間Ⅱ式１段階以降であり、かつ A 類が多数を占めることなど、廻間様式と相違もある。

（7） 日吉Ⅰ～Ⅲ式の設定とその画期

ここまで、土器の出土層位と型式を手掛かりとして、日吉遺跡出土土器の主要器種の変遷を分析し、その変化の方向性を明らかにした。また、日吉編年と広域の土器様式を比較するため、山中・廻間編年との併行関係についても整理した。ここでは得られた結果をまとめ、日吉遺跡出土土器の土器様式を設定するとともに、先学の成果に拠りつつ、そこに生じた画期から、当地域における弥生時代から古墳時代への移行期の社会背景を考えたい。

日吉Ⅰ～Ⅲ式の設定

各器種の変化は、必ずしも一致して表れていないが、それらを総括することによって、日吉遺跡出土土器を日吉Ⅰ～Ⅲ式の３つに大別し、２つの画期を見出すことが可能である。すなわち、日吉１～３期前半期をもって日吉Ⅰ式期を設定し、日吉３期後半期～５期をもって日吉Ⅱ式期、日吉６期前半期～後半期をもって日吉Ⅲ式期を設定する。

＊　赤塚次郎 1990「廻間式土器」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 10 集
赤塚次郎 1992「山中式土器について」『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 40 集
赤塚次郎 2002「濃尾平野における弥生時代後期の土器編年」『八王子遺跡考察編』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 92 集
赤塚次郎 1997「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 73 集

日吉Ⅰ式期

日吉１～３期前半期をもって、１～３段階とする。高杯Ａ・Ｃと器台Ａに代表される。主に山中Ⅱ式期から廻間Ⅰ式期０段階に併行している。

全体的に丁寧なつくりの土器が多く、外来系土器では、数は少ないが、瀬戸内地域や畿内、近江湖南地域等に系譜を追える資料を確認できる。土器食膳具のほとんどを高杯Ａが占める。一方、土器煮炊具では、鉢ではＡ２を中心とするものの、甕においてはＡ・Ｂが共に使用されており、特定の器種への集約は確認できない。赤塚は当併行期の伊勢湾沿岸部の土器群が一様でないことを指摘しており、土器食膳具の増加と、各地域が相互に影響を与えながらも、相対的には独自性をもつ地域的様式が維持されることが、この時期の土器様式の大きな特徴である*。

また、弥生時代後期前半の土器食膳具については、木製に比べ耐久性や使用感が劣るにも関わらず増加することから、土器の一見不利にみえる特徴が大切なことと認識され、あえて使用された結果である可能性が示されている**。日吉Ⅰ式期において、土器食膳具が一定量を占めていることは、土器のもつ儀礼的な側面が高められた可能性を示すものであり、当様式における土器の役割は前段階に比して相対的に高まっていただろう。

日吉Ⅱ式期

日吉３期後半期～５期をもって、１～３段階とする。高杯Ｂと器台Ｂに代表される。主に廻間Ⅰ式期１段階から廻間Ⅰ式期４段階古に併行している。

当様式期を境に、高杯や器台だけでなく、土器煮炊具や土器貯蔵具に至るまで、それまでの多くの型式が消失し、代わって高杯Ｂや器台Ｂといった東海西部を中心に斉一性を有する新たな型式の出現を確認できる***。また、土器食膳具の増加に加え、土器煮炊具に器壁を極端に薄く仕上げる甕を確認できるようになった。

以上のような変化は、東海西部で広く見られるものであり、さらに薄甕の出現については、東海西部だけでなく、西日本においても確認されている****。そのため、当様式期における土器様式交流は、前段階である日吉Ⅰ式期に比較しても、活発なものであっただろう。

ただ、当様式の主体となる型式には、高杯Ｂ２やＢ３のように、当地域を中心として分布する可能性が指摘されているものもある*****。このことは、東海西部が斉一性を有する土器様式へと変化していく過程の一翼を、当地域において独自の発展を果たしてきた型式が、担った可能性を示している。

---

*　都出比呂志 1989「個人別食器の成立」『日本農耕社会の成立過程』
　赤塚次郎 1993「山中式という名のデザイン」『考古学フォーラム』３

＊＊　宇野隆夫 1995「前方後方形墳墓体制から前方後円墳体制へ－東日本からみた日本国家の形成過程－」『西谷眞治先生古稀記念論文集』

＊＊＊　赤塚次郎 1993「山中式という名のデザイン」『考古学フォーラム』３

＊＊＊＊　赤塚次郎 1992「東海系のトレース－ 3･4 世紀の伊勢湾沿岸地域－」『古代文化』第 44 巻第６号
　石野博信・関川尚功 1976『纒向』

＊＊＊＊＊　赤塚次郎 1997「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 73 集
　小野木学 1998「欠山式併行期の高坏からみた美濃の地域色」『土器・墓が語る－美濃の独自性～弥生から古墳へ～』
　高木宏和・鈴木元・小野木学・村木誠・宮腰健司・石黒立人 2000「濃尾地方における古墳時代初頭の地域差」『S 字甕を考える』

また、薄甕の出現を、土器食膳具と同様、実用性を強調したものではなく、土器の壊れやすい側面を強調したものと考えるならば、当様式期において、土器の役割はさらに高まったであろう*。

以上の点から、この時期の土器様式の大きな特徴は、土器のもつ儀礼的な側面がさらに高められるとともに、地域毎に独自の発展を果たしてきた土器様式が、東海西部で共有されていくことである。

なお、日吉遺跡における環濠集落の廃絶や、象鼻山における造墓の開始が確認できるのも当画期であり、新しい土器様式の共有と新しい集落の形成が、造墓の開始と一連の現象としてなされたことは、当地域における弥生時代から古墳時代への移行過程を考える上で、重要な知見を与えるものであろう。ただ、当地域では、環濠集落の廃絶と前方後方形墳墓築造の開始は一致しておらず、この間に象鼻山３号墳（上円下方壇）や、方形や円形を呈する墳墓群が象鼻山山頂部に築造された。

日吉Ⅲ式期

日吉６期古～新段階をもって、１～２段階とする。加飾が著しい壺Ｃや壺Ｆ、甕Ｃに代表される。廻間Ⅰ式期４段階新から廻間Ⅲ式期４段階に併行している。前様式に比べて、甕Ｃの出土量が増加するが、土器食膳具の出土量は減少する。外来系土器では、北陸地域に系譜を追えるものを多く確認できるようになるほか、布留式甕の形態的特徴を備えた甕を確認できている。布留式の甕は、これを構成する諸要素が、他の複数地域の関わりの中で捉えられており、土器様式交流の活発化がピークを迎え、日本列島一帯が大きくまとまる時期に、一定のセット関係に統一された土器供膳具とともに日本列島に広く拡散・分布することが明らかにされているが、当様式では、前段階である日吉Ⅱ式期と同様、甕ではＣ、高杯ではＢ２・Ｂ３を主体とするなど、東海西部の様式が維持されており、西日本の影響はほとんど確認できない**。

以上の点から、この土器様式の大きな特徴は、土器の儀礼的な側面が頂点を迎え、衰退をはじめるとともに、畿内の土器様式が日本列島に広く拡散・分布する中で、東海西部を中心とした独自の様式が維持されることである。

なお、当様式併行期には、畿内の土器様式の東日本に対する影響が点的なものに止まる一方で、東海西部が独自の動きを示し、東日本に広く影響を与えたことが明らかにされている***。また、西濃地域において前方後方形墳墓が築造されるのも当様式併行期である****。この一連の変化の背景が、東海西部を起点とした政治的連合体が成立した結果を示すものであるならば、当様式期に前方後方形墳墓である象鼻山１号墳が築造された当地域は、この政治的連合体に加担したであろう***。

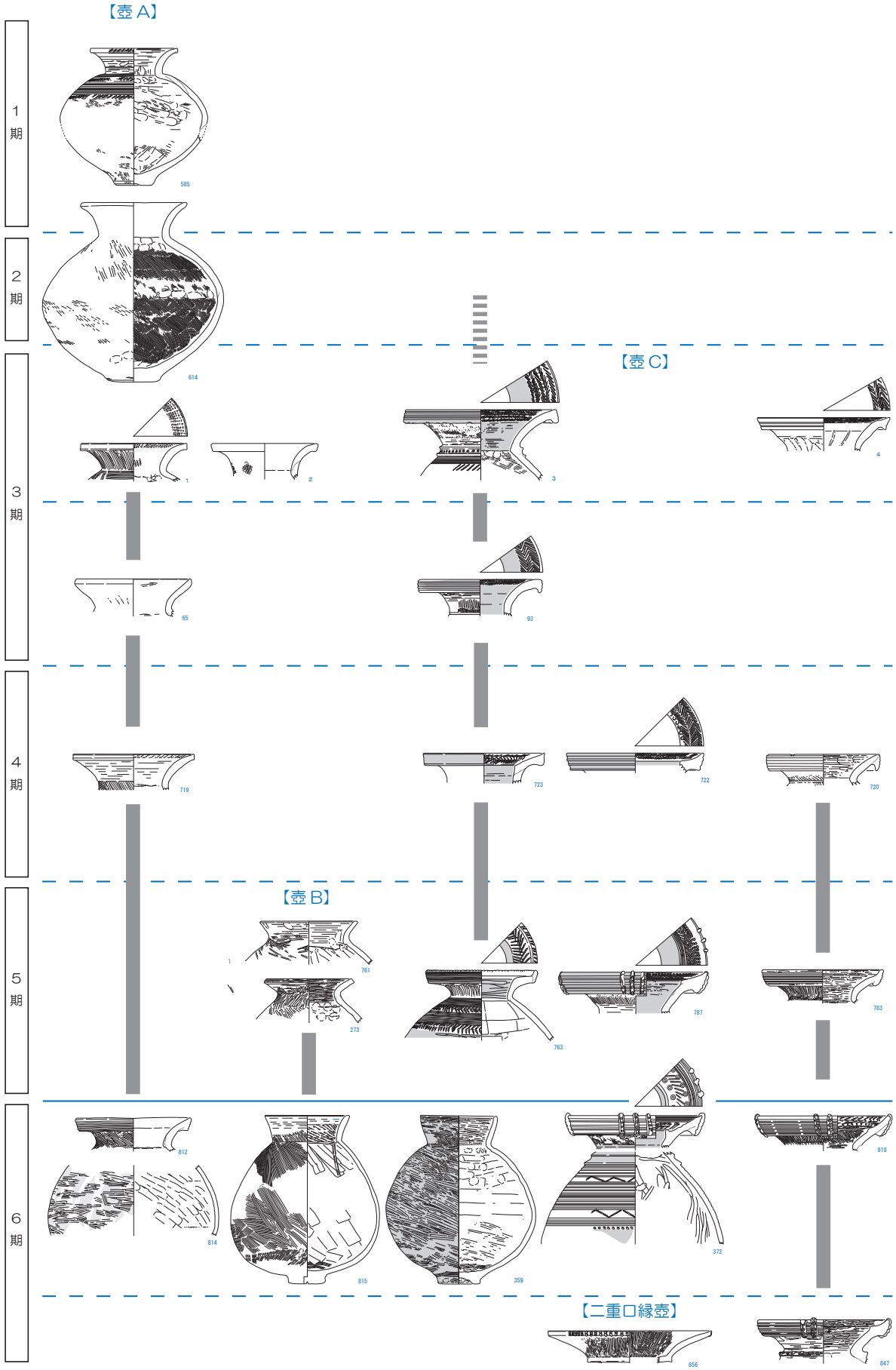
---

* 宇野隆夫 1995「前方後方形墳墓体制から前方後円墳体制へ－東日本からみた日本国家の形成過程－」『西谷眞治先生古稀記念論文集』

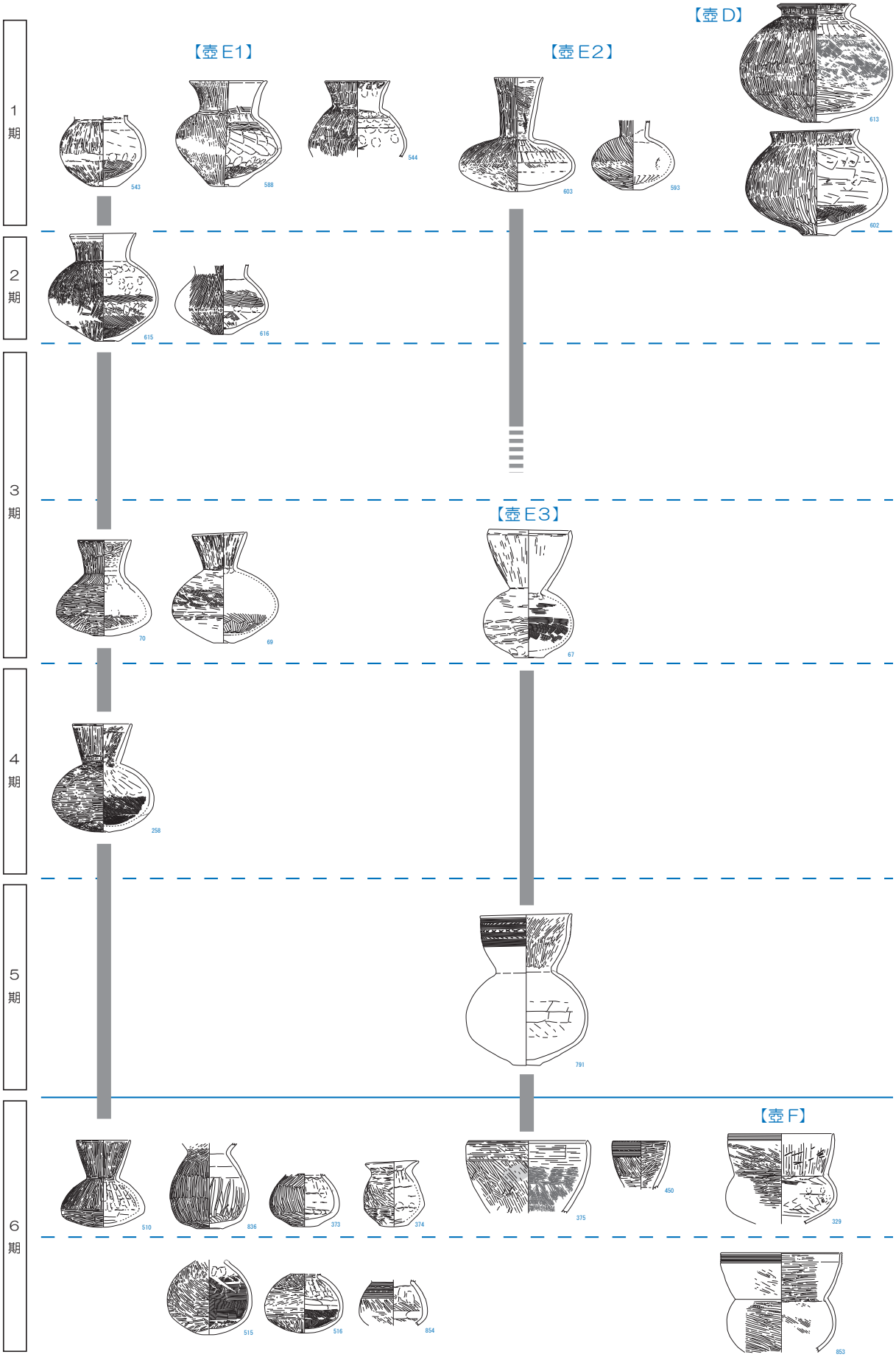
** 小山田宏一 1993「布留式の成立」『庄内式土器研究』Ⅳ
次山　淳 1993「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』158

*** 赤塚次郎 1994「３・４世紀の東海地域」『東日本の古墳の出現』
宇野隆夫 1995「前方後方形墳墓体制から前方後円墳体制へ－東日本からみた日本国家の形成過程－」『西谷眞治先生古稀記念論文集』

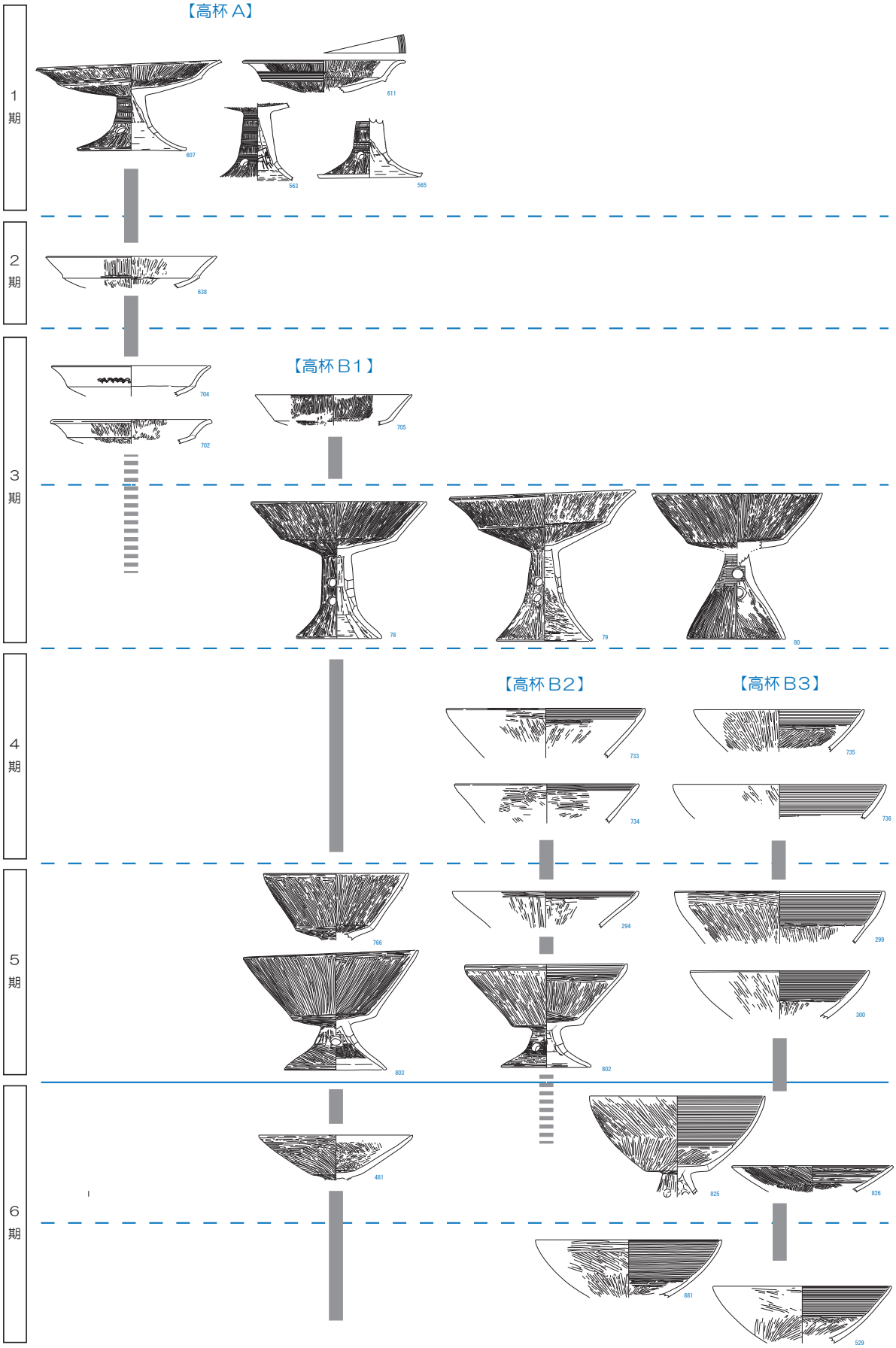
**** 中島和哉 2010「岐阜県西濃地域における古墳出現期の様相－象鼻山古墳群の調査成果を中心に－」『東海地方における古墳出現期の諸相－辻畑古墳出現の背景を考える－』第 15 回考古学研究会東海例会



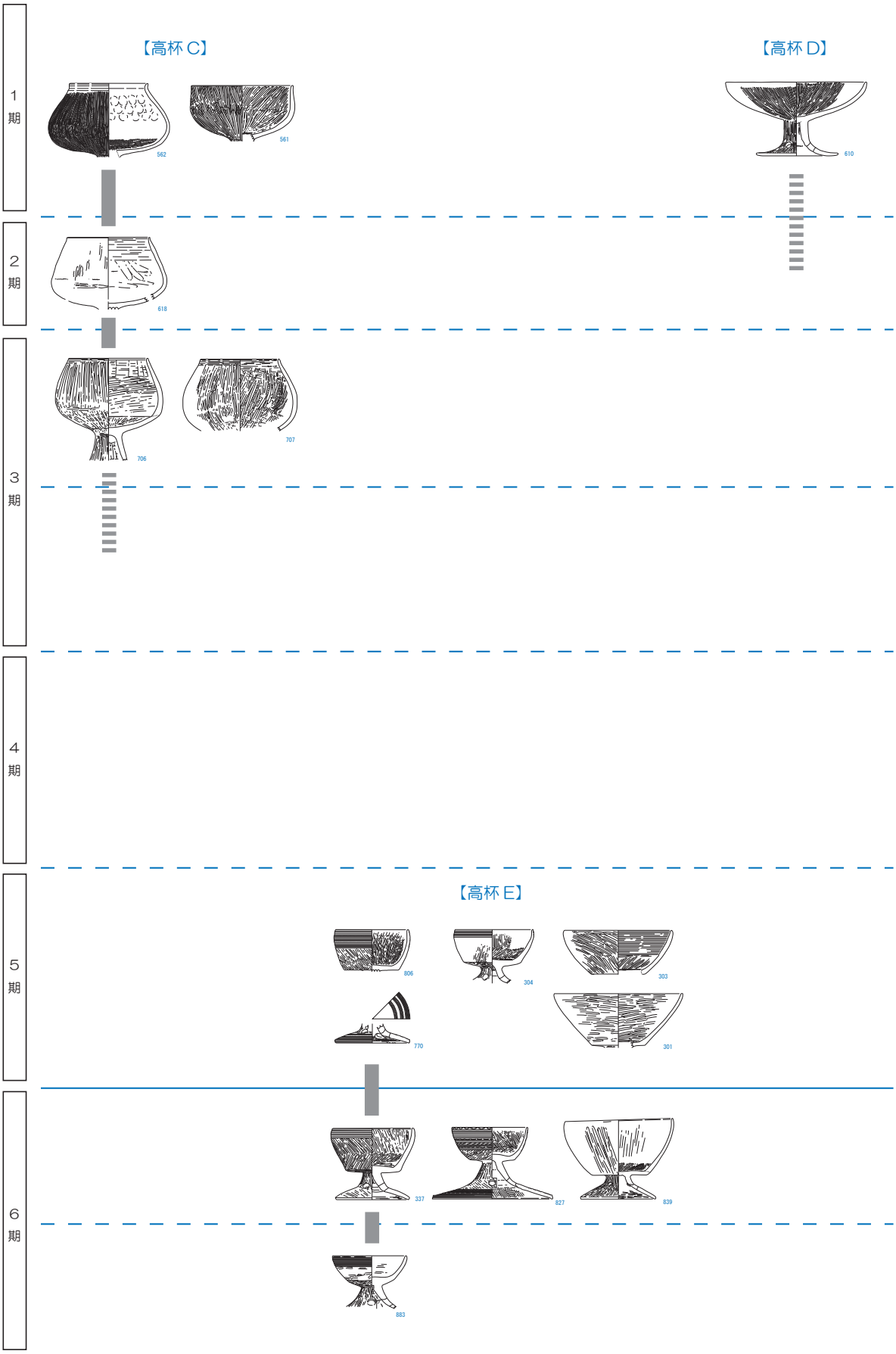
第86図　壺A・B・Cの変遷（S＝1/8）



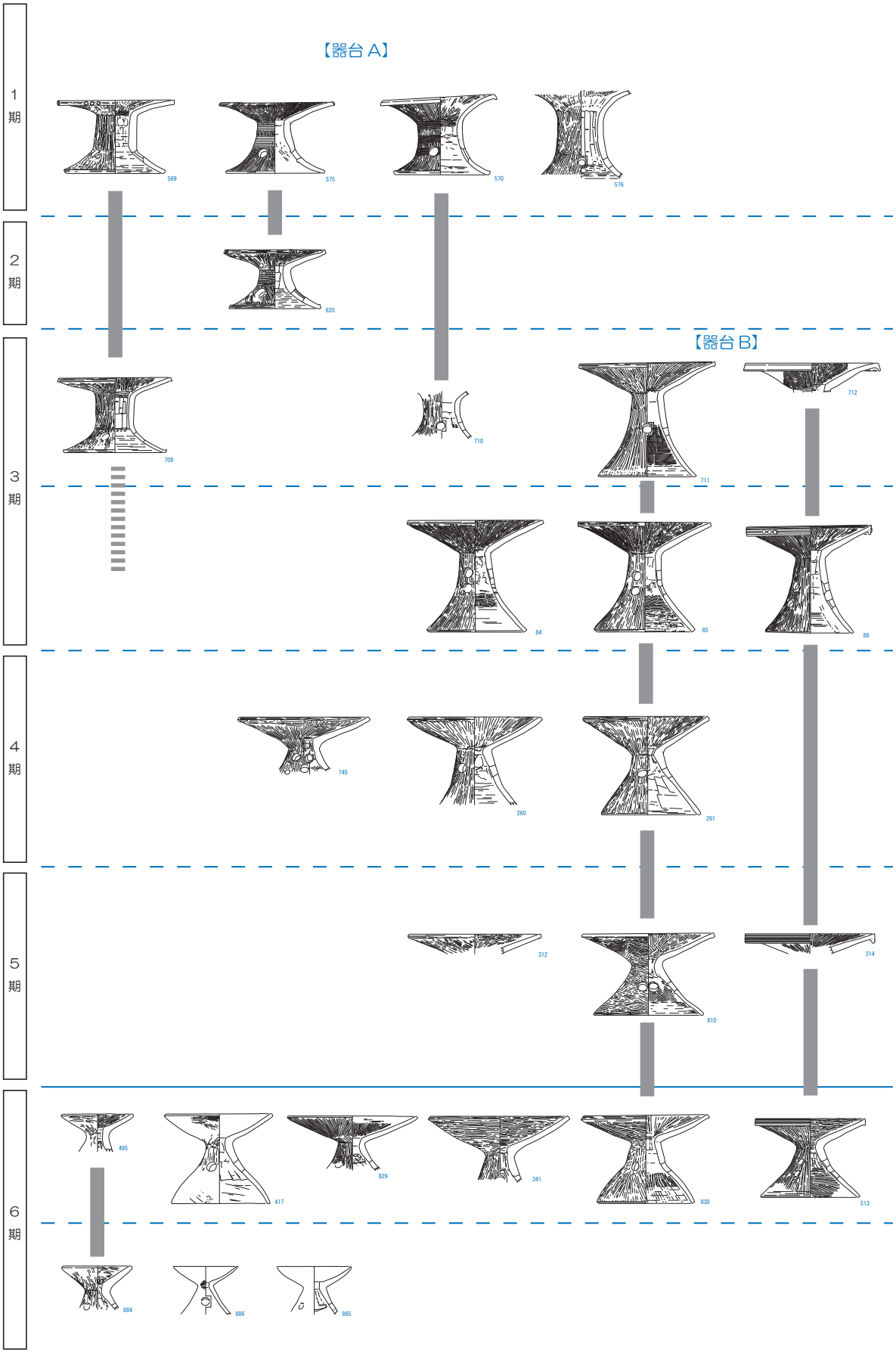
第 87 図　壺D・E・Fの変遷（S＝1/8）



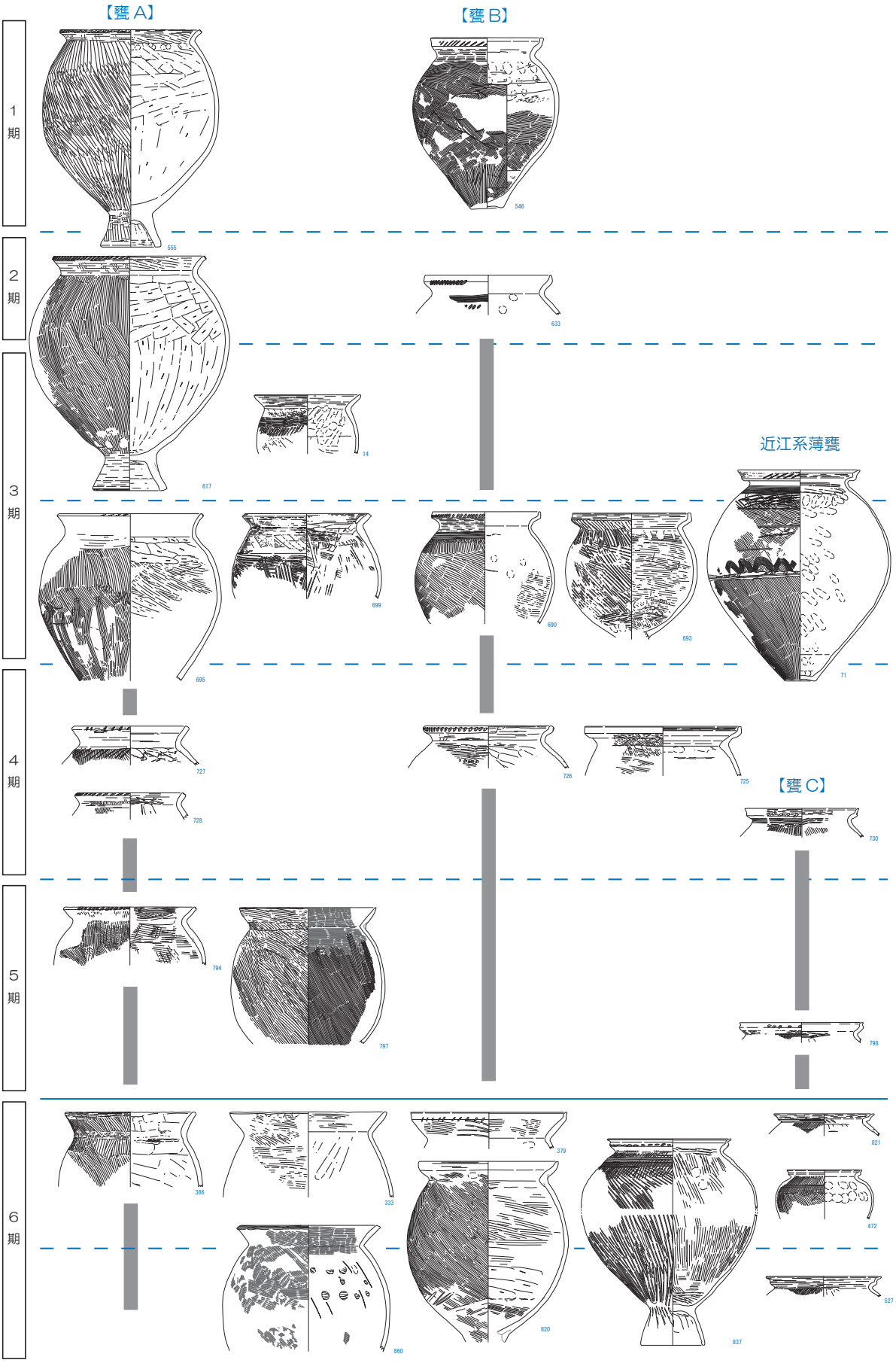
第 88 図　高杯A・Bの変遷（S＝1/8）



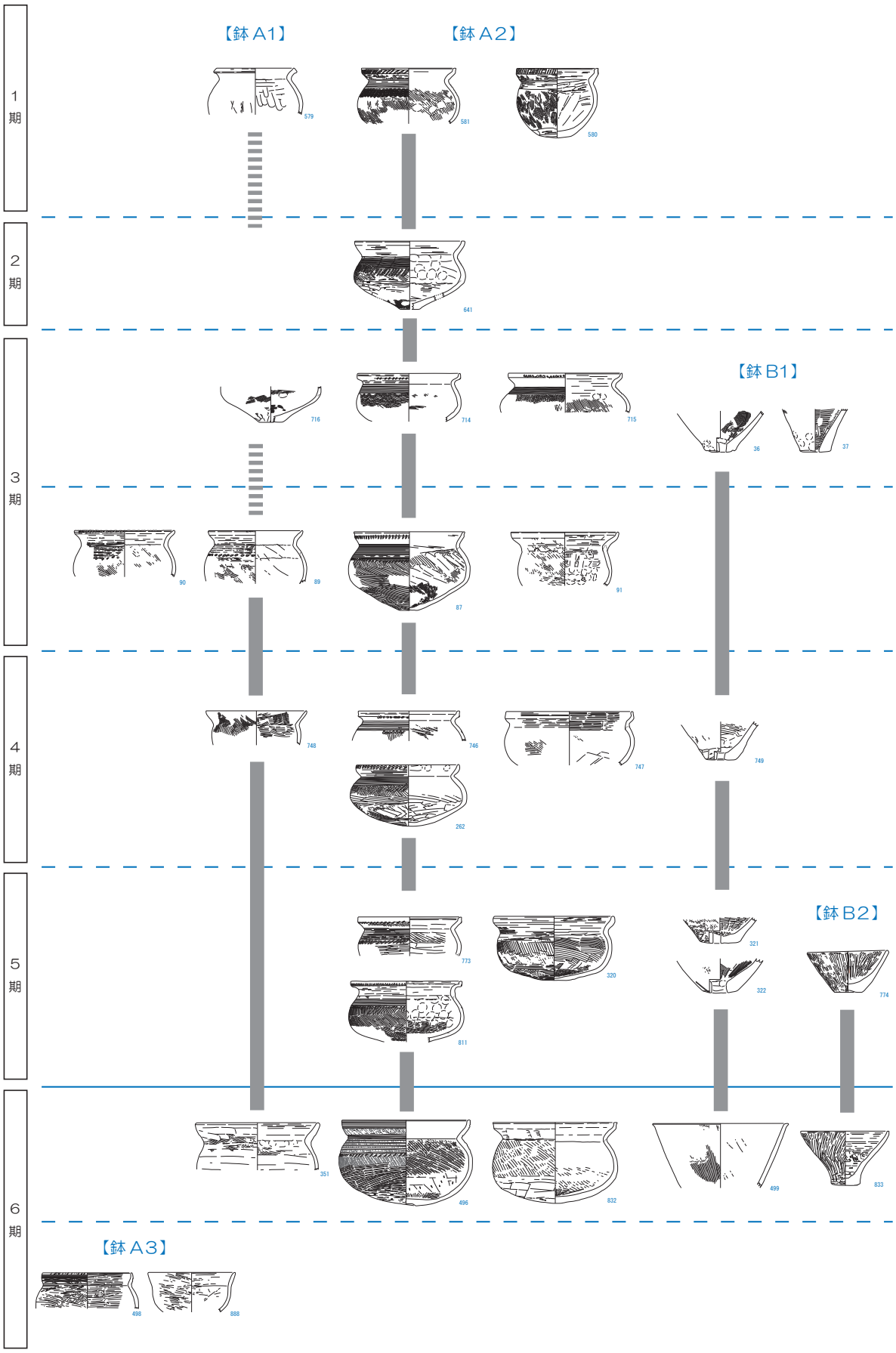
第 89 図　高杯C・D・Eの変遷（S＝1/8）



第 90 図　器台 A・B の変遷（S＝1/8）



第 91 図　甕A・B・Cの変遷（S＝1/8）



第92図　鉢A・Bの変遷（S＝1/8）

（8） おわりに

弥生時代から古墳時代への移行期には、環濠集落を軸とする個々の軍事的な体制を基礎とする従来のあり方から、墳墓型式や土器様式をはじめとする儀礼的な分野の共有に象徴される支配層の連合体制の役割が卓越するあり方に転換していく*。そのため、本考察では、日吉遺跡の発掘調査において出土した土器を大別３期・細別８期に区分し、土器様式の変化を、集落の変遷や造墓の推移と関連付けて整理し、分析した。その結果、当地域においては、環濠集落の廃絶が、東海西部を中心とする新しい土器様式の共有や象鼻山における造墓の開始と一連の現象としてなされたことを明らかにし、当該期（日吉Ⅱ式期・廻間Ⅰ式期）に東海西部を起点として儀礼の共有が推進された可能性を、土器様式の変遷に読み取った。

以上のような成果は、西濃地域の弥生時代から古墳時代への社会変化を明らかにするだけでなく、東海地方の支配層の連合の意義が増大し、小地域を越えて新たな政治的まとまりが形成される過程を考える上でも重要な情報を提供できるだろう。今後、この分析結果を基に、新たに提起できた課題に取り組み、当該期の社会動向の解明に努めたい。

＊　宇野隆夫 1995「前方後方形墳墓体制から前方後円墳体制へ－東日本からみた日本国家の形成過程－」『西谷眞治先生古稀記念論文集』

第５章　総　　括

日吉遺跡とその周囲一帯には、古墳時代への移行期に数多くの墳墓が築造された象鼻山古墳群や、その築造を支えた勢力が本貫とした遺跡が良好に遺存している。そのため、日吉遺跡の発掘調査で得られた成果をもとに当地域の土器編年案を示し、この成果に基づいて、集落・墳墓・土器の変化を一体のものとして把握し、その関連性を明らかにした。

その結果、日吉遺跡における環濠集落の廃絶と、象鼻山における造墓の開始が一連の現象としてなされ、日吉Ⅱ式期・廻間Ⅰ式期から、土器様式においても地域的土器様式を離脱し、東海西部を中心とした新しい土器様式へと変化していくことを示せた。

そして、その背景には、養老町域においても、環濠集落を軸とする個々の軍事的な体制を基礎とする従来のあり方から、墳墓型式や土器様式をはじめとする儀礼的な分野の共有に象徴される支配層の連合体制の役割が卓越するあり方への転換があったと考えた。今後、検討するべき課題は多いが、これは養老町域にとどまる現象ではなく、東海･日本列島における古墳社会形成の重要なステップであったと推察している。

当発掘調査は開発を端緒とするものであり、対象となった範囲についての記録保存を目的としたものである。そのため、かなり限られた条件下で実施したものであるが、得られた成果をできる限り分析し、日吉遺跡の性格を明らかにするとともに、当地域の土器編年案を作成することに努めた。その成果については、既に前章までに詳しく述べたが、ここでは得られた土器編年案が、今後の象鼻山古墳群の調査・研究・活用を図る上で、いかに重要な役割を果たすかを示して結びとしたい。

象鼻山古墳群は、前方後方形を呈する１号墳など一部の墳墓を例外として、象鼻山中の墳墓のほとんどを廻間Ⅰ式期を中心とした時期に、一斉に計画的な造墓を進めた稀有な遺跡である。このようなあり方は、一つの地域の有力集団が代々の統率者を継続的に葬るという一般的な古墳群のあり方とはかけ離れたものであり、東海西部を中心とした複数の勢力の合意を得て、各勢力の有力構成員を埋葬する共同墓地とされた可能性が高い。

そして、これまでの発掘調査の成果からは、一斉に築造されたにも関わらず、それぞれの墳墓には、形態や葬送儀礼に相違があり、土器の出土状態についても周囲を巡る溝から多量に出土するものと、墳丘盛土中から広く出土するものがあることを明らかにできている※。

そのため、象鼻山古墳群の中心をなす墳墓群は、東海西部が古墳時代初頭に前方後方形墳墓（前方後円墳）を共有する墓制に至るまでの過渡期にあるものと評価でき、その歴史的意義を解明するためには、土器様式においても、東海西部がこれを共有するに至る過程を明らかにし、墳墓型式と土器様式の変遷を一体のものとしてとり上げ、得られた情報を東海西部の考古学的成果と詳細に比較することが重要になる。そしてこれを実現する基盤を提供するのが、当地域の土器編年案である。

当発掘調査では、こうした目的意識の中、遺跡詳細分布調査によって得られていた結果をもとに、

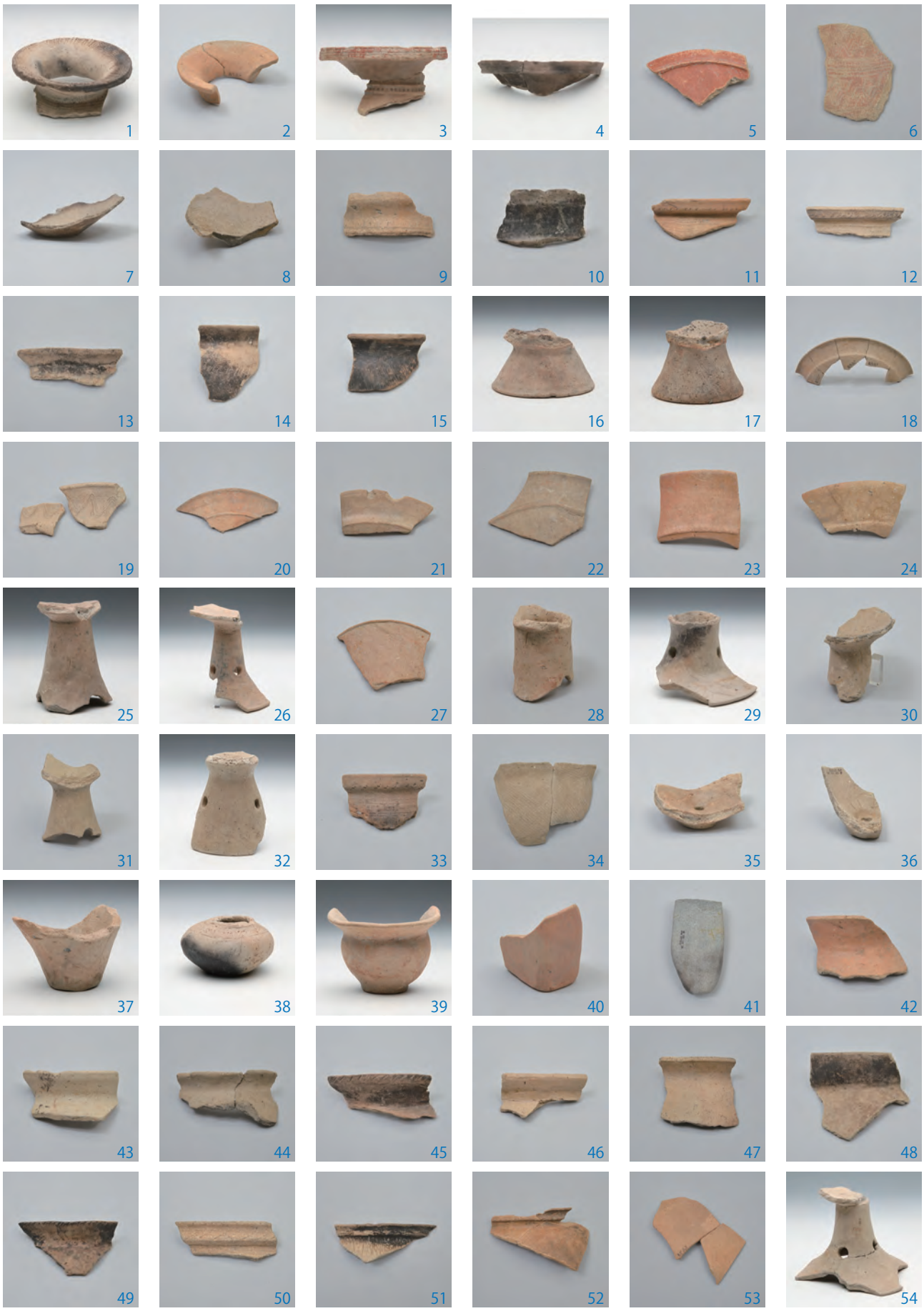
※　中島和哉編 2010『象鼻山古墳群発掘調査報告書 - 第１～４次発掘調査の成果 -』養老町教育委員会

日吉遺跡が象鼻山古墳群と密接な関係をもつ遺跡であると予想し、遺跡の変遷を把握することと、多量の土器の出土地点を層位に基づいて記録することを重視した。

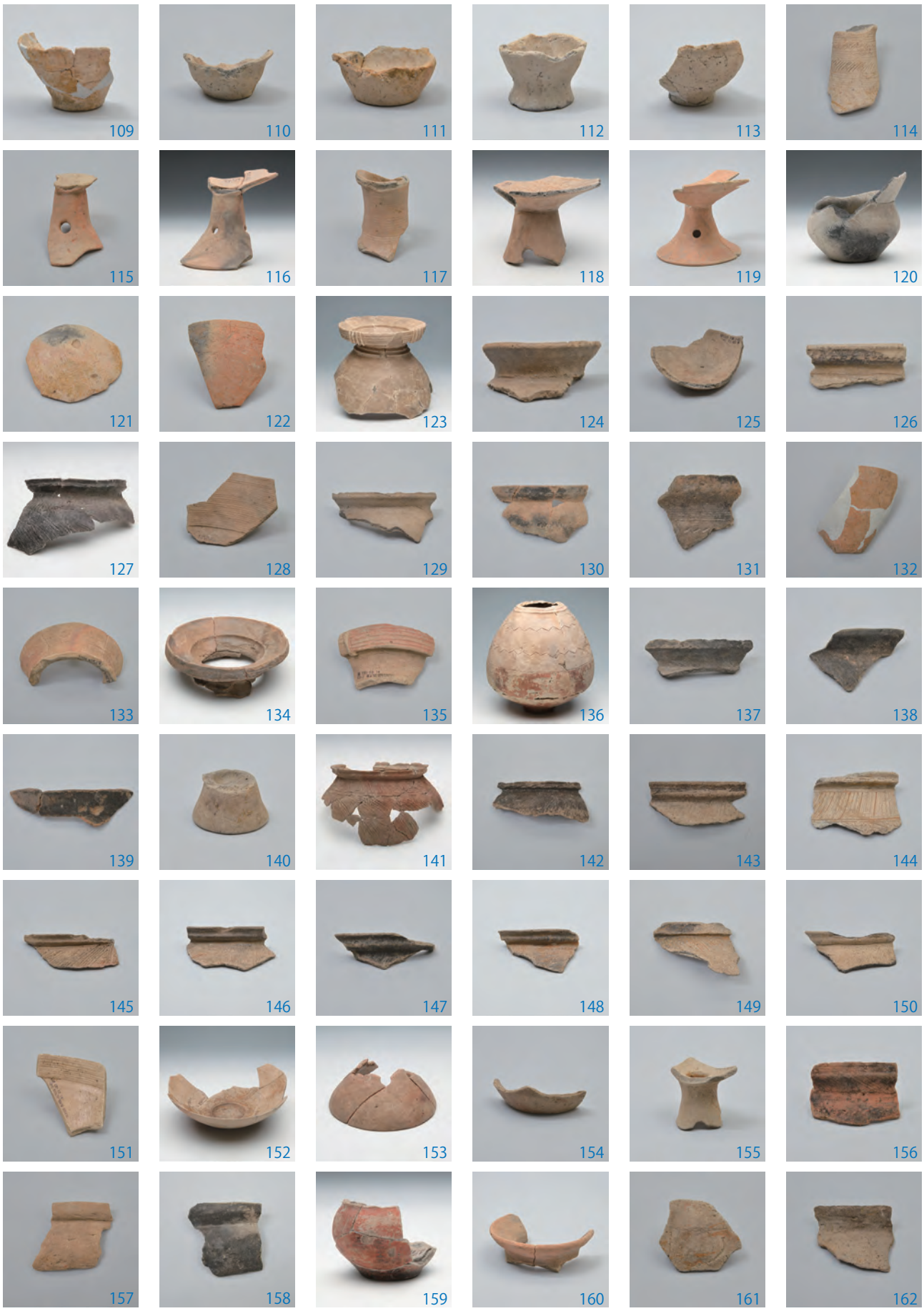
日吉遺跡においては、未だ、その内容が明らかになっていない部分が多いが、遺跡内においては、工場誘致をはじめとする開発計画が進行している。そのため、今後の開発に対し、遺跡の情報をなるべく多く蓄積し、その成果をもとに日吉遺跡の全体像をより正確に予測し、遺跡の保護に結びつけたい。

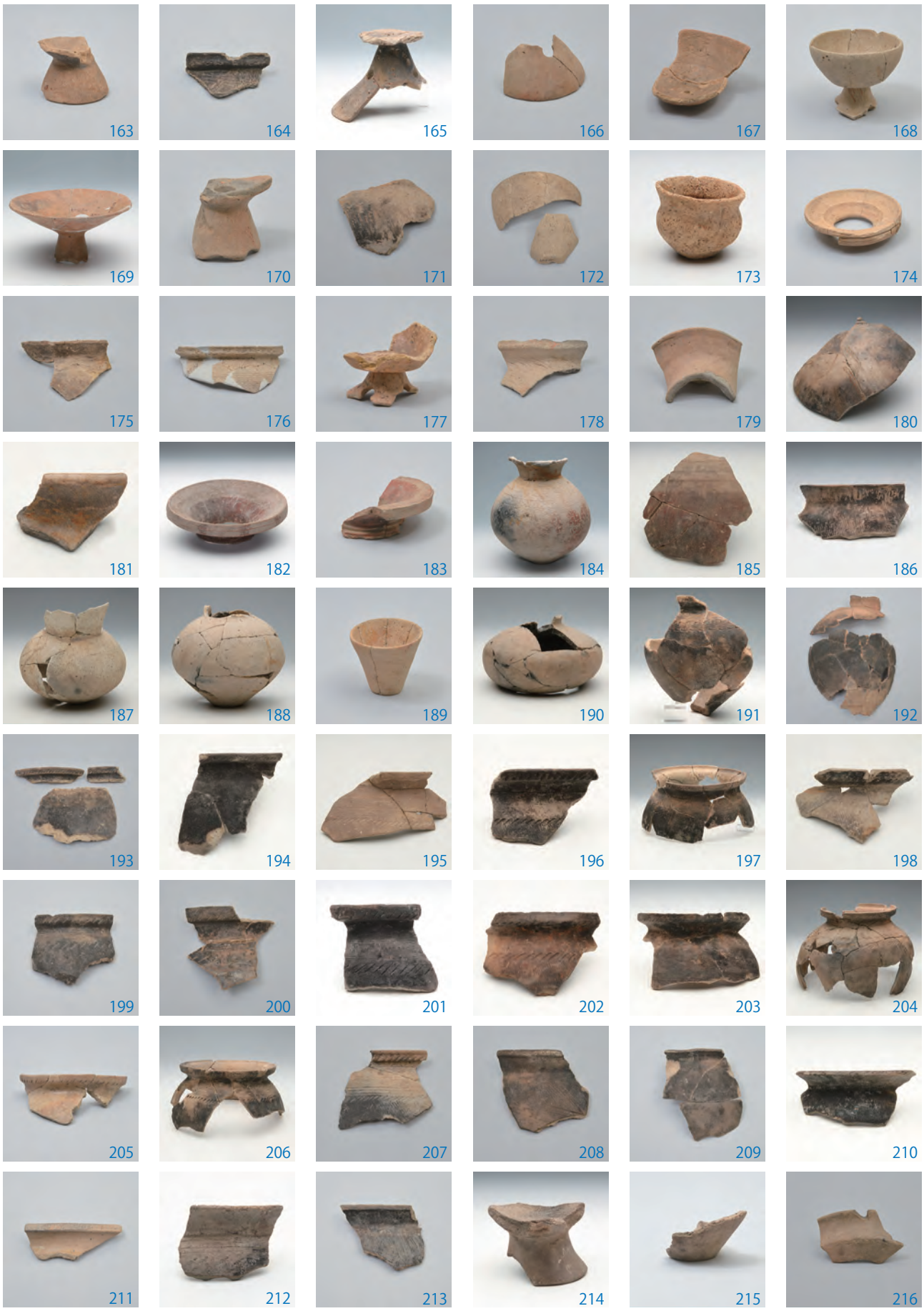
次への課題は多いが、現在において本報告書をまとめることができたのは、多くの方々のご理解とご協力によるものである。特に、調査作業員には、困難の多い調査にも関わらず、最後まで力を尽くして頂いた。記して感謝申し上げるとともに、今後ともご助力をお願いしたい。

発掘調査出土遺物写真


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54

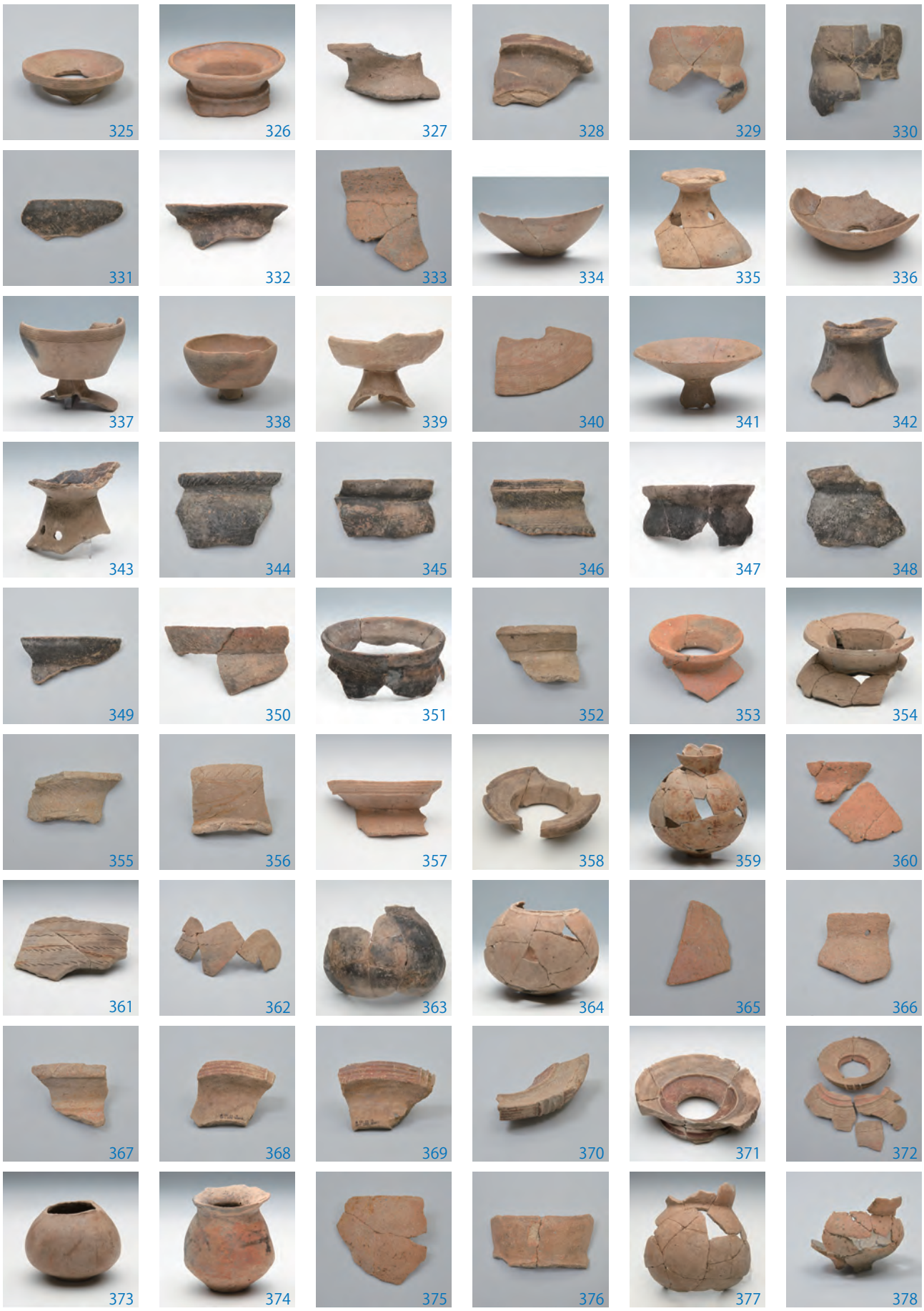
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108

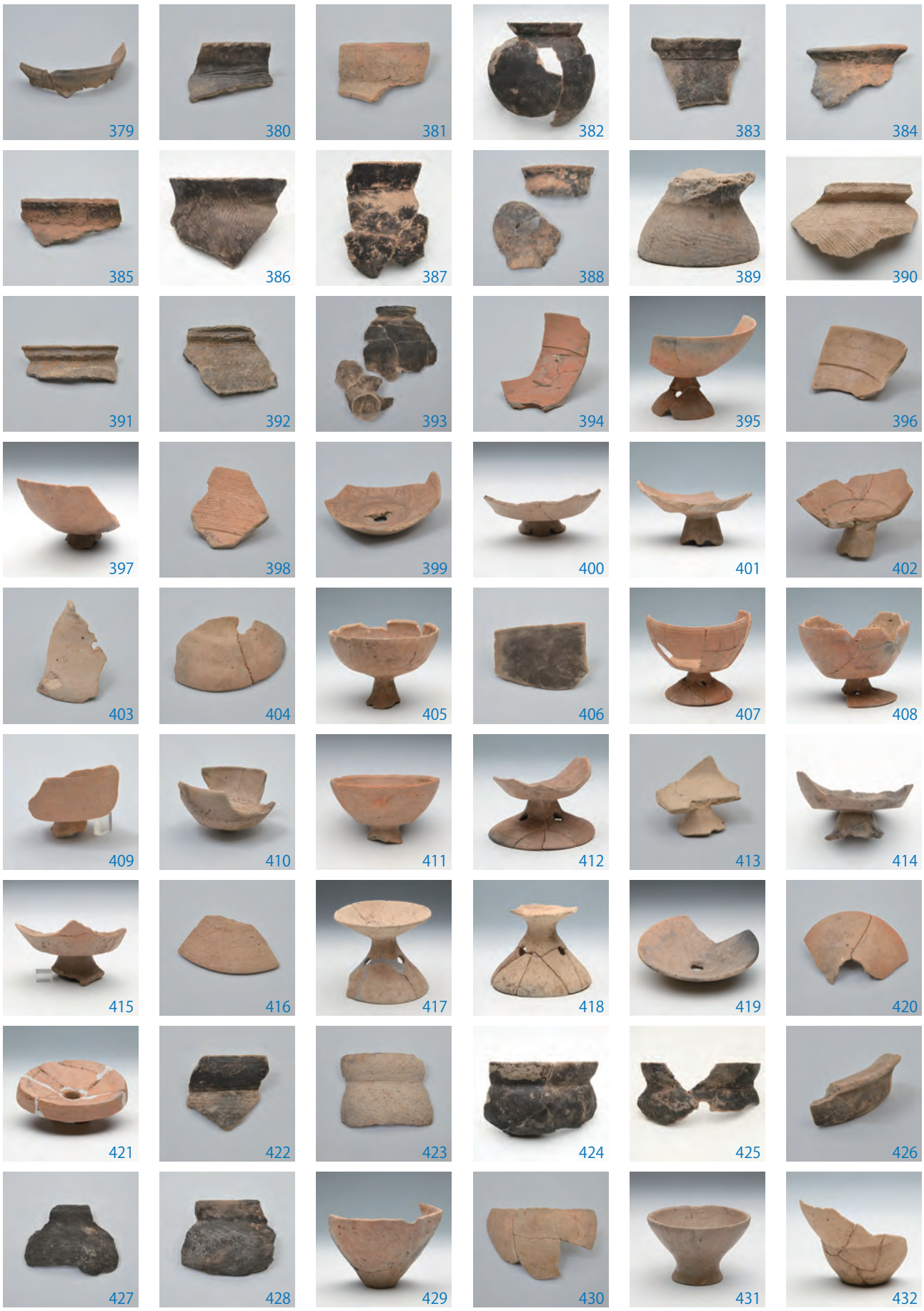

109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162

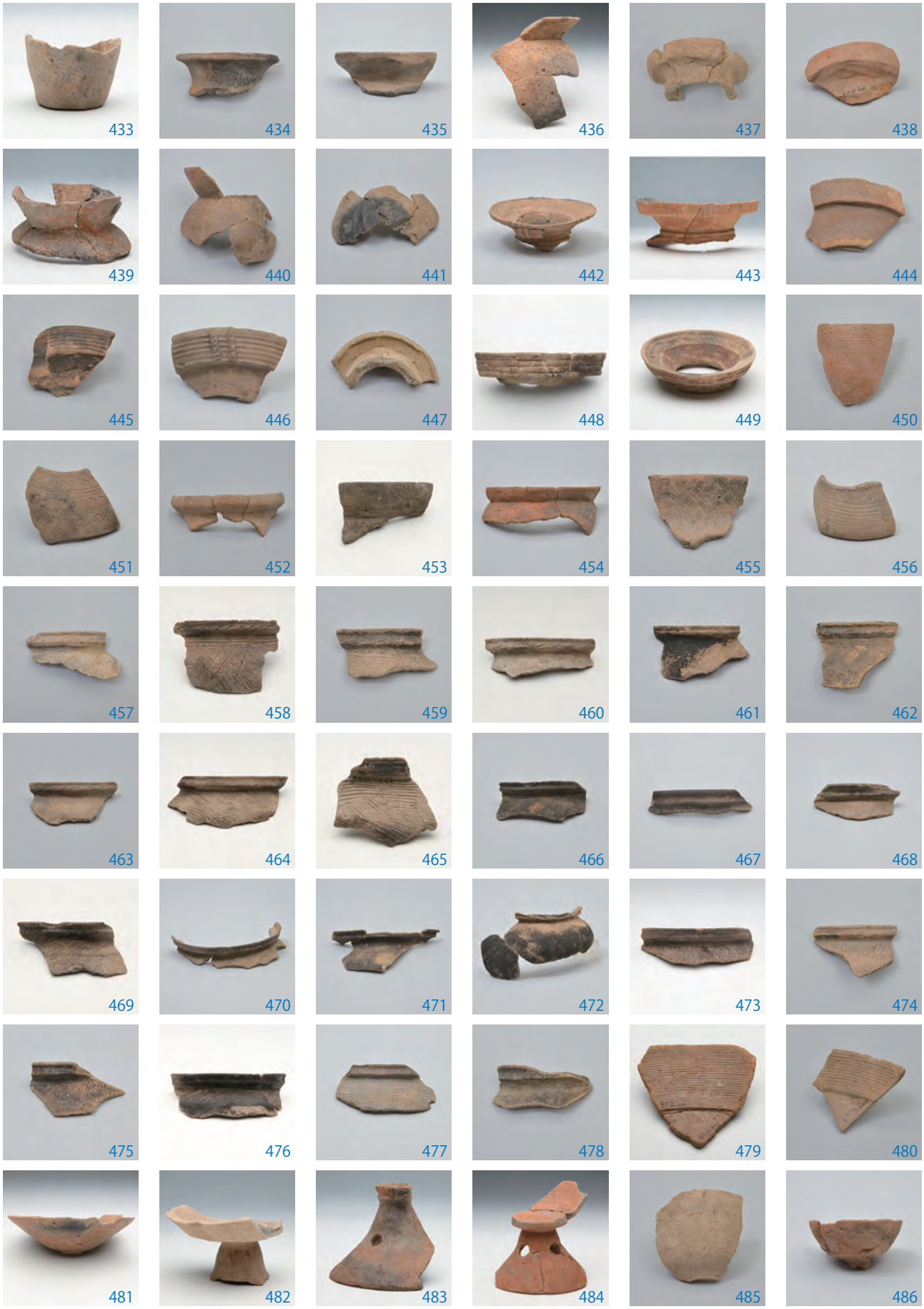

163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216

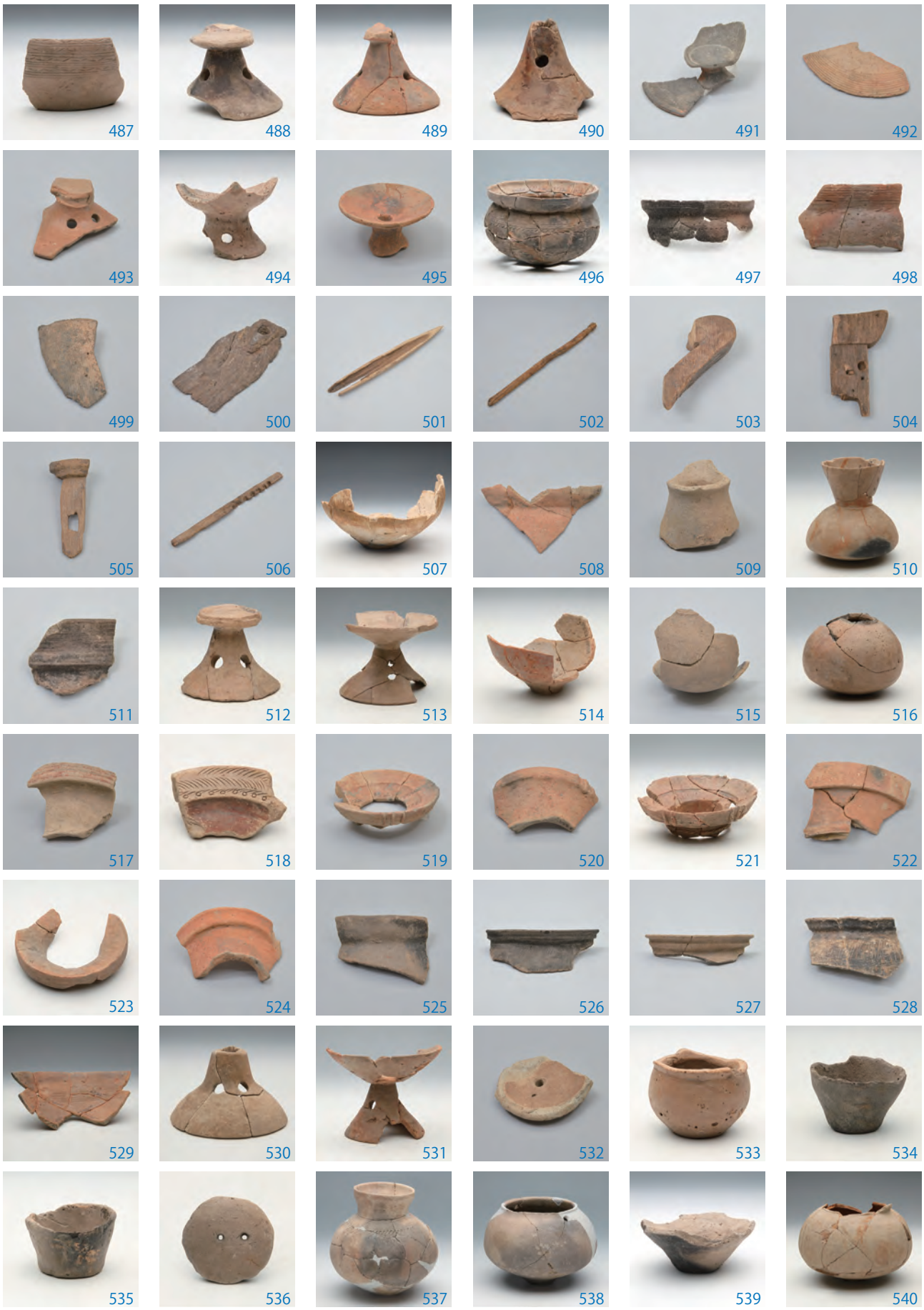
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270

271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324


325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378

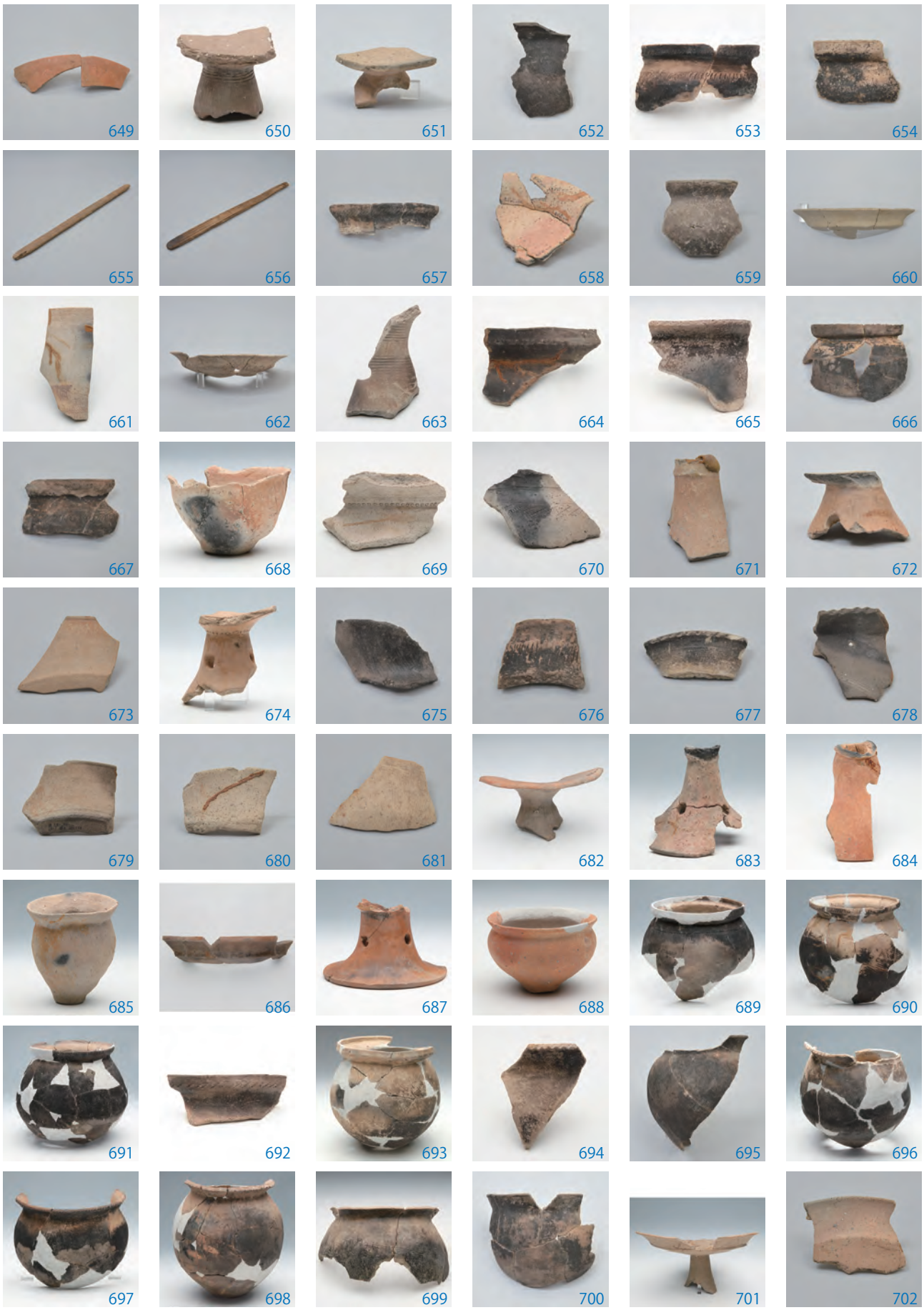

379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432


433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486

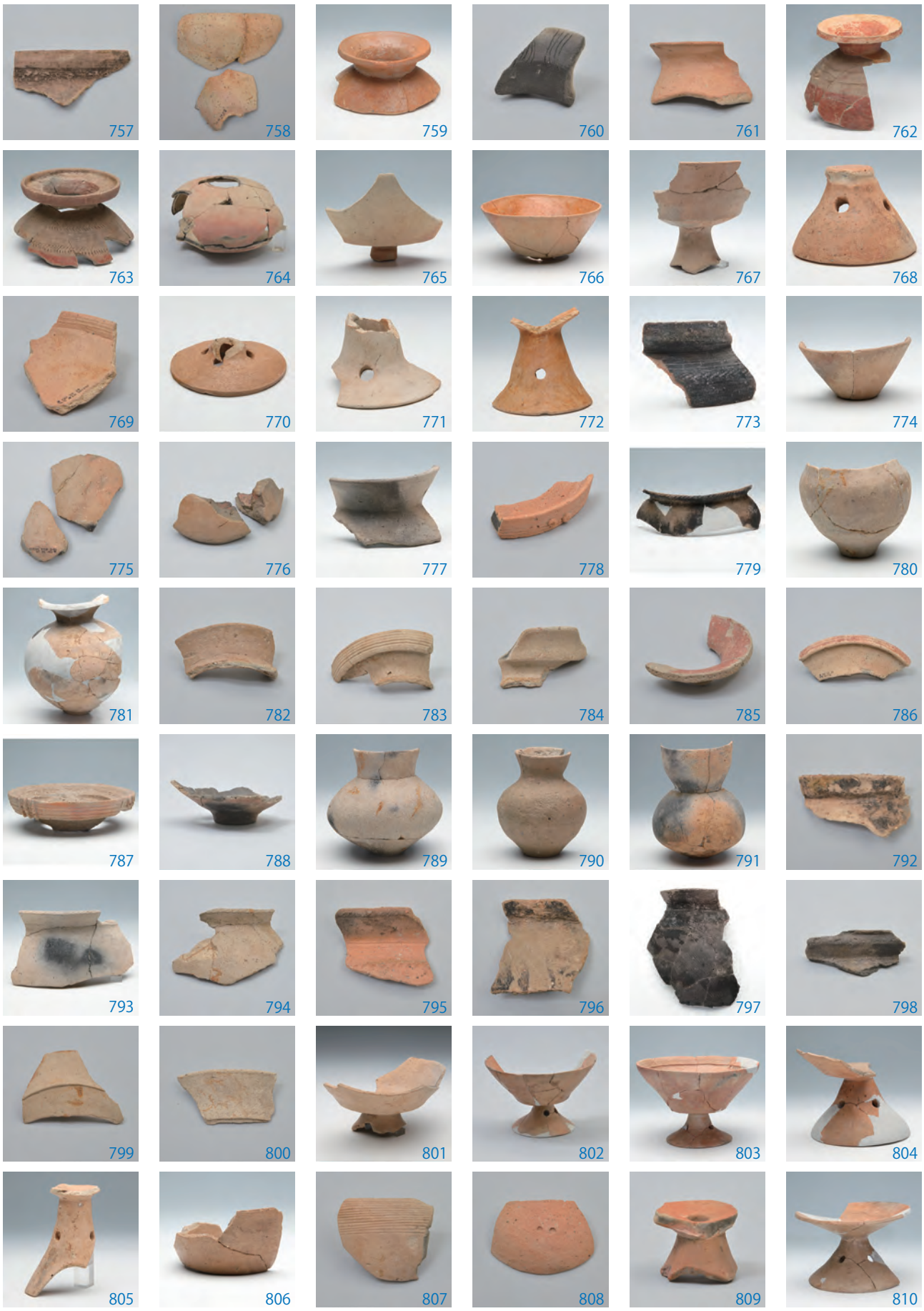

487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540

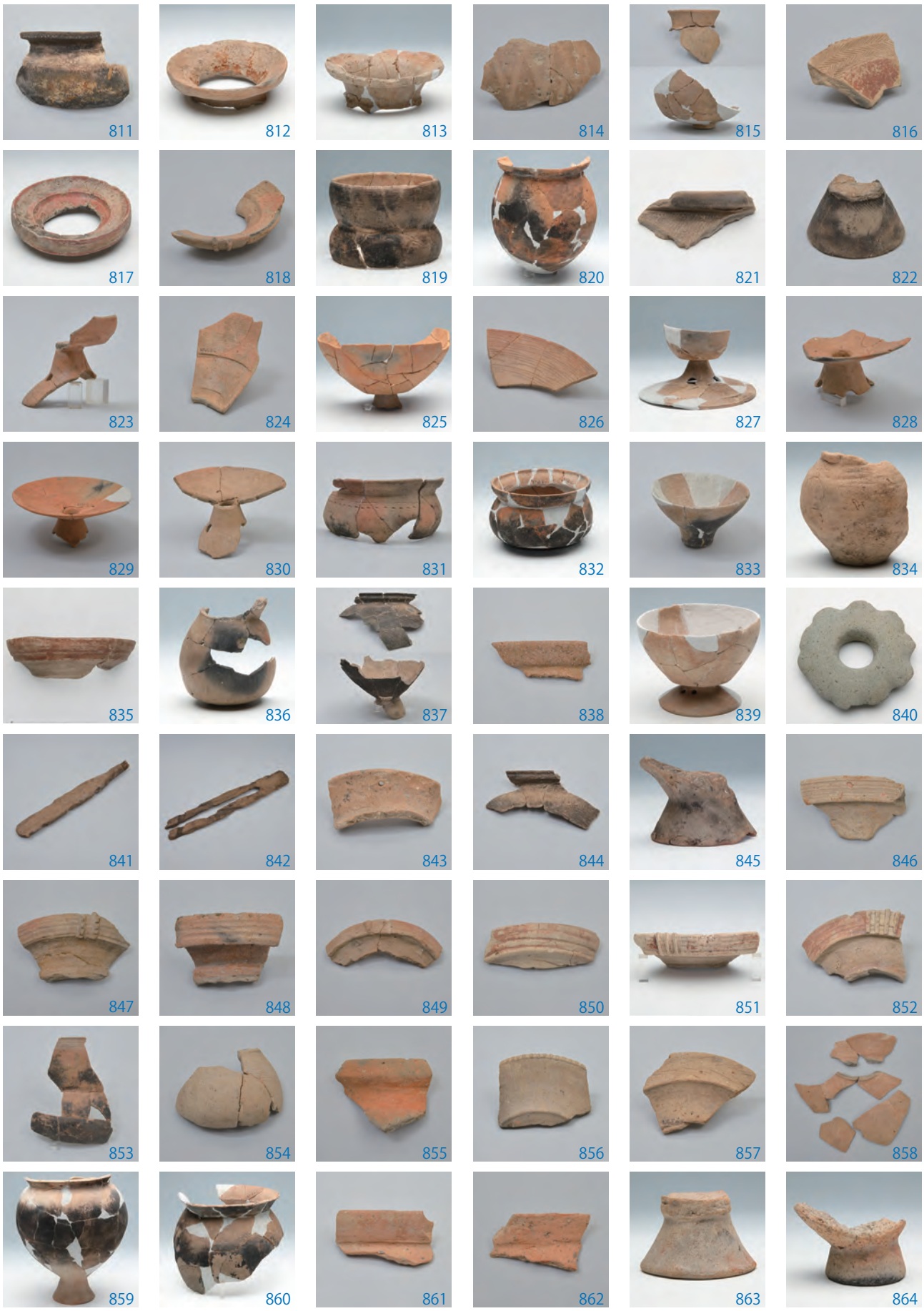
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594

595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
643
644
645
646
647
648


649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702

703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
750
751
752
753
754
755
756


757
758
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
779
780
781
782
783
784
785
786
787
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
810


811
812
813
814
815
816
817
818
819
820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
840
841
842
843
844
845
846
847
848
849
850
851
852
853
854
855
856
857
858
859
860
861
862
863
864

865

866

867

868

869

870

871

872

873

874

875

876

877

878

879

880

881

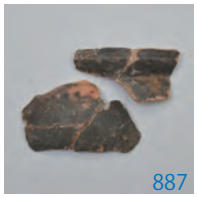
882

883

884

885

886


887

888

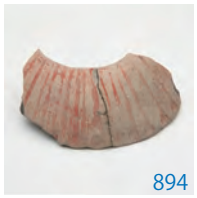
889

890

891

892

893


894

報　告　書　抄　録

ふりがな	ひよしいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	日吉遺跡発掘調査報告書
副書名	第１～３次発掘調査の成果
巻次	
シリーズ名	養老町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第７集
編著者名	中島　和哉
編集機関	養老町教育委員会
所在地	〒503-1392　岐阜県養老郡養老町高田798番地
発行年月日	西暦2014年３月28日

ふりがな	ふりがな	コード	北緯・東経	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	町村遺跡番号	°　′　″	㎡	
日吉遺跡（ひよしいせき）	養老町（ようろうちょう）	21341-10143	北緯 35°19′29″ 東経 136°33′37″	300（1次）	町道拡幅工事
				390（2次）	
				750（3次）	

所収遺跡名	主な時代	種別	主な遺構	主な遺物	特記事項
日吉遺跡	弥生 古墳	散布地 集落跡	河道 竪穴建物 環濠	土器 石器 木器	弥生時代後期の環濠

養老町埋蔵文化財調査報告書第７集

日吉遺跡発掘調査報告書

第１～３次発掘調査の成果

2014 年３月

編 集・ 発 行：養老町教育委員会
印　　刷：ナカシャクリエイテブ株式会社